

「名前の正しさ」と名指しの本性的正しさ

——プラトン『クラテュロス』研究——

田中 あや

本論を読むにあたって

対話篇『クラテュロス』は、プラトンの主要な対話篇の一つである。しかし、とりわけ我が国では、この対話篇が正当な扱いを受けてきたとは言い難い。「名前の正しさ」という聞き慣れない主題と長大な語源分析の扱い難さから、これまで、この対話篇について立ち入った研究はなされてこなかった。英米圏では、20世紀の分析哲学に端を発する「言語論的転回」(linguistic turn)の中で、意味論的関心から『クラテュロス』への注目が高まり、21世紀にかけて、『クラテュロス』研究は飛躍的な発展を遂げた(2011年には、Francesco Ademolloによって、事実上初のコメントリーが出版された)。しかしながら、『クラテュロス』の本質に迫る研究は、まだ存在しない。というのも、「名前の正しさ」という主題それ自体が誤解に晒されてきたからだ。

本稿は、『クラテュロス』の全体像とその本質を正しく見定めることを目的とするため、その大部分が、この対話篇の構成と翻訳および解釈の見直しに当てられる。本稿で引用する『クラテュロス』の諸節は、すべてわたしが訳出したものである。プラトンの他の対話篇とアリストテレスの作品については、邦訳と英訳を適宜参照する。『クラテュロス』については、オクスフォード古典叢書の新校訂版を定本とし、慣例によってステファノス版の頁数で言及する(『クラテュロス』は、W. S. M. Nicoll と E. A. Duke が共同で監修している)。ソクラテス以前の哲学者の断片への言及には、Diels & Kranz (1951-1952) の番号 (DK) を用い、《 》で括弧する。書名・作品名には『 』、名前への言及と特別な意味の用語には「 」、実在には〈 〉、属性には“ ”を用いる。引用において写本にはない語句の補いは { } で示す。

本稿が、我が国の『クラテュロス』研究の発展に寄与しうるものであることを願う。

目次

序論	1
表1	17
『クラテュロス』篇の構成	18
第一章 『クラテュロス』読解への道標	21
1 問題の所在	21
2 『クラテュロス』の背景にある事情	24
(1) 冒頭の一節 (383a1-3) についての予備的考察	24
(2) 冒頭でのヘルモゲネスの陳述 (383a4-384a7) の分析	25
(3) 基本構図の見直し	30
3 語源分析	31
4 クラテュロスと「名前の正しさ」	37
(1) クラテュロス	37
(2) 「名前の正しさ」	44
5 『クラテュロス』の執筆順序をめぐる問題	46
(1) 先行研究の状況	46
(2) 385b2-d1 の一節をめぐる問題	48
(2) - 1 先行研究の状況	48
(2) - 2 385b2-d1 の読解	49
第二章 名指しの本性的正しさとプラトンの言語論	63
1 はじめに	63
2 ヘルモゲネス——われわれ——の視点	65
3 プロタゴラス批判	68
4 名指しの本性的正しさ	73
5 「名前の形相」	77
第三章 「名前の正しさ」についてのソクラテスの解釈	88
1 はじめに	88
2 名前についてのホメロスの考え	89
(1) プロタゴラスからホメロスへ	89
(2) 「正しさの程度」Ⅰ	91
(3) 「正しさの程度」Ⅱ	93
(4) 名前の正しさについてのホメロスの考えの「痕跡」	97

(5) 親と子の間の自然本性的類似性	100
(6) 名前の正しさと、名前を構成する文字と音節の関係構造	103
(7) 「名前の力」	113
(8) 複数の名前の中の意味論的同値	116
3 派生的名前の語源分析	120
(1) はじめに	120
(2) 語源分析の体系的構造	122
4 名前を構成する字母と対象との間の音声的類似性	128

第四章「名前の正しさ」の意味論的問題 130

1 「割り当ての議論」	130
(1) 「ヘルモゲネス」のヘルモゲネスへの割り当て	130
(2) 「ヘルモゲネス」のクラテュロスへの割り当て	132
(3) 「男性」ないし「女性」の特定男性への割り当て	134
2 「二人のクラテュロスの議論」	135
3 「σκληρότης」の議論	136
(1) 規約と習慣	136
(2) 類似性と「形跡」	140
(3) 数の名前	143

第五章「名前の正しさ」の存在論的問題 146

1 意味論的問題から存在論的問題への転換	146
2 「記述的意味＝知識説」	147
3 名前の不調和をめぐる議論	148
4 実在を学ぶ二つの方法	150
5 学びをめぐる議論の結論	151

第六章 流転説 154

1 プラトンと流転説をめぐる問題	154
(1) 問題の所在	154
(2) ソクラテス以前のギリシア思想全体におけるテーマとしての流転	155
(3) 流転説の多層構造	162
2 「流転をめぐる議論」	165
(1) ソクラテスの二つのテシス	165
(2) 「第一議論」——語の正しい適用の不可能性——	168

(3) 「第二議論」——存在の不可能性——	170
(4) 「第三議論」——知識の成立の不可能性——	172
(5) 「第四議論」——知識の存在の不可能性——	175
(6) ソクラテスの最後のテシス	177
(7) 「流転をめぐる議論」の結論	179
(8) ソクラテスの確信的主張	181
参考文献	185

序論

対話篇『クラテュロス』は、第一に、プラトンの言語哲学の対話篇である。しかし、そう主張するには、多くの説明を要するだろう。Van den Berg は、その著書 *Proclus' Commentary on the Cratylus in Context* の冒頭で、こう述べている。

『クラテュロス』は、元来、言語哲学——それ自体が古代には存在しなかった——についての対話篇でも、言語学についての対話篇でもなく、言語の基本構成要素である ὀνόματα (名前) とプラトン哲学の関係についての考察である¹。」

今日では、言語哲学と言え、20 世紀の分析哲学に端を発する「言語論的転回」(linguistic turn) の中で、意識哲学に代わって台頭した哲学領域を指す。こうした意味規定のもとでは、無論、古代ギリシアに言語哲学は存在しない。実際、古代ギリシアで哲学が生まれて以来、言語は、多くの哲学者の関心を引いてきたが、20 世紀に至るまで、言語それ自体が主題として論じられることはなかった。プラトンにおいても、『クラテュロス』以外に言語を主題的に論じた対話篇は存在しない。このことは、何を意味するのだろうか。

それはつまり、プラトンにとって言語とは、存在論的・認識論的問いを探求するための手段であり、言語それ自体が探求の目的ではなかったということなのか——。おそらくこの答は間違っていないが、一つ重要な視点を見失っているように思われる。それは、言語の問題が、プラトンにとって、存在と認識の問題の考究を必然的に伴うということである。

語の正しい適用と知識の成立は、プラトンにおいて、対象の「確固不動性」を前提する。つまり、われわれが語を何かに正しく適用し、それについて思考し、そして知ることの可能性は、名指され、思考され、知られる当の対象が「相対性」も「流転性(可変性)」も免れた確固不動のあり方をもつことに全面的に依拠しているのである。その意味において、プラトンは真正の「实在論者」である、とわたしは主張する。しかし、この主張は、いわゆる古典的形而上学的实在論を克服すべく新たな实在論の可能性を探求した 20 世紀の分析哲学者たちに対する挑戦の言葉を意味する。たとえば、『实在論と理性』(*Realism and Reason*) の中で Putnam は、「われわれの語が、ある決まった対象と「対応している」という、それまでの彼の立場が依拠していた概念に疑問を呈した²。この問題提起はもつともである。われわれは、語が、心や脳の外部にあるもの——实在——に接近可能であると、あるいは、わたしの語と他人の語が指示する対象が同一の対象であると、どうやって言うことができるだろうか——。

¹ Van den Berg 2008: xiv.

² Putnam 1983.

この問いに対する一つの応答が、『クラテュロス』というこの対話篇である。プラトンにおいて、語と対象との間の「固定的な」単一の対応関係——言い換えれば、単一の自然本性的指示関係——が要請されることの背景には、「名指す」という行為をめぐるプラトンの深い思索が存在する。一般に、何かをなすということ（行為）は、行為主体の恣意的な判断によって、恣意的に選択された道具を用いてなされた場合には成功せず、反対に、行為の対象の自然本性的あり方に従い、自然本性的に決まっている道具を用いてなされた場合にのみ成功する。たとえば、わたしが肉を切ろうとするとき、肉の種類や部位別特性などを考慮せずに、そこいらにあったパン切り包丁を使って好き勝手に切ろうとしたら、わたしはその肉を切るという行為に失敗するだろう。だが、当然、わたしはそんなことはしない。わたしは肉切り包丁を手に取り、当の肉が切られるのに自然本性的に適した仕方、それを切ることができる。明示的な仕方で誰かに教えられたわけでもなく、また、明示的な規則に従っているわけでもないのにわたしがそうできるのは、手本を見習ったり、誰かが肉を切るところを観察したりしながら、そう行いうことがすでにわたしの本性の一部になるほどにまでその行為を繰り返し継続してきたからであろう。

このことは、「名指す」という行為にも該当する。たとえば、わたしがある物質 X を「金」と名指したとする。もしわたしがその物質の種類や属性を考慮せずに好き勝手に（たとえば、「銀」と）名指したとしたら、わたしはその名指し行為に失敗していただろう。わたしは当の物質 X（ないし、諸々の X の集まり）が〈金〉であることを明示的な仕方で誰かに教えられたわけでもなく、また〈金〉が原子番号 79 の物質であることを知っているわけでもない（少なくとも、その科学的知識は、いまのわたしには忘却されている）。にもかかわらず、わたしが X を他の複数の物質から区分して「金」と名指すことができるのは、他人の行為を観察するなどして、X を「キン」という記号ないし音声と結びつける作業を行い、以後、「金」という名前を X に適用することを習慣づけてきたことにより、X を「金」と名指すことがすでにわたしの本性の一部になっているからであろう。

だがここで、次のような反論が予想される。肉を切るという行為は、行為の対象それ自体——肉自体——を扱うことができるが、名指すという行為は、名指される対象それ自体を扱うことはできないのではないか——もしできるとしても、名指し行為を通じて、語が、当の対象に到達することをどうやって説明するのか——。

「自分自身と結んだ規約」という考えが、それを説明するかもしれない。言語 \mathcal{L} を母国語とするひとは、 \mathcal{L} に属する「X」という記号ないし音声は X の名前である——X を指示する——という言語規約を自分自身と結んだことにより——つまり、X を「X」という記号ないし音声と結びつける作業を自分自身で行ったことにより——のちに遭遇するすべての「X」という記号ないし音声を、X を指示するものとして認識することができる。「X」と X の、いわば対応づけの作業は個人的なものであるが、この対応関係は自然本性的——言い換えれば、公共的——である。なぜなら、

名前は、規約を結んだことによって対象を前もって知っている人々に対して、{その対象を} 明示する (433e4-5)。

と言われており、語と対象の対応づけの作業は、同じ言語共同体に属するすべての成員に、対象についてのある種の「知」を獲得させるものであるからだ。それゆえ、話し手 A の「X」という発語で A が思考するものと、その発語から聞き手 B が喚起するものは同一のものであり、そのようにして言語の公共性が保たれることになる。

しかしながらこの説明は、言語習得の過程で、各人が語と結びつけるものが何故対象の「知覚」や対象についての「表象」ではなく、語の外部にある当の対象であるのかという本質的な問題に回答できていない。なぜなら、この説明において、語の使い手が、世界と絶対的な関係に立っていることが仮定されているからだ。そのうえ、その仮定は、プラトンにおいて、「物質的」なものに対する指示のみならず、価値的对象や抽象的对象に対する指示にまで適用される。プラトンが、単称名辞と一般名辞との間に区別を設けずに指示の問題を論じていることは、現代の学者の目には極めて不合理で未熟に映るだろう。しかし、プラトンにとって、「名指す」ということは、それがなければ外的世界についてのいかなる思考も成立し得ないという意味で、もっとも原初的な知的営みであり、それゆえ、語の使い手が、言語外的な対象——それが何であれ——をある仕方では把握していること——別の言い方をすれば、言語外的な対象についての「知」を暗黙の裡にもっていること——は、還元不可能な前提なのである。

こうしたプラトンの立場は、一般に想定されているプラトニズムの立場——すなわち、語がある決まった対象と対応していることの説明原理として、形相を直接的に把握する非自然的な心的能力を仮定すること——とはまったくの別物である。第一に、語の使い手が言語外的な対象をある仕方では把握していることは、『クラテュロス』において、「自分自身と結んだ規約」に基づく自然本性的な能力として説明されている。われわれ一人一人が語の使い手である限りにおいて有しているこの能力は、説明不可能で非自然的な心的能力などでは決していない。だがより本質的な問題として、そうした能力が「仮定されている」ということの意味が、現代の分析哲学において、まったく理解されてこなかったように思われる。

実在把握能力の「仮定」は、プラトンにおいて、認識論的・存在論的探求の端緒を意味する。先の「金」の事例に戻って説明しよう。もしわたしが〈金〉を知らなければ、ある物質 X を見たときに「金」という発語は生じなかつたはずである。だがたいていの場合、わたしが〈金〉についてもっているこの種の「知」が捉え直されることはない。わたしの名指しの成功は、同じ言語共同体に属する他者の理解にいくらか依拠する限りにおいて、「金」という語で自分は何を指しているのかという問いを抱くことはないからだ。もし誰かに「その「金」という語で何を指しているのか」と問われたら、わたしは迷わず目の前にある物質 X を指さして「これ」と言うだろう。だが、わたしは、金についての科学的知識を十分な仕方ではもっていない。少なくとも、金が原子番号 79 の物質であるという、小さい頃に学ん

だ知識はとっくに忘れ去られている。では、わたしは何を了解して「金」という語を発したのだろうか。あるいは、「これ」と言って、わたしは一体何を指したのだろうか——。わたしが「金」という発語でもって了解していること、あるいは「これ」と言って指さしたものは、いまこの物質 X に現れている光沢や形、あるいはそうした物理的特徴の集合ではあり得ない。なぜなら、そうしたものは、観察者の相違、同一の観察者における視点の相違、時間の相違、点・文脈・関係の相違など、観点に応じて変化するものであるからだ。わたしは確かに、こうした「相対性」や「可変性」を被り得ないものを指している。では、それは何であるのか。

われわれが、心や脳の外部にあるもの——実在——をある仕方では把握していなければ、何かを名指し、それについて思考し、話すことはできないだろう。いかなる思考の成立も依拠するところの、実在についてのこの種の「知」は、認識論的・存在論的探求の端緒であると同時に、その終局点でもある。というのは、自分の語が指している当のものを捉えることは、それについて予めもっている「知」を捉え直すことに他ならないからだ。

「名指す」ということをめぐるプラトンの思索が、認識論的・存在論的問題を射程に収めるものであることは、プラトン研究においてすら、十分には理解されていないように思われる。それは一つには、『クラテュロス』というこの対話篇の、プラトン哲学全体にとっての重要性が（とりわけ我が国では）看過されてきたこと、そして、この対話篇が、長い解釈史の中で、必ずしも正当には扱われてこなかったことに因る。

『クラテュロス』がこれまで、上述した意味での言語哲学の対話篇として読まれてこなかったこと背景には、この対話篇の主題である「名前の正しさ」および語源分析 (etymology) が誤解にさらされてきたという事情がある。ストア派と中期プラトン主義者は、太古の人間たちが、同時代の哲学者に比して実在への優れた洞察力を享受していたと確信するようになり、次第に哲学を、この太古の知恵を取り戻すためのプロジェクトと見做すようになった。古代の人間は事物の本性への鋭い洞察力をもって名前を制定したため、名前を学ぶことは事物の本性を学ぶことに他ならないとするストア派の思想を中期プラトン主義者が共有したことは、プロクロスを含め多くのプラトン主義者が、『クラテュロス』の語源分析は、事物の本性についての信頼可能な情報を提供すると想定する結果を招いた。

20 世紀後半になると、『クラテュロス』の語源分析は、一方で、語源学や詩学、また音韻論を中心とした言語学などの研究対象とされ、他方、『クラテュロス』の内面的研究においては、意味論的関心から盛んに論じられた——20 世紀後半における哲学の「言語論的転回」が、プラトン哲学の重要な論題（とりわけ、アイデアの自己述定問題）を「意味論的」角度から解決しようという潮流を生み、この時代に『クラテュロス』への関心が一挙に高まったからだ。一般に「記述説」と呼ばれる語源分析的方法論——「名前は、固有名も一般名も、共に記述的意味を有し、それを充足する本性をもつ対象に適用されねばならない」という説——は、プラトンにしばしば帰されてきた「意味と名指しの混同」という批判を回避するものと見做されたが、結果として、論者たちの多くは、「記述説」をプラトン自身の受容する

見解と解釈した。

20世紀後半から21世紀にかけて、(英米圏で)語源分析を中心に据えた統一的解釈が試みられるようになると、「名前の正しさ」に対するソクラテス(そしてプラトン)の最終的立場の判定が『クラテュロス』研究の主要課題として認識されるようになった。というのは、古代とは異なり現代において、「名前の正しさ」は、一般に「言語本性主義」(linguistic naturalism)／「言語規約主義」(linguistic conventionalism)——それぞれクラテュロスとヘルモゲネスによって提唱される——と呼ばれる一定の学説ないし理論の間の対立という問題枠の中で論じられてきたため、この対話篇の統一性・一貫性を立証するためには、ソクラテスが最終的にどちらの立場でこの対話篇から去るのが、秩序立てて説明されなければならないからだ。しかし、諸家の見解は大きく隔たっており、いまだ一定の解釈は提示されていない(第一章第一節で詳説する)。

古代から現代に至るまで、『クラテュロス』研究が直面してきた問題ないし困難は、本質的に、「名前の正しさ」の誤解に由来する。「名前の正しさ」という主題が、元来、プロディコスやプロタゴラスらのソフィストたちが職業的に扱っていたものであることは、プラトンのいくつかの対話篇と、アリストテレスの報告から知られる(第一章第四節(2))。この対話篇の冒頭部でもまた、この二人のソフィストは、「名前の正しさ」に関する類のことに精通する人物として言及されるが、彼らソフィストの金銭欲と、多額の謝礼金を支払って誰かの講義を聞くだけで哲学的知識を得ることができるという愚かな考えがあからさまに嘲笑、軽蔑されるだけで、彼らの扱う「名前の正しさ」について、立ち入った考察はなされない。では、何故プラトンはこの対話篇の冒頭部でこのような筋書きを書いたのだろうか——。

それは一つには、「名前の正しさ」が、師ソクラテスが精通する類の主題ではないことを最初にはっきりと示しておくためであろう。実際、ソクラテスは、「名前の正しさ」に関する講義をプロディコスから聞かなかつた——がゆえに、「名前の正しさ」に関する事柄の真実を知らないと断言する(384b)。このことは、「名前の正しさ」をめぐるのちの探求が、ソクラテスの基盤に基づいてではなく、ホメロスらの詩人を権威として着手されることの伏線となっている。

だがもう一つ、プロディコスらへの皮肉まじりの言及に託された意図は、この対話篇において論究される「名前の正しさ」が、プロディコスらの扱う類の「名前の正しさ」とは別物——つまり、単に嘲笑するだけでは済まされない、極めて重大な哲学的問題を孕むもの——であることを示唆することにある。問題とされるその「名前の正しさ」は、クラテュロスという名の人物が説くものであり、この人物に極めて特異な、私秘的思想である。クラテュロスは、ソクラテスの仲間の一人であるヘルモゲネスに対し、「少なくとも「ヘルモゲネス」は君の名前ではない——たとえすべての人間がそう呼ぶとしても、だ。」(383b6-7)と謎めいた発言をするが、その理由をヘルモゲネスが問いただしても、しらばくれて何も明確にしない。そこでヘルモゲネスは、偶然通りかかったソクラテスに、クラテュロスの「神託めいた言葉」[τὴν...μαντείαν]の「解釈」を願い出る。この対話篇のほぼ半分を占める長大な語源

分析は、したがって、クラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものについてのソクラテスの解釈なのである。

以上の二点を踏まえると、プロディコスらソフィストたちについての挿話を通じて、プラトンは、「名前の正しさ」に関する事柄の中に、ソクラテス（そしてプラトン）によって積極的に肯定されうるものは何もないこと、そしてクラテュロスの説く「名前の正しさ」が何故「問題」であるのかが、徹底的に吟味されねばならないことを暗示していると考えられる。クラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものの中にプラトンが見据えた「問題」とは、それが、「名前の語源分析から得られる「記述的意味」が、対象の本性を明示する」と主張する点にある。この主張が、意味論的にも存在論的にも、極めて問題含みであるのは、一方で、それが、「語は、その記述的意味を充足する本性をもつ対象にしか適用され得ない」と主張することによって、「虚偽の発語の不可能性」を伴い、他方、それが、「語の記述的意味を知ることが、対象についての知識を獲得する唯一にして最善の手段である」と主張することによって、「記述的意味を無条件に基準として、外的世界のあり方を断定する」からである。

ソクラテスは、語源分析を実演する過程で、名前が「正しい」名前であるための条件を、それが対象の任意の属性を表示する[σημαίνει]という点に見出す。極めて重要なのは、ここにおいてはじめて、語と対象との間に第三の要素——われわれが「意味」や「概念」と呼ぶもの——が出現したことである。しかし、語が表示するものは、厳密には、複数の語の記述的意味が共通に表示するもの（たとえば、「Ἐκτορ」と‘Ἀστύναξ’は、それぞれの記述的意味——「所有者」と「市」[ἄστυ]の「支配者」[ἄναξ]——を介して、同一の属性——“王にふさわしい”——を表示する）として——それはつまり、いわば記述的意味によって決定されるものとして——現われたため、対象の本性では決してなく、むしろ当の対象にとり付随的な属性であったり、実際には当の対象にあてはまらない属性である可能性がある。取り違えてはならないのは、ソクラテスが見出したこの語源分析的方法論それ自体が誤りなのではないということだ。問題は、語と対象との間に「意味」を介在させることなく、それを対象の自然本性的あり方と混同することにある。

「名前の正しさ」は、それが「対象の本性を明示する」と主張する限りにおいて、徹底的に批判・吟味され、斥けられねばならない。従来、それがソクラテス（そしてプラトン）の受容する見解と見做されてきたのは、この対話篇の冒頭部が適切に読まれてこなかったからである。「名前の正しさ」一般がソクラテスによって積極的に論じられうる主題ではないこと、そしてこの対話篇で論究される「名前の正しさ」がクラテュロスという人物に特異な、極めて問題含みの思想であることが看過され、「名前の正しさ」は、「言語本性主義」対「言語規約主義」という一定の学説ないし理論間の対立において論じられてきた。これまで、このテキストに明記されていない前提が疑われることすらなかったために、「名前の正しさ」に対するプラトンの最終的立場やこの対話篇の一貫性などをめぐる不要な論争が引き起こされてきた。

上記の背景と問題点を踏まえ、本稿は、この対話篇全体の目的が、クラテュロスという名

の登場人物の説く「名前の正しさ」に孕まれる「問題」を批判・吟味することにあるという想定に立ち、この対話篇が、或る種の循環構造を成して、語と対象との関係をめぐる一つの完結した議論を構成しうることを示す。それに先立ち、第一章は、『クラテュロス』を読解するための予備的考察に当てる。この章は、『クラテュロス』の全体像とその本質を捉え直すうえで再検討されるべき四つの項目——冒頭部の見直し（第一節・第二節）、語源分析（第三節）、クラテュロスと「名前の正しさ」（第四節）、執筆順序の問題（第五節）——を扱う。具体的には、まず、従来の『クラテュロス』研究において共有されてきた基本構図の問題点を指摘し（第一節）、これまで精確に読まれてこなかった冒頭の一節およびその背景にある事情を正しく理解し直すことによって、従来の基本構図の全面的見直しを図る（第二節）。次に、この対話篇のほぼ半分を占める長大な語源分析が、対話篇全体においてどのような役割を担っているのかを検討する（第三節）。途方もない量の語源分析の存在は、『クラテュロス』研究の進展を妨げる一つの要因となってきた。Barneyの研究(2001)は、語源分析の機能、長さ、そしてユーモア的要素を正しく理解するうえで不可欠な「プラトンのジャンル」（プラトン流の書き方）という視点を導入し、『クラテュロス』の語源分析研究に一定の指針を与えたが、同時に、プラトン哲学における価値という論点を問題化した。以後、語源分析の裏にある哲学的問題（流転説をめぐらる問題）が議論の俎上に載せられ、表の問題——すなわち、ソクラテスの語源分析のパフォーマンスそれ自体が示している問題——が見過ごされてきた。本稿は、「エウテュプロンの知恵」と「自己欺瞞」という二つのモチーフに着目し、ソクラテスの語源分析の実演が全体として、次のことを示していることを論証する。それはすなわち、知識への探求的欲望ではなく誇示的欲望から語源分析に魅了され、名前の中に反映された古代の命名者たちの見解を知ることによって知識を得たと思い込んでいることの無自覚と自覚の間の緊張関係、である。われわれは、語の使い手として、語の外部にある対象——実在——をある仕方で把握しているにもかかわらず、知識というものが外から与えられるものであるという誤った理解をもつがゆえに、何であれ権威的で言語化されたもの（語源分析的知識もその一つ）に確からしさを見出し、それで知識を得たと思い込んでいる——このことは、『クラテュロス』全体が提示する「問題」である。それゆえ、ソクラテスの語源分析の実演は、まさに『クラテュロス』の中心的問題と直接的にかかわっているのである。

Goldschmidtの研究が明らかにしたように³、語源分析は、外的世界がいかにあるかを教える説得的で有効な手段として当時ソフィストたちの中で重んじられていた。他方、前述のように、「名前の正しさ」もまた、プロディコスやプロタゴラスらの一部のソフィストたちによって職業的に扱われていた。クラテュロスという人物が、語源分析に職業的に従事していたソフィストの一人であったかどうかは定かでないが、この人物に特異な点は、「名前の正しさ」を語源分析的基準に求めたことと、その「極端性」にある。『形而上学』（第1巻第6章 987a29-b7; 第4巻第5章 1010a7-9）でのアリストテレスの証言から、クラテュロスは、

³ Goldschmidt 1940: 109-142.

通常、極端な流転説を唱え、最後には語ることを放棄した人物として知られるが、その極端性は、彼の説く「名前の正しさ」と無縁ではない——否むしろ、「名前の正しさ」への異常なまでの執着が、クラテュロス、最終的に言語を放棄するにまで至らせたと考えerことは妥当である。第四節では、「言語の放棄」に存するクラテュロスの流転説の極端性が、彼が「名前の正しさ」と呼ぶものの極端性にいかなる仕方で起因するかを検討する。その考察のいくらかは推測の域を出ないが、クラテュロスという人物の哲学的発展を可能な限り再構築しようと試みることは、なぜプラトンがこの『クラテュロス』という対話篇において、クラテュロスの説く「名前の正しさ」を問題化したのかを理解するのに役立つ。

『クラテュロス』の十全な理解のためにもう一つ検討されねばならない問題がある。それは、『クラテュロス』の執筆順序をめぐる問題である。一般に、『クラテュロス』は中期対話篇と見做されているが、中期対話篇のどこに位置づけられるかという問題がこれまで議論を呼んできた。結論から言えば、本稿は、『クラテュロス』を『国家』以後に位置づけ、この対話篇を『テアイテトス』を経て『ソフィスト』へと連結する三部作の序章として読むという Warburg らの解釈に従う。その論拠の一つが、385b2-d1 の一節にある。この一節は、現在置かれている場所にはふさわしくなく、それゆえ、別の場所に置き換えられるか、あるいは削除されねばならないという見方が、現在、主流となっている。この一節は、「言表」を「名前」と同化するという統語論的問題を抱えており、『クラテュロス』の執筆順序を特定するうえでの一つの指標となりうるため、その取扱いは慎重になさなければならない。Sedley の研究以前、この一節は、『クラテュロス』の執筆順序をめぐる問題とは無関係に論じられてきたが、Sedley の研究によって、双方が密接な関連をもち、それゆえ、独立に論じられるべきでないことが示されたと思われる。したがって、第五節は、その大部分が、この一節と、それとの関連が見込まれる 429b10-430a7 の一節についての詳細な分析に当てられる。この作業は、『クラテュロス』の執筆順序をめぐる問題に取り組むうえで必要不可欠な作業であることを、予め断っておきたい。

第二章では、従来、「言語本性主義」を擁護する議論と見做されてきた 384c10-391b6 の一節が、名指しの本性的正しさを基盤とするプラトンの言語論の提示に位置づけられることを示す。この対話篇は、「名前の正しさ」のようなものは存在しないと主張するヘルモゲネスの見解の吟味からはじまる。ヘルモゲネスは、「われわれ」と呼びうるような日常の名前使用者のいわば代弁者であり、「ひとびとがそう呼んでいるものが、その名前である」という至って常識的な見解をもつ。ヘルモゲネスにとって、名前はすべて正しい名前であるため、「正しさ」というものを、何かがある名前であるための条件としてしか理解することができない。ヘルモゲネスは、その条件を「規約」と「同意」に見出すが、それはひとびとの間で結ばれる公的な規約ないし同意ではなく、私的なものであるため、それによってヘルモゲネスは「命名の恣意性」を認めていることになる。しかしヘルモゲネスは単に、われわれが何かに勝手に名前をつけたり、既存の名前を新しい名前に勝手につけ替えたりできるということを言っているに過ぎない。逆に彼は、「使用の公共性」を認めるため、「命名の恣

意性」が公的な対人コミュニケーションを妨げることはない（第二節）。

ソクラテスは、「各人が何かにつけた名前であればなんでも、各人にとっての名前である」というヘルモゲネスの見解から、名前の、各命名者に対する「相対性」という特徴を見出す。そして、名前が各命名者に対して相対的であるのと同じように、名指される対象のあり方もまた、各人に対して相対的であるのかどうかをヘルモゲネスに問うことによって、ヘルモゲネスに、これまで不明瞭であった二種類の相対性——すなわち、「名前（厳密には、文字と音節から構成される素材としての名前）の、各命名者に対する相対性」とプロタゴラスの「認識される対象の、各認識主体に対する相対性」——の峻別を促す。その峻別をもってはじめて、名指される対象の同一性が顕在化する。このようにして、議論は、「名前の正しさ」の存在それ自体を認めないヘルモゲネスの見解から、プロタゴラスの「相対性」の否定を媒介として、名指される対象の「確固不動性」へと内的に展開してゆくのである（第三節）。

音声形態としての名前の「相対性」から、名指される対象の「確固不動性」が要請されたことの背景には、「名指す」という行為を、外的世界のあり方にかかわる営みであるとするプラトンの理解が存在する。先に述べたように、たとえば肉を切ろうとするとき、切られる対象（肉）のあり方（肉の種類や部位別特性など）を考慮せず、行き当たりばったりの道具を用いて切ろうとするなら、その肉を切るという行為は失敗に終わるだろう。だが、実際には、われわれは、明示的な仕方で誰かに教えられたわけでもなく、明示的な規則に従っているわけでもないのに、切られる肉の特性に適した仕方で、本性上適した道具（肉切り包丁のうちでも、切られる肉の特性に適したもの）を用いて切ることができる。同様に、名指すという行為においても、われわれは、明示的な仕方で誰かに教えられたわけでもなく、明示的な言語規則に従っているわけでもないのに、名指される対象のあり方に即して、本性上適した道具（名前）を用いて名指すことができる。ここで留意しなければならないのは、われわれの行為の成功は、行為主体の専門的な知識や技術よりも道具の性能に依拠するという点である。概して、われわれは、肉についての専門的知識や肉切りの専門的技術をもっていないが、肉切り包丁を使えば、少なくとも、肉を切るという行為には成功する。同様に、われわれは、対象についての専門的知識や対象同定についての精確な理解を欠いているが、適切な名前を使用することで、少なくとも、名指すという行為には成功する。「道具の機能への依存性」という論点は、われわれが、名指すという行為を、それがなされるにふさわしい仕方で実際になしているという事実は無自覚であること、そして、名指される対象について暗黙の裡にもっているある種の「知」がまだ不完全なものでしかないことを示唆する（第四節）。

こうした「名前の道具モデル」を支えているのは「名前の形相」という概念である。「名前の形相」を名前の「意味」や「概念」と見做す通常の解釈の誤りは、384c10-391b6（この一節は、名指すという行為の本性的正しさにかかわる）と、後続する391b7から427e5までの一連の長い語源分析のセクション（この箇所は、クラテュロスの説く「名前の正しさ」に

ついでにソクラテスの「解釈」にかかわる)との間の根本的な相違を看過し、後者で導入される「名前の力」という概念と「名前の形相」とを混同したことにある。語源分析の過程で見出される「名前の力」は、語がその記述的意味を介して対象の任意の属性を表示する作用——意味作用——に相当するが、「名前の形相」は、語と対象との間の自然本性的な指示関係の言語モデルの構築の際に導入された概念であるため、「意味作用」ではあり得ない。「名前の形相」は、「名指すということとその自然本性とする何か」であると言われる。そうすると、われわれが日常的な名指し行為において、外的世界の構造を、そうある通りに区分し、外的世界がいかにあるかをより表立って明らかにしているのは、名前がもつこの機能に依ってであることになる。

名前の模範的使用者たる「問答家」への言及は、名前使用が、プラトンにおいて、問答法における使用を射程に収めるものであることを意味する。われわれ日常の名前使用者と問答家との間に設けられた区別は、名指すという行為のあり方そのものにかかわるのではなく、外的世界のあり方を基準として、語の適用の正しさを識別できるか否かという点に存する。このようにして、プラトンは、語と対象の二項関係に限定された言語モデルが、語・語を使用する主体の知のあり方・対象の三項関係に拡張されねばならないことを、示唆しているのである（第五節）。

第三章は、391b7から、クラテュロスが再度登場する427e5までの一連の長い語源分析が、クラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものについてのソクラテスの「解釈」であることを示す。このことが意味するのは、ソクラテスが提示する語源分析的方法論およびそれによって示される内容が、クラテュロスが「名前の正しさ」ということと言おうとしていることではないということである。クラテュロス自身の口から「名前の正しさ」の内実が語られるのは、427e5以降である。ソクラテスはこの対話篇において、「名前の正しさ」に関する事柄の真実を知らないという姿勢に徹しており、対話相手であるヘルモゲネスもまた、「名前の正しさ」について無知である——否むしろ、彼は「名前の正しさ」の存在それ自体を認めない——ため、「名前の正しさ」をめぐるソクラテスらの探求は、「知っているひとびと」を頼りに行われることになる。「知っているひとびと」とは、プロディコスとプロタゴラスであるが、一方で、プロディコスに関しては、「彼の講義をソクラテスは聞かなかった」とすでに言われており、他方、プロタゴラスに関しては、ヘルモゲネスが、プロタゴラスの相対主義を斥けたことを理由に「名前の正しさ」についての説も否定するため、彼らソフィストに代わって「ホメロスらの詩人」が権威となる（第二節(1)）。

以上のようにして、「名前の正しさ」をめぐるソクラテスらの探求は、名前についてのホメロスの考えを吟味することから始まる。ここで注意を要するのは、ホメロス自身が「名前の正しさ」という考えをもっていたわけではないということだ（ホメロスは、『イリアス』と『オデュッセイア』における5か所で、同一の対象が、神々と人間たちとはそれぞれ異なる名前と呼ばれる例を挙げ、語源分析的説明を行っている。しかし、Kirkの解説によれば

4、それらの事例を説明する原則は存在しないとされる。いずれにせよ、それらの事例でもってホメロスが「名前の正しさ」という主題を論じていたと考えるのは妥当でない。むしろ、名前についてホメロスが言及している箇所を基に、ソクラテスが、ホメロスのような名前の正しさを探ってゆく。ソクラテスは最初に、ホメロスのような正しさを、名前の使用者の間の知恵の優劣という点に見出す（神々と人間たちの間の知恵の優劣に関しては(2)、類としての男性と女性との間の知恵の優劣に関しては(3)で論ずる）。ヘクトルの息子につけられた二つの名前——「アステュアナクス」と「スカマンドリオス」——のうち、どちらがより正しい名前であるかを判別する基準は、最初、名前の使用者が男性であるという点に求められる。そうすると、トロイアの男たちが使用していた名前は「アステュアナクス」であるため、「アステュアナクス」の方が、女たちが使用していた「スカマンドリオス」という名前よりも正しい名前であることになる。

次にソクラテスは、ホメロスの権威に訴えない仕方で、「アステュアナクス」が何故ヘクトルの息子の、より正しい名前であるのかを考察する。ソクラテスにとってまだ判然としないのは、「父ヘクトルが市を守護した」ということがいかにして、「彼の息子が「アステュアナクス」——「市の支配者」——と呼ばれて正しい」ことの論拠となりうるのか、という点である。そこでソクラテスは、「ヘクトル」と「アステュアナクス」の両方の名前が、それぞれの記述的意味——「所有者」と「市の支配者」——を介して、同一の属性——“王にふさわしい”——を表示するという意味論的説明を試みる ((4))。

しかし、この意味論的説明においても依然として、息子が父と同じ属性をもつことが、息子の名前の「正しさ」の前提となっているため、検討中の問いは解明されない。そこでソクラテスは、「親と子は、自然本性的に、同一の属性を有するか、同一の「種」に属する」という原則に従い、「アステュアナクス」は、親と子に共有される同一の属性（“王にふさわしい”）ないし双方が属する同一の種（王）を、その記述的意味を介して表示するため、ヘクトルの息子の、自然本性的により正しい名前であると説明する ((5))。

議論の基点は、名前が表示するものの「同一性」から、名前を構成する文字と音節の「多様性」へと移行する。ここで、名前を構成する文字と音節の「多様性」と「無関係性」が許容される条件が設けられる。その条件は、①「名前の中に、事物のあり方が明示されている」という点と、②「それ（明示されている事物のあり方）が、支配的である」という点に見出される。ソクラテスの語源分析的説明において、語が表示する対象の「あり方」[οὐσία] は、対象の本性ないし本質ではなく、対象の任意の属性（当の対象にとり付随的な属性であったり、実際には当の対象にあてはまらない属性である可能性がある）であるため、①は、「対象の任意の属性あるいは対象にあてはまらない属性が、名前の中に明示（表示）されている」という極めて弱い条件であることになる。名前が対象の任意の属性を表示するのは記述的意味を介してであるため、①は、厳密には、「名前を構成する文字および音節の中に、その名前が表示する属性を決定づける音声的要素が置かれている」という条件として理解され

⁴ Kirk 1985: 94; 247.

る。しかし、のちの議論（第四章第三節）の内容を踏まえると、名前を構成する文字と音節の中に、その名前が表示するものを決定づける音声的要素が置かれているとしても、その音声的要素は必ずしもその表示に寄与するわけではなく、その音声的要素がそれ自身の機能を発揮するか否かは、規約の問題であることがわかる。そうすると、上記の条件は、最終的に②と組み合わされることで、次の条件——すなわち、「名前を構成する文字および音節の中に、その名前が表示する属性を決定づける音声的要素が置かれており、かつ、その音声的要素がその表示に寄与する」——という条件として理解されることができ（(6)）。

以上の条件は、「名前の力」という概念を用いて再度説明される。「名前の力」という概念を理解する鍵は、それが「薬の力」と類比的に説明される点にある。テオフラストス『植物誌』第9巻第19章第4節によると、植物の根や実や液汁は、色や匂いや味などの点で相互に異なるが、「同じ一つの効能」をもち、「同一の効果」をもたらすとされる。テオフラストスのこの調査に基づくなら、「薬の力」は次のように定式化されることができ——複数の植物 A・B・C...が、色や匂いなどの点で相互に異なる物質 X・Y・Z...（苦い味のする根や白い葉や太い実など）を基本構成要素とし、同じ効果（たとえば、胃の浄化）をもたらす場合、X・Y・Z...に共有される同一のはたらき（胃の浄化作用）が「力」と呼ばれる——。類比的に、「名前の力」もまた、次のようなはたらきないし作用として定義されることができ——すなわち、複数の名前 A・B・C...が、文字や音節の点で相互に異なる「記述的意味」X・Y・Z...から構成され、同じものを表示する場合、X・Y・Z...に共有される同一のはたらき（意味作用）が「力」と呼ばれる、と——（(7)）。

名前と薬のアナロジー、及び、「名前の力」という概念の導入は、「名前の正しさ」を、「父子関係にある二つの名前の間の自然本性的正しさ」から、「複数の名前の間の意味論的正しさ」へと拡張、展開することを可能にしたと結論づけることができる。この議論展開は、これまで着目されてこなかったが、この対話篇全体の統一性および一貫性という点において、極めて重要である。この対話篇の最後に着手される「流転をめぐる議論」の眼目は、徳に関する名前の記述的意味が全体として表示する通りに、実在のあり方が本来的に“動”であるのか否かを検証することであり、ここにおいて、複数の名前の間の意味論的正しさの正当性が問い直されるからだ。その意味において、「父子関係にある二つの名前の間の自然本性的正しさ」から「複数の名前の間の意味論的正しさ」への展開は、「名前の正しさ」の問題から流転説の問題への内的展開の伏線となっているとすることができる（(8)）。

第三節では、394e から 421c までの一連の長い語源分析の構造を概説する。「派生的名前」を対象とするこの語源分析は、倫理学、心理学、論理学、存在論の対象、一言でいえば、哲学的思考がそれにかかわるところのすべての実体の名前を扱う。個々の語源分析については、Sedley が極めて精密な分析を行っているが、全体的な構造および各セクション間のつながりに関しては、Ademollo の分析がより説得的だと思われるため、基本的には Ademollo の解釈に従い、この長い語源分析の内的連関と全体としての統一性を説明する。

第四節では、「要素的な名前」（それ以上他の要素に分解され得ない名前）の正しさを説明す

る。派生的名前の正しさは、記述的意味を介して対象の任意の属性を表示するという点に見出されたが、要素的名前は記述的意味をもち得ないため、別の正しさが要請される。ソクラテスは、「名前は事物の模造品である」という考えに基づき、要素的名前を構成する字母と対象との間の音声的類似性に着目する。そこでまず、実在が類ごとに分割され、それに対応する形で、ギリシア語の14個の字母 [ρ, ι, φ, ψ, σ, ζ, δ, τ, λ, γ, ν, α, η, ο] が取り出され、そのそれぞれは、14の類（動・静、硬さ・柔らかさなど）と、舌の動きや氣息によって生み出される音声面での類似性をもつことが示される。

第四章は、クラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものに孕まれる意味論的問題を扱う。ソクラテスは、一連の語源分析の実演を通じて、派生的名前の「正しさ」を「記述的意味を介して対象の任意の属性を表示する」という点に見出し、他方、要素的名前の「正しさ」を「字母と対象との間の音声的類似性」という点に見出した。しかし、これらの説明は、クラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものの内実を明らかにしない。ソクラテスの説明に関して、クラテュロスが納得しない点は、それが、「諸々の名前の間の出来の優劣における差」（言い換えれば、「正しさの程度の差」）を主張する点である。クラテュロスによれば、すべての名前が正しくつけられているため、「正しさ」に程度という性質は認められない。これまで見てきたように、ソクラテスが提示した「正しさ」の条件は、極めて弱いものであった。なぜなら、語が何を表示するかは、語の記述的意味によって決定されるため、語が表示するものが対象の本性である必然性は全くないからだ。実際、ソクラテスが語源分析した名前のほとんどが、対象の付随的な属性か、実際には当の対象にあてはまらない属性を表示する。つまり、ソクラテスが扱った名前のほとんどが、出来の悪い名前なのである。

そうすると、「すべての名前が正しくつけられている」という主張でもってクラテュロスが言わんとするのは、「すべての名前が、その記述的意味を介して、対象の本性を表示する」ということであることになる。この主張は、意味論的問題を孕む。この主張に従えば、「語は、その記述的意味を充足する本性をもつ対象にしか適用され得ない」（「記述的意味＝指示対象説」）ため、虚偽を発することが、本来的に不可能になるからだ。たとえば、誰かがヘルモゲネスを「ヘルモゲネス」と呼ぶ際、この名前は、話し手の意図に関係なく、その記述的意味——「ヘルメスの息子」——を充足する本性をもつだれか別の人物を指示する。結果として、この話し手は、「ヘルモゲネス」という発語でもって、そのだれか見知らぬ人物を正しく名指していることになる（第一節(1)）。あるいは、挨拶の場で相手の名前を間違えるといった事例では、間違って発せられた語は「騒音」に過ぎない（(2)）。ソクラテスは、身振りや記述などの名前以外の要素に訴えることで、話題となっている対象が特定されるメカニズムを説明し、虚偽を発する可能性を示そうとする（(2)・(3)）。しかし、語が対象を指示するメカニズムが記述的意味によっては説明され得ない——言い換えれば、指示を確保する要因は、記述的意味ではない——ことが示されない限り、「記述的意味＝指示対象説」は論駁され得ない。

そこで、ソクラテスは、クラテュロス説の誤りの元凶が、「似像」と「写し」の混同にあ

ることを看守する。似像も写しも、実物とは別のものであるという点は共有しているのだが、似像は二通りの仕方では異なる。第一に、似像は、たとえば二次元であったり、木製であったり、無生命であったりといった類の「本質的」欠陥をもつ。第二に、似像は、制作者の技量や能力次第で、実物が実際に有するのとは異なった諸特徴を与えられる場合がある（「非本質的」欠陥をもつ）。名前はこれらの欠陥をもつ「似像」であって、実物と質的に同一な「写し」とは異なることを示したうえで（第二節）、ソクラテスは、要素的名前である‘σκληρότης’「硬さ」を取り上げる。この名前は、中に置かれたλが硬さとは正反対の柔らかさを模倣するため、「出来の悪い名前」に数え入れられる。これまでの議論は、指示が名前以外の要素（直示など）に依拠しなければ成立しないという点に重点を置いていたため、「記述的意味＝指示対象説」を論駁するに至っていない。そこでソクラテスは、σκληρότηςが名前以外の要素抜きで、いかにして当の対象——〈硬さ〉——を指示しうるかを問題にする。この問題化によってソクラテスは、指示を確保する要因として、クラテュロスから「習慣」[ἔθος]という要素を引き出すことに成功する。ここで言われる「習慣」とは、「こう発語する」という発語行為と「あれのことを考える」という思考活動の習慣的な連鎖であり、この連鎖は、或る言語共同体の言語規則を採用して以来、その規則の範囲内で言語を使用するよう自分自身を習慣づけてきたことに由来する。だが、「発語行為と思考の習慣的連鎖」は、「自分自身と結んだ規約」の上に成立している。「自分自身と結んだ規約」という考えは、プラトンにおいて、語の使い手が対象についての知識を或る仕方でもっていることを説明する。なぜなら、「名前は、規約を結んだことによって対象を前もって知っているひとびとに対して、{その対象を} 明示する」と言われるからだ。Ademolloによれば、「対象を知っている」とはここでは、「「X」がどんな対象を指示するかを知っている」ということを意味する。つまり、語の使い手は、「X」という記号ないし音声とXを結びつける作業を行ったことにより、Xを——おそらくは、暗黙の裡に——知っているのである。しかし、名指しの成功が、同じ言語共同体に属する他者の理解にいくらか依拠する限りにおいて、語の使い手が対象についてもっている知識が問い直されることはない（(1)）。

しかし、ソクラテスにとって（以上のような意味での）「規約」だけが指示を確保する要因ではない。ソクラテスは、指示を確保する要因を「規約」と「類似性」の両方に見出す。ここで問題となるのは、名前を構成する字母と対象との間の音声的類似性が、いかにして指示の成功に寄与するか、である。要素的名前が正しい名前であるための語源分析的条件として導入された「類似性」が、実在を構成する類と、それと対応する仕方では取り出された字母との間の関係に言及する点と、「形跡」[τύπος]という概念に着目し、本稿は次のような解釈を提示する。語の使い手は、何か或る「X」という記号ないし音声とXを結びつける作業を行ったとき、Xが「X」という視覚的記号ないし音声としてそのひとの精神に刻印され、のちに「X」という記号ないし音声に遭遇したとき、その視覚的記号ないし音声からXを喚起することで、それがXの名前であることを認知することができる。もしこの考えが正しいければ、語と対象との間の音声的類似性は、規約に依拠する仕方では、指示の成立に関与してい

ることになる ((2))。以上のようにして、ソクラテスは、語が使用される外的文脈に訴えることなしに、語それ自体が当の対象をいかにして指示しうるかを、「規約」と「類似性」という二つの要素を用いて説明した。しかし、以上の説明は、‘σκληρότης’という要素の名前に関するものであるため、「記述的意味」が指示の成立に寄与し得ないことを論証するものではない。したがって、クラテュロスの「記述的意味＝指示対象説」は、いまだ無傷のままであることになる。

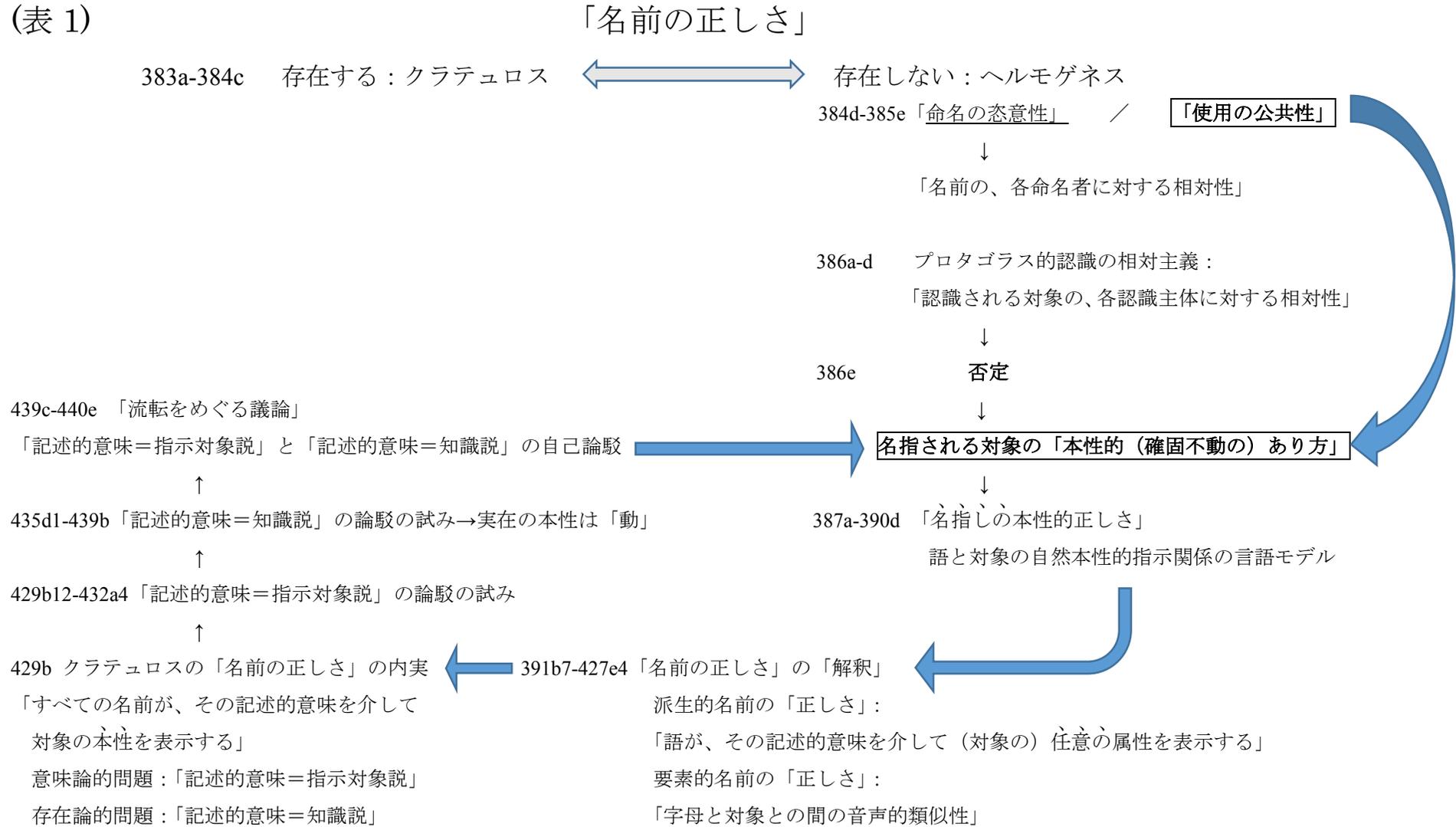
第五章は、クラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものに孕まれる存在論的問題を扱う。「すべての名前が、その記述的意味を介して、対象の本性を表示する」というクラテュロスの主張は、意味論的問題のみならず存在論的問題をも孕んでいる。「語の記述的意味が、対象についての知識を獲得する唯一にして最善の方法である」(「記述的意味＝知識説」と主張することによって、語の記述的意味を無条件に基準として、外的世界のあり方を断定するからだ。ソクラテスは、「記述的意味＝知識説」を、実際のギリシア語は一貫性を欠いていることを示すことによって論駁しようとするが、クラテュロスは、再度「記述的意味＝指示対象説」を持ち出して、語源的に「動」を表示する名前と「静」を表示する名前のどちらか一方は名前ではないと主張する。だが、そのことは、どちらの名前が存在論的に真の理論を提示するかを判定する別の方法を要請することになるため、語の記述的意味を、対象についての知識を獲得する唯一にして最善の手段と見做す「記述的意味＝知識説」は論駁されたかに見える。しかし、この一連の議論の結論は、名前を通じて実在について学ぶことの或る程度の可能性を残すものであるため、「記述的意味＝知識説」の全面的な論駁には至っていない。

第六章は、プラトン哲学と流転説の問題を扱う。まず第一節で、先行研究の問題点を指摘し ((1))、この問題に取り組むうえでの予備的考察を行う ((2)・(3))。第二節では、『クラテュロス』の最後の議論である「流転をめぐる議論」を検討する。この議論は、「万物は常にあらゆる点で流転している」という「極端な」流転説のテシス (H テシスと略記する) から何が帰結するかを見ることによって、あるもののそれぞれ一つ一つの「確固不動性」(数的・質的同一性) を主張するソクラテスのテシスの正否を検証しようという試みとして読まれる。この議論は、H テシスから導出される四つの帰結を論ずる四段階の議論から成る。この議論の結論は、極端な流転説の真偽性についての判定を留保するものではある。しかし、名指され、知られる対象の本性が流転ではあり得ないことは、「記述的意味＝指示対象説」と「記述的意味＝知識説」がそれぞれ自己論駁に追いやられるという仕方で暗示されている。もし名指され、知られる対象の本性が——記述的意味が主張する通りに——“動”であり、それぞれのものは片時も同一性を保たないのなら、名前の記述的意味は、その機能——指示対象を決定するという機能と、対象についての知識を提供するという機能——を失うことになる。なぜなら、一つの名前が、その記述的意味を介して一つの特定の対象 (本性的指示対象) をもつことは不可能になるからだ。つまり、クラテュロスの「名前の正しさ」と極端な流転説は、本質的に、両立不可能であり、もしクラテュロスが極端な流転説を擁護するな

ら、彼は「名前の正しさ」を捨てざるを得ないのである。

以上のようにして、『クラテュロス』は、名指し行為の成功が依拠するところの、名指される対象の「確固不動性」の仮定ではじまり、その仮定で終わるといふ或る種の循環構造をなして、語と対象との関係をめぐる一つの完結した議論を構成する。次項に、その循環構造を図式化したもの（表 1）と、『クラテュロス』篇の構成を示したものを載せておく。

(表 1)



『クラテュロス』篇の構成

第一部：名指しの本性的正しき (383a1-391b6)

導入部：背景、主題、及び、方法の設定 (383a1-384e9)

ヘルモゲネスの見解 (384c10-e2)

「名前の、各命名者に対する相対性」から「認識される対象の、各認識主体に対する相対性」へ (385a1-e3)

「プロタゴラス批判」(385e4-386e5)

名指しの本性的正しさ(「名前の道具モデル」の提示) (386e6-391b6)

行為の自然本性 (386e6-387d9)

名前の機能 (387d10-388c2)

「名前の形相」(388c3-390e5)

移行部：「名指しの本性的正しき」から「名前の正しき」へ (390e6-391b6)

第二部：「名前の正しき」の「解釈」(391b7-427e4)

ホメロスの名前の正しさ：名前の使用者の間の知恵の優劣における相違 (391b7-392d10)

神々と人間たちの間の知恵の優劣 (391b7-e7)

類としての男と女の間知恵の優劣 (392a1-d10)

ホメロスの名前の正しさの「痕跡」(392d11-393b6)

親子間の自然本性的類似性 (393b7-e7)

名前を構成する文字と音節の「多様性」と「無関係性」(393c8-e10)

「名前の力」(394a1-b7)

複数の名前同値の意味論的同値 (394b7-d11)

移行部：「偶然的」正しきから「必然的」正しきへ (394d2-397c3)

偶然的に正しくつけられている名前 (394d2-396c5)

「エウテュプロンの知恵」の襲来 (396c5-397a2)

必然的に正しくつけられている名前の考察へ (397a3-c3)

派生的名前の語源分析 (397e4-421c2)

「神々」についての予備的考察、及び、「ダイモンたち」、「英雄たち」、

「人間たち」について (397e4-399c9)

「魂」と「肉体」について (399d1-400c10)

ホメロスの神々の名前について (400d1-408d5)

自然科学の対象の名前について (408d6-410e1)

「自然的」神々の名前について (408d6-409c9)

要素の名前について (409c10-410c4)

時間的規則性に関する名前について (410c5-e1)

知恵の高点へと疾走 (410e2-5)

徳に関する名前について (410e6-420e5)

「めまい」による投影的誤謬 (411b3-d2)

徳と価値に関する名前について (411d3-416d11)

有用と有害に関する名前について (416e1-419b4)

感情に関する名前について (419b5-420b5)

判断に関する名前について (420b6-c9)

意志に関する名前について (420d1-e5)

最も重大で最も美しいものの名前について (421a1-c2)

要素的名前の語源分析 (421c3-427d3)

第三部：クラテュロスの「名前の正しさ」の内実 (427d4-439d9)

「名前の正しさ」の意味論的問題 (427d4-435d1)

導入部：「名前の正しさ」についてのソクラテスの「解釈」に対する同意と
異論 (427d4-429b11)

「割り当つの議論」 (429b12-432a4)

「クルモゲネス」のクルモゲネスへの割り当て (429b12-e2)

「クルモゲネス」のクラテュロスへの割り当て (429e3-430a7)

「男性」なし「女性」の特定男性への割り当て (430a8-431a7)

言表（名前と述語の組み合わせ）の真なる割り当てと偽なる割り当て
について (431a8-c2)

偽なる割り当ての可能性 (431c3-432a4)

「二人のクラテュロスの議論」 (432a5-d10)

「τύπος（形跡）条件」 (432d11-433b7)

「σκληρότηςの議論」 (433b8-435d1)

「名前の正しさ」の存在論的問題 (435d1-439b9)

導入部：意味論的問題から存在論的問題への転換 (435d1-e5)
「学びをめぐる議論」 (435e6-439b9)

「記述の意味＝知識説」 (439b10-436a2)

名前の不調和をめぐる議論 (436a3-438d1)

実在を学ぶ二つの方法 (438d2-439b9)

- 第四部：「流転をめぐる議論」(439b10-440e7)
 導入部：名前から名指される対象へ(439b10-c6)
 ソクラテスの第一テシス(439c6-d2)
 ソクラテスの第二テシス(439d3-7)
 第一議論(439d8-12)
 第二議論(439e1-6)
 第三議論(439e7-440a5)
 第四議論(440a6-b4)
 ソクラテスの最後のテシス(440b4-c1)
 「流転をめぐる議論」の結論(440c1-3)
 ソクラテスの確信的主張(440c3-d7)
 クラテュロスの「極端な」流転説への傾倒の兆候(440d8-e7)

第一章 『クラテュロス』 読解への道標

この章は、全体として、『クラテュロス』の全体像とその本質を捉え直すための予備的考察である。そこで、従来の『クラテュロス』研究が精確に理解してこなかった、あるいはなおざりにしてきた四つの項目——冒頭部の見直し（第一節・第二節）、語源分析（第三節）、クラテュロスと「名前の正しさ」（第四節）、執筆順序の問題（第五節）——を扱う。「名前の正しさ」という主題と長大な語源分析にどう向き合うべきかという問いの答えは、冒頭部にある。それゆえ、冒頭部の精確な読解がこの対話篇の本質を頭わにすると言っても過言ではない。執筆順序をめぐる問題を扱うのは、プラトンのクロノロジーにおける『クラテュロス』の位置を知ることが、この対話篇全体の理解につながるからである。緻密なテキスト分析は、『クラテュロス』の執筆年代を特定するために必要不可欠な作業であることを、再度断っておく。

1 問題の所在

対話篇『クラテュロス』の冒頭場面は大方次のようであると、一般に想定されている⁵——「名前の正しさ」をめぐる、クラテュロスとヘルモゲネスは、すでに長い間激しく口論を交わしていたが、まだ合意に至らない。そのとき、彼らはたまたまソクラテスに遭遇する。そこでヘルモゲネスは、ソクラテスにいわば「判定者⁶」として議論に参加してもらったらどうかと、クラテュロスに提案する。

こうした想定のもとで、『クラテュロス』の冒頭の一節は、一般に、次のように訳出されている⁷。

HE. 「では、あなたがよければ、ここにいるソクラテスにもわれわれの議論に参加してもらいませんか。」

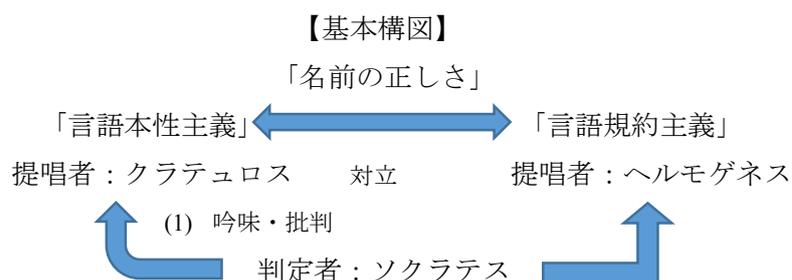
CR. 「きみがよければ。」 (383a1-3)

⁵ Sedley 2003: 3. ‘Cratylus and Hermogenes have already been engaged in heated debate, and as the dialogue begins, without any of the usual prefatory material, we find them approaching Socrates and inviting him to act as umpire. Their dispute is about the ‘correctness of names — what makes a name a *correct* name?’; cf. 51. Cf. Ademollo 2011: 23. ‘Hermogenes and Cratylus are on their way to the countryside (440e) and have been discussing for some time without reaching an agreement. Then they meet Socrates. Hermogenes suggests that they should inform him of the content of their discussion; Cratylus agrees.’（下線部は強調のためにわたしが引いたものであり、原文にはない。）

⁶ ‘umpire’ と明記しているのは Sedley (2003: 3) であるが、大方の学者は、ソクラテスを「言語本性主義」と「言語規約主義」の論争の調停者ないし判定者と見做している。

⁷ E.g. Reeve, ‘Shall we let Socrates here join our discussion?’ (1998: 1). Cf. Ademollo 2011: 23.

『クラテュロス』の冒頭がこのように読まれるのは、この対話篇が全体として、「名前の正しさ」をめぐる「言語本性主義」(‘linguistic naturalism’)と「言語規約主義」(‘linguistic conventionalism’)——それぞれクラテュロスとヘルモゲネスによって提唱される——の対立を軸に、ソクラテスが両説を吟味・批判するという構成をとっていると、理解されているからである。研究者たちの間で広く共有されているこの基本的な枠組みを図式化すれば、次のようになる。



この基本構図に照らすならば、ソクラテスは最終的にどちらに軍配を上げたのかという問い——言い換えれば、ソクラテスの最終的立場は何であるのかという問い——が、おのずと現われてくるのではなかろうか。現に、「名前の正しさ」に対するソクラテス（そしてプラトン）の最終的立場をどう解するかが、『クラテュロス』研究の主要課題として認識されている。以前は、ソクラテスの最終的立場を「完全な規約主義」と見做す規約主義解釈が支配的であった⁸。しかしこの解釈は、『クラテュロス』全体の統一性を否定するというリスクを背負う⁹。というのは、(1) は——一般的な解釈に従えば——言語本性主義を擁護する議論 (383a-427d) と言語本性主義を再吟味する議論 (427d-435d) から構成されるため、ソクラテスが最後の最後に規約主義に翻ったと解することは、言語本性主義を擁護するそれまでの議論をすべて崩壊し、この対話篇全体の統一性と一貫性を否定することになるからだ。Barney と Sedley は規約主義解釈に異論を呈し、『クラテュロス』の統一性を重視した新たな

⁸ Schofield はソクラテスの最終的立場を‘a full-blooded conventionalism’と呼称する (1982: 76)。

⁹ 規約主義解釈をとり、『クラテュロス』を非連結の諸議論のまとまりのない羅列と読む学者は Robinson (1969: 125) である。‘I conclude that the appearance of Plato’s distributing himself equally on both sides of the question is deceptive. In favour of the nature-theory he produces only arguments that are weak or bad; against it he produces unchallengeable arguments; and he probably felt this himself’. Cf. Bestor 1980: 323-327; Annas 1982: 106-109.

解釈を提示したが¹⁰、近年、Ademollo が再び規約主義解釈を支持する論拠を提示した¹¹。

「名前の正しさ」に対するソクラテス（そしてプラトン）の最終的立場は何であるのかというこの疑問は、先の基本構図が確定されたことによって否応なしに解釈の決定を迫る問題となって現れてきたように思われる。そもそも「言語本性主義」と「言語規約主義」とは、後代の学者が便宜的に付したラベルに過ぎない¹²。それがいつの間にか『クラテュロス』解釈の「暗黙の前提」として、ほとんど無批判に受け入れられてきた。確かに、この対話篇の中で、クラテュロスとヘルモゲネスは対極の立場に置かれており、ソクラテスはそれぞれの見解を批判・吟味する。しかし、この「暗黙の前提」は、その対立が、「名前の正しさ」をめぐる一定の学説ないし理論の間の対立以外のものである可能性を予め排除するほど強力に論者たちの思考を制限し、その結果、「名前の正しさ」に対するプラトンの最終的立場の、いわば選択問題が、『クラテュロス』研究の主要課題と目されるに至った。

しかしながら、次節で見てゆくように、後続するヘルモゲネスの陳述 (383a4-384a7) は、彼がクラテュロスに「提案」(383a1-2) をするに至った経緯——すなわち、『クラテュロス』の背景にある事情——を説明したものであるのだが、この説明からは、先の基本構図——とりわけ、「言語本性主義」と「言語規約主義」と呼ばれるような一定の学説同士の対立——は見えてこない。それゆえ、ヘルモゲネスがクラテュロスに対して行った提案の内容は、一般に理解されているように、「係争中の議論に、ソクラテスを、いわば「判定者」として参戦させる」という趣意のものではないことになる。

『クラテュロス』の全体像と本質を正しく捉えるためには、冒頭でのヘルモゲネスの「提案」の趣意を精確に理解することが不可欠である。だがそのためには、プラトンがどのような事情をこの対話篇の背景に想定していたかを先立って見定める必要がある。従来の『クラテュロス』研究において、後続するヘルモゲネスの陳述は、この対話篇の背景にある事情についての説明としてではなく、むしろ先述した「暗黙の前提」のもとで、「名前の正しさ」をめぐる本格的議論の冒頭として扱われてきたがために、ヘルモゲネスの「提案」の趣意と、したがってまた、この対話篇の全体像は、問い直される余地すら与えられてこなかった。

このような背景を踏まえて、以下の論述は、「暗黙の前提」を一度取り去ってテキストそ

¹⁰ Barney の解釈も Sedley の解釈も、『クラテュロス』全体の統一性という大枠は共有しているが、その中身は大きく異なる。Barney は、ソクラテスの最終的立場を「規約主義にも本性主義にも集約されない第三の立場」と見做し、具体的には、名前についての「悲観主義」

(pessimism) をプラトンに帰す (2001: 134-142)。他方、Sedley は、語源分析が解釈学的には (exegetically) 正しいが、哲学的には (philosophically) 誤りであるという想定のもとで、ソクラテスの最終的立場を「柔軟な本性主義」と見做す (2003: 28; 138-146)。

¹¹ Ademollo は、この対話篇の中に「言語本性主義の擁護→言語本性主義への反論→言語規約主義の受容」という一本の流れを見出し、規約主義解釈の難点と見做されてきた統一性の否定の問題を克服しようとする (2011: 424)。

¹² このラベルづけは、わたしが知る限りでは、Kretzmann に始まる。‘We may conveniently call Cratylus’ position “naturalism”. Hermogenes’ opposing position may be called “conventionalism” (1971: 126).

のものに立ち戻り、テキストが何を言っているのかを入念に読み解いてゆく作業に当てられる。そのようにして『クラテュロス』の背景を精確に理解したとき、どのような全体像が浮かび上がってくるのかをしかと見定め、『クラテュロス』読解への新たな道標を示したいと思う。

2 『クラテュロス』の背景にある事情

(1) 冒頭の一節 (383a1-3) についての予備的考察

まずはもう一度冒頭の一節に戻り、検討されるべき点を明確にしておこう。翻訳そのものを見直す必要があるため、以下に原典を引用する。

HE. Βούλει οὖν καὶ Σωκράτει τῷδε ἀνακοινωσώμεθα τὸν λόγον;

CR. Εἴ σοι δοκεῖ. (383a1-3)

問題は、ヘルモゲネスによるクラテュロスへの提案の内容を表す一文 καὶ Σωκράτει τῷδε ἀνακοινωσώμεθα τὸν λόγον (383a1-2) をどう解するか、にある。まず、τὸν λόγον (383a2) が具体的に何を指しているかの検討は、後続するヘルモゲネスの陳述を俟たなければならない。しかし、それが ἀνακοινωσώμεθα (383a1-2) の目的語であるという点で、λόγος という語のここでの意味はある程度限定される。ἀνακοινώω は、プラトンにおいて、比較的用例の少ない動詞であり、『クラテュロス』の目下の箇所を含めた計 4 箇所 (『法律』913b、『プロタゴラス』314b; 349a) にしか登場しない。そのうえ、この動詞は他の 3 箇所では与格を取り、「(人) に相談する」(consult) という同じ意味で用いられているのに対し、目下の箇所だけで与格と対格の両方を取る形で用いられている。LSJ では、この動詞が与格と対格の両方を取る (おそらく唯一の) 用例として『クラテュロス』のこの箇所が挙げられており、この動詞のここでの意味は、「(人) に (何か) を伝える、知らせる」(communicate, impart) であるとされている。

もとより用例が少ないのみならず、目的語を二つ取る用例が他に存在しないため、意味の確定がやや困難ではあるが、この動詞が前置詞 ἀνά と動詞 κοινώω から成る複合語であるという点に鑑みれば、それが「伝える、知らせる」という κοινώω の基本的意味の一つを保持すると解することは妥当であろう (LSJ によれば、ἀνά は複合語の中で用いられる場合、常に翻訳可能なわけではないが、増加や強化の意味をもつとされる¹³)。

ἀνακοινώω のここでの意味が以上のように確定されると、λόγος の意味もある程度定まってくる。まず、それが少なくとも「議論」(discussion) ないし「討論」(debate) を意味するのではないことだけは、明らかである¹⁴。もしクラテュロスとヘルモゲネスとの間で何らかの「議

¹³ LSJ ἀνά F. 2.

¹⁴ 註 4 を参照されたい。

論」が成立していたのなら、ソクラテスに「伝える」ものは、厳密には、「議論の内容」あるいは「議論の主題」である。事実、Ademollo は、ヘルモゲネスの提案の内容について、「ソクラテスに、クラテュロスとヘルモゲネスとの間で交わされた議論の内容を伝える」という説明を加えており¹⁵、Dalimier もまた、検討中の一文を、「ここにいるソクラテスに、われわれの話し合いの主題を伝える」と訳出している¹⁶。

だがしかし、クラテュロスとヘルモゲネスとの間で何らかの「議論」が成立していたと考えることは、いささか軽率である。少なくともこの冒頭の一節からは、そのような情報を引き出すことはできない。ソクラテスに遭遇する前に、この二人の間で何らかのやりとりがあったことは疑いないとすると、λόγος はここで、クラテュロスの口から発せられた特定の言葉の意味すると解することもできる。

以上の考察から、λόγος のここでの意味が、次の二つ、すなわち、

- a) 「話し合いの内容ないしその主題」(thing spoken of, subject-matter¹⁷)
- b) 「(口から発せられた) 特定の言葉」(a particular utterance¹⁸)

に絞られたとしよう。

(2) 冒頭でのヘルモゲネスの陳述 (383a4-384a7) の分析

クラテュロスの同意を得て(383a3)、ヘルモゲネスはソクラテスに向かって言う。

HE. 「こちらのクラテュロスは、ソクラテスよ、こう言っています、すなわち、A あるもののそれぞれに [ἐκάστῳ τῶν ὄντων]、名前の正しさ [ὀνόματος ὀρθότητα] が自然本性的に決まっているものとして [φύσει πεφυκυῖαν] あり、概してひとが自分たちの音声の一部 [τῆς αὐτῶν φωνῆς μέρειον] を発する際に、そう呼ぶように同意したことによって呼ぶようなものが名前なのではなく、むしろ何か名前の正しさのようなものが自然本性的に存在し、{その正しさは} ギリシア人にも外国人にもあらゆるひとにとって同じなのである、と。」(383a4-b2)

ヘルモゲネスは、クラテュロスの同意を得たので、彼に提案したことを実際に実践した、と考えるのは自然であろう。そうすると、「ソクラテスにも「このロゴス」を伝えたらどうか」というのがその提案の内容であるからには、目下の一節でヘルモゲネスがソクラテスに伝えたことこそが、他ならぬ「このロゴス」[τὸν λόγον 383a2] であることになる。

¹⁵ Ademollo 2011: 23. (註 5 を参照されたい。)

¹⁶ ‘Voici Socrate: veux-tu que nous lui fassions part du sujet de notre entretien?’(Dalimier 1998: 67).

¹⁷ LSJ λόγος 8.

¹⁸ LSJ λόγος 7.

目下の一節で「このロゴス」を直接受けると考えられる A の部分は、原典で三つの等節から成る¹⁹。

- C¹ あるもののそれぞれに、名前の正しさが、自然本性的に決まっているものとしてある。
- C² 概してひとが自分たちの音声の一部を発する際に、そう呼ぶように同意したことによって呼ぶようなものが名前なのではない。
- C³ 何か名前の正しさのようなものが自然本性的に存在し、{その正しさは}ギリシア人にも外国人にもあらゆるひとにとって同じである。

検討中の τὸν λόγον (383a2) が具体的に C¹~C³を指すことは明らかにされた。われわれの次なる課題は、C¹~C³がどのような意味で「ロゴス」と言われるのかを明らかにすることにある。先の考察によれば、検討中の一文での λόγος の意味は、a)「話し合いの内容ないしその主題」もしくは b)「(口から発せられた)特定の言葉」のどちらかであり、a 解釈は Ademollo や Dalimier によって支持されている (24 頁参照)。しかし、a 解釈は、一見妥当に思われるのだけれども、実際には支持され得ない。

まず目下の一節で、ヘルモゲネスは C¹~C³を単に「クラテュロスが言っていること」(383a4)としてソクラテスに伝えただけで、それについて何の説明も与えていない。もし、é 一般に想定されているように、ソクラテスに遭遇する前にヘルモゲネスがクラテュロスと「名前の正しさ」をめぐる長いこと議論を交わしていたとしたら、ヘルモゲネスは、まず何について議論し、これまでのところ何が論じられたのかをソクラテスに説明したうえで、C¹~C³をクラテュロス自身の見解として提示したはずである²⁰。だが実際には、C¹~C³についてこの一節から読みとれるのは、それが、クラテュロスが言ったことであるということ以外にはない。

続く一節は、ヘルモゲネスの三つの質問と、それに対するクラテュロスの返答から成る (383b2-7)。

ヘルモゲネスの質問 (1): 「「クラテュロス」という名前は、本当に、あなたの名前なのか。」

——クラテュロスの返答: (同意)

¹⁹ Barney (2001: 24) は、C¹~C³を「ヘルモゲネスによる、論敵クラテュロスの見解の要約」と明記している。‘Hermogenes opens the discussion with a résumé of his opponent’s view’.

²⁰ Cf. Ademollo (2011: 23) は、ソクラテスに遭遇する前にヘルモゲネスとクラテュロスの間で「名前の正しさ」をめぐる議論が交わされていたという従来の想定に立ってはいないが、「ヘルモゲネスが、ソクラテスに遭遇する前にクラテュロスと何について議論していたかをあまり多くの言葉で説明せずに、即座にクラテュロス自身の見解を提示する」という、重要な指摘をしている。

ヘルモゲネスの質問 (2): 「ソクラテスの名前は何なのか。」

——クラテュロスの返答: 「「ソクラテス」」

ヘルモゲネスの質問 (3): 「それならば、他のすべての人間にとっても、われわれがそれぞれのひとをそう呼んでいるところのまさにそれが、それぞれのひとの名前なのではないか。」

——クラテュロスの返答: 「いや、少なくとも「ヘルモゲネス」は君の名前ではない——たとえすべての人間がそう呼ぶとしても、だ。」

まず、この一連のやりとりから、ヘルモゲネスの思考の過程を読みとろう。「クラテュロス」という名前は、本当に、あなたの名前なのか」という最初の質問は、直接的には C²に向けられていると考えられる。ヘルモゲネス自身を含めひとびとは、現に、クラテュロスを「クラテュロス」という名前で呼んでいる。しかし C²は、まさにそのような仕方で呼ばれているものは、実のところ、クラテュロスの名前ではないと言っている。そこでヘルモゲネスは——「本当に」[τῆ ἀληθείᾳ 383b2-3]という表現が示唆するように——「クラテュロス」という名前が本当にクラテュロス本人の名前なのだろうか（もしかしたらクラテュロス本人の名前ではないのではないか）という疑念を示す質問をした、というわけである。

しかし、ヘルモゲネスがクラテュロスから受けた返答は、「クラテュロス」という名前がクラテュロス本人の名前であることに同意を示すものであった (383b3)。さらにヘルモゲネスは、「ソクラテスの名前は何なのか」という質問に関しても、クラテュロスから、「「ソクラテス」」という想定通りの返答を得る (383b4)。

そこでヘルモゲネスは、クラテュロスによって同意された二つのこと、すなわち、

- (i) 「クラテュロス」という名前は、クラテュロスの名前である。
- (ii) 「ソクラテス」という名前は、ソクラテスの名前である。

から、

- (iii) すべてのひとにとって、ひとびとがそれぞれのひとをそう呼んでいるところのまさにそれが、それぞれのひとの名前である。

を導出し、(iii) に対するクラテュロスの同意を求める (383b4-6)。ここで注記しておきたいのは、(i)・(ii) から (iii) を導出する際に、ヘルモゲネスは次のことを暗黙の前提としているということだ。それはすなわち、

- H¹ ひとびとがそれぞれのひとをそう呼んでいるところのそれが、それぞれのひとの名前である。

である。だが、H'は「名前の正しさ」についてのヘルモゲネスの積極的主張では決してないことに留意されたい²¹。ヘルモゲネスは、何かがある名前の前であるのは、ひとびとがそれをそう呼んでいるから、ということ以上の考えをもたない。それゆえ、(i)・(ii)がクラテュロスによって同意されたのは、現にひとびとがクラテュロスを「クラテュロス」と呼び、ソクラテスを「ソクラテス」と呼んでいるからだ、と解する以外に解釈の仕様がなないのである。だからこそヘルモゲネスは、クラテュロスの次の返答、すなわち、

(iv) 「ヘルモゲネス」という名前は、ヘルモゲネスの名前ではない。

を全く理解できない (383b6-8)——現に、ひとびとは自分を「ヘルモゲネス」と呼んでいるのに、「ヘルモゲネス」という名前が自分の名前でないとは、一体どういうことなのか。

(iv) には、「たとえすべての人間がそう呼ぶとしても」という譲歩文がつけ加えられているため、クラテュロスは、ひとびとがヘルモゲネスを「ヘルモゲネス」と呼ぶことそれ自体を否定してはいないことになる。しかし、ひとびとがそう呼ぶということは、クラテュロスにとって、「ヘルモゲネス」がヘルモゲネスの名前であることを保証しはしない。つまりクラテュロスは、「何かがある名前の前である」ことに、何か別の基準ないし前提（つまり、H'とは異なる前提）を設けているのである。

そうすると、「クラテュロス」がクラテュロスの名前であり、「ソクラテス」がソクラテスの名前であるのは、クラテュロスにとって、何かH'とは異なる前提に依拠することになる。言い換えれば、(i)・(ii)は、ヘルモゲネスとクラテュロスの両者にとって真の命題であるが、その前提とするものは、両者の間で異なっているのである。

何かがある名前の前であるための「基準」とは、C¹とC³でクラテュロスが「名前の正しさ」と呼んでいるもの、である。しかし、その内実の如何がいま問題となっているのではない。目下の問題は、むしろ「名前の正しさ」と呼ばれるものがそもそも存在するの否か、にある。なぜなら、ヘルモゲネスは、「ひとびとがそう呼ぶ」ということ以外に、何かがある名前の前であることを確保するようなもの——クラテュロスが「名前の正しさ」と呼んでいるもの——が存在するというそのこと自体を、現段階で理解できずにいるからだ。

このことは、次の一節から明らかにされる。

HE. 「そしてわたしは質問して、彼が一体何を言おうとしているのかを知ろうと熱心になりましたが、彼は何も明確にせず、わたしに対してしらばくれるのです——このことについて自分は知っているのだから、もしそれをはっきりと言う気があるなら、わたしをも同意させて自分が言おうとすることを私にも言わせることができ

²¹ Ademollo (2011: 26) もまた、ヘルモゲネスとクラテュロス間の目下のやりとりは、「正しい名前」ないし「名前の正しさ」についてではなく、「何が誰かの名前であるのか」および「或る特定の名前は「本当に」誰かの名前であるのかどうか」についてである、と説明している。

るであろうところの何かを、自分は自分の頭の中で考えているふりをしながら——。」(383b7-384a4)

「このこと」(384a3)は、直接的には(iv)の内実を指す。しかし、これまで見てきたように、「ヘルモゲネス」という名前は、君の名前ではない」ということでクラテュロスが何を言おうとしているのかをヘルモゲネスが理解できないのは、そもそもC¹~C³でもってクラテュロスが何を言おうとしているのかを理解できていないからである。一見クラテュロスの「知」と対照的なヘルモゲネスの「無知」は、しかし、クラテュロスの言語態度に起因する。クラテュロスは、「ヘルモゲネス」という名前がヘルモゲネス本人の名前ではないということの意味——つまり、クラテュロスが「名前の正しさ」と呼んでいるものの内実——について、何も明確にしないからだ。否、精確には、クラテュロスはそれについて、神託めいた言葉しか発しないことが、次の一節から明らかにされる。

HE. 「ですから、もしあなたがなんとかしてクラテュロスの神託めいた言葉 [τὴν...μαντείαν²²] を解釈する [συμβάλειν] ことができるのなら、わたしは喜んでお聞きしたいです。否むしろ、名前の正しさに関する事柄がどのようなことであるとあなた自身に思われるのか、わたしは一層喜んで聞き学びたいです、もしあなたにその気があれば。」(383b7-384a7)

ヘルモゲネスの言う「クラテュロスの神託めいた言葉」とは、「クラテュロスが言ったこと」としてヘルモゲネスがソクラテスに伝えたすべての発語内容(383a4-b2; b4; b6-7)を指す。ここにおいてわれわれはようやく、C¹~C³がどのような意味で「ロゴス」と言われるのかという問いに、明確な答えを与えることができる。「ここにいるソクラテスにも「このロゴス」

²² μαντεία の基本的な意味は「神託」である。Barneyは、「名前の本性的正しさが存在する」というクラテュロスの主張を、非合理的・神託的な「予言的主張」(oracular claim)とし、他方、ソクラテスの語源分析の実演を、この予言的主張の合理的説明とすることで、一連の語源分析を全体として「合理的再構築」(rational reconstruction)と見做す解釈を提示する(2001: 52-53)。他方、Ademolloは、この対話篇の最後でクラテュロスが流転説に対して同感の意を表すという結末と、クラテュロスが最終的に極端な流転論者になったというアリストテレスの報告を念頭に入れ、クラテュロスのこれ見よがしの謎めいた態度を『テアイテトス』179d-180cで描写される「ヘラクレイトスの徒たち」に特徴的な態度と見做す(2011: 27)。

第一章第四節(1)および第三章で論述するように、「語は、その記述的意味を充足する本性をもつ対象にしか適用され得ない」というクラテュロスの主張(「記述的意味=指示対象説」)は、「虚偽不可能論」を伴う。クラテュロスに従えば、たとえば誰かがヘルモゲネスに向かって「ヘルモゲネス」と発語したとき、この名前は、話し手の意図に関係なく、「ヘルメスの息子」という記述的意味を充足する本性をもつ誰か別の人物を指示し、その結果、この話し手はその誰か見知らぬ人物を正しく名指していることになる。また、誤って発せられた語は「騒音」に過ぎない。このように、「虚偽を発すること」を本来的に不可能と見做すクラテュロスの極端な言語態度および言語観は、引用箇所のみ μαντεία という語によっても表現されていると思われる。

を伝えたらどうか」(383a1-2) という検討中の一文での *λόγος* の意味は、a) 「話し合いの内容がないしその主題」ではなく b) 「(口から発せられた) 特定の言葉」であることは、疑い得ない (25 頁参照)。なぜなら、「ソクラテスにもこのロゴスを伝えたらどうか」というヘルモゲネスの提案の背後にある事情と、その提案の目的が、いまや明らかにされたからだ。まず、この提案の背後にある事情は、簡潔にまとめれば、次のような事情である——ソクラテスに遭遇する前にヘルモゲネスは、クラテュロスから、彼が「名前の正しさ」と呼んでいるものについて謎めいた言葉を聞き、何を言おうとしているのかを問いただしてもクラテュロスは何も明確にしないため、膠着状態に陥ってしまった——。だからこそ、この提案の目的は、目下の一節ではっきりと述べられている通り、「ソクラテスに、クラテュロスの神託めいた言葉を解釈してもらうこと」にあるのである。

こうした背景のもと、対話篇『クラテュロス』は始まる。

HE. 「では、あなたがよければ、ここにいるソクラテスにもあなたの言っていることを伝えるのはどうでしょう。」

CR. 「君にそう思われるなら。」 (383a1-3)

(3) 基本構図の見直し

以上の考察から直結して言えるのは、先の基本構図 (22 頁参照) が根本的に見直される必要があるということだ。第一に、これまで「暗黙の前提」とされてきた、「言語本性主義」と「言語規約主義」の間の対立のようなものは、実際には存在しない。ヘルモゲネスは、「何かがある何かの名前であるのは、ひとびとがそれをそう呼んでいるから」という至って常識的な考え以上の考えをもたない²³。これは、一般には「言語規約主義」と呼ばれているが、実際には、「名前の正しさ」についてのいかなる立場も表明するものではない。なぜなら、ヘルモゲネスは、そもそも何か「名前の正しさ」のようなものが存在するという自体に理解を示すことができないからである。したがって、クラテュロスとヘルモゲネスの間の対立は、本質的に、「名前の正しさ」のようなものが存在するの否か、に存することになる。

他方、ソクラテスはこの対話篇の中で、クラテュロスの神託めいた言葉の「解釈者」としての役割を与えられており、それゆえ、391b4 から、クラテュロスが再度登場する 427e5 までの長い議論の中でソクラテスが語ることは、基本的には、「名前の正しさ」についてのクラテュロスの言葉の解釈であることになる²⁴。解釈である以上、それはソクラテス自身の積

²³ Cf. Sedley (2003: 51-54) は、ヘルモゲネスを「言語規約主義」の代弁者 (the voice of linguistic conventionalism) と呼称するが、彼を何か特定の説の提唱者と見做すことに注意を促している。

²⁴ 「解釈者」としてのソクラテスの立場を強調しているのは Barney (2001: 52-53) である。‘Socrates’ etymologizing is presented as part of his explication of Cratylus’ claim that there is a natural correctness of names. The *Cratylus* opens with Hermogenes asking Socrates to interpret this oracular claim [*manteia*] (384a5), palying the role of *prophētēs* or spokesman to Cratylus’ Pythia (cf. *Timaieus* 71e-

20 世紀後半に巻き起こったこの Scherz order Ernst 論争は、Barney の研究 (2001) によって終末を迎えたと言えるだろう。Barney は、『クラテュロス』の語源分析の途方もない長さ
と冗談交じりの口調を「プラトンのジャンル」(プラトン流の書き方) と関連があるとし、
語源分析のセクションの中に二つのジャンル——「神がかり的なひらめきの逸話」(The
Inspiration Episode) と「闘争心の披露」(The Agonistic Display) ——を見出す。Barney が導入
したこの「プラトンのジャンル」という視点は、語源分析の機能と長さ、そしてユーモアの
要素を正しく理解するうえで不可欠であり、『クラテュロス』の語源分析研究に一定の指針
を与えたと言うことができる²⁹。

しかし、Barney は、このジャンルを別とすれば、語源分析作業および語源分析的方法論そ
れ自体はソクラテスによって軽蔑されるべき全く価値のないものでしかないのかという問
いを立てた。というのは、先の基本構図に従えば (22 頁参照)、(1) は「言語本性主義」を
擁護する議論 (383a-427d) と「言語本性主義」を再吟味する議論 (427d-435d) から成り、前
者のほぼ全体 (393d-427c) が語源分析で占められるのだが、そこで提示される二つの語源分
析的方法論——「記述説」(393d-4c) と「音声的模写説」(421c-7c) ——は、両説とも、「再吟
味」の諸議論によって傷をつけられることになるからだ。Barney 以来、『クラテュロス』の
語源分析は、プラトン哲学における価値という視点から捉え直されるようになり³⁰、Barney

²⁹ Barney 2001: 49-73.

³⁰ Barney は、『クラテュロス』の語源分析がプラトンにとって有する価値を、次の二つの点に
見出す。一つは、「説得の方法」(a method of persuasion) として有益であるという点であり、も
う一つは、「プラトンにとっての一抹の真実を示す」という点である。最初の点について
Barney は、プラトンが、『クラテュロス』の後に執筆された対話篇 (たとえば『ピレボス』や
『法律』) において、かなり積極的に語源分析を行っている点に着目し、語源分析を、下位の哲
学的・問答法的方法論——「問答法を用いば論証されうるであろうが、しかしその必要のない
ものを、すばやくかつ説得的に提示するための補助的ないし戦術的方法」——の一つに数え
入れる (Barney が「下位の哲学的・問答法的方法論」と見做すのは、語源分析以外では、
μακρολογία、神話、詩の解釈、闘争、そしてレトリックである)。Barney が注意を促すのは、こ
の下位の問答法的方法論には正しい使用と間違った使用とがあるということであり、語源分析
の場合、間違った使用とは、それを「発見 (知識の獲得) のための方法」として使用するもの
である。「再吟味」の諸議論によって斥けられるのは、この「発見のための方法」としての語源
分析であって、「説得の方法」としての語源分析は全く無傷のまま残されている。他方、もう一
つの点について Barney は、まず、語源分析が、「万物は流転している」というその全体的なメ
ッセージを通して、真実を一括して示す、と述べる。「一括して」という表現によって Barney
が言おうとしているのは、次のことである。すなわち、「万物は流転している」という語源分析
の全体的メッセージは、感覚界にのみ言及するものとして再解釈される限り、真であるが、流
転するわれわれの世界が存在するすべてであるという誤った理解を示す点で (つまり、不変の
非感覚的対象、すなわちイデアの存在を考慮し損なっている点で)、偽である、ということであ
る。だが Barney が「プラトンにとっての一抹の真実」と言っているものは、語源分析が解釈す
る古代の命名者たちのドクサおよびそれらに含まれる事実のことではない。第六章第二節で説
明するが、語源分析が示すプラトンにとっての一抹の真実とは、「名前の本質的 (構造的) 欠
陥」のことであり、これは、『クラテュロス』の結論を言語一般に対する悲観主義の表明と見做
す Barney の解釈と密接にかかわっている (2001: 71-73)。

の研究は、Sedley の研究 (2003) によって補完された。Sedley は、語源分析的方法論についてのプラトンの評価という問題により立ち入った調査を行い、語源分析の価値を、古代の命名者たちのドクサを明るみに出すという点に見出した³¹。こうして「解釈学的」視点が、Sedley によって新たに語源分析研究に取り入れられ³²、この視点は、Ademollo (2011) の提示した「ドクソグラフィー」(doxography) という考えによって、より明確化されたと言える³³。

Barney の先駆的研究以来、それまで正当に扱われてこなかった語源分析のセクションについて実に多くのことが論じられ、明らかにされた。しかしわたしには、15 年前に Barney 自身が指摘した問題が十分な仕方では克服されたようには思われぬ。というのは、この 15 年間主として論じられてきたのは、語源分析の裏にある哲学的問題であるからだ³⁴。そして、諸家たちが語源分析の裏にプラトン哲学にとって重要そうな問題を読みとろうとするのは、二つの語源分析的方法論（つまり、「記述説」と「音声的模写説」）が最終的にはソクラテスによって斥けられるよう意図されたものであるため、それを裏づける根拠として使用される一連の語源分析もまた初めから軽蔑されるべき、価値のないものでしかないと前提しているからである。

事実、ソクラテスがこの対話篇の中で行う語源分析の作業は、プラトンの師ソクラテスが実際に行っていた類の哲学的営みではなく、また一連の語源分析を通してソクラテスが提示する内容も、ソクラテス自身には帰され得ないことが強調されてきた。論者たちがその論拠として引き合いに出すのは、エウテュプロンに由来する「神がかり的なひらめき」というモチーフであり、これは Barney が「プラトンのジャンル」と呼ぶものの一つである（本稿 32 頁参照）。このモチーフは、従来、語源分析とソクラテス（そしてプラトン自身）の哲学との間に一定の距離を設けるためのプラトンの仕掛けであると想定されてきた³⁵。このモチーフは、語源分析の非常に早い段階で導入され (396c)、ソクラテスの語源分析技能と知恵は、くり返し、「神がかり的なひらめき」の観点から特徴づけられる (399a1; 411b4; 428c7)。

³¹ 'Plato fully shares the presupposition endemic to his culture that languages were consciously devised by early members of the human race, who can be assumed to have constructed each word as a brief description of its nominatum, just as present-day name-makers demonstrably continue to do.' Sedley 2003: 28.

³² Sedley 2003.

³³ Ademollo (2011: 199-210) は、『クラテュロス』の語源分析の機能が、本質的に、「古代の命名者たちの見解 (δόξα) を顕わにすることにある」とし、その意味で、語源分析全体を「ドクソグラフィー」として特徴づける。

³⁴ 語源分析の裏の問題とは、Barney においては「言語の本質的欠陥」であり (2001: 73-80)、Sedley と Ademollo の両者においては「流転説をめぐる問題」である。

³⁵ 「神がかり的なひらめき」というモチーフの機能を「距離化」('the distancing function') という点に見出す Barney の解釈は、多くの学者に受け入れられている (2001: 58. Cf. Ademollo 2011: 243)。他方、Sedley は、ソクラテスの語源分析技能と知恵を「非ソクラテス的性格」('non-Socratic character') とし、ソクラテスによって斥けられるべきものと見做す必要はないと述べる (2003: 40-41)。

ソクラテスはこの対話篇の中で最初から「解釈者」としての役割を与えられているのだから、彼の語源分析のパフォーマンスや、それを通して彼が提示する内容が、実際のソクラテスに帰され得ないことは、論を俟たない(30-31頁参照)。だがそれを「距離化」という視点から捉えることは、問題とされていることを見えなくすることでしかない。わたしにはむしろ「神がかり的なひらめき」というモチーフの機能は、次の点に存すると思われる。それはすなわち、この対話篇の中でソクラテスが行っている語源分析の営みをクラテュロスが実際に行っていた類のものに近づけること、である。この「近似化」という視点からしか、語源分析の表の問題——つまり、見た目以上でも見た目以下でもなく、見た目通りのもの——を直視することはできない。

しかし「近似化」だけでは語源分析の表の問題を真に理解することはできない。もう一つ重要となるのが、「エウテュプロンの知恵」というモチーフである。上述したように、ソクラテスの語源分析技能と知恵は繰り返しエウテュプロンに帰されるのだが、なぜその知恵の起源がエウテュプロンである必要があるのだろうか。

まずはこの対話篇の中で初めてエウテュプロンが言及される場面を見てみよう。神々の名前の語源分析をしている最中に、突如、「知恵」がソクラテスに降りかかり、ソクラテスは次のように言う。

SO. 「どこからかわからないが突如わたしにやってきたこの知恵が、何をしようか——尽きてしまうのか否か——を試すまでは、名前が神々に正しくつけられているということを詳細に論ずるのをやめないであろう。」(396c5-d1)

ソクラテスは最初、「この知恵」[τῆς σοφίας 396c7]の起源も、それが何をしようのかもわかっていない。そこでヘルモゲネスは、目の前のソクラテスの状態を次のように描写する。

HE. 「ソクラテスよ、もうほんとうにあなたは、まるで神がかりの状態になった者たちが突然神託を語るのと同じように{語っている}のように、このわたしには思われませぬ。」(396d2-3)

それを聞いてソクラテスは、次のことを断言する。

SO. 「そうなんだ、ヘルモゲネスよ、はっきりと言おう——わたしに降りかかったこの知恵はプロスパルタのエウテュプロンに由来するものだ。というのは、わたしは朝早くから長い間彼と一緒にいて、耳を貸していたからだ。だから、おそらく彼はそのとき神がかりの状態にあって、わたしの耳を霊的な知恵で満たしただけでなく、わたしの魂をもつかんだのかもしれない。しかるに、われわれは次のようにしなければならぬとわたしには思われる、すなわち今日はそれ{この知恵}を使って名

前について残されている事柄を考察し、明日は、もし君たちも同意してくれるなら、神官たちの誰であれソフィストたちの誰であれ、こうした類の浄めができる誰かを探し出して、この知恵を追い払い、浄めてもらう、ということだ。」(396d8-397a2)

ここで言及されるエウテュプロンを、『エウテュプロン』と題された対話篇の登場人物と重ね合わせることは妥当であろう。だが、『エウテュプロン』という対話篇に登場するエウテュプロンは、秘伝的な宗教的知識の所有を主張し、予言を試みようとして多くの人に嘲笑される、かなり頭のいかれた危険人物として描かれており（『エウテュプロン』6bc; cf. 3bc）、そのうえ彼は語源分析には何の関係もない³⁶。Ademollo が指摘するように、「追い払う」[ἀποδιοπομπησόμεθα 396e3-4] という動詞は、真に宗教的な文脈においてであれ、メタフォリカルにであれ、常に何か悪いものを追い払う行為に言及する³⁷。そうすると、プラトンが「この知恵」をエウテュプロンに帰したのは、他ならぬそれが悪質な類のものであることを暗示するためであったと考えられる。だからこそ、ソクラテスはヘルモゲネスらと、「今日は、「この知恵」を使って「名前の正しさ」の問題を考察し、明日は、それを追い払い、浄めてもらう」という約束を交わすのである。

ここで注意を要するのは、目下の一節でプラトンが訓告を与えているのは「この知恵」に対してであって、語源分析それ自体に対してではないということだ。だが多くの場合、プラトンの警告は、語源分析そのものに向けられていると理解されている。なぜなら、エウテュプロンに由来する「知恵」がソクラテスに降りかかり、ソクラテスが神がかり的状态になるという場面設定でもって、プラトンは何か深刻な問題を示しているわけではないと、一般に理解されているからだ³⁸。

しかしわたしは、「エウテュプロンの知恵」というモチーフが、『クラテュロス』の語源分析の表の問題、ひいてはこの対話篇全体が提起する問題の本質に或る仕方で絡み合っていると考える。エウテュプロンに由来する「知恵」が最初にソクラテスに降りかかったとき、ソクラテスはこう言っていた——「この知恵」が何をやるのだろうか——尽きてしまうのか否か——を試すまでは、「名前の正しさ」について論ずるのをやめない、と。そしてそのときは次のようにして訪れる。一連の語源分析を終えた直後にソクラテスは、エウテュプロンから授かった語源分析の「知恵」に驚嘆しながらも、「自分がいったい何を言っているのかを再吟味しなければならない」と言い、次のように続ける³⁹。

³⁶ 幾人かの学者（たとえば、Allan 1954）に抗して Ademollo (2011: 242 n. 136) は、ソクラテスがここで言及するエウテュプロンとの会話を、『エウテュプロン』で行われる二人の会話と同一視することは不合理であると述べる。その理由は、『エウテュプロン』での会話は語源分析と何の関係もないからである。Cf. Sedley 2003: 3 n.5.

³⁷ Ademollo 2011: 243-244.

³⁸ E.g. Ademollo 2011: 243. 'it seems very reasonable to think that in *Cra.* the claim that Socrates has been inspired by Euthyphro is not seriously meant.'

³⁹ 「自己欺瞞」というモチーフに着目するのは Ademollo である。Ademollo によれば、「クラテュロスとの対話が始まったとき、ソクラテスは自分自身の語源分析技量に疑念を呈し、自己欺

「というのは、自分が自分に欺かれるということが、あらゆることのうちで最も危険なことであるからだ。」(428d3-4)

エウテュプロンに由来する「知恵」がソクラテスに対してなそうとしたことは、「自分が自分に欺かれること」、すなわち「自己欺瞞」への誘導である。自己欺瞞とは、一般に、間違った事柄や無効な事柄を、あたかも事実か有効な事柄だと信じ込んでしまうプロセスや現象である。プラトンにおいて、ひとをして望ましくない方を信ずるように導く心理的要素の一つに、知識に関する自己顕示欲というものが存在すると考えられる。そしてその根底には、知識というものが何か外から与えられるものであるという誤った理解が潜在する。語源分析は、クラテュロスをはじめとする当時のソフィストたちにとって、外的世界についての知識を披露する巧妙な手段であったが、クラテュロスにとり、それは知識を得るための唯一にして最善の手段でもあった。ソクラテスは、この対話篇の最後に次のように述べている。

SO.「[...]だがまた、次のようにすることは知性をもつ人間のすることでは決してない、すなわち自分と自分の魂を配慮すること [αὐτὸν καὶ τὴν αὐτοῦ ψυχὴν θεραπεύειν] を名前任せにしたうえで、名前とそれらをつけた者たちを信頼しきって、ひとかどのことをもう知っているのだと自信をもって断言し [...]。」(440c3-6)

「自分が自分に欺かれること」が何故「最大の危険」と言われるのかは明確には語られていないが、それは「自己欺瞞」というものがソクラテスにとって最も本質的な問題にかかわるものであるからにちがいない。その問題とは、知識の誇示欲から外的なもの（「語源分析的知識」もその一つ）を盲目的に信頼し、それで何かを知った気になること——知っていると思いついでいること——である。プラトンの訓告は、まさにこうしたわれわれひとりひとりの魂のあり方に向けられている。もしそれが語源分析そのものや言語一般に向けられていると理解されるなら⁴⁰、プラトンは悲嘆にくれるだろう。

こうした全体の文脈に置き換えるなら、428d3-4の一節が、極めて重要な転換点であることがわかる。この一節は、修正された基本構図に照らすならば、「名前の正しさ」を解釈する議論(391b7-427d3)とそれを再吟味する議論(428e4-435d1)の分岐点に位置するが、それは、本質的には、ソクラテスとクラテュロスの哲学的分岐点を意味しているとわたしは考える。

「神がかり的なひらめき」というモチーフの「近似化」機能は、ソクラテスがここまで、クラテュロスの語源分析技能と知恵を披露するのを可能にした。しかし、ソクラテスはここ

瞞 (self-deceit) の危険性に対する警告を与えた」とされる (2011: 432)。しかし、Ademollo は、本稿のように、「エウテュプロンの知恵」と「自己欺瞞」の二つのモチーフが、『クラテュロス』全体が提起する問題と密接に関連していると主張しているわけではない。

⁴⁰ Cf. Barney 2001 (註 30 を参照されたい) ; Van den Berg 2008.

に至って「この知恵」に驚嘆しながらも疑念を呈し、自ら自分自身を語源分析の営みから遠ざける。その「距離化」を可能にしたのは、「この知恵」が自分自身を「自己欺瞞」という最大の危険に陥らせることの自覚である。知識への探求的欲望ではなく誇示的欲望から語源分析に魅了され、それで知識を得たと思い込んでいることの無自覚と自覚の間の緊張関係と、無自覚からの自覚こそ、ソクラテスの語源分析の実演それ自体が示しているものに他ならない。

4 クラテュロスと「名前の正しさ」

(1) クラテュロス

歴史上のクラテュロスについての史料および典拠は、『クラテュロス』というこの対話篇と、アリストテレスの証言だけである。しかし、双方の証言には、一見したところ、相互に一致しない点が見られるため、歴史上のクラテュロスの哲学的発展を再構築することは、事実上、困難であると認識されてきた。

しかし、その再構築の試みは Sedley によって先鞭をつけられ、近年、Ademollo によって一定の成果を得た。Ademollo の研究成果は、今後必ず参照されるべきものであると思われるので、その要諦を押さえておきたい。Ademollo は、まず、『クラテュロス』から次の四つの証拠を引き出す。

- (1) クラテュロスはアテナイ人であり、スミクリオンの息子である (429e)。
 - (2) クラテュロスは、この対話篇の中ではまだ若く、ソクラテスよりもはるかに若い (429d; 440d)。
 - ・クラテュロスは、ソクラテス (B.C. 470/469-399) よりも少なくとも 20 歳ぐらい若いと考えられるため、紀元前 450 年よりもおそらく後に生まれたと推測できる。
 - (3) クラテュロスは、「名前は本性的に正しい」という見解をもっている (383a-384a)。
 - ・この見解は、「語源分析」と関係がある：名前の語源分析から得られる「記述的意味」は、対象の本性を表示する (428bc)。
 - (4) クラテュロスは流転説に傾倒しかかっている。
 - ・437a で、クラテュロスは「万物は常にあらゆる点で流転している」という説をそれとなく支持する。なぜなら、ギリシア語の名前の記述的意味は、その大部分が、実在のあり方を本質的に“動”とする万物流転の世界観を反映することが判明するから。
 - ・440de で、クラテュロスは「事實は、ヘラクレイトスが言っている通りであるように見える」とはっきり述べる。
- この一節は、次のことを示唆する——クラテュロスは、ソクラテスと対話する前はまだ流転論者ではなかった。つまり、クラテュロスのヘラクレイトス主義への転向は、この対話篇での議論の最中に起こっている。

(1)～(4) は、アリストテレスの次の証言によって補完される。

(5) 基盤となるアリストテレスの証言は『形而上学』第1巻第6章 987a29-b7 であり、プラトンのイデア論の起源についてのものである。

プラトンは若いときに、クラテュロスやヘラクレイトスの、「知覚（感覚）されるものはつねに流転していて、それらについては「知識」は成立しえない」という考えに初めて親しみ⁴¹、後年までその考えを保持していた [...] ⁴²。

- ・プラトンが、クラテュロスのヘラクレイトス的見解に出会ったのは、プラトンがソクラテスの弟子であった期間（紀元前 415 年頃から 399 年までのおよそ 10 年間に先立っていたという主張は、クラテュロスが、ソクラテスが死ぬ「399 年よりも 10 年前までには」ヘラクレイトス主義者になっていたことを伴う。

以上の証拠から、Ademollo は、次のことが事実でありうると断言する。

- ・クラテュロスは、ソクラテスよりも 20 歳ほど若く、プラトン（B.C. 427-347）よりも年長である。
- ・クラテュロスは、若いときに最初に「名前の本性説」を信じるようになり、その後で、ソクラテスと対話している最中にヘラクレイトス主義者になった⁴³。
- ・それから数年後に、クラテュロスは、若いプラトン（このとき、プラトンはまだソクラテスの弟子ではなかった）に出会い、感覚される世界は絶え間なく流転しているのだと説いて、この説をプラトンに受け入れさせた。

次に Ademollo は、アリストテレスのもう一つの証言を引き合いに出す。

⁴¹ プラトンがクラテュロスのヘラクレイトス的見解に初めて出会ったのが、ソクラテスの弟子であった期間の前であるのか、それともソクラテスの死後であるのかをめぐって、論争がある。Ross (1924: 158-159 n.32) は、プラトンはソクラテスの死後にクラテュロスの弟子になったという Diogenes (D. L. 3.6) と Olympiodorus (Vita Platonis 192-3 Hermann) の陳述よりもむしろ、プラトンはソクラテスの弟子になる前に最初にクラテュロスのヘラクレイトス的見解に親しんだというアリストテレスの証言を受け入れなければならないと述べる。それは次の理由による。すなわち、もし「プラトンが最初にソクラテスの指導を仰いだとき、彼は 20 歳であった」という Diogenes の陳述が正しければ、その前に、プラトンがクラテュロスのもとで学ぶ時間がたくさんあった、ということだ。Diogenes らの伝統的見解を受容するのは Allan (1954: 275 n.2)。Ross と同様の解釈をとるのは、Cherniss (1955) や Ademollo (2011: 15 n.17) である。

⁴² 藤澤訳を部分的に参照した (2014: 222)。

⁴³ Ademollo は、この点を、史実の反映と見ている。

- (6) 『形而上学』第4巻第5章 1010a7-9 でアリストテレスは、「この自然の全体が運動し変化しているのを見、しかもそのように変化する事物についてはなんらの真実も語りえない——少なくとも、あらゆるところであらゆる仕方に変化するものについては真実を語ることはできない」と考えるひとびとに言及し、次のことをつけ加える。

この見解から、これまでに述べられてきたうちの最も極端な見解も現れたのである。それはヘラクレイトスの徒を名乗るひとびとの見解、ことにクラテュロスの抱いていたそれで、このひとに至っては、ついに、何も語るべきでないと考え、彼の指頭を動かすのみであった。そして彼は、ヘラクレイトスが二度と同じ川に足を踏み入れることはできないといったのを批判した。というのは、彼は一度もできないと考えたからである⁴⁴。(1010a10-15)

- (6) に関連する資料として、Ademollo は、『弁論術』第3巻第16章 1417b1-2 も引用する。(これは、アイスキネスによる報告を介した間接的な証言であるが⁴⁵、クラテュロスについての極めて重要な資料であると思われるので、以下 (6)* として引用することにする。)

- (6)* 「彼はシューシューっと口音を立てて、激しく手を振りながら」

Ademollo は、(6)・(6)* で伝えられるクラテュロスの言動を、彼の極端なヘラクレイトス主義との関連性のもとで、こう分析している——クラテュロスは「万物は片時もいかなる点でも同一性を保たない」という極端な考えをもつに至ったがゆえに、「指さし⁴⁶」を、事物の同一性ないし本性に「関与しない」で済む方法として実践し⁴⁷、「シューシュー [...]」はその前兆

⁴⁴ Ademollo は Barnes (1984) の訳に従う。

⁴⁵ このアイスキネスは、弁論家のアイスキネスではなく、「ソクラテコス」と呼ばれる人物である。彼はプラトンの同時代人で、ソクラテスの献身的な追随者であった (Kennedy 2007: 241 n.187)。

⁴⁶ Ademollo は、「指頭を動かす」を「事物を指さす」という意味に解する (2001: 17)。

⁴⁷ Ademollo のこの解釈は Taylor (1960: 76) の解釈に依拠しており、「指さし」を、事物の同一性ないし本性に「関与する」唯一の方法と見做す Sedley の見解 (2003: 19) への反論として提出されている。「事物の瞬間的同一性」を認めたくらば、「指さし」がその同一性に「関与する」か否かを争点とするこの論争に対し、「事物の瞬間的同一性」を認めず、「指を動かす」を、指示ないし同定の不可能性の表示と見做す立場がある。その立場は、基本的に、1010a10-15 でアリストテレスによって報告される「川の流るるの比喻」から、ヘラクレイトスとクラテュロスの相違を次の点——すなわち、前者は絶え間なく変化する事物を再度同定することはできないとし、後者は同定すらできないとしたという点——に見出す (cf. Kirwan 1971: 109)。この点は、Guthrie (1962: 450 n.3) によって詳細に説明されている。Guthrie によれば、「川に一度も足を踏み入れることはできない」というクラテュロスの極端な主張は、本質的に、次の点に存する。すなわち、足が川の表面に触れてから川の底に着くまでの間に（足を踏み入れようとした）その地点の川はすでに変化してしまっているということである。川について「一瞬も同じ地点を認めな

であった、と。

(6)・(6)* と、(1)～(4) および (5) の間の一貫性について、Ademollo は、(6)・(6)* が、(1)～(4)——『クラテュロス』の中で、クラテュロスは、「それぞれのものが、本性的に正しい名前をもっている」を主張している——と、(5) ——それによれば、クラテュロスは若いプラトンに出会い、(極端な流転ではなく、ヘラクレイトスの) 流転について教えたとされる——で描写されているのよりも後の段階のクラテュロスを描写しているとし、そのことは、「ついに」(1010a12) ——すなわち、クラテュロスの哲学的発展の末 (それは必ずしも、彼の晩年である必要はない) ——というアリストテレスの表現によって伝えられるため、(1)～(6) の間に不一致は存在しないと結論づける。

Ademollo の分析は、一方で、歴史上のクラテュロスの哲学的発展を再構築する試みには成功していると言えるだろう。だが他方で、或る問題を浮き彫りにしたように思われる。Ademollo の分析によれば、クラテュロスについてプラトンが知っていたことは、彼がもともとは「名前の正しさ」という考えと語源分析に精通していたということと、それについてのソクラテスとの議論をきっかけに、流転論者になったということだけであり、クラテュロスがいずれ極端な流転説を唱えるに至ったことは、プラトンは知らなかったことになる。しかし、第六章で見ると、流転をめぐる最後の議論 (439b10-440d7) (以下、「流転をめぐる議論」と呼称する) で吟味されるのは、いわゆるヘラクレイトスの流転説ではなく、極端な流転説である。極端な流転説は、『テアイテトス』の「流転説批判」(179d-183c) においても吟味されており、そこでは、その説はイオニアのエペソスという土地に屯する「ヘラクレイトスの徒たち」に帰される。そこでクラテュロスの名は挙げられていないが、両議論は非常によく似た論証構造をもち、その双方において、「語の正しい適用の不可能性」という同じ帰結が導出される。

「ヘラクレイトスの徒たちの極端な説」が、「感覚論」(155e-157c; 159de) を構成する「ヘラクレイトスの流転説」と同一のものであるか否かという点で諸家の見解はわかるにせよ⁴⁸、この説は、一般に、「言語の崩壊」をもたらすと理解されている⁴⁹。注意すべきなのは、「言語の崩壊」とは、言語使用の不可能性を意味するのではなく、上記したように、語の正

い」とすると、類比的に、発語についても次のことが成立する。すなわち、語が口から発せられるまでの間に、語の指示対象はすでに変化してしまっているということである。語を発することは、対象が何であれ、それが永続的なものであるという誤った印象を与えることになるため、クラテュロスは、最終的に、何も語らず、ただ指を動かすことを最善と見做した、と Guthrie は解釈している。

Cherniss (1964: 84) もまた、後者の立場をとっていると思われるが、彼は「指を動かす」を「指で合図する」(make signs with his finger) と理解している。しかし Cherniss が「合図」ということで何を意味しているのか不明である。

⁴⁸ 一方で「感覚論」を構成する流転説を「広く知者たちに共有されていた思想」と見做し、他方、「流転説批判」で扱われる流転説を「ヘラクレイトスの徒たちの極端な思想」と見做したうえで、両説を完全に区別するのは McDowell (1973: 179) と藤澤 (2014: 214-231)。Cornford (1935) と Burnyeat (1990) と Sedley (2004) は両説を区別していない。

⁴⁹ 藤澤 2014: 214-231. Cf. Ademollo 2011: 468-473.

しい適用の不可能性を意味するということだ。「語の使用の不可能性」と「語の正しい適用の不可能性」の間の区別は、これまであいまいにされてきたように思われるが、クラテュロスの哲学的発展の過程をより精確に理解するためには、はっきりさせておく必要がある。まず、「流転説批判」を構成する一議論 (182d1-7) と「流転をめぐる議論」の「第一議論」(439d8-12) の両方で、「性質そのものの変化」が吟味されており、——性質の例として挙げられているものの違いはあるにせよ (『テアイテトス』では〈白さ〉、『クラテュロス』では〈美〉) ——、両議論はほぼ同じ用語法と論証構造をもつ⁵⁰。『テアイテトス』では、「〈白さ〉そのものが変化する」という仮定は、「何らかの色を正しく呼ぶ [ὀρθῶς προσεπεῖν] ことはできない」という帰結をもたらすとされ、他方、『クラテュロス』では、もし〈美〉そのものが別のものに変化するとしたら、それを正しく呼ぶ [ὀρθῶς προσεπεῖν] ことはできないとされる。

この議論でいったい何が言われているのか、一見明らかでない。幾人かの学者が解釈するように⁵¹、もし極端な流転説が真であるなら、何かを名指すこと自体が不可能である、ということなのか。だがそうだとすると、「正しく」[ὀρθῶς] という語は冗長であるように見える。であれば、ここでは名指しや同定の不可能性以外のことが語られていると考えねばならない。だが、それは何なのか。

「正しく」という語がここで、クラテュロスの言う「名前の正しさ」との関連において用いられていると考えることは妥当であろう。第四章で見るように、クラテュロスの言う「名前の正しさ」は、第一に、名前の語源から説明される「記述的意味」が指示対象を決定すると主張する (以下、「記述的意味＝指示対象説」と呼称する)。この主張は、言い換えれば、名前は、その記述的意味を充足する本性をもつ対象にしか適用され得ないという主張であるため、語の適用はすべて正しいことになり、したがって、「虚偽を発する」ことは本来的に不可能であることになる。たとえば、「ヘルモゲネス」という名前は、その記述的意味——「ヘルメスの息子」——を充足する本性をもつ対象にしか適用され得ないため、誰かがヘルモゲネスを「ヘルモゲネス」と名指した場合、この名前は——話し手の意図に関係なく——「ヘルメスの息子」を充足する本性をもつ誰か別の人物を指示しており、したがって、その話し手は、そのだれか見知らぬ人物を正しく名指していることになる。また、相手の名前を間違えるといった誤った名指しの事例では、間違って発せられたその名前は「騒音」に過ぎない。このように、「記述的意味＝指示対象説」は、語を誤って適用する (誤った対象に適用する) ことを本来的に不可能にするのである。

⁵⁰ 両議論の類似性については、Ademollo が詳しく論じている (2011: 468-473)。

⁵¹ Sedley (2003: 168-169) は、万物が流転変動する世界では、主語を置き、述定する行為が不可能になると分析する。その理由は、何かを主語に置き、それについて述定する行為は時間を伴う行為であり、その間に当の対象は別のものに変化してしまっているからである。第六章第二節で詳説するが、問題とされているのは述定行為ではなく、名指し行為であるという点、そして「正しく」という語の存在が看過されている点で、Sedley の解釈には賛成できない。Cf. 藤澤 (2014: 226) は、『テアイテトス』の「流転説批判」について、極端な流転説から、同定と記述行為の無意味性・不可能性が帰結すると分析している。

「記述的意味＝指示対象説」は、「虚偽の発語の不可能性」という重大な哲学的問題を孕むにもかかわらず、明示的な仕方では論駁されていない。しかし、「流転をめぐる議論」の「第一議論」(439d8-12)が、「記述的意味＝指示対象説」を自己論駁に迫りやることによって、それが真であり得ないことを暗に示していると考えられる。もし極端な流転説が真であるなら、語の適用に要する時間と対象における変化に要する時間のずれのせいで、語の適用はすべて誤りであることになる。たとえば、わたしがこの特定の花を見て、「美しい」と発語したとしよう。わたしがこの花を見て美しいと感じ、「美しい」という語を発するまでの間には——どれだけわずかであっても——いくらかの時間が存在する。だがその間に、わたしが「美しい」という語で指示しようとした対象——すなわち、〈美〉そのもの——は、別のものに変化してしまっている。それゆえ、わたしは「美しい」という語で、誤った対象を指示したことになる。したがって、もしクラテュロスが極端な流転説を受け入れるのだとしたら、語の適用をすべて正しいとする「記述的意味＝指示対象説」と、ひいては「名前の正しさ」を、捨てざるを得ないのである。

先の一節に戻ろう。そうすると、「もし〈美〉そのものが変化するとしたら、それを正しく呼ぶことはできない」は、次のことを言っていることになる。それはすなわち、「もし〈美〉そのものが変化するとしたら、「美しい」という発語はすべて誤り——つまり、「美しい」という語の適用はすべて誤り——である」ということだ。少なくとも『クラテュロス』の目下の議論で、プラトンが、「記述的意味＝指示対象説」が必然的に伴う「虚偽の発語の不可能性」の論駁を暗に意図していたことは疑い得ない。このことが『テアイテトス』の当該議論にも言えるのかどうかは定かでないが、「ヘラクレイトスの徒たち」ということでプラトンが、クラテュロスも念頭に置いていた可能性は否定できないだろう。

だがその場合、なぜ「ヘラクレイトスの徒たち」の中にクラテュロスの名前が挙げられていないのかが疑問である。これから述べることは推測の域を出ないが、一つの考えられうる答えとして提示しておきたい。『テアイテトス』の「流転説批判」と『クラテュロス』の「流転をめぐる議論」で吟味されている極端な流転説は、(6)・(6)* でアリストテレスが報告しているものとは異なる。両議論で、極端な流転説から帰結するのは「言語の崩壊」——厳密には、「語の正しい適用の不可能性」——であるが、(6)・(6)* で伝えられるクラテュロスの「極端性」は「言語の放棄」にある⁵² (以下、「言語の崩壊」を伴う極端な流転説を極端な流転説¹とし、「言語の放棄」を伴う方を極端な流転説²とする)。クラテュロスが、もし極端な流転説¹を受け入れるのなら、彼は「名前の正しさ」という考えを捨てるのと同時に、「虚偽の発語の可能性」を認めざるを得ない。おそらく、それを回避する唯一の方法が、語を発しないということであったのだろう。だがそうすると、(6)・(6)* で報告されているクラテュロスの不可解な言動についての Ademollo の解釈に対して疑問が生じてくる。註 47 で触れ

⁵² Cf. Ademollo 2011: 17. ‘the main consequence of Cratylus’ extremism was that he regarded it as right not to say anything and limited himself to moving his finger – presumably to *point* at things.’ (439d8-12); Sedley 2004: 93-94.

たように、(6) に関して Sedley と Ademollo の間で争点となっているのは、「指さし」という瞬間的行為でもってひとは対象の本性——極端な流転説は、事物の同一性を片時も認めない——に關与しうるのか否か、にある。Sedley が指さしを対象の本性にかかわる唯一の方法と見做すのに対し、Ademollo は、指さしですら、どれだけわずかであっても時間を要するとし、それを対象の本性にかかわらないで済む最も安全な方法と見做す。しかしわたしには、この応酬が、的を得たものでないように思われる。まず第一に、両者は、「一瞬一瞬は、それぞれのものは、それがまさにそうであるところのものである」という共通の理解のもとで、「指さし」という行為が、対象のそうした瞬間的な本性に關与しうるのかどうかで争っている。しかし、「流転をめぐる議論」の「第二議論」(439e1-6) で極端な流転説¹から導出される二つ目の帰結は、「存在の不可能性」であり、それは、「何ものも「何か(一つのもの)」[τῆ]として存在し得ない」ことを意味する。そうすると、「それぞれのものが瞬間的にはそれ自身の本性をもっている」というような考えは、極端な流転説¹にはないように思われる。むしろ、極端な流転説¹は、万物の本性それ自体が流転だと主張するのではないだろうか。もしこの解釈が正しければ、「指頭を動かす」という行為は、Sedley や Ademollo の言う「指さし」ではなく、字義通り「指頭を動かす」ことであることになる。なぜなら、それによってクラテュロスは、事物の流転的本性を表示しようとしていたのであり、(6)* での「シューシュー」や「激しく手を振る」などの行為も同様であった、と考えられるからだ。クラテュロスのこの言動についてのアイスキネスの間接証言は、模範的叙述の一例として引用されている。アリストテレスは、「シューシュー」と「激しく手を振る」について、それらが「聴衆が知らないものについての、彼らの知っている指標 [σύμβολα]」であるという理由で、「説得力をもっている」と述べる(『弁論術』第3巻第16章 1417b2-3⁵³)。つまり、アリストテレスは、クラテュロスのこれらの言動を、感情を表示する説得的方法として引用しているのである。元来、物の二つの部分のうちの一つ(片割れ)を意味する σύμβολον という語は、たとえば、嵌め合わせることによって契約相手を特定するために用いられる、骨などの物品の片割れであった⁵⁴。σύμβολον として機能する物は、それだけでは何も意味せず、契約を交わす双方が片割れを保持し、その双方が、その意味に合意することではじめて有意味となるという意味で、『命題論』第1章 16a3-9; 19-21; 26-29 では、「名前は規約的である」ことを示す重要タームとして用いられている。同様に、「シューシュー」や「激しく手を振る」などの言動も、それが何を意味するかについてひとびとの間で合意が成立しているがゆえに有意味となる。ここで、本来規約の産物としての名前に用いられる σύμβολα という語が、名前ではなく、音声や身振り手振りなどの身体言語に用いられていることは、興味深い。ク

⁵³ Cope (1970: 352-353) の解説によれば、ここで引用されているクラテュロスの「シューシュー」や「激しく手を振る」などの言動は、次の理由で叙述に現実性と信憑性を与えるとされる——それはすなわち、聴衆が、彼らの知っている性格や感情の「しるし」[σύμβολα] (或る特定の性格や感情を指し示すもの、指) から、それらについて述べられている、彼らの知らない事実を推論するという理由である。

⁵⁴ Van den Berg 2008: 21.

ラテュロスは、何かを表示する手段として音声（「シューシュー」は、事物の流転的本性を表す意図で発せられた「音」であって、「名前」ではない）や身体言語に訴えることで、「名前は、自然本性的である」という考えと、極端な流転説の両方を保持しようとしたことが窺えるからだ。『弁論術』でのアリストテレスの引用は、極端な流転説との関連性を示唆するものではないにせよ、「名前の正しさ」への執着から言語それ自体を放棄することを選択したクラテュロスの晩年の姿を伝えているように思われる。

以上から、プラトンは、おそらく、クラテュロスが最終的に極端な流転説²を唱えるにまで至ったことを知っていたのではないかと推察される。虚偽を発することを是が非でも回避するために、ついには語の使用それ自体を放棄するに至ったクラテュロスは、プラトンにとって、いわゆる「ヘラクレイトスの徒たち」と区別されねばならない人物であったにちがいない。『テアイテトス』の「流転説批判」において、クラテュロスの名が挙げられていないのは、おそらくそれが理由であろう。

(2) 「名前の正しさ」

クラテュロスがプラトンにとって特異な存在であったことは、「名前の正しさ」という側面からも見ることができる。

(1) で見たように、クラテュロスがもともとは「名前の正しさ」という考えと語源分析に精通する者であったことは、Sedley と Ademollo の分析によって、いまやほぼ事実として受け入れられている。しかし、この解釈を最初に提示したのは、Barney であった⁵⁵。Barney の主張に独自の点は、ソフィストたちが当時言語とその「正しさ」に魅了され、語源分析が実際に当時の活発な知的営みであったという想定のもとに⁵⁶、クラテュロスが語源分析を生業とするソフィストの一人であったと推定している点にある。確かに、Barney が言うように、言語とその「正しさ」への関心はクラテュロスに特有のものであったわけではない。プロディコスとプロタゴラスが「名前の正しさ」という主題を扱っていたことは、よく知られている。一方でプロディコスは、『エウテュデモス』277e で、「ひとはまず第一に、名前の正しさについて [περί ὀνομάτων ὀρθότητος] 学ばねばならない」と言ったとされており、それによって彼が、同義語の間に極めて微妙な意味論的区別を設けることを意味していたことは、たとえば『カルミデス』163d や『プロタゴラス』337ac、またアリストテレス『トピカ』112b21-26 での言及からも知られる。他方、プロタゴラスは、『パイドロス』267c で、「正語法」[ὀρθοέπεια] を扱っていたとされ、『ソフィスト的論駁について』173b17-174a4 や『弁論術』1407b7-8 でのアリストテレスの報告、また、『文法学者に対して』（『数学者に対して』第1巻）150-3 でのセクストス・エンペイリコスの陳述から、プロタゴラスがそれによって、事

⁵⁵ Barney 2001: 52-57.

⁵⁶ この点は、広く学者たちによって受け入れられている。E.g. Goldschmidt (1940: 109-142); Baxter (1992: 86-160); Barney (2001: 52-57); Sedley (2003: 25-41).

物の自然的性質に従って名前の文法的性を分類することを意味していたことがわかる⁵⁷。セクストス・エンペイリコスの陳述について、Blank は、次のように解説している⁵⁸——「[...] 名前の文法的性は、二つの点で——すなわち、種を表す男性形ないし女性形の名詞が実際の性に関係なく個々人に適用されている (151)、あるいは男性形ないし女性形の普通名詞が無生物の物体に適用されている (152) という点で——、物理的実体と一致しないように見える。これらの問題は両方とも、「名前の正しさ」を扱っていたと報告されているソフィスト——すなわち、プロディコスとプロタゴラス——の一人によって、おそらく指摘された。プロタゴラスは、名前を「性」の点で三つ、すなわち男性的なもの、女性的なもの、もの的なもの（アリストテレス『弁論術』第3巻第5章 1407b6）に区分し、たとえば「怒り」[μῆνις] や「ヘルメット」[πίληξις] は、一般に女性形の形容詞を伴って使用されているが、(実際には) 男性形であり、その結果、(男性形の形容詞(分詞)を使って)「破壊をもたらす怒り」[μῆνιν οὐλόμενον] と言っている者は、文法違反(つまり、名詞と形容詞の間の性における不一致)を犯していると思われるだろうが、実際にはそうではない(アリストテレス『ソフィスト的論駁について』第14章 173b17)と主張したと報告されている。」

『クラテュロス』においても、「名前の正しさ」との関連から、プロディコスとプロタゴラスの名は挙げられている(前者は、384ac で、「プロディコスの見解をソクラテスは知らない」という仕方而言及され、後者については、391bc で、「ヘルモゲネスの義兄弟であるカリアスがプロタゴラスから「名前の正しさ」に関する類のことを学んだ」と言われる)。しかしいずれの場合も、ソクラテスは、彼らへの言及を、次の二点——すなわち、彼らソフィストたちの金欲と、単に多額の金を支払ってひとの講義を聞くだけで哲学的問題についての真実を学ぶことができるという馬鹿げた考え——を嘲笑する機会に利用しているだけである。プロディコスとプロタゴラス双方の見解について立ち入った議論がなされないのは、それらが、クラテュロスが「名前の正しさ」と呼んでいるものと本質的に異なるものであるから、であろう。

⁵⁷ Murray (1946: 176-178) は、ギリシア語学習の起源をプロタゴラスに見る。Murray の説明によれば、プロタゴラスは *περὶ ὀρθότητος ὀνομάτων* ないし *περὶ ὀρθοεπείας*, *On Correctness of Names or On Correct Speech* という著作を書いたとされ、*ὀνομάτων* という語から次のことが推定可能であるとされる、それはすなわち、プラトンの中に確認されるロゴスの分割、すなわちロゴスをその部分に——*μέρη λόγου*, ‘parts of speech’——に分割することを最初に行ったのはプロタゴラスであった、ということである。Murray の説明では、言説は、事物の名前と、それ(事物)について言われる事柄——*ὀνόματα* と *ῥήματα*——に区分され、それらはやがて名詞と動詞になるが、この段階では、それらは主語と述語に近い。プロタゴラスは、名詞を ἄρρενα, θήλεα, σκεύη, Males, Females, Things に区分し、最後の分類 (σκεύη) は、アリストテレスによって μέσα, ‘Middles’ と呼ばれたが、最終的には、οὐδέτερα, (どの分類にも属さないという意味で) Neuter となった。さらに Murray は、事物の自然的性質を優先し、それに従って名前の文法的性を変えるというプロタゴラスの主張から、プロタゴラスが、言語を、「自然本性」ではなく「ノモス」の問題と見做していたと推定している。しかし、わたしには、プロタゴラスが、事物の自然的性質の方に語の文法的性を一致させることを主張していたことは、彼が、言語を、ノモスの問題と見做していたことにはならないように思われる。

⁵⁸ Blank 1998: 183-184; cf. 234.

当時ソフィストたちの幾人かによって「名前の正しさ」に関する類のことが、それぞれ異なる仕方であらわれていた。しかし、その中でもとりわけプラトンが「問題」を見出したのは、クラテュロスが「名前の正しさ」と呼んでいるものであり、その視界の先には、或る仕方で絡み合ってくる流転説の存在があったことは、疑い得ない。

5 『クラテュロス』の執筆順序をめぐる問題

(1) 先行研究の状況

本章の最後に、『クラテュロス』の執筆順序をめぐる問題について一考しておきたい。『クラテュロス』が、プラトン諸対話篇のクロノロジーのどこに位置づけられるかという問題は、これまで議論し尽されてきたが、いまだ学者たちの間で合意は成立していない。一般的には、『クラテュロス』は中期対話篇と見做されているが、中期対話篇のどこに位置づけられるかという問題が論議を呼んできた。議論はかなり錯綜しているが、大まかに二通りの解釈の方向性が見られ、そのそれぞれにおいてさらに二方向に分岐しているように見える。一方の、より一般的な解釈は、プラトンの伝統的なクロノロジーおよび「文体統計学」(stylometry) に依拠する解釈である⁵⁹。そのなかでも文体統計学的証拠に基づく解釈は、『クラテュロス』389a5-390e4 での εἶδος および ἰδέα と、439b10-440e7 での αὐτός の用語法が、それぞれ『国家』596b-597a と『パイドン』65d での用語法と類似していることから、『クラテュロス』を『国家』以前に位置づける⁶⁰。それに対して、用語法の類似をプラトンの思考ないし問題の類似と見做すことに慎重な態度を示す学者は、『クラテュロス』の中に確認される「イデア」が、『パイトン』と『国家』に代表される中期対話篇においてほど十分に練り上げられ、明らかにされていないという理由で、『クラテュロス』を『パイドン』以前に位置づける⁶¹。

もう一方の解釈には、伝統的なクロノロジーと文体統計学の手法に依拠するのではなく、プラトンの諸対話篇の間を貫く主題により重きを置く傾向が見られる。その中で、『クラテュロス』と『テアイテトス』と『ソフィスト』の間の、主題とモチーフの点での一貫性および連続性に着目する学者は、『クラテュロス』を『国家』以後に位置づけ、この対話篇を、これら三つの連続する対話篇の序章として読むことを提案する⁶²。他方、White は、『パイドン』から『クラテュロス』まで、プラトン哲学を貫く問題が、イデアと名辞との間の対応関係にあるとし、『クラテュロス』を『パイドロス』以後に位置づける解釈を提示している⁶³。

⁵⁹ Brandwood によれば、プラトンの後期対話篇に典型的な特徴が初期対話篇に現れる頻度を、後者の、前者との相対的な近似性の指標として受け入れると仮定した場合、後期対話篇ともっとも近いとされる対話篇の中に『クラテュロス』が含まれるであろうとされる (1990: 252)。

⁶⁰ Ross 1955: 187-196; Kahn 1973; Levin 2001: 4 n.4

⁶¹ Luce 1964: 136-154; Calvert 1970; Irwin 1977.

⁶² Warburg 1929; Kirk 1951; Allan 1954; Barney 2001.

⁶³ White 1976; cf. Ademollo (2011) は、『クラテュロス』を『パイドロス』以後、『テアイテト

その一方で、『クラテュロス』を中期対話篇と見做さない学者もいる。Owen と Mackenzie は、『クラテュロス』の中に確認されるアイデアを、プラトンの超越のアイデアと見做し、この対話篇を、後期対話篇の「アイデア論批判」のグループに分類する⁶⁴。

以上の紛糾した議論を解きほぐすべく、Sedley は、これまでにない解釈を提示した⁶⁵。それは、『クラテュロス』が、プラトン諸対話篇の伝統的なクロノロジーの一つの場所には収まらない、という解釈である。Sedley は、われわれがもっている『クラテュロス』は第二版ないしのちに書かれた版であり、晩年にプラトン自身によって行われたいくつかの修正を含んでいるという意味で、『クラテュロス』は、おそらく唯一の「ハイブリッド」——すなわち、プラトンの思考の、一つより多くの相から生み出された作品——であると述べる。Sedley が論拠とするのは、テキスト上の問題が指摘される 385b2-d1 と 437d10-438b8 の二節である。この二節は、前後の文脈とあからさまに矛盾することから、Sedley は、プラトンが『クラテュロス』第二版を刊行するにあたり、この二節を削除し、言表を名前と述語の組み合わせとして分析するいくつかの箇所 (387c-d; 408d; 431b-c; cf. 425a) を『ソフィスト』と同時期に修正したと結論する。

437d10-438b8 の一節のテキスト上の問題はかなり複雑であり⁶⁶、その問題と、『クラテュロス』の執筆順序をめぐる問題は相互に独立の問題として扱われるべきであるが、他方、385b2-d1 の一節は、統語論的問題を抱えることから、『クラテュロス』の執筆順序と密接な関連をもつと予想される。したがって、以下で、385b2-d1 の一節の内容を確認し、前後の文

ス』以前に位置づける。

⁶⁴ Owen 1953; Mackenzie 1986. Mackenzie は、「流転をめぐる議論」の「第三議論」(439e7-440a5)で導出される帰結——「いかなるときにも決して同じ状態にないものは、誰にも知られ得ない」という帰結——が議論中の、流転しているとされる「實在」[ὄντα] ではなく、先行する「第二議論」(439e1-6)の最後 (e3-5) に言及される確固不動の本性に言及するとし、この「第三議論」が、プラトンのアイデアは知られ得ないことを示すものであると主張する。Mackenzie のこの解釈は、しかし、大方の学者によって否定されている。

⁶⁵ Sedley 2003: 6-16.

⁶⁶ 437d10-438b8 の一節には二つの異なるバージョンが存在する。主要写本の一つである W には、他のすべての主要写本と異なる点が二つある。一つは、437d10-438a2 を含む点であり、もう一つは、a2 Οἷ μοι δοκεῖ の後に ἐκ ποίων δὲ を追加している点である。後者は、後続する a3-10 を読み飛ばして、a11 Ἐκ ποίων οὖν ὀνομάτων から再読すべきことを示唆していると考えられる。他方、他のすべての主要写本は、d10-a2 を削除し、437d9 のすぐ後に 438a3 を読む。したがって、d10-a2 と a3-10 が、別の異なる版としてわれわれの手元にあることになる。d10-a2 の眼目は、「最初に名前を制定した法習制定者たちは、事物についての知識を所有していた」という論点について、クラテュロスとソクラテスの同意が成立する点に存するが、このことは、法習制定者たちが事物についての知識をもっていたという考えをソクラテスにも帰す点で問題であり、また、この一節は、「法習制定術」[νομοθετική] という、『クラテュロス』の中で一度も用いられていない用語を含む点でも問題含みである。それにもかかわらず、Kapp の提案に従い、新 OCT の編者たちと Dalimier は、d10-a2 の執筆者を、a3-10 と同様にプラトンに帰した。この立場は、近年では、Valenti (1998) と Sedley (2003: 9; n.17) によって支持された。d10-a2 の著者をめぐる論争に立ち入る余裕はないが、上述の内容上の問題に鑑みれば、d10-a2 がプラトン自身によって書かれたと推定することは困難であると思われる。この問題についての詳細は、Ademollo (2011: 489-495) を参照されたい。

脈と『クラテュロス』全体の趣意との関係において、この一節がどのように処理されるべきかを検討し、その考察結果に基づいて、『クラテュロス』の執筆順序をめぐる問題に対し、自分自身の見解を提示することにしたい。

(2) 385b2-d1 の一節をめぐる問題

(2)-1 先行研究の状況

385b2-d1 の一節は、現在置かれている場所にはふさわしくなく、それゆえ、別の場所に置き換えるか、あるいは削除されなければならないという見解が、現在、主流となっている。この問題に先鞭をつけたのは、Schofield である⁶⁷。Schofield は、この一節が、385a1-b1 から 385d2 への一続きの議論を中断してしまうことを指摘し、この一節は、若干後の 387c5 直後の位置に置き換えられるべきであると提案した。この置き換えは、Reeve に採用され⁶⁸、Barney による支持を得た⁶⁹。Sedley は、新 OCT の編者たちと同様に、この一節が、現在置かれている場所には属し得ないという点で Schofield に同意するが、かと言って、Schofield が提案した位置には置き換えられ得ない⁷⁰——否むしろ、実はわれわれがもっている『クラテュロス』(第二版)の他のどの場所にも置き換えられ得ないと述べる⁷¹。近年、Ademollo は、この一節が真正のものであり、現在の位置に正しく置かれているという想定に立脚して、この一節の緻密な分析を行い、この想定の正当性を証明しようと試みた⁷²。しかし、Sedley が予告していたように⁷³、Ademollo の解釈は、この一節が、この対話篇全体にふさわしいことを示すだけで、現在の位置にふさわしいことを示すのには成功していない⁷⁴。

Schofield が最初に指摘したように、この一節が完全に場違いであり、現在の位置に属し得ないことについて、もはや議論の余地はないと思われる。この一節は、

385a1-b1: 各人がそう呼ぶと決めたものであれば何であれ、その名前である。

⁶⁷ Schofield 1972.

⁶⁸ Reeve 1998.

⁶⁹ Barney 2001: 28 n.9

⁷⁰ 第二章第四節で詳説するが、386e6-387d9 の一節において、「行為の自然本性」という考えが、「切る」と「焼く」という日常的行為と、「語る」と「名指す」という言語行為との間の類比に基づいて論じられる。問題となっている 385b2-d1 の一節では、名前の真偽性が論じられるため、もし Schofield の提案に従ってこの一節を 387c5 の直後に挿入すると、「切る」と「名指す」の間の極めて重要なアナロジーが不明瞭になってしまう。なぜなら、名前の真偽性という論点は、「切る」と「名指す」の間のアナロジーにおいて、何の役割も担っていないからである (cf. Sedley 2003: 59 n.18)。その意味で、Schofield の提案には同意し兼ねる。

⁷¹ Sedley 2003: 6-16.

⁷² Ademollo 2011: 49-59.

⁷³ Sedley は、当時近刊予定であった Ademollo のコメンタリー (2011 年刊行) の中での議論の内容について、上述のような批判を行っている。

⁷⁴ Baxter (1992: 32-37) もまた、385b2-d1 の一節が現在の位置にふさわしいことを論証するのに成功しているとは言い難い。

と、

385d2: そうすると、各人が何かの名前であると言えれば必ず、それが、各人にとっての名前であることになる。

の間に置かれている。この箇所は、ソクラテスがヘルモゲネスの見解から「命名の恣意性」という論点を引き出し (385a1-b1)、そこから「名前の、各命名者に対する相対性」(385d2)へと議論を意図的に展開してゆく、ちょうどその転換点に位置する。そして議論は、そのうち、「プロタゴラス批判」(385e4-386e5)へと連続してゆく(次章で詳しく論ずる)。それゆえ、この一節の存在は、その極めて重要な議論の連続的展開を阻むものでしかない。

しかし、この一節は、どこか別の場所に置き換えるか、あるいは削除すべきかどうかという点で、議論の余地がある。この一節には、しばしば『クラテュロス』全体が抱える問題と評される「名前 [ὄνομα] と言表 [λόγος] の同化問題」が内在する。この問題は、一般に、『クラテュロス』の統語論的誤りおよび『ソフィスト』との矛盾と見做されており、『クラテュロス』の執筆順序を決定する際の一つの指標とされてきた。しかし、従来の研究がこの問題を正當に扱ってきたとは言い難い。それは一つには、この一節が不適切な場所に置かれているために、当の問題が適切な場で論じられてこなかったからである。

『クラテュロス』研究は、今日、この一節の処理に関して、387c5の直後に置き換えるか、それとも削除するかの選択を迫られている。しかし、この一節の適切な場所に関しては、まだ議論する余地が残されている。

(2)-2 385b2-d1 の読解

問題の一節は、次のように読める。

I

SO. 「さあ、ではわたしに次のことを言っておくれ。君が次のように呼ぶものは何かあるか——「真を語り、そして偽を語る」と [καλεῖς τι ἀληθῆ λέγειν καὶ ψευδῆ].」

HE. 「あります。」

SO. 「そうすると、真なる言表があつて、もう一方は偽であることがありうるのだね [εἶη ἂν λόγος ἀληθῆς, ὁ δὲ ψευδῆς]⁷⁵.」

HE. 「もちろんです。」

SO. 「それなら、あるものについて、そうある通りに言う言表が真であり、他方、{それについて} そうでないように言う言表が偽であるね [ὅς ἂν τὰ ὄντα λέγη ὡς ἔστιν,

⁷⁵ Ademollo は 408c 「言表は、真と偽の二面性をもっている」を参照し、‘among sentences, some are true and others are false?’ と訳出する。W 写本だけは ὁ λόγος ὁ μὲν を読む。

ἀληθής, ὅς δ' ἂν ὡς οὐκ ἔστιν, ψευδής]。」

HE. 「はい。」

SO. 「そうすると、次のことが可能であることになるね、すなわち言表で、そうであるものと、そうでないものとの両方を言うことが⁷⁶。」

HE. 「もちろんです。」

II

SO. 「だが、真なる言表は、一方でその全体は真であるが、他方、その諸部分は真ではないのか。」

HE. 「いいえ、その諸部分もまた真です。」

SO. 「で、その諸部分でも大きい部分が真で、小さい部分は真ではないのか。それとも、すべての部分が真であるのか。」

HE. 「すべての部分が {真である} とわたしは思います。」

III

SO. 「では、言表の部分に関して、君が名前よりも小さい部分と呼ぶものはあるか。」

HE. 「いいえ、それが最小の部分です。」

SO. 「そうすると、名前もまた、真なる言表の中で、言われるのだね。」

HE. 「はい。」

SO. 「それは真である、君の主張によれば。」

HE. 「はい。」

IV

SO. 「他方、偽なる {言表の} 部分は、偽ではないのか。」

HE. 「そうわたしは主張しています。」

SO. 「そうすると、虚偽の名前と真の名前を言うことが可能であることになるね、いやしくも言表に関してもそう言えるのだとすれば。」

HE. 「もちろんです。」 (385b2-d1)

個々の論点はさておき、議論全体の構造と論旨は簡単明瞭である。この一節は四つの部分から成り⁷⁷、全体で一つの完結した議論を構成する。四つの部分それぞれの要点は、

⁷⁶ Sedley は、385b10 のコンマを λόγῳ の前ではなく後ろに置く。‘So this is a property of a statement, to state things which are and things which are not?’ (2003: 11 n.24)。

⁷⁷ I～IVの区分に関しては Ademollo に従う(2011: 49-59)。他方、Sedley は、この議論を、はじまりと中間と終わりをもつ一つの完成した議論と見做す (2003: 11)。

- I 言表には真と偽がある。
- II 言表全体が真であれば、その諸部分はどんなものでも——大であれ小であれ——真である。
- III 言表の最小の構成要素は名前であり、IIから、真なる言表を構成する名前もまた、真である。
- IV (Iから、以上のことが偽なる言表についても言えるため) 偽なる言表を構成する名前は偽である。

であり、この議論全体の論旨は、

言表全体が真ないし偽であれば、その最小の構成要素である個々の名前もまた、真ないし偽である。

「言表 [λόγος] と、その構成要素である名前 [ὄνομα] は、性質上、同じものである」というこの原則は、一般に、「合成の原則」(*the principle of compositionality*⁷⁸) と呼ばれ⁷⁹、プラトンの後期対話篇『ソフィスト』での主張、すなわち

真と偽は、完全な言表 [λόγοι] に属し、それらを構成する個々の語にまで遡ることはできず、それらを構成する名前と述語の非対照的な組み合わせに依拠する。

という主張と直接あからさまに矛盾することが指摘されてきた。しかし、のちのいくつかの

⁷⁸ Barney が、『クラテュロス』の結論を、言語一般に対するプラトンの不信感ないし絶望感の表明と見做すのは、『クラテュロス』において確認される「合成の原則」、すなわち「言表 [λόγος] は、構成要素である名前と性質上同じである」という原則に則り、「言表もまた、名前——本質的に欠陥をもつ——から構成される限り、必然的に欠陥をもつ」と理解されるからである。また、この原則は『第七書簡』(342b6-7) においても確認されることから、『第七書簡』における言語論と『クラテュロス』における言語論の類似性がしばしば指摘されてきた (Barney 2001: 163-169; White 1998: 199-215)。Barney は、『クラテュロス』(432b1) と『第七書簡』(342e3) の両方で用いられる τὸ ποιόν τι という表現にも着目する (『クラテュロス』432a5-b4 で、ソクラテスは存在を二つの部類に分ける。一つは、「その同一性が数に左右される、数そのものおよび数的なもの」であり、もう一つは「τὸ ποιόν τι と似像一般」である。名前は、実物とは異なり、本質的および非本質的欠陥をもつことから、後者の部類に属するとされる。他方、『第七書簡』342e3 では、「あるもの」[ὄν] が把握されるための四つの手段、すなわち (1) その名前、(2) その言表、(3) それが具現化された像 [εἶδωλα]、(4) われわれの魂におけるその現われ (思いなし、知識、知性) は、その「あるもの」ではなく、τὸ ποιόν τι を明示すると言われる)。この表現が概して「不完全で不確定の本性しかもちえない任意の可感的個物」を指すという理解のもとで、この表現から名前と言語に対する非難ないし責めの意味合いを読み取り、『第七書簡』が『クラテュロス』の悲観主義的結論——現実の名前が規約によって機能していることへの絶望と名前の側の本質的欠陥に対する非難の表明——に非常に近い言語観を提示すると主張する。

⁷⁹ Cf. 'the fallacies of Composition and Division' (Robinson 1956: 123; 131).

議論の中に、上述の『ソフィスト』での主張とほぼ同じ主張——「言表 [λόγοι] は、名前 [ὀνόματα] と述語 [ρήματα] の組み合わせである」(431c1-2; cf. 425a)——が確認されるため、単純に『クラテュロス』を統語論的發展段階に位置づけることには抵抗がある。また、名前を言表と性質上同じものとする考えは、本質的に、名前における真偽を主張することにあるため、その考えを『クラテュロス』全体——なぜなら、『クラテュロス』の主題は「名前の正しさ」であるのだから——に帰すことは、あまりに軽率である。

われわれはまず、この対話篇の中に、この一節と密接に関連する議論があるのかどうか、つまり、言表と名前の真偽をめぐる議論がこの対話篇のどこかで展開されているのかどうかをしてみる必要があるだろう。実際、Fine や Ademollo は、目下の一節で名前に帰される「真」は、名前の「真の割り当て」と「偽の割り当て」が論じられるのちの諸議論（とりわけ、431a）によって適切に説明されると主張する⁸⁰。確かに、『クラテュロス』において名前の真偽が論じられるのは、「割り当ての議論」と呼ばれる一連の議論（429b12-432a4）においてであるが、その議論の中でもとりわけこの一節との関連性が見込まれるのは、「偽なる言表の不可能性」が論じられる最初の議論（429b12-430a7）である。「ヘルモゲネス」という名前の割り当て（適用）に関するこの議論については、第四章第一節で詳しく論ずるため、ここでは、「偽なる言表の不可能性」という論点に絞って検討する。

まずは、関連するテキストの内容を確認しよう。名前の中に良し悪しの差を認めず、「すべての名前が正しくつけられている」（429b10）と主張するクラテュロスに対して、ソクラテスは次のように問う。

SO. 「では、どうだろう。ついさっきも言われていたことだが、こちらのヘルモゲネスには、これは、名前としてつけられてすらいらない [Ἐρμογένει τῶδε πότερον μηδὲ ὄνομα τοῦτο κεῖσθαι⁸¹] とわれわれは主張してよいのだろうか——もしヘルメスの血統の何も彼にふさわしくないのだとしたら——、それとも {それは名前として} つけられてはいるが、しかしながら少なくとも正しくつけられてはいないと主張すべきなのだろうか。」

CR. 「つけられてすらいないと、このわたしには思われます、ソクラテスよ。つけられていると思われているけれども、この名前は別のひとの名前なのです——そのひとの本性を、この名前が明示するまさにその当人の⁸²。」

⁸⁰ Fine 1977; Ademollo 2011: 57-59.

⁸¹ 429b12-c1 の一節については、Dalimier と Ademollo の読みに従い、τοῦτο (c1) は κεῖσθαι の主語であり、他方、ὄνομα は述語の位置にあるものとして解する。ὄνομα τοῦτο を「この名前」と訳出する学者もいる (e.g. Reeve 1998: 77)。

⁸² 429c5-6 には異読がある。φύσις (c6) の後に、主要写本は ἡ τὸ ὄνομα δηλοῦσα ('that indicates the name') を読む。この読みは、Fowler と新 OCT と Dalimier によって採用されているが、Ademollo が指摘するように、『クラテュロス』の他の箇所 (393de; 395b; 396a; 422d) では、「名前が、名指される対象の本性を明示する」と言われており、その逆ではない。したがって、わたしは、ἡ...δηλοῦσα を削除するという Schanz の提案と、Heindorf の校訂に従い、ἦν τὸ ὄνομα

SO. 「では、概してひとが「彼はヘルモゲネスである」と言うようなときには、そのひとは、偽りを言ってすらいないのか。というのは、もし {彼が} ヘルモゲネスでないなら、「このひとがヘルモゲネスである」と言うことすら、今度もまたあり得ないのではないかという恐れがあるからだ [οὐδὲ τοῦτο αὖ ἤ, τὸ τοῦτον φάναι Ἐρμογένη εἶναι, εἰ μὴ ἔστιν] 。」

CR. 「おっしゃるのはどのような意味ですか。」

SO. 「偽を語ることはまったくあり得ないということ、このことを君の言論は伴うのか。というのは、そう言っているひとびとがたくさんいるからだ、親愛なるクラテュロスよ、いまも昔もね。」 (429b12-d3)

「君の言論」[σοι...ὁ λόγος 429d2] とは、「名前の正しさ」についてのクラテュロス説全体を指す⁸³。ソクラテスがここで、「ヘルモゲネス」という名前をめぐる問題を取り上げたように、クラテュロスの件の発言——「少なくとも「ヘルモゲネス」は君の名前ではない——たとえすべての人間がそう呼ぶとしても、だ。」(383b6-7)——は、「名前の正しさ」ということでクラテュロスが言おうとすることのすべてを言い表している。問題は、それが「偽を語ることの不可能性」を含意するのか⁸⁴、それとも必然的に伴うのか⁸⁵、にある。

まず、クラテュロス自身の主張を確認しよう。

a) たとえすべての人間がそう呼ぶとしても、b) 「ヘルモゲネス」は君の名前ではない。

という発言は、目下の一節で、

a*) つけられていると思われているけれども、b*) この名前は別のひとの名前である。

と言い直されている。

a・a* は、ひとびとが「ヘルモゲネス」という名前をヘルモゲネスの名前として——すなわち、慣習的に——使用しているという事実に対する譲歩を表す⁸⁶。他方、b・b* は、「ヘルモゲネス」という名前が、この名前の記述的意味——「ヘルメスの息子」——を充足する本性

δηλοῖを読むことにする。この読みは、Burnet と Méridier と Ademollo によって採用されている。

⁸³ λόγος (d2) は、クラテュロスの最後の返答 (b7-c6) に言及し、「いま君が言っていること」として解されるべきでない。なぜなら、ソクラテスは、クラテュロスの「名前の正しさ」の説全体が「虚偽の言表の可能性」を伴うことを示唆しているからである (cf. Ademollo 2011: 328)。

⁸⁴ Denyer 1991: 72. 'is the implication of your argument that...'

⁸⁵ Burnyeat 2002: 40 n.1; Ademollo 2011: 328; cf. Schofield 1982: 69.

⁸⁶ Cf. Ademollo 2011: 324.

をもつ別の人物の名前であって、ヘルモゲネスの名前ではないという、クラテュロスにとっての真実を表す。

この二つの主張は矛盾を孕む。なぜなら、語の使い手は、「X」を X の名前として規約的に使用しながら、他方、「X」は、語の使い手の考えや意図とは無関係に⁸⁷、その記述的意味を充足する本性をもつ別の対象 Z を指示するからだ。

一見唐突に思われる「虚偽を語ることの不可能性」への言及は、クラテュロス説に孕まれる或る問題を暴き出すための、ソクラテスの周到な仕掛けである。その「問題」が何であるかは、おいおいわかってくるため、まずはソクラテスの議論を追うことにしよう。

a・a*と b・b*から、

C ひとヘルモゲネスを「ヘルモゲネス」と呼ぶが、この名前は彼に正しくなく適用されているのではなく、彼に適用されてすらいない。

「今度もまた」[αὖ 429c8]——つまり、C と同様に——、

C* ひとヘルモゲネスに向かって「彼はヘルモゲネスである」と言うが、この言表は、彼について偽を述べているのではなく、彼について何も——真であれ偽であれ——述べてすらいない⁸⁸。

ソクラテスは、「名前の正しさ」についてのクラテュロス説が次のことを伴う可能性を示唆している。それはすなわち、「ヘルモゲネス」のような不適切な名前の場合、その名前と呼ばれる個人について——真しか語り得ないという意味で——虚偽を語るができないのではなく、むしろそのひとについて——真であれ偽であれ——何も語るができないということである。

このことは、逆にクラテュロスにとって、真しか語り得ないという意味での「虚偽不可能論」を擁護する理由となる。「おっしゃるのはどのような意味ですか。」(429c10) という疑問によって、クラテュロスが、C から C*への展開を予想だにしていなかったことがうかがえるが⁸⁹、クラテュロスは、ソクラテスの説明を聞いたうえで (429d1-3)、次のように返答する。

CR. 「実際いかにして、ソクラテスよ、ひとが、それについて言っているところのもの

⁸⁷ Cf. Williams 1982: 84.

⁸⁸ 429c の論理構造については、Sedley が簡潔に分析している。‘The question that at this stage interests Socrates is what follows from the supposition that an inappropriate name, like ‘Hermogenes’, is not really that individual’s name at all. If it is not his name, it presumably fails to refer to him, which seems to mean that you cannot say anything, true or false, about him by using that name. In which case the very statement ‘This is Hermogenes’, although *ex hypothesi* not true, cannot be false either.’ (2003: 132).

⁸⁹ Cf. Ademollo 2011: 329.

について言いつつ、あるものを言わないことがあり得ましようか [λέγων γέ τις τοῦτο ὁ λέγει, μὴ τὸ ὄν λέγοι]。それとも、虚偽を語ることはこのこと、つまりあるものを言わないこと [τοῦτό ἐστιν τὸ ψευδῆ λέγειν, τὸ μὴ τὰ ὄντα λέγειν]、ではないのですか。」

クラテュロスにおいて、「虚偽を語ることの不可能性」は次のように規定される。

C** それについて言っているところのものについて言いつつ、あるものを言わないことはあり得ない。

λέγων γέ τις τοῦτο ὁ λέγει は、いくつかの解釈の余地があるが⁹⁰、C**が、C*をクラテュロス説の側から言い換えたものである点に着目すべきである。C*によれば、「彼はヘルモゲネスである」という言表は、その名前と呼ばれているひとについての偽なる言表ではなく、そもそもそのひとについての言表ですらない。このことは、C**に従って、次のように言い換えることができる——この言表は、ヘルメスの血統にふさわしいだれか見知らぬ人物についての真の言表である、と。

ここで注意すべきなのは、C**は、C に依拠しているということだ⁹¹。クラテュロスの主張によれば、「ヘルモゲネス」という名前は無条件に、そのだれか見知らぬ人物に適用され

⁹⁰ Ademollo (2011: 332-335) は、λέγων τοῦτο ὁ λέγει という表現について、三つの可能な解釈を提示している。要点を概括すれば、次のようになる——一つ目の可能な解釈は、「ひとが言うところのもの」[τοῦτο ὁ λέγει] が文の内容、すなわち文が表現する命題に言及すると解するものである。たとえば、誰かが「テアイテスは飛んでいる」という文を述べた場合、このひとが「言っていること」は、「テアイテスが飛んでいるということ (that)」であることになる。その場合、この話者が言っているときされる「あるもの」[τὸ ὄν] は、「事実であること」(‘what is the case’) であることになる。二つ目の可能な解釈は、λέγων τοῦτο ὁ λέγει を「それについてひとが語るころのものについて語りつつ」(‘speaking of that of which he speaks’) と解するものである。その場合、話者の言う「あるもの」は、「存在するもの」(‘what exists’) である。三つ目の可能な解釈は、クラテュロスが、文を一種の名詞句と見做す誤りを犯していると解するものである。その場合、たとえば「カリ阿斯は白い」という文は全体として、カリ阿斯ないし白いカリ阿斯を名指すないし指示することになる(「文が、事実を名指すないし指示する」という解釈については、Denyer 1991 を参照されたい)。

クラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものは、「虚偽の発語の不可能性」を含意する(言い換えれば、クラテュロス自身が「虚偽の発語の不可能性」を主張する)。そしてまた、クラテュロスは文を一種の名詞句と見做すため、彼の説は全体として「偽なる言表の不可能性」を伴うことになる(クラテュロスは、自分が文を一種の名詞句と見做すことで哲学的誤謬を犯していることに気づいていないため、クラテュロス自身が「偽なる言表の不可能性」を主張しているわけではない)。したがって、わたしは、三つ目の解釈を採用することにする。

⁹¹ Pace Ademollo 2011: 329. Ademollo は、クラテュロスが、「名前の正しさ」の説とは無関係の理由でのみ、「偽なる言表の不可能性」を支持すると述べる。「名前の正しさ」についてのクラテュロスの説がいかにして「偽なる言表の不可能性」を伴うかという問題について、Ademollo の分析には全体として賛成できない。

る。それと同様に、誰かが「彼はヘルモゲネスである」と言うとき、その話し手が「それについて言っているところのもの」とはまさにその見知らぬ人物であることになる。要するに、

「ヘルモゲネス」という名前は、無条件に、ヘルメスの血統にふさわしいだれか見知らぬ人物を指示する。

と同じ論理で、

「彼はヘルモゲネスである」という言表は、無条件に、ヘルメスの血統にふさわしいだれか見知らぬ人物を指示する。

ということになるのである。ここにおいて、言表（文）を、一種の名詞句と見做すことに起因する誤謬が生じる⁹²。クラテュロスにおいて、言表は一種の名詞句に同化されるため、あらゆる言表が、名前と同様の仕方で、（語源分析的）対象を指示する。そしてその対象は、クラテュロスにとっては、名前と自然本性的関係にある対象、すなわち「あるもの」である。それゆえ、クラテュロスにおいて、ひとが何かを語る時、そのひとは無条件にその「あるもの」を語っているものであり、よって、あるものを言わないことは本来的に不可能なのである。

ソクラテスは「虚偽不可能論」それ自体の考察には立ち入らず(429d7-8)⁹³、代わってクラテュロスの意図する虚偽不可能論、すなわち言表を名前と同化させることに因る虚偽不可能論の吟味に着手する。挨拶の場面で相手の名前を言い間違えるという事例において、その相手がいかにして特定されるかを説明するにあたり、ソクラテスは、「ようこそ、アテナイからのお客様、スミクリオンの息子、ヘルモゲネスよ。」という名前の羅列表現を用いる。ソクラテスは最初に、身振りや記述などの名前以外の要素に訴えることで、話題となっている

⁹² Ademollo 2011: 333-334.

⁹³ Ademollo によれば、「その議論は、あまりにも巧妙過ぎてわたしとわたしの年齢では対処しきれない [...]」(429d7-8) というソクラテスの発言は、統語論的未熟性ゆえに、プラトン自身が目下の議論の誤りを特定できないという困難に直面していることを意味する可能性がある（がしかし、そうである必要はない）とされる（2011: 335）。実際、一般に、プラトンは、『ソフィスト』での解決に至るまで、長い間、言表を性質上名前と同一視することによって引き起こされる哲学的諸問題の解決に困難をきたしていたと考えられている。この問題については本節の最後に考察するが、差し当たり、次の点だけ述べておきたい。わたしは、ここにおいてプラトン自身が統語論的問題に直面していると推定することは妥当でないと考える。なぜなら、後続する議論において、プラトンは、文ではなく名前の羅列表現を用いることで、「偽なる言表の可能性」に対するクラテュロスの擁護（429d4-6）が、本質的に、文を一種の名詞句と見做す誤りに起因することを暴き出そうとしているからである。統語論的誤りに陥っているのは、プラトンではなくクラテュロスであり、プラトンがクラテュロスの誤りを特定できていなければ、この一連の議論は成立し得ない。

る対象が特定されるメカニズムを説明し、虚偽が発せられる可能性を示そうとするが、その可能性はクラテュロスによって斥けられる。なぜなら、クラテュロスは、次のように応答するからだ。

CR. 「わたしには、ソクラテスよ、このひとは目的なく [ἄλλως⁹⁴] これらのことを発することになるのだろうと思われます。」

SO. 「いや、その答えでもよい。実際、どちらなのだ、これらのことを発したひとは、真を発することになるのか、それとも偽を発することになるのか。あるいは、それらの一部分は真で、他の部分は偽なのか。というのは、このことでも {君が答えてくれば} 十分だからだ。」

CR. 「そのようなひとは騒音を立てているだけであると、わたしとしては主張したいです。ちょうど誰かが鍋をたたきながら⁹⁵、それを動かしているのと同じように、そのひとも自分自身を無益に動かしながら。」 (429e8-430a7)

「これらのこと」は、「ようこそ、アテナイからのお客人、スミクリオンの息子、ヘルモゲネスよ」という名前の羅列表現すべてを指す。クラテュロスに向けられたこの挨拶表現において、「ヘルモゲネス」という名前だけが間違っ^て割り当てられているが、クラテュロスにとって、部分の誤りは全体の誤りを含意する。この名前の羅列表現を構成する諸部分の真偽についてソクラテスが言及した意図は、明らかに、クラテュロスの統語論的誤り——すなわち、言表と名前の同化——を暴き出すことにある。言表を一種の名詞句と見做すことに因る誤謬の問題は、最終的にクラテュロスによって「無益な騒音」として払いのけられるが、こののち、議論の基点はクラテュロス説の根源的問題、すなわちあらゆる発語が真であるという意味での「虚偽の発語の不可能性」の徹底的な吟味へと移行してゆく。

ここで、問題の一節に戻ろう。「言表と、その構成要素である名前は、性質上、同じものである」という原則は、ソクラテスが、クラテュロス説の中に見出した「問題」である。また、I と記した最初の部分で扱われる言表の真偽と、以上に見たようなクラテュロスの主張する言表の真偽との間には、密接な関連が見られる。I は、四つの連続した問いから成り、その論証構造と内容において、慎重な読解を要する。論旨を明確にするために、命題の形式に表記し直すと、

⁹⁴ ἄλλως 429e8 は、直後で μάτην 430a5 に言い換えられており、全体の趣意は、「単に騒音を立てているだけで、何か意味のあることを言っているのではない」ということである。Ademollo は、LSJ 2.3 を参照し、ここでの ἄλλως を 'in vain' と訳出している。

⁹⁵ χαλκίον (430a6) をたたいて騒音を立てることは、『プロタゴラス』 329ab において、弁論家の返答の途方もない長さ^をを表すメタファーとして言及されているが (cf. Ademollo 2011: 338 n.49)、同時に、弁論家の議論の不毛^をを表す機能も与えられていると考えられる (cf. Dalimier 1998: 269 n.393)。

1. 「真を語り、そして偽を語る」と呼ぶ何かがある。

1 から、

2. 真なる言表があり、もう一方は偽である、ということがありうる。

2 から、

3. あるものについて、そうある通りに言う言表が真であり、他方、それについて、そうでないように言う言表が偽である。

3 から、

4. 言表で、そうであるものと、そうでないものとの両方を言うことが可能である。

1~4 の命題のそれぞれが、いくつかの解釈を許容する。まず 1 の命題について、ここでの *καλεῖν* (to call) の意味は、「名前をつける」でも「呼び名で呼ぶ」でもなく、「その存在を措定する」に近い。そうすると、1 の眼目は、*ἀληθῆ λέγειν καὶ ψευδῆ* を *τι* で表される「何か」として措定することにあることになる。これまでのところ、*ἀληθῆ λέγειν καὶ ψευδῆ* は主として次の三通りの仕方で訳出されている。

- A speaking the truth and speaking a falsehood (Reeve; Dalimier⁹⁶)
- B speaking truly and falsely (Sedley⁹⁷)
- C speaking truths and falsehoods (Ademollo⁹⁸)

ほぼ呼応して、2 の命題も、次の二通りの仕方で訳出されている。

- A some statements are true, while others are false. (Reeve; Ademollo; cf. Dalimier)
- B there can be a true statement, and another can be false. (Sedley)

おそらく大きな相違点は、「偽を語る」ということを、「真を語る」ということから独立した異なる言語行為とする区別を、テキストの中に読みとるか否かにある。1 から導出される 2 を見ると、原文 *εἴη ἂν λόγος ἀληθῆς, ὁ δὲ ψευδῆς* は、Sedley が適切に訳出しているように、真

⁹⁶ Reeve 1998: 6; Dalimier 1998: 69-70.

⁹⁷ Sedley 2003: 11.

⁹⁸ Ademollo 2011: 49.

なる言表の存在と、その対となっているもう片方の言表として偽なる言表の存在を措定しているように見える。そうすると、1 は、厳密には、「真を語り、そのもう片方として偽を語る」と読める。

1 と 2 がこのように読まれるべきであることは、3 から明らかである。3 は、「あるもの」[τὰ ὄντα] について、肯定／否定の二つの単純な言表の定式を提示する（以下、肯定の定式を affirmative formula の頭文字をとって AF、否定の定式を negative formula の頭文字をとって NF と略記する）。

- 「あるもの」について、
AF そうある通りに言う。
NF そうでないように言う。

この定式化によって、偽なる言表は、「あるもの」について語る真なる言表の対という形でしか捉えられていないことがわかる。何かについての「ある」を「ない」として語るという定式で表現される偽なる言表は、クラテュロスが理解する類の偽なる言表——「あるものを言わないこと（つまり、あるものについて、そうでないように言うこと）」(429d5-6)——である。何かについての真なる言表が前提されており、偽なる言表は、その否定形でしかないという単純な理解は、クラテュロスという登場人物の統語論的誤謬に因るものであると考えて然るべきである。

以上の考察は、『クラテュロス』において確認される統語論的問題が単にプラトン自身の未熟さに因るものではないことを示してはいるが、しかし、「虚偽」をめぐる困難へのプラトンの解決が、『クラテュロス』においてすでに提示されていることを示すものではない。あるいは、われわれがもっている『クラテュロス』が『ソフィスト』と同時期に執筆し直された第二版であるという Sedley の想定を裏づけるものでもない。なぜなら、本質的な問題として、『クラテュロス』において「語る」という言語活動の対象は、名指し行為の場合と同様に、「存在する事物」としてしか捉えられていないからだ。問題の明確化のために、3 が提供する真と偽の二つの言表を定式化し直すと、次のようになるだろう。

- T 真なる言表は、「あるもの」[τὰ ὄντα] について、「そうある通りに」[ὡς ἔστιν] 言う。
F 偽なる言表は、「あるもの」[τὰ ὄντα] について、「そうでないように」[ὡς οὐκ ἔστιν] 言う。

ὡς(385b7; b8) に関して、Reeve だけが ‘that’ と訳出しているが、大方の学者は ‘as’ と訳出している。問題は、「語る」という行為が、目下の一節で、(語の指示対象のような) 単一の要素を対象とする行為とされているのか、それとも、(主語と動詞、あるいは、指示対象と述定という) 二つの要素の組み合わせを対象とする行為とされているのか、にある。検討中

の一節において、「真なる言表」と「偽なる言表」の定式が、それぞれ一通り（つまり、合計二通り）しか存在しないという事実に着目しよう。『エウテュデモス』284c と同様に⁹⁹、この一節において、真と偽の言表の定式が二通りしか提示されていないのは、言表がかかわる対象である τὰ ὄντα が、単に「存在するもの」としてしか捉えられていないから——否、より精確には、「語る」という行為が、「名指す」という行為と同様に、言語外的な事物を対象とする行為として理解されているから——であろう。Ademollo が分析するように、ここでの τὰ ὄντα を「事実」（‘be the case’）を意味する εἰμί（‘be’）動詞の現在分詞と解し¹⁰⁰、ὡς を実詞節の ‘that’ と読む場合、たとえば「カリ阿斯は黒い」という偽なる言表は、「カリ阿斯は白い」という事実について或る仕方で語ってはいるが、そうある通りにではない（つまり、カリ阿斯を正しく述定してはいない）という、奇妙な主張をしていることになる¹⁰¹。τὰ ὄντα を、「事実」ではなく「存在」を意味する εἰμί 動詞の現在分詞として読み、ὡς を、様態を表す副詞節として読むと、次のようなより自然な解釈が可能となる——すなわち、真なる言表は、一方で、存在するもの（たとえば、カリ阿斯）に、それがもっている特徴（たとえば、白さ）を帰す言表であり、他方、偽なる言表は、そのものに、それがもっていない特徴（たとえば、黒さ）を帰す言表である、と。

この解釈は、『クラテュロス』の一節で提示される偽なる言表が、なぜ否定の定式しか存在しないのかを説明する。「語る」という行為が、「名指す」という行為と同様に、単一の要素を対象とする行為と見做されているため、「ないもの」——つまり、指示対象にならないもの——について語ることは、本来的に不可能であるからだ。納富が述べるように¹⁰²、語ったり考えたりする対象としての「ある」[ὄν] が、二つの要素（主語と動詞、または、指示対象と述定）から成る複合構造をもつものとして捉えられるのは『ソフィスト』においてであって、それ以前の対話篇（『エウテュデモス』と『クラテュロス』と『テアイテトス』）では、「語る」という行為は、別の類の行為——「なすことや作ること」（『エウテュデモス』284b1-c6）、「名指すこと」（『クラテュロス』387c6-11; 385b2-d1）、「感覺すること」（『テアイテトス』188c9-189b9）——と類同化され、その結果、「語る」という行為の対象は、「もの」のレベルでしか捉えられていない¹⁰³。

⁹⁹ 『エウテュデモス』284c で、「ディオニュソドロスが、ともかくも語っているのなら、彼は真実とあるものを語っている」という、虚偽の可能性を否定するエウテュデモスに対し、クテシッポスは、「彼（ディオニュソドロス）は、あるものを或る仕方で語ってはいるが、そうある仕方でではない [τὰ ὄντα μὲν τρόπον τινὰ λέγει, οὐ μέντοι ὡς γε ἔχει]」と答える。

¹⁰⁰ ギリシア語の ἐστὶ 動詞とその現在分詞 ὄν が「真実ないし事実」を意味する用法 (*veridical use*) については、とりわけ Kahn (1986: 8-9) を参照されたい。Cf. Kahn 1973^b; Brown 1994.

¹⁰¹ Ademollo 2011: 52-53.

¹⁰² 納富 2002: 183-192.

¹⁰³ Burnyeat は、虚偽をめぐる困難へのプラトンの解決が、すでに『テアイテトス』188d-189b と (1990: 77-79; 2002: 40-50)、『エウテュデモス』284c においても(2002: 50-66) 示唆されていると想定する。Ademollo (2011: 335 n.43) は、納富 (2002: 191 n.67) と同様に、『クラテュロス』における虚偽の扱いが『エウテュデモス』のものと同様に基本的な同じであると考えているため、虚偽をめぐる困難へのプラトンの解決が、『エウテュデモス』で仄めかされているとは想定してい

『ソフィスト』において、「語る」という行為の対象が二つの要素の結合として捉えられたとき、真と偽の言表の定式は、以前とは異なる新たな形で提示される (263b4-10)¹⁰⁴。

T* 真なる言表は、あるを、ある、と語る、あるいは、ないを、ない、と語る。

F* 偽なる言表は、ないを、ある、と語る、あるいは、あるを、ない、と語る。

ここではじめて、真なる言表と偽なる言表のそれぞれについて、肯定と否定の二つの定式が提出される。「ないを、ある、と語る」という肯定の定式が成立する条件は、まず第一に、「語る」という行為の対象が、たとえば、テアイテトスという語の指示対象ではなく、テアイテトスが座っているという事態ないし事実であること、そして、実際とは異なる事態を事実として語ること、である（たとえば、「テアイテトスが、飛んでいる」と語るように）。このように、「語る」という行為のかかわる対象が単純な「もの」ではなく「事態」として捉えられることで、「ない」について語る可能性が開かれ、さらに、「ない」を「ある」と結合することで、虚偽を語る可能性が確保されることになる。

以上の考察によって明らかにされたのは、『クラテュロス』と『ソフィスト』の間の本質的な相違が、真理と虚偽が定式化される構図それ自体の相違に存するという点、そして、まさにその相違が、『クラテュロス』から『ソフィスト』に至る統語論的發展を示しているということである。先に触れたように (60 頁参照)、『テアイテトス』においても、「語る」という行為は、「見る」や「聞く」や「触れる」などの単一の要素を対象とする感覚行為と類同化されるため、一見すると、虚偽をめぐる問題に関して、『クラテュロス』と『テアイテトス』の間には何の發展もないように見える。しかし、『テアイテトス』を介さずには、『クラテュロス』から『ソフィスト』に至る統語論的發展はなかったであろう。なぜなら、『クラテュロス』には、現われをめぐる問題が欠如しているからである。

Harte は、「指示対象についての正確な知識や対象同定についての正確な理解を欠いているにもかかわらず、当の指示対象を——自分の知らないうちに——指示している」という、『国家』第7巻の「洞窟の比喻」における囚人たちの言語使用の状況と彼らの理解を、現代言語哲学の諸議論を借用しながら詳細に分析している¹⁰⁵。この研究の焦点は、「ひとの言語使用とその理解が、そのひとの認識の状態について何を明らかにするか」にあり、言語使用の問題が、プラトン哲学における認識論的問題に関与していることを示す。実際、『ソフィ

ないが、『テアイテトス』ではその解決がすでに示唆されていると想定している。

納富が論じているように、「思考する」や「語る」という営みがとる構造が考慮されるのは『ソフィスト』においてであり、この点が、『ソフィスト』と上記の三つの対話篇の間の本質的な相違であろう。

¹⁰⁴ 厳密には、まず初めに、「偽なる判断」が「ないを、ある、あるいは、あるを、ない、と考えること」として定義され (240e1-9)、その次に、「偽なる言表」が「偽なる判断」と同様の仕方
方で定義される。

¹⁰⁵ Harte 2007: 195–215.

スト』で手掛けられる「言表（ロゴス）の真偽性」の問題化は、中期対話篇で未解決であった「現われ」の真偽性の問題を解明すべく要請されたのであり¹⁰⁶、その限りで言語の問題は、プラトン哲学において、認識の問題と深くかかわっている。

序論で概説したように、『クラテュロス』は、名指し行為の成功が依拠するところの、名指される対象の「確固不動性」の仮定ではじまり、その仮定で終わるという或る種の循環構造をもつ。この仮定は、プロタゴラス的認識の相対主義の否定に依拠するため、この仮定を出発点とし、再びこの仮定に戻るといふ議論展開は、『クラテュロス』で残された諸問題の解決が認識論的問題の解明を要請することを示唆している。そして、その諸問題とは、極端な流転説の真偽性と虚偽をめぐるとの問題である。

極端な流転説は、『クラテュロス』において、古代の命名者たちの「ドクサ」[δόξα 411c2]として導入される。古代の命名者たちは、当時の知者たちと同様に、外的世界がいかにあるかを探求しながら¹⁰⁷ 思想的・認識的混乱に陥り（「めまいを起こした」411b7）、その「ドクサ」を外的世界のあり方に投影したと言われるため、極端な流転説がこの対話篇において無条件に偽であると示唆されていることは疑い得ない。したがって、この対話篇の最後の議論が、極端な流転説の真偽性を未解決のままにすることは、その問題が『テアイテトス』で解決されるべきものであることを意味するのではない。そうではなく、より本質的問題、すなわち一般に知者と称される多くの者たちが犯した投影的誤謬が『テアイテトス』で本格的に吟味されるべき問題であることを意味しているのである。『クラテュロス』から『テアイテトス』へとその扱いを委ねられた問題とは、厳密には、「現われ」をめぐるとの問題なのである。

以上の考察に基づき、わたしは、『クラテュロス』を『テアイテトス』を経て『ソフィスト』へと連結する三部作の序章として読むという Warburg らの解釈を支持する(46 頁参照)。

¹⁰⁶ この問題についての詳細な検討は、中畑 1993 を参照されたい。

第二章 名指しの本性的正しさとプラトンの言語論

1 はじめに

修正された基本構図（31頁参照）が従来の基本構図（22頁参照）と根本的に異なる点の一つが、384c10-391b6の位置づけである。従来、この一節は、「言語本性主義」を擁護する議論と位置づけられてきたが、「名前の正しさ」についてクラテュロスが言ったとされること（とりわけ、C¹~C³）についてソクラテスが解釈し始めるのは、391b7以降である。このことは、直前の391a4-b6でソクラテスが次のように述べていることから明らかである。

SO. 「いやわたしは、ヘルモゲネスよ、名前の本性的正しさについて何も主張してはいないのだよ [οὐδεμίαν λέγω¹⁰⁷]. 君は忘れてしまったのだ、少し前にわたしが言っていたことを、すなわちわたしは知っているのではなく、君と一緒に考察するつもりだということ。だがいま、以前に比べてこれだけのことが、わたしと君に——なぜならわれわれは考察しているのだから——もう明らかになっている、つまり名前は何らかの正しさを本性的にもつものであるということ、そして名前を、どんな対象にであれ——うまく制定するすべを知っていることは、すべての人間に属することではない、ということである。そうではないか。」

HE. 「まったくそのとおりです。」

SO. 「それでは、この次に、われわれは探求しなければならない、名前のその正しさ [αὐτοῦ ἡ ὀρθότης] とは一体どのようなものであるのかを、もし君が知りたいのならば。」

ソクラテスがここではっきり述べているように、この段階ではまだ、クラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものの内実は明らかにされていない¹⁰⁸。「少し前にわたしが言っていたこ

¹⁰⁷ 391a3 τὴν φύσει ὀρθότητα ὀνόματος を直接受ける。

¹⁰⁸ 390d11-e1で、ソクラテスは「そしてクラテュロスは、諸々の事物にとって名前は自然本性的にあると言いつつ、真実を言っている」と結論づける。Ademolloは、名前が事物と自然本性的な関係にあるということが本質的に何に存するのかということ、クラテュロスがヘルモゲネスとの議論においてはっきりと説明していないのと同様に、ソクラテスもまた、これまでのところはっきりと説明していないとし、とりわけ、ソクラテスは、「名前の正しさ」が語源分析と関係があることを明示的には主張していないと述べる(2011: 146)。他方、Sedleyは、「名前の正しさ」という主題についてのソクラテスの無知の表明が、部分的には皮肉によるものであり、賛同できない語源分析を斥けることによって、ソクラテスは、最終的に、語源分析作業についてまったくの無知であるわけではないことを明らかにすることになると述べる(2003: 75)。この一節は、形式的には、クラテュロスの説く「名前の正しさ」の共同探求の冒頭部に位

と」(391a5) は、384ac を前方参照し、そこでは、「名前の正しさ」に関する類のことについて、真実が一体どのようなものであるかをわたしは知らないのだ。だから、君ともクラテュロスとも一緒に喜んで探求したい」とソクラテスは言っていた(5頁参照)。そうすると、384c10-391b6 は、全体として、「名前の正しさ」についての共同探求として位置づけられるが、注意を要するのは、共同探求の相手であるヘルモゲネスもまた、「名前の正しさ」について無知——否むしろ、彼は「名前の正しさ」のようなものは存在しないと考えている——ということだ。そうすると、「名前の正しさ」をめぐるソクラテスらの探求は、「名前の正しさ」は存在しない」という主張の吟味からはじまることになる。ここで、次の点に留意を促しておきたい。従来、名前の本性的正しさへの移行は、ヘルモゲネスの「言語規約主義」の論駁の結果と見做されてきたが、以下で見てゆくように、それは実際には、ヘルモゲネスの見解の内的展開の結果である。ヘルモゲネスの見解を吟味してゆく中で見出される名前の本性的正しさは、したがって、クラテュロスの主張する「名前の正しさ」と同じものではない。

目下の一節の議論構成と、「名前であるものそれ自体」[αὐτὸ ἐκεῖνο ὃ ἐστὶν ὄνομα 389d6-7] (これは、「名前の形相」[τὸ τοῦ ὀνόματος εἶδος 390a6-7] とも呼ばれている。以下、この「名前の形相」を本稿での統一した呼称として用いる)の身分は、これまで最も物議を醸してきたが、本章は、目下の一節を次のように読解することを提案する。この節は主として、名指すこと——言い換えれば、名前の適用——にかかわる「本性的正しさ」を論じており、その目的は、クラテュロスの説く「名前の正しさ」を反駁するための基盤となる言語論を構築することにある。その言語論とは、「記述的意味」を介在させない言語論であり、名前の自律的で自然本性的な機能を主張する「名前の道具モデル」を基盤とする。「名前の道具モデル」は、語の使い手が、名指すという行為を、それがなされるにふさわしい仕方ですべて実際になしているという事実に無自覚であるということと、語の外部にある対象について暗黙の裡にもっている或る種の「知」がまだ不完全なものでしかないという、一見矛盾する二つの事実を伝えている。

他方、「名指すの本性的正しさ」という考えは、「われわれ」と呼びうるような日常的言語使用者の名指す行為をめぐる思索を基点としつつ、「問答法」をも射程に収める。プラトンは、「外的世界のあり方を基準として語の適用の正しさを識別する能力を有するか否か」という点で、「われわれ」(日常的言語使用者)と名前の模範的使用者たる問答家とを明確に区別しており、言語の問題が、語・語を使用する主体の知のあり方・対象という三項関係に拡張して論じられねばならないことを示唆している。

置するが、実質的には、ソクラテスの言語論の構築に位置づけられる。なぜなら、この一節でソクラテスがヘルモゲネスと共に探求する「名前の正しさ」は、「名前の正しさ」の存在自体を認めないヘルモゲネスの見解の吟味から始まり、そこから、プロタゴラス的認識の相対主義の否定を媒介して、名指すという行為の自然本性的正しさへと内的に展開してゆくからである。この一節で提示される「正しさ」は、「名指す」という行為にかかわるものであり、クラテュロスの説く「名前の正しさ」と区別されねばならない。

2 ヘルモゲネス——「われわれ」——の視点

第一章で見たように、ヘルモゲネスが冒頭でソクラテスに伝えたのは、「名前の正しさ」についてクラテュロスが言ったこと (C¹~C³) と、二人の間で交わされた問いと答えのやりとりの内容だけであり、ヘルモゲネス自身の見解はまだはっきりと表明されていない。以下において、「名前の正しさ」の共同探求の出発点となるヘルモゲネスの基本的見解の記述を見とどけておこう。

HE. 「規約 [συνθήκη] と同意 [ὁμολογία] 以外に何か他の名前の正しさが存在するとは考えられません。というのはわたしには、概して誰かが何かに定める [θῆται] ような名前は何であれ正しいものであると思われるので。そして、もしもう一度それを別の名前とつけ換えて[μεταθῆται]、もはや前の名前と呼ばない [καλῆ] のなら、その後の名前が前の名前に劣らず正しいのです——ちょうどわれわれが奴隷の名前をつけ換えるのと同様に。というのは、名前の何一つとして、それぞれのものの何一つにも、自然本性的に決まっておらず、習慣を身につけたうえで [ἔθισάντων] そう呼んでいるひとびとのノモス [νόμος] と習慣 [ἔθει] によって [名前はそれぞれのものの名前である] からです。」 (384c10-d9)

「規約」と「同意」以外に、何か他の「名前の正しさ」は存在しないが、「名前の正しさ」についてのヘルモゲネスの積極的見解であると解することに、慎重でなければならない。従来、「名前の正しさ」を「規約」に求める立場が「言語規約主義」であると理解されてきたが¹⁰⁹、第一章で確認したように、ヘルモゲネスの立場とクラテュロスの立場の根本的な相違は、何か「名前の正しさ」のようなものが存在するの否かという点にあり、その内実の如何にあるのではない¹¹⁰。したがって、「規約」と「同意」以外に、何か他の「名前の正しさ」は存在しない」という主張は、「もし「名前の正しさ」のようなものが存在するのだとしたら」という仮定に基づいて提示されたと解されねばならない。

ヘルモゲネスが「名前の正しさ」の探求の出発点とした「規約」および「同意」は、しかし、「単なる音声と名前を区別するものは何であるか」という「名前の起源」にかかわる問

¹⁰⁹ たとえば、Ademollo は、「規約 [συνθήκη] と同意 [ὁμολογία] 以外に何か他の名前の正しさが存在するとは考えられません」(c11-d2) が、「名前の正しさ」は、本質的に、規約と同意に存する」ことを断言するものであると述べる (2011: 37)。

¹¹⁰ Barney は、一方で「言語本性主義」が「名前の正しさ」のようなものが実際に存在する」という説として、他方、「言語規約主義」がその否定として言い換えられうると述べる。テクスト的な証拠として、次の箇所が挙げられている——クラテュロスは一度も自分の立場を説明したことがないという苦情をヘルモゲネスが後になって繰り返すとき、ヘルモゲネスはクラテュロスの特徴を「名前の正しさ」が存在すると主張するが、それが何であるかをはっきりとやらない (427d2-6) という点に見る。Barney によれば、このときヘルモゲネスは、その正しさが「自然本性的」であると明確には述べていないとされる (2001: 27 n.7)。

いへの応答に過ぎない¹¹¹。というのは、「概して誰かが何かに定めるような名前は何であれ正しい」という主張でもって、ヘルモゲネスは、「概して誰かが何かに定めるようなものは何であれ名前である」ということを言っているに過ぎないからだ¹¹²。「名前の正しさ」の共同探求をはじめめる前、ヘルモゲネスは、「ひとびとがそう呼んでいる」ということ以外に、何かがある名前のための基準ないし前提が存在しうるとは考えていなかったことを思い出してもらいたい(27-28頁参照)。「規約」と「同意」は、ひとびとがXを「X」という名前で呼ぶようになるための条件にあたるため、ヘルモゲネスは、「名前の正しさ」の探求にあたり、そうした名前の成立条件に「正しさ」を見出そうとしたことがわかる。しかし、「規約」も「同意」も、単なる音声と名前の違いを説明するだけで、「正しさ」というものについて何も説明していない。

また、ヘルモゲネスは「規約」と「同意」ということで、一見、ひとびとの間で結ばれる公的な取り決めのことを言っているように見えるが、実際はそうでない。384dでの奴隷の名前をつけ替えるという事例から、ヘルモゲネスは「規約」と「同意」という語で私的な取り決めに意味しており、したがって、命名に関して恣意性を認めていると推測できる。つまりヘルモゲネスは、「或る特定の個人がそう呼ぶと決めたものであれば何であれ、その名前である」という趣意のことを言っているのである。ただし、Sedleyによれば、奴隷の名前

¹¹¹ Barneyが指摘するように、言語が「自然本性的」であるという主張は、次の三通りの解釈が可能である。(a) 言語に適用可能な正しさの自然本性的基準が存在するという規範的主張(normative claim)(クラテュロス説)、(b) われわれの実際の言語は、正しさのこの基準を満たすというさらなる主張、(c) 原始人はさまざまな事物を感覚したとき、それに反応して、特定の音声を自然に発したため、言語は最初は自然に生じたというエピクロスの見解のように(『ヘロドトスへの手紙』75-76)、言語の起源は何らかの仕方で「自然本性的」であったという、非常に異なる史的的主張(historical claim)。(Barneyは触れていないが、同著作でエピクロスは、名前が生み出される過程を三段階に分ける——第一段階：感覚上の刺激が、古代の人間たちに、特定の仕方で息を吐き出させることで特定の音を生み出させた(この特定の音とは、咳をしたり、くしゃみをしたり、怒鳴ったり、うなったりするときに自然発生的に出る音に相当する)。人種の違いゆえに、例えば木を見るという同一の刺激は、さまざまな種族にさまざまな仕方で影響し、さまざまに異なる反応を誘発した。このことが、言語の多様性を生んだ。第二段階：すでに存在している言語を多義的ではなく一義的にするために、個々の種族内での一致によって特定の造語作業が行われた。第三段階：或る人間たちが、名前をあてがったところの目に見えない実体を知るようになった(目に見えない実体とは、時間と空間である。これらの実体をわれわれは知覚することができないが、われわれはこれらの概念を、われわれが実際に知覚するもの——例えば、昼が夜に変わることや、身体が或る場所から別の場所へと移動すること——から推論することができる)——。(エピクロスのこのテキストの訳と解釈については、Long&Sedley 1987; Van den Berg 2008を参照した。))

ヘルモゲネスもまた、ソクラテスと同様に、「名前の正しさ」について無知であるため、「正しさ」という概念を「言語の起源」と結びつけ、単なる音声と名前を区別するものを「規約」と「同意」に求めたのではないかと想定される。

¹¹² わたしが言おうとしているのは、Ademolloの言う「正しさの冗長概念」(the Redundancy Conception of correctness)のことではない。Ademolloによれば、ソクラテスは「名前の正しさ」と言いつつ、「正しさの冗長概念」に終始執着しており、これに従うと、「Xの名前である」は「Xの正しい名前である」と同じことを意味する(2011: 423)。

のつけ替えは日常的なギリシア人の慣行であり、現代的な観点から見れば、私的なあだ名のつけ替えに相当する¹¹³。したがって、ヘルモゲネスの立場は、たとえばハンプティーダンプティー見解¹¹⁴やウィトゲンシュタインの言う私的言語の立場¹¹⁵に近づけて理解されるべきでない。

他方、名前の使用に関しては、ヘルモゲネスは公的な名前を恣意的に使用することを認めていない。なぜなら、384d6-7で、ヘルモゲネスは「対象がどんな名前と呼ばれるかは、ひとびとのノモスと習慣によって決まる」という趣意のことを言っているからだ。具体的には、385a6-b1での人間と馬の名前のつけ替えの事例において、ヘルモゲネスは公的な名前の使用（人間を公的に「人間」と呼ぶ）と私的な名前の使用（人間を私的には「馬」と命名したうえで、「馬」と呼ぶ）をはっきりと区別しており、後者は公的な場での対人コミュニケーションを妨げない。

以上から、ヘルモゲネスが「名前の正しさ」の共同探求をはじめた立脚点としたのは、概ね次のような見解であることになる。

H² 或る何か「X」がXの名前であるのは、ひとびとがXを「X」と呼んでいるからであるが、それはまず、或る特定の個人がXを「X」と命名したからである。

「Xが「X」と呼ばれるのは、ひとびとの間で共有された習慣に起因するが、それに先立って、Xを「X」と命名した特定の個人が存在する」というのは実際の事実であり、われわれ自身もまたそのように考えているのではなからうか。しかし、こののち議論は思わぬ方向へ展開してゆくことになる。ソクラテスが議論の基点を、ヘルモゲネスの見解からプロタゴラスの相対主義へと移行させるからだ。従来、この移行は、本質的に、後者の論駁が前者の論駁を伴う仕方ですら「言語本性主義」へと議論を移行させることにあると理解されてきた。次節では、以上に見たようなヘルモゲネスの見解がプロタゴラスの相対主義を伴うのかどうかという問題をわれわれの視点から検討し、この議論展開の裏に隠されたプラトンの意図をできる限り明らかにしたい。

¹¹³ Sedley 2003: 51-52.

¹¹⁴ Baxter (1992: 18-19)によれば、「わたしがXをFと名指し（命名し）、それからXをGと命名し直した場合、Gは——わたしがXをその名前で呼ぶ限りにおいて——Xの名前としてFにとって代わる」というヘルモゲネスの見解は、語の意味を自由自在に操ることができるというハンプティーダンプティーの見解と同じであるとされる。ヘルモゲネスが認める「命名の恣意性」は、本質的に、名前（文字と音節から構成される素材としての名前）が各命名者に対して「相対的」であることに存する。音声形態としての名前の、各命名者に対する相対性は、語の意味ないし概念が、各使用者に対して相対的であることと区別されねばならない。したがって、Baxterの解釈は受け入れられ得ない。

¹¹⁵ 『哲学探究』でのウィトゲンシュタインの「私的言語」をめぐる論争に立ち入ることはできないが、少なくともウィトゲンシュタインが「ひとりひとりの思念のなかにあるもの」という意味で全否定した「私的言語」という考えは、ヘルモゲネスの考えとは全くの別物であるという点だけ述べておきたい。

3 プロタゴラス批判

原典でわずか十数行ほどの短い一節 (385e4-386e5) で、プロタゴラスの「尺度説」が吟味・批判される (以下、この一連の議論を「プロタゴラス批判」と呼称する)。前節で触れたように、「プロタゴラス批判」は、一般に、ヘルモゲネスの「言語規約主義」の論駁を目的とすると理解されている。しかし、「言語規約主義」がプロタゴラスの相対主義を伴うのか否かに関して、諸家の見解は大きく隔たっており¹¹⁶、いずれの場合も問題が残る。前者が後者を伴わない場合、後者の論駁は前者の論駁を意味しないため、「言語規約主義」は無傷のままであることになり、他方、前者が後者を伴う場合、後者の論駁によって前者も論駁されることになるが、「プロタゴラス批判」においてプロタゴラスの「尺度説」が論駁されているのかどうかという問題が生じる¹¹⁷。

まず、プロタゴラスの「尺度説」がどのような仕方で導入されるのかを見てみよう。ソクラテスはヘルモゲネスの見解 (H²) が個人だけではなく国家にも当てはまることへの同意を得たうえで、ヘルモゲネスに次のように問う。

SO. 「ではどうだろう。わたしがあるものの何か——例えば、われわれがいま「人間」と呼んでいるもの——を {こう} 呼ぶと仮定しよう、つまりわたしがそれを「馬」という名前と呼び、われわれがいま「馬」と呼んでいるものをわたしが「人間」という名前と呼ぶと仮定しよう。その場合、同じものが公的には [δημοσίᾳ] 「人間」という名前をもつが私的には [ιδίᾳ] 「馬」という名前をもち、それからまた、私的には「人間」という名前をもつが公的には「馬」という名前をもつことになるだろうね。君が言おうとしているのはこういうことか。」

HE. 「そのようにこのわたしには思われます。」 (385a1-b1)

ιδίᾳ という語は、『テアイテトス』 154a2 で、感覚される性質・事象の、各感覚者に対する「相対性」を表す重要タームとして用いられている (ἐκάστῳ ἴδιον 「各感覚者に固有の

¹¹⁶ White (1976: 133; 149 n.3) によれば、規約主義はプロタゴラス主義を伴い、その一例であるとされる。Silverman (1992: 31) は、プラトンが、規約主義はプロタゴラスの存在論につながると推論すると主張する。Palmer (1989: 44-50) は、ヘルモゲネスは実際にプロタゴラスの相対主義 (名指しについての主観主義を伴う) に傾倒しているが、そのことに気づいていないと述べる。Denyer (1991: 71) によれば、ヘルモゲネスとクラテュロスの両方が「虚偽の言明は決してなされえない」という帰結につながる、名前の正しさの見解をもつとされる。Barney (2001: 23-48) は、私的な名指しを正当化するヘルモゲネスの立場は、主観主義ないし虚偽不可能論を伴うことはないが、それは、保守主義——「われわれの実際の公的な慣習はすべて正しい」——から出発し、プロタゴラスの相対主義——「われわれの判断はすべて誤り得ない」——によって裏づけされていると結論する。Barney 以外に、ヘルモゲネスの見解がプロタゴラスの相対主義を伴わないと解釈するのは、Sedley (2003: 54) と Ademollo (2011: 81) である。

¹¹⁷ この立場を取るのは、Sedley である (2003: 51-52)。

もの)。人間と馬の名前のつけ替えの事例の眼目は、名前の、各命名者に対する「相対性」ということを、名前の特性として明確化することにある。注意すべきなのは、ここにおいて「相対性」は、名前——精確には、文字と音節から構成された、素材としての名前——と各命名者との関係にのみ帰されており、名指される対象のあり方と各命名者との関係には帰されていないということだ。否むしろ、ここでは、音声形態としての名前の「相対性」と名指される対象の「同一性」が鮮明に対比されてさえている。つまり、名前がどのような音声ないし文字から構成されるかは、その名前をつける（制作する）命名者の採択に左右される（名前を構成する音声ないし文字の、各命名者との相対性）が、そのことは、名指される対象がいかにあるかが、その命名者の判断によって決定されることを伴わない。

ソクラテスがここで「相対性」という概念の導入でもって、プロタゴラスの相対主義への移行を準備したことは疑いない。しかしソクラテスの意図は、ヘルモゲネスの見解がプロタゴラスの相対主義を伴うように仕掛けることにあるのではなく、むしろヘルモゲネスに、音声形態としての名前の「相対性」を、プロタゴラスの「(認識される対象の、各認識主体に対する)相対性」から完全に切り離すよう仕向けることにある。それはなぜなら、前者を後者から完全に区別することではじめて、名指される対象の「同一性」ないし「確固不動のあり方」ということがはっきりと見えてくるからである。

ソクラテスが、「相対性」に加えて「一時性」ないし「可変性」も名前の特性として挙げたのち (385d2-6)、ヘルモゲネスは次のように応じる。

HE. 「というのもソクラテスよ、わたしはこれ以外の名前の正しさを見ることのできないのです、すなわち、わたしは、わたしが定めた或る名前でそれぞれのものを呼ぶことができ、あなたもまた、あなたが定めた別の名前でそれぞれのものを呼ぶことができるということである、と。このようにして諸国家にとってもまた、わたしが見るところ、そのそれぞれにとって私的に同じものに対して名前が定められています、或るギリシア人にとっては他のギリシア人と異なる仕方、また或るギリシア人にとっては外国人と異なる仕方¹¹⁸。」 (385d7-e3)

ヘルモゲネスのこの応答を受けてソクラテスは、次のように述べる。

¹¹⁸ 385d9-e2 の一節には異読がある。καὶ ταῖς πόλεσιν... ἰδίᾳ ἐκάσταις ἐπὶ τοῖς αὐτοῖς κείμενα ὀνόματα は Q に見られ、Heindorf と新 OCT によって採用されている。βW は ἰδίᾳ ἐκάσταις ἐνίοις を読んでいたため、この読みから Burnet は ἰδίᾳ ἐνίοις を、Buttmann は ἰδίᾳ ἐκάσταις ἐνίοις を導出している (Buttmann の読みは、Bekker, Stallbaum, Méridier によって採用されている)。T には ἰδίᾳ しかなく、この読みは Fowler によって採用されている。Burnet が行ったように、もし ἐνίοις を読むなら、ἐκάσταις は削除されるべきであるが、この一節の眼目は、名前が各命名者に対して固有にある (d8-9) のと同様に、名前は各国家にも固有にあるという点に存するため、ἐκάσταις は削除されるべきでない。したがって、わたしは新 OCT の読みに従う。

SO. 「よろしい、それでは見てみようではないか、ヘルモゲネスよ、あるものもまたそういう仕方であると君に見えるのかどうか、つまり、それらのあり方は各人に固有にあるのか——ちょうどプロタゴラスが、人間は「あらゆるものの尺度」であると言って、次のことを言おうとしていたように——それはすなわち、事物は、わたしに現れるとおりにわたしにとってあり、君に現れるとおりに君にとってある、ということだ。それとも、事物はそれ自身の何らかの確実なあり方をもっているように君に思われるのかどうか。」 (385e4-386a4)

名前が——個人であれ国家であれ——各命名者に対して相対的であるということをヘルモゲネス自身が自ら口述したことを受け、ソクラテスは、「相対性」ということが、事物のあり方についても言えるのかどうかの考察をヘルモゲネスに促す。音声形態としての名前の、各命名者に対する「相対性」と、名指される対象の「同一性」ないし「確固不動の本性」の対比は、「名前の形相」をめぐるのちの議論で表立って論じられることになる。その点を念頭に入れるなら、ソクラテスはプロタゴラスの相対主義をめぐるこの一連の議論にのちの展開の伏線を敷いたとも考えられる。いずれにせよ、強調しておきたいことは、プロタゴラスの相対主義への言及でもってソクラテスは、ヘルモゲネスの見解の論駁を意図しているのでは決してなく、むしろ音声形態としての名前の「相対性」と鮮明に対比される、名指される対象の「同一性」へと目を向けるよう、ヘルモゲネスを誘導しているということだ。実際、ヘルモゲネスは「現にかつて途方に暮れて、プロタゴラスが言おうとしていることの方へと押し流されました。しかし、それが事実であるとはわたしにはあまり思われません¹¹⁹」(386a5-7) と述べる。この発言は、ヘルモゲネスがプロタゴラスの相対主義を受け入れていないことの証拠ではあるが、逆に、ヘルモゲネスが音声形態としての名前の「相対性」とプロタゴラスの説く「相対性」とを明確に区別できていなかった（がゆえに、その混乱からプロタゴラスの相対主義へ傾倒しかけたことがあった）ことの証拠でもある。

したがって、後続する「プロタゴラス批判」は、名前の、各命名者に対する「相対性」を、プロタゴラス的「(認識される対象の、各認識主体に対する) 相対性¹²⁰」の否定を媒介とし

¹¹⁹ οὐ πάνυ τι (386a6) がどの程度の否定を表すかをめぐり、翻訳上の相違が見られる。通常、この表現は、ヘルモゲネスによるプロタゴラスの相対主義の否定の強調と読まれている：Reeve (1998: 4. 'not...at all'); Dalimier (1998: 72. 'ne...pas tout à fait'); Barney (2001: 31. 'It has happened that I've been so puzzled I've been carried away into Protagoras' position, even though it *really* doesn't seem right to me': really は否定辞の前に置かれると、否定を強調する)。他方、Ademollo は、この表現を、否定を弱めるものと解する (2011: 80 n. 89. 'not quite')。文法的にはどちらの意味にもとられうるが、ヘルモゲネスは、音声形態としての名前が各命名者に対して相対的にあることと、認識される対象が、各認識主体に対して相対的にあることをはっきりと区別できていないため、Ademollo の訳に従い、この表現を、否定を弱めるものとして読むことにする。

¹²⁰ Ademollo (2011: 77) は、385e6-386a でソクラテスによって言及されるプロタゴラス説が、感覚対象の、各感覚主体に対する相対性と、非感覚対象（倫理的対象）の、各認識主体に対する相対性を主張する広義の説であると述べるが、プロタゴラスの「尺度説」が感覚対象と感覚主体との間の関係に適用されるのは『テアイテトス』第一部においてである。『クラテュロス』で

て、名指される対象の「確固不動性」へと内的に展開することを目的とする。この議論では、「非常に多くの人間が劣悪——したがって、無思慮——であり、他方、非常に少数の人間が善良——したがって、思慮深い——である」というヘルモゲネス自身の経験 (386b2-4) から、「ひととひとの間には、知恵の優劣の点で違いがある」という帰結が導き出され (386bd)、プロタゴラスの「尺度説」はあっさりとは斥けられる。『テアイテトス』 161d2-e3 で提出される問い——「もし各人が自分自身の真理の「尺度」であるなら、何故われわれは、幾人かのひとびと (たとえば、プロタゴラス自身) を知恵があると評するのか」という問い——は、『テアイテトス』では「プロタゴラス批判」(169d-179d) の一部を構成するが、『クラテュロス』では「プロタゴラス批判」でソクラテスが展開するただ一つの議論である。この議論が、『クラテュロス』において、「尺度説」の十分な論駁として扱われていると解釈する Sedley は、それがしかし『テアイテトス』においてほど決定的な論駁として扱われてはいないことに関して、プラトンが、『クラテュロス』から『テアイテトス』に至るまでの間に、プロタゴラスがどう返答しうるかを見て取ったということを示しているのかもしれない、と述べる¹²¹。しかし、以上に見たように、『クラテュロス』の「プロタゴラス批判」はプロタゴラス説そのものの論駁を目的とせず、むしろプロタゴラス的「相対性」の否定は、音声形態としての名前の「相対性」から名指される対象の「確固不動性」への内的展開の媒介者として働いている。「知恵の優劣における相違」の議論は、したがって、その内的展開を手順よく進めうるだけの十分な効果をもつと考えられる。

だがしかし、「プロタゴラス批判」がこの対話篇全体において有する意味は、これだけに尽きない。ソクラテスは、一連の議論の最後に次のように結論する。

SO. 「そうすると、もし [...] それぞれのものが各人に固有にあるのでもなければ、次のことが明らかである、すなわち S¹ 事物それ自身が自分自身の何らかの確固不動のあり方をもつものとしてある [αὐτὰ αὐτῶν οὐσίαν ἔχοντά τινα βέβαιόν ἐστι τὰ πράγματα]——われわれとの関係において [πρὸς ἡμᾶς] あるのではなく、またわれわれの現われに応じて上へ下へと、われわれによって引きずられてある [ὑφ' ἡμῶν ἐλκόμενα ἄνω καὶ κάτω τῷ ἡμετέρῳ φαντάσματι {ἐστι}] のでもなく、そうではなくて、S² それ自体において、自分自身のあり方との関係において、まさにそれをその本性とする状態を有しつつ、ある [καθ' αὐτὰ πρὸς τὴν αὐτῶν οὐσίαν ἔχοντα ἤπερ πέφυκεν] ということである。」 (386d8-e4)

「われわれの現われに応じて上へ下へと、われわれによって引きずられてある」の「上へ下

は、感覚をめぐる問題は論じられていないため、目下の一節で導入されるプロタゴラスの「尺度説」は、非感覚対象 (倫理的・価値的対象) と認識主体との間の関係にのみ言及するものと理解されるべきである。

¹²¹ Sedley 2004: 55-56.

へ」[ἄνω καὶ κάτω e2] という表現が、「流転」関連用語の一つである (cf. 『パイドン』90c5; 『テアイテトス』153d4-5) という点に注目する必要がある。何故「流転」関連用語がプロタゴラスの相対主義を特徴づける主要メタファーとして使用されているのか。

第六章で見るように、この対話篇の最後に展開される「流転をめぐる議論」において、S¹が、ソクラテスの第一・第二テシス (439c6-d1; d3-6) として再度表明されることになる。そこで、事物それ自身の確固不動の本性は、極端な「流転性」と対立するものとして仮定される。つまり、『クラテュロス』全体において、プロタゴラスの「相対性」(386a4; e1) と極端な「流転性」(411c3) のそれぞれがソクラテスの「確固不動性」(386e1) と対極に置かれているのである¹²²。

第六章第一節で詳しく検討するが、流転説はプラトンにおいて本質的に多層的であり、いわゆるヘラクレイトス的万物流転の思想は、ヘラクレイトスただ一人に帰されるべきでなく、プロタゴラスやエンペドクレス、またホメロスにも共有されていた普遍的な思想であったと考えられる。このことは、プロタゴラスの相対主義とヘラクレイトス的流転説が論理的に同値であることを決して意味しないが¹²³、しかし両説が、プラトンにおいて、何らかの関連性をもっていたことを示唆する。その関連性を示す重要な箇所が『テアイテトス』と『クラテュロス』に存在する。『テアイテトス』でソクラテスは、「プロタゴラスが弟子たちに内密に語った真理」(152c8-11) という断り書きを入れて、次のような「容易ならぬ言説」(152d1) を提示する¹²⁴。

「何ものも、「それ自身が自分自身だけで」[αὐτὸ καθ' αὐτὸ]、一であることはない——すなわち、「何か」[τι] であることもなければ、「何かそのようなもの」[ὅποιονοῦν τι] であることもない。」(152d2-6)

この言説は、「各人にとって」という限定句を意図的に落とすことで、プロタゴラスの相対主義が依拠する外的世界のあり方を露わにしている。外的事物のあり方は、ちょうど「われわれとの関係において[...] われわれの現われに依じて上へ下へと、われわれによって引

¹²² Cf. Barney 2001: 158; Sedley 2003: 111, n. 24.

¹²³ プロタゴラス主義とヘラクレイトス主義を同一視する学者は、Burnyeat 1990; Barney 2001; Sedley 2004.

¹²⁴ 一般に「内密の教説」と呼ばれるこの言説は、二つの部分から構成されている。藤澤は、「何ものもそれ自体として一つのものであることはできない」と、「すべてのものは、場所的運動と変動と相互混合から成るのであって、われわれがそれを「(で) ある」と呼んでいるのは正しい呼び方ではない」(152d2-e1) が、それぞれ「自体性の否定」と「恒常性の否定＝流転性」を表明する相互に独立した思想であると述べる (2014: 125-126)。田坂もまた、Cornford (1935: 38-39) や Burnyeat (1990: 12-13) らの伝統的解釈に従い、「内密の教説」を二部構成で読むが (2007: 17-25)、最近では Sedley (2004: 39-40) など、両者を区別せずに論じる学者が多い。本稿は、両者の関係をめぐる論争には立ち入らず、『テアイテトス』152d2-6 と『クラテュロス』439e1 の密接な関連性を指摘するだけにとどめる。

きずられてある」と言い表されるように、各人の現われに依存的である。たとえば、Xが美であるか醜であるかが予め決定されているわけではなく、Xが美であるということは、特定の認識主体の認知的状態を伴う仕方では成立し得ない。これは逆に言えば、その条件の下でなければXは美でも醜でもないということである。この言説を承認するとされる知者たちの中にヘラクレイトスの名が挙げられていることと、『クラテュロス』の「流転をめぐる議論」で、「万物は常にあらゆる点で流転している」という極端な流転説のテシスから導出される四つの帰結の一つが「一切のものは、「何か」[τι]であり得ない」(439e1)という言説であることは、偶然ではあり得ない¹²⁵。「何ものも、それ自体が一つのものとしてあることはない」という思想——「確定性の否定」の主張——に、プロタゴラスの相対主義とヘラクレイトス的（および極端な）流転説の双方が依拠しているのである。

「何ものも、それ自体が一つのものとしてあることはない」という思想は、プロタゴラスの相対主義とヘラクレイトス的（および極端な）流転説が依拠する最小の共通基盤であり、ここにおいて、両説は、ソクラテスの思想——すなわち、「あるもののそれぞれひとつひとつが、それ自身の確固不動の本性をもつものとしてある」という思想——と対峙する。だがしかし、この「確定性の否定」は、両説において、それぞれ異なる問題を生む。一方でそれは、プロタゴラスの相対主義の場合、外的世界のあり方が特定の認識主体との関係において相対的に決定されることを根拠づける。それゆえ、現われのうちでは真偽の弁別は無意味、あるいは不可能となる。他方、ヘラクレイトス的流転説においては、各人の現われが特権化されることはなく、とりわけ極端な流転説が想定するような世界、すなわち一切のものが何か一つのものとして存在し得ないような世界——万物の本性それ自体が流転であるような世界——では、語の正しい適用と知識の成立が不可能となる（第六章第二節で詳説する）。プロタゴラスの相対主義とヘラクレイトス的（および極端な）流転説は、確かに、「確定性の否定」という最小の共通基盤を有するが、両説は本質的に異なる問題を生む以上、相互に独立した異なる思想として理解されなければならない。

4 名指しの本性的正しさ

プラトンにおいて、音声形態としての名前の「相対性」から、名指される対象の「確固不動性」への内的展開が要請されたこと背景には、「名指す」ということそれ自体についての深い思索が存在する。語で何かを「名指す」[ὀνομάζειν]という「行為」[πρᾶξις]は、プラトンにおいて、あるもの[τὰ ὄντα]の一種とされ¹²⁶、名指すという行為そのものにそれ自身

¹²⁵ McDowell は『テアイテトス』の「内密の教説」と『クラテュロス』(423c9-424b3; 439d8-440a5)との関連を指摘している(1973: 121-122)。

¹²⁶ 行為を、あるものの一種とみなすことで、行為そのものにそれ自身の自然本性を認める通常の解釈(松永 1993; Ackrill 1997)に対して、Sedley は、行為の自然本性は、行為に伴う事物の本性に由来すると解釈する(Sedley 2003: 54-58)。Sedley によれば、名指しは、名指される対象の自然本性に即してなされねばならない。他方、Ackrill (1997: 39-40) は、名指しとその他の諸行

の自然本性が見出される。「行為の自然本性」という馴染みのない考えは、ソクラテスによって、「切る」という日常的行為を事例にして次のように説明される。

SO. 「[...] もしわれわれがあるものの何かを「切る」ということを、切りかつ切られることの自然本性に即して、また自然本性において決まっている手段を用いてなそうと欲するならば、われわれは「切る」という行為をなすことになるし、それに成功し、正しくなすことになるが、もし、その自然本性に反して切ろうとするならば、失敗し、何もなさなかったことになるのではないか。」 (387a1-8)

この箇所を松永は、「われわれがつねに日常的にギリシア語でいう自然本性に出会っているという現場」の一例として引用する¹²⁷。なすこと（行為）の自然本性を「われわれがそれに出会っているもの」と理解するに至る過程で、松永は、プラトンにとってなすこと¹²⁸の考察の出発点はどこにあったのかを問い、次のように言う。「われわれは、「なすこと」というのを問題とすると、通常はただちにそのなすことの動機、意図といったものを問おうとする。しかしプラトンにとって、なすこと¹²⁸の考察の出発点はその中にはない。それはむしろ、そのなすということが基本的に見出されるのは果たしてどこかという、その場面の考察から始まる。そしてそれはほかでもなく、われわれが「ある」と語るそのもののうちにおいてであった」と¹²⁸。

プラトンにおいて、何かをなすことにそれ自身の自然本性が見出されるのは、なすことを通じてわれわれが外的世界のあり方にかかわっているからである。たとえば、肉を切るという行為が成功するためには、切られる対象（肉）の自然本性的あり方（たとえば、肉の種類や部位別特性など）に即して、それに本性上適した道具（肉切り包丁のうちでも、切られる肉の特性に本性上適したもの）を用いてなさねばならない。もし斧を使って、樹木を切るのに適した仕方で切ろうとしたら、肉を切るというこの行為は成功しないだろう。「行為の自然本性」という考えは、われわれに関する事実——すなわち、われわれは、「切る」などの日常的行為を、それがなされるにふさわしい仕方で実際になしているという事実——を教えている。序論（2 頁参照）で述べたように、われわれは、肉を切るということについて、明示的な仕方で誰かに教えられたわけでもなく、また、明示的な規則に従っているわけでもないのに、肉切り包丁を用い、切られる肉の特性に適した仕方で切ることができる。それが可能であるのは、われわれが、数多くの手本を見たり、他人の行為を観察するなどしながら、

為のアナロジーには欠陥があり、X を名指すことは、X を切ることや焼くこととは異なり、X に対して何か作用を及ぼす（X に変化をもたらす）行為ではないと指摘する。つまり、何かを名指すのに成功することは、その対象が名指されることの自然本性的あり方に即してなされることを要求しない。

¹²⁷ 松永 1993: 193-197.

¹²⁸ 松永 1993: 143.

その行為がもはや自分の本性の一部となるほどにまでそれを繰り返して行ってきたからであろう。

だが、こうした行為の成功は、行為主体の専門的な知識や技術よりも道具の性能に依拠することに留意しなければならない。たとえばわたしは肉についての専門的な知識や肉切りの専門的技術をもっていないけれども、切られる肉に適した包丁を用いれば、少なくとも肉を切ることに成功する。「道具の機能への依存性」というこの論点は、次の二つのことを示している。一つは、行為の成功が、それに用いられる道具の性能にいくらか依拠する限りにおいて、行為主体であるわれわれが、それがなされるにふさわしい仕方で行っているという事実、われわれ自身が無自覚であるということ、である。もう一つは、われわれが行為の対象について持っているある種の「知」（たとえば、肉の種類や部位別特性についての知識）は、行為の成功を根拠づけるものではあるが、まだ不完全なものでしかないということである。この二つの事実は、「名指す」という行為へと議論の基点が移行した際、極めて重要な意味を帯びることになる。

さて、肉を切るなどの日常的行為と同様に、名指すという行為もまた、名指される対象の自然本性的あり方に即して、それに本性上適した道具を用いてなされねばならない。その道具が、「名前」[ὄνομα] である。それゆえ、原語 ὄνομα は、個体を表す場合だけではなく、種類や性質などを表す抽象名詞や、形容詞および分詞（さらには動詞）の場合も含むため、概ね名辞 (term) に等しい。したがって、われわれは、概して語を使って何かを名指すという日常的な行為を通じて、名指し・名指されることの自然本性的あり方に即して、本性上適した道具を用いて、その行為を行っているということになる。

名指すという行為の自然本性という考えは、しかし、肉を切るなどの行為の自然本性の場合ほど明確でない。われわれは、日常的に何かを名指しながら、いったい何をしているのだろうか――。

この問いにわれわれがすぐに応答できないのと同じように、ヘルモゲネスもまた、「名前でも名指しながら、われわれは何をしているのか」(388b7-8) というソクラテスの問いかけに対し、答えに窮する。そこでソクラテスは、次のように応じる。

SO. 「名指すとき、a) われわれは互いに何かを教え合っている、つまり[καί]、b) われわれは事物を――そうある通りに¹²⁹――区分している。」(388b10-11)

¹²⁹ ἢ ἔχει (b11) に関しては、Ademollo は、この表現が ‘to be’ という形を含んでいないという事実を反映し、‘as they are’ではなく、‘as they stand’と訳出する。Ademollo が留意するように、この表現は、それをどう解するかによって οὐσία (388c1) の意味が決定されるという点で、極めて重要である。Ademollo は、『クラテュロス』において οὐσία が事物の本質ないし本性ではなく、事物の付帯的な属性を意味すると解釈しているため、この表現を事物の本性ではなく、任意の状態に言及するものと理解している (2011: 110 n. 32)。

本章の冒頭で述べたように、384c10-391b6 の一節は、ソクラテスの言語論の構築に位置し、検討中の一節は、その言語論の中核をなす「名指しの自然本性」というソクラテスの考えを提

ヘルモゲネスの同意を得て、ソクラテスは次のように続ける。

SO. 「そうすると、名前とは、a) 教示するための何らかの道具、つまり [καί]、b) そのあり方を区分するための道具であることになる——ちょうど梭が、入り混じっている縦糸と横糸を織り分ける道具であるのと同じように。」 (388b13-c1)

引用したこの二節は、a が b によって説明されるという仕方¹³⁰、全体として名指すということの本質を言い表している。一般に、「教示」と「区分」が名前の一つの機能を構成すると考えられているが、それをどう理解すべきかが問題となる。理解の鍵は、名前が、梭——入り混じっている縦糸と横糸を織り分ける道具——と類比的に語られている点にある。ちょうど梭が、入り混じっている縦糸と横糸を、本来そうある通りに織り分ける道具であるのと同じように、名前もまた、外的世界の構造を、その自然本性的あり方に即して切り分ける道具なのである。つまり、名指すということは、本来的に不確定で境界をもたない世界に確定性と秩序を創出する行為なのではなく、むしろその行為を通じて外的世界のあり方にかかわり、それがいかにあるかをより表立って明らかにする行為なのである。

ここで、先ほど指摘した二つの事実——すなわち、われわれは、諸々の日常的行為を、なし・なされるにふさわしい仕方ですべて実際になしているという事実に無自覚であることと、われわれが行為の対象についてもっているある種の「知」は不完全なものでしかないという事実——が、極めて重要な意味を帯びてくる。以下で見るように、プラトンはこの対話篇において、「われわれ」と呼びうるような日常的言語使用者と、模範的な名前の使用者たる「問答家」とを明確に区別しており、問答家への言及は、原典でわずか数行ほど (390c2-12) しかない。このことは、ソクラテスの「確固不動性」がこの対話篇の最後まで暫定的・仮説的な身分にとどまることと密接にかかわっており、それをどう解するかは『クラテュロス』全体の理解を左右する。それゆえ、この問題の検討は問答家が言及される一節を俟たなければならないが、差し当たっては、次の点だけ述べておく必要がある。事物それ自身の確固不動のあり方は、一方で、名指しの成功が全面的に依拠するものとしてはじめから前提されており、他方、この対話篇の最後では、極端な流転性を凌駕し得ないという、一見矛盾した二つの論点は、上述のわれわれに関する二つの事実と相即的であるということだ——つまり、名指しの成功は、語の外部にある対象——実在——の確固不動性と、語の使い手が当の対象についてもっているある種の「知」を前提するが、その「知」はまだ不完全なものでしかない、と

示す。ソクラテスは、名指すという行為が、外的世界の構造をそうある通りに区分し、世界がいかにあるかを教示するものであると考えているため、ここでの ἡ ἔχει と直後の οὐσία は、事物の自然本性的あり方に言及するものと解されねばならない。

¹³⁰ 主流の解釈に従い、388b10 と b13 の καί を説明的用法でとり、διδάσκειν (教える) と διακρίνειν (区分する) という二つの動詞によって名前の一つの機能が説明されていると理解する (Ackrill 1997; Barney 2001; Sedley 2003; Ademollo 2011)。ただし、Kretzmann は、「教示」と「分類」(taxonomy) を名前が有する二つの独立した機能とみなす (1971)。

いうことである。

「道具の機能への依存性」という論点は、名指し行為の場合、名前の自律的で自然本性的な機能を主張する「名前の道具モデル」というモチーフによって説明される。名前のこの機能は、「名前の形相」と呼ばれ、プラトンの言語論において極めて重要な役割を担う。次節では、『クラテュロス』研究においてこれまで最も議論を呼んできた「名前の形相」について、特に力を入れて検討することにした。

5 「名前の形相」

名指し行為は、以上に見たような専門知を必要としないものと、教示術という専門知を必要とするものとに明確に区別される。この教示術という専門知の導入とともに、「教示」はより積極的な意味をもつことになる。まず、教示術を有する名前使用の専門家——教示者——の存在が措定され、次のような身分を与えられる。

- i) 名前をうまく——教示術に則って——使用する。
- ii) 法習制定者（専門知をもつ名前制作者）の作った名前を使用する。

以後、議論の基点は「名前の使用」から「名前の制作」へと移行するのだが、それは、教示者と法習制定者とが相互依存的であるという事実に基づく（一方では 388c9-389a3 で、専門家の道具使用が有効であるためには、その道具は技術知をもつ制作者によって制作されなければならないと言われ、他方、390b1-d8 で、専門家の道具制作が有効であるためには、その制作過程はその道具を使用する専門家によって監督されなければならないと言われる）。名前の制作者は、「名前をわれわれに授けるのは、法習 [νόμος] である」という理由から、「法習制定者¹³¹」[νομοθέτης] と同定され (388d12-e2)、名前制作の場面は梭の制作との類比に即して、次のように記述される。

SO. 「さあ、それでは、考えてくれたまえ、法習制定者はどこに目を向けて名前を制定

¹³¹ νομοθέτης の身分とアイデンティティをめぐる問題について、Ademollo は、名前制作の専門知を有する人間が一人存在したか、それとも複数人存在したかということは、ソクラテスにとってはどうでもよいことであり、νομοθέτης は、いわば、一個人というよりもむしろ一つの種族であると述べる。そのうえで、ソクラテスの主張の眼目が次の点に存すると分析する——1) ノモス一般と特定の名前の存在は、誰かそれを制定したひとの存在を伴う。2) この「誰か」は、専門的知識を備えており、その知識はノモスの中に具現化されるようになる (2011: 117-125)。

『クラテュロス』に登場する「法習制定者」[νομοθέτης] について押さえておかなければならないのは、次の二つの点である。一つは、法習制定者は、身分と役割の点で、「問答家」の下位に置かれるという点であり、もう一つは、画家や大工と類比的に、法習制定者の間には、名前と法律を制定する技術の優劣の点で相違がある (429a-b) という点である。後者の点に鑑みれば、複数人の法習制定者の存在が想定されていると考えられる。

するのかを。今まで言われてきたことから類推したまえ。大工はどこに目を向けて
梭を作るのだろうか。梭することをその自然本性としているような何か、ではな
いのか¹³²。」(389a5-8)

大工が、梭の制作時に目を向ける対象は、「梭であるものそれ自体」[αὐτὸ ὃ ἔστιν κερκίς 389b5]
と呼ばれ、「梭すること」を、その自然本性としているような何か」と記述される。類比的
に、法習制定者が名前の制作時に目を向ける対象は、「名前であるものそれ自体」[αὐτὸ ἐκεῖνο
ὃ ἔστιν ὄνομα 389d6-7] であり、「名指すこと」——すなわち、「実在の区分と教示」——を、
その自然本性としているような何か」であることになる。

「名前の形相」[τὸ τοῦ ὀνόματος εἶδος 390a6-7] とも呼ばれるこの実体をめぐっては、これ
まで様々な解釈が提示されてきたが、大まかに二つの方向性が認められる。一方は、『クラ
テュロス』をアイデア論の発展段階に位置づけ、目下の議論を不完全なアイデア論と見做し、「名
前の形相」に、『パイドン』と『国家』で顕著な「離在」[χωρισμός] を一切読み込まない解
釈である¹³³。他方、他の多くの論者は、「名前の形相」を「意味」ないし「概念」¹³⁴、ある
いは「定義」と見做す点で共通している¹³⁵。「名前の形相」をどう解するかは、『クラテュロ
ス』全体の理解に大きくかかわる。その限りにおいて、わたしはこのどちらの解釈にも従わ
ない。しかしまずは、多くの論者に共有されている後者の解釈（以下、「意味解釈」と略記
する）を検討する。「意味解釈」が論拠とするのは、次の一節である。

¹³² 註 147 を参照されたい。

¹³³ Luce (1965) によれば、「梭であるものそれ自体」[αὐτὸ ὃ ἔστιν κερκίς 389b5] や「何か美その
もの、善そのもののようなものがある」[τι εἶναι αὐτὸ καλὸν καὶ ἀγαθόν [...] 439c8] などの用語
法は、『パイドン』と『国家』で確立される伝統的アイデア論を前提しているように見えるが、用
語法はそれだけでは執筆順序を特定する信頼可能な基準にはならないとされる。そして Luce
は、『クラテュロス』の執筆年代がプラトンの生涯における過渡期——以前の思索を背景に、ソ
クラテスによって提供された基盤に基づいて、プラトンが独自の哲学を作り上げていた時期
——に遡るという確信のなかで、『クラテュロス』におけるアイデアの提示には、そうした進歩的
仮説（つまり、『クラテュロス』はプラトンのアイデア論の発展および準備段階であり、アイデア論
が完成される『パイドン』の前に位置づけられるという仮説）と一致する多くのものが存在す
ると主張する。Irwin (1977) もまた、439c-440d で論じられる「美そのもの」が離在するアイデア
ではないとし、先行議論で述べられた「確固不動の本性」(386d8-e4; 389ab) ——「白」という
語は常に同じ色を指さなければならないという意味での確固不動性——を前方参照するに過ぎ
ないと述べる。

¹³⁴ Kretzmann 1971; Ketchum 1979; Ackrill 1997; Barney 2001.

¹³⁵ Ademollo (2011: 125-138) は、δύναμις (394ac) が ἰδέα (389e3) ・ εἶδος (390a7) に対応するとい
う Ackrill の解釈(1997) に抗し、前者を名前の「意味」、後者をプラトンのアイデアに言及する表
現と見做す。そして、アイデアが、一般的に、正しい定義によって規定されるものであるという
理解に基づき、「名前のアイデア」を「名前の定義」と見做す。439c-440d で論じられる「美その
もの」も同様に、Ademollo は、プラトンのアイデアと見做すが、それは、389a-390e ですでにイ
デアが導入されているという理解に基づく(456-462)。『クラテュロス』で提示されるアイデアは中
期対話篇（『パイドン』と『国家』）で確立される「離在するアイデア」ではないという Luce
(1965) と Irwin (1977) の解釈に対して、Ademollo は、それを立証する論拠は『クラテュロス』
にはないと述べる (458 n.13)。

SO. 「それでは、かの法習制定者も、各対象に自然本性上適した名前を音声と綴りの中に入れるべきを知っていなければならないのではないか。そしてまた、名前であるものそれ自体に目を向けて、すべての名前を制作し制定しなければならないのではないか。[...] なお、もし法習制定者の其々が同じ綴りの中に入れていない場合には、次のことを知っておかねばならない。すなわち、同じ目的のために同じ道具を作っても、すべての鍛冶屋が同じ鉄材の中に入れるわけではないのだ。しかしそれでも、同じ形相を与えている限りは、それぞれが別の鉄材の中にあってもその道具は正しくあるのだ。」 (389d4-390a2)

多くの論者が Calvert の提案に従い、ここに二種類の「名前の形相」の区別を見出す¹³⁶。一つは、〈名前それ自体〉（一般に、「名前の Form」と呼ばれる）であり、もう一つは、「各対象に自然本性上、適した名前」ないし「(名前の) 同じ形相」[τὴν αὐτὴν ιδέα]（一般に、「名前の Proper Form」と呼ばれる）である。この二つの関係は、類と種の関係に相当する¹³⁷。両者の内実および名前の Form の全体構造の理解には多少のずれが見られるが、「名前の Proper Form」を名前の「意味」ないし「概念」と見做す点ではどの解釈も一致している。Calvert によると、(a) 「名前の Form」、(b) 「名前の Proper Form」、(c) 名前の素材（音声（文字）と綴り）の間の関係は次のように説明される。(a)―(b) に関して、(b) は (a) よりも明確に限定される。(a) は「端的に名指す」という自然本性をもつのに対し、(b) はこの特定のものの本質を明らかにするという自然本性をもつ。例えば、「机」と「椅子」は、ともに名前であるという点で (a) をもつが、其々異なるものの本質を明らかにするという点で異なる (b) をもつ。他方、(b)―(c) に関して、(b) よりも (c) の方が数的に多い。なぜなら、書記言語と音声言語には「机」の多くの事例が存在するが、「机」の「Proper Form」は一つしか存在しないからだ。『クラテュロス』の例を引用するなら、「ヘクトル」と「アステュアナクス」は音声と綴りの点で異なるが、王という同じものを意味する——同じ Proper Form をもつ——限り、その多様性は許容される (394bc)。

「名前の形相」という捉えがたい概念の理解の際にほとんどの論者が依拠するのは、「名前の力」[ἡ τοῦ ὀνόματος δύναμις] という概念である (394b6-7)。実際、上述した「ヘクトル」と「アステュアナクス」の例は、双方が同じ「力」をもつ事例の一つとして挙げられる。この δύναμις という用語は、389e3 と 390a7 での εἶδος と ιδέα に相当すると、Ackrill は述べる¹³⁸。この読みに唯一反論する Ademollo は、「名前の力」は名前の意味ないし意義であるが、

¹³⁶ Calvert 1970.

¹³⁷ Sedley 2003.

¹³⁸ Ackrill 1997: 43-44. Cf. Kretzmann (1971: 131) によれば、プラトンは「名前の正しさ」についての説を展開する過程で、model correct name（いかなる音声や記号とも同定され得ない言語を超えた実体）を捨てて、実際の名前の force を選択し、具現化 (embodiment) を意味作用 (signification) と置き換えるとされる。つまり、Kretzmann によれば、「名前の力」は、「名前の形相」に取って代わる概念であり、実際の名前によって意味されるもの（意味内容）であると

こうしたのちの展開を現時点での議論の中に読み込むのは無謀である、なぜなら、のちの議論では現時点での議論は喚起されないからだ」と指摘する¹³⁹。Ademollo のこの指摘は正鵠を得ていると思われる。とりわけ、「名前の Form」を、特定の音ないし文字から構成される普通の名前とは対照的に「イデア的な名前」(the ideal name)、もしくは、複数の同義語が表すのは同じ概念であるという点で、「概念としての名前」(the name-as-concept) と見做す Ackrill の解釈には一見説得力があるが¹⁴⁰、この議論を通じてソクラテスが、名前は意味を表すと言っている箇所はどこにもない¹⁴¹。ソクラテスが教えるのは、「名前の形相」が「目を向ける対象」であること、「各対象に自然本性上、適している」こと、そして「実在の区分と教示をその自然本性としているような何か」であるということだ（「X が Y に自然本性上適している」は「X は Y を意味する」と同義ではない）。

わたしがこの「意味解釈」を受け入れないのは、この解釈がクラテュロスの立場を説明するものであるからだ。従来の基本構図に従えば、目下検討中の箇所は「言語本性主義」を擁護する議論の一部を構成する。この解釈の問題点は、本稿の最初で述べたように（第一章第一節参照）、名前の本性的な正しさについての諸説を無造作に「言語本性主義」と呼んだことで、プラトンの立場とクラテュロスの立場を同一視するという受け入れがたい結果を招いたことにある。クラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものの根幹にあるのは、名前の語源分析が対象の本性を顕わにするという思想であり、そこにおいて、対象の本性を表示する（と主張された）記述的内容である「記述的意味」が重要な役割を担う。第一章第四節で述べたように、「名前の正しさ」という考えはクラテュロスに特有のものではなく、プロディコスやプロタゴラスなど他のソフィストの関心事でもあったが、中でもとりわけクラテュロスの主張する「名前の正しさ」をプラトンが標的にしたのは、その根幹をなす「記述的意味」が対象の本性を表示すると主張するからである。この主張は、意味論的にも存在論的にも極めて重大な哲学的問題を伴う。一方で、「記述的意味＝指示対象説」は、名前の記述的意味が指示対象を決定すると主張する。この説によると、名前は、その記述的意味を充足する本性をもつ対象にしか適用され得ないため、あらゆる発語が正しいことになり、結果として、この説は、虚偽不可能論を擁護することになる（40-41 頁参照）。他方、クラテュロスは、名前の記述的意味を知ることが、対象についての知識を獲得する唯一にして最善の方法であると主張する（以下、「記述的意味＝知識説」と呼称する）。ギリシア語の名前の記述的意味は、全体として、実在のあり方を本質的に“動”とする万物流転の世界観を反映するため、語源分析から得られる記述的意味を対象についての「知識」と同一視することは、記述的意味が主張する「流転説」を真と見做すことになる。

以上のように、名前の記述的意味が対象の本性を表示するという主張は、意味論的にも存

される。Sedley (2003: 81-86) の解釈については、本論 118 頁を参照されたい。

¹³⁹ Ademollo 2011: 134-135 n. 99.

¹⁴⁰ Ackrill 1997: 44.

¹⁴¹ Cf. Ademollo 2011: 134.

在論的にも極めて問題含みであるにもかかわらず、その意味論的問題と存在論的問題のそれぞれは、それぞれの時代の要請に応じて積極的に受け取られてきた。中期プラトン主義の時代に、哲学は、太古の知恵を取り戻すプロジェクトと見做されるようになり、その一つの手段として語源分析が重んじられた。そのような逸脱の果てに、新プラトン主義者プロクロスは、語源分析を形而上学的知識の獲得のために利用するに至った。20世紀になると、分析哲学に端を発する「言語論的転回」によって哲学史研究が大きな転換期を迎える中、プラトン研究においても、『クラテュロス』の語源分析は意味論的関心から盛んに論じられた。そうした中で、論者たちの多くは、「記述説」をプラトン自身の受容する見解と解釈した（4頁参照）。21世紀に入りようやく（英米圏で）語源分析を中心に据えた統一的解釈が試みられるようになったが、「名前の正しさ」が、「言語本性主義」と「言語規約主義」の対立という問題枠の中で論じられたがゆえに、論者たちは、プラトンの立場をどちらかに帰属させることに難渋を強いられ、その結果、プラトンの立場とクラテュロスの立場は混同され、クラテュロスの主張を不本意にもプラトンの主張と見做すよう余儀なくされた。

プラトンが、記述的意味を介在させない言語論を構築するにあたり、その基盤に据えたのが「名前の形相」を骨子とする「名前の道具モデル」である、とわたしは考える。従来の解釈は、「名前の形相」が「名指すこと」——すなわち、「実在の区分と教示」——をその自然本性としているような何かであると言われる点を看過してきたように思われる。梭とのアナロジーをもう一度思い出そう。「梭であるものそれ自体」は、次のような意味規定を与えられていた。

- A 大工が、梭の制作時に目を向ける対象¹⁴²
- B それぞれの対象に本性上適した（それぞれの布地の種類や特徴に本性上適した）もの
- C 木材の中に具現化されるもの——それが具現化されてさえいけば、木材の種類の違いは問題にならない
- D 「梭すること」（梭を使って、入り混じっている縦糸と横糸を区分しながら織り込

¹⁴² Ademollo は、(ἀπο) βλέπειν πρός という表現が、何かについて思考したり、何かを意識を向ける活動 (the activity of considering or focusing on something) を表すメタファーであり（それゆえ、ここでは、大工の思考活動が言及されている）、大工が「目を向ける」対象である「梭の形相」とは、何か自然本性的に梭することに適しているという考えに相当する実体 (the entity corresponding to the notion of something's being naturally fit for pin-beating) であると述べる (2011: 125-126)。確かに、Ademollo が言うように、(ἀπο) βλέπειν πρός (「～に目を向ける」) という表現は、何かを意識を向け、それについて思考するという活動を表すメタファーであると考えられる。しかし、上述のように、「梭の形相」は D 「梭すること」をその自然本性とするものと互換的であり、D は A 「機織りが目を向ける対象（つまり、思考の対象）」だとされる。そうすると、思考の対象に相当する「梭の形相」が、思考の内容ないし「定義」(Ademollo 2011: 132-138) であると解するのは不合理であることになる（このことは、「名前の形相」を名前の「意味」ないし「概念」と見做す通常の解釈にも該当する）。

むこと)をその自然本性としているような何か

たとえば、大工が厚手の羊毛布地を織るのに適した梭を制作するとしよう。その場合、大工は、まず、(D) 概して「梭すること」をその自然本性としており、(B) 具体的には、厚手の羊毛布地を織り込むことをその自然本性としているものの方に意識を向け、それを (C) 任意の木材の中に具現化しなければならない。大工が任意の木材の中に具現化するものとは何であるのか。それは、厚手の羊毛布地を織り込むのに適した機能に他ならない。その機能が具現化されてさえいれば、どんな木材から作られていても問題はない。そして機織りは、その機能のおかげで厚手の羊毛布地を織り込むことができる。

そうすると、「名前の形相」もまた、差し当たり、「名指す」という機能——すなわち、外的世界を、そうある通りに区分し、それがいかにあるかを教示する機能——としておさえられる。だが、ここで問題に直面する。この節の冒頭で触れたように、名指し行為には、専門知を必要としないものと、教示術という専門知を必要とするものがあり、それに伴って、名前の使用者もまた、われわれのような名指しの専門知をもたない日常的言語使用者と、教示術を有する教示者とが明確に区別されている。そしてこの教示者は、のちに「問答家」[διαλεκτικός 390c11] と同定される。大方の論者がこの区別を、二つのタイプの言説ないし言語使用の間の区別と見做してきた。一つは、日常生活においてわれわれが使うような言語（たとえば、「猫がマットの上にいる」というような事柄を言うために使用する言語）であり、もう一つは、問答家（哲学者）が問答法において定義を求める際に使用する言語（たとえば、「猫とは何であるか」というような定義を求める問において使用する言語）である¹⁴³。こうした区別を読むひとびとが論拠とするのは、原典でわずか 10 行の問答家についての言及のうち、次の部分である。

¹⁴³ Ackrill (1994: 28) は、言語が「真を伝達する」という目的を果たすためには、「名前が、本当に存在する種や特性を指示しなければならない」とし、名前に課せられたこの条件を、次の二通りの仕方で理解する。①「非専門的理解」：たとえば、われわれは猫がマットの上にいることを互いに伝え合うために「猫」と「マット」という名前を使用する。もし猫という種もマットというものも存在しなかったら、この言語使用は情報を伝えることはできないため、われわれの使用する「猫」と「マット」という名前は本当の種やものに対応していることになる。②「哲学的理解」：問答家の言語使用は普通の言語使用（①）と異なり、より高次の使用——一言語内の概念構造全体の明晰さ、一貫性、客観的妥当性について問うもの——である。もし「正義とは何か」「猫とは何か」のような問いが高次に、そして概念構造全体の明晰さ、一貫性、客観的妥当性を示す仕方で答えられることができるなら、「正義」と「猫」という語は明確な意味をもっているということだけではなく、正義は本当に、客観的特性であり、猫は本当の自然種であることが証明される。Van den Berg (2008: 17) は、Ackrill の解釈に従いつつ、①へのプラトンの関心は限定されたものでしかないと述べる。Cf. Sedley 2003: 61.

わたしは、Ackrill の解釈に反対しているのではない。①と②の区別を認めただけで、さらにその先、すなわち「われわれ」と「問答家」との間の溝が埋められるのかどうか——それが可能であるなら、いかにしてか——を問うことが求められていると思われる。

SO. 「さて、そのひとは、問うすべを知っているひとであるのではないか。」

HE. 「そのとおりです。」

SO. 「そしてまた、同じひとが、答えるすべをも知っているのだろうね。」

HE. 「では、問うすべと答えるすべを知っているひとを、君は、問答家以外のほかの何と呼ぶかね。」

SO. 「いいえ、そう呼びます。」 (390c6-12)

「そのひと」は、直前の「法習制定者の制作品（名前）を使用する者」を受ける。法習制定者が制作した名前を使用する者は、以前、教示者とされていたため、ここにおいて教示者が問答家と同定される。問答法と教示との関連性を踏まえて、たとえば Sedley は、「名前の最高の機能は、プラトンのソクラテスの目から見れば、それによってのみ真の哲学教育が適切に実行されるところの一連の問い尋ねる作業を促進することにある」と述べる¹⁴⁴。

確かに、教示術という専門知の導入と問答家への言及は、われわれが単にコミュニケーションの目的で行っているたわいもない会話の中での名前使用と、哲学的問答法における名前使用との間の埋めきれぬ溝を暗示しているように一見思われる。しかし、実際はそうではないことが、問答家についての次の記述からわかる。

SO. 「また、誰が、法習制定者の制作品（名前）を——この地においても外国においても——最もうまく監督し、それが制作され終えたときに {最もよく} 判別することができるのだろうか。使用するであろうまさにそのひと、なのではないか。」 (390c2-4)

この一節は、問答家についての最初の記述である。この記述には、『国家』第 10 巻 601c3-602a2 で設けられる、道具の制作者と使用者についての原則、すなわち、「いかなる制作者も、当の制作物の使用者となる人によって監督され、助言を受けねばならない、なぜなら、使用者だけが、その制作物の良し悪しを判定できるからだ」という原則が適用されている。しかし、プラトンがここで額面通りのこと——すなわち、問答家は、法習制定者が名前を制作する場に居合わせて監督し、制作された名前がうまく作られているかをその場で判別するという——を言おうとしているのでないことは明らかであるため、われわれは、この原則の背後にあるプラトンの考えを探り出す必要がある。

まず、問答家に「名前の使用者」という身分が与えられている点を踏まえると、問答家が、名前がうまく作られているかどうかを判別するのは、まさに名前を使用するその過程においてであると考えられる。だがしかし、名前の良し悪しを判別する能力とは、どのような能力であるのか。

¹⁴⁴ Sedley 2003: 62-65.

法習制定者の仕事は、大工の仕事と類比的に、(C)「名前の形相」——「名指す」という機能——を、任意の文字ないし音節の中に具現化することである(81-82頁参照)。そうであれば、名前がうまく作られているかを判別する能力とは、音声形態としての名前の中に「名前の形相」が具現化されているか——すなわち、名前が「名指す」というその自然本性的機能を発揮するかどうか——を、名前の使用を通じて判別できる能力、であることになる。

では、その判別基準はどこにあるのか。名指すということの本性は、外的世界の構造を、その本来的なあり方に即して切り分け、世界がいかにあるかを教えることにある。であれば、名前が、実際にその機能を発揮しているのか否かを判別する基準は、外的世界の側にあることになる。つまり、名前が、外的世界のあり方を基準として適用されているのかどうかということが、その名前の良し悪しを判別する基準なのである。

この判別能力は、外的世界のあり方——すなわち、実在の構造——についての知識を前提する。そうすると、この点に、われわれ日常的言語使用者と問答家との間の本質的な相違が存することになるのだろうか——。

おそらく大方の学者は、「是」と答えるだろう。たとえば、Sedleyは、名指される対象についての知識の所有を、「ともかくも可能であるなら」という条件つきで、問答家の専門領域と見做す¹⁴⁵。しかし、前節で見たように、「行為の自然本性」という考えは、行為主体が行為の対象についてのある種の「知」を暗黙の裡にもっていることを前提するものであった——その「知」はまだ不完全なものでしかないのだけれども。そうすると、プラトンはここで、外的世界のあり方を基準として語が適用されているのかどうかを判別する能力およびその前提となる実在の知識を有する問答家(哲学者)の存在を、それを欠くわれわれとの対比のもとに想定しているのではなく、むしろその能力が、名前の問答法的使用の実践を通じてわれわれの中で開示され、実在についての「知」がわれわれの中で捉え直されねばならないことを示唆していると考えることができる。

従来の解釈は、「名前の形相」を、名前の制作の場面に定位して論じてきた。実際、「名前の形相」の意味規定A~Cは、名前が「実在の区分と教示」というその自然本性的機能を有するか否かが、名前の制作者(法習制定者)の力量に依存することを示しており、この一連の議論は、ソクラテスの次の陳述で締めくくられる。

SO. 「したがって、ヘルモゲネスよ、ひよっとしたら名前の制定は、君が思っているように、つまらないことでもなく、またつまらないひとたちや行き当たりばったりのひとびとがすることでもないようだ。そしてクラテュロスよ、諸々の事物にとって名前が自然本性的にあり、すべてのひとが名前の制作者なのではなく、それぞれの

¹⁴⁵ ‘[...] understanding of the objects named, if available at all, is the province of his (lawmaker’s) natural overseer, the dialectician (388c-390e).’ (Sedley 2003: 9); Ackrill (1997: 50-51) もまた、問答家ないし哲学者が、問答法の実践を通じて、一言語内の概念構造全体が実在の構造を正しく映しとるものであるかどうかを判別することができるだろうと述べる。

ものに自然本性的にある名前の方に目を向けて、その形相を文字と音節の中に置くことのできるかのひとだけが名前の制作者でありつつ、真実を言っているのだ。」(390d9-e5)

ここでソクラテスは、「名前と事物が自然本性的な関係にある」という考えをはっきりとクラテュロスに帰す。だがその考えは、「名前の形相」が法習制定者によって文字と音節の中に具現化されるという説に裏づけられているに過ぎない。名前制作における法習制定者の特権的身分とその卓越した技術は、一方で、「名前の正しさ」についてのクラテュロスの説が依拠するものであり、他方、クラテュロスとソクラテスの立場を隔てるものであることがのちに判明する(428e-429b)。ソクラテスが、法習制定者の間の名前制作技術の優劣における相違を主張するのに対し、クラテュロスは、そうした相違を完全に拒否するからだ。

法習制定者の間には、名前制作技術の優劣の点で相違があるという主張は、法習制定者(名前制作の専門家)と問答家(名前の模範的使用者)の間には、身分と役割の点で優劣が存在するという先の論点と照応する。この論点は、「名前の形相」が、本質的には、名前の使用の場面に見出されるべきものであることを示唆している。実際、意味規定 D——「名指すこと」を、その自然本性としているような何か——は、「名前の形相」が、「名指す」という行為の自然本性そのものであることを示していると言っている。肉切り包丁の性能の良し悪しが、その包丁を使って肉を切るという行為によってしか判別され得ないのと同じように、名前が「実在の区分と教示」というその自然本性的機能を発揮しうるかどうかは、名前を用いて何かを名指すという行為によってしか判別され得ない。つまり、「名前の形相」とは、語の使い手が、名指し・名指されることの自然本性的あり方に従って名指し行為を行うことによってはじめて具現化されるものなのである。

従来、名前の使用による「名前の形相」の具現化という、より本質的な論点が看過され、名前制作における「名前の形相」の具現化という論点だけが、ソクラテス自身に帰されてきた¹⁴⁶。しかし、上述のように、「名前の正しさ」をめぐるヘルモゲネスとの共同探求の暫定的結論を述べる際、ソクラテスは後者の論点だけをクラテュロスに帰しており、前者の論点については無言である。このことは、前者の論点が、ソクラテス(そしてプラトン)自身の見解であることを示唆している¹⁴⁷。

¹⁴⁶ Ademollo (2011: 144-145)によれば、ソクラテスは、クラテュロスの「自然本性説」の一部として、その説についてのソクラテス自身の解釈およびその発展、すなわち命名(名前制作)に対する「民主主義的」立場の否定を提示するとされる。語源分析の営みにソクラテスが精通していたのか否かという点に着目する Sedley (2003: 75) は、名前制作における「名前の形相」の具現化という目下の論点を、ソクラテスが語源分析の営みに全くの無知であるわけではないことを示すものと見做す。

¹⁴⁷ 中畑 (1985: 82-83) は、「梭することをその本性とするような何か」[ὁ ἐπεφύκει κερκίζεν 389a7-8]という表現に着目し、この表現を、行為の有効性という視点から、「梭を用いる行為の本性」と理解する。類比的に、「名前の形相」も、名指しという行為の本性的あり方(より厳密には、相互に教示し、事物のあり方に即して区分する行為の本性的あり方)と理解してい

ここで、これまで先延ばしにしてきた問題について論じておきたい。プロタゴラス的（認識の）相対主義の否定に依拠する仕方では指定された「事物それ自身の確固不動の本性」は、第六章で扱う「流転をめぐる議論」において、「これまでに何度も夢にみているもの」[ὁ ἔγωγε πολλάκις ὄνειρώττω 439c7] という前置きのもとに、美そのものや善そのものなど、あるもののそれぞれひとつひとつに帰される。だが「夢」というメタファーで示唆されるように、「美そのもの」の存在は最後まで暫定的・仮説的な身分にとどまる。このようにして、この対話篇は、「事物それ自身の確固不動の本性」の仮定ではじまり、その仮定で終わるといふ或る種の循環構造を有することになる。「美そのもの」の存在論的身分についての詳しい検討は第六章で行うが、本節で扱った「梭であるものそれ自体」の存在論的身分も相まって、これらにアイデアという特別な身分を与えるか否かをめぐり、長く論争がつづいている。

結論を言えば、これらはアイデアであるよう意図されていると、わたしは考える。以下に、その理由を述べる。「流転をめぐる議論」の帰結、すなわち「万物は常にあらゆる点で流転している」という極端な流転説が真であるなら、何かを正しく指示し、それについて知ることは不可能であるという帰結は、裏を返せば、正しく名指される対象と知られる対象は決して変化を受け入れない——すなわち、それらはアイデアである——ということを示していると考えられる。しかし、正しく名指され、知られる対象が実在——アイデア——であることが最後まで仮説にとどまるのは、それが、名指し行為の成立条件として前提されているに過ぎないからなのである。

「名前の道具モデル」の核をなす「名前の形相」は、名前の自律的で自然本性的な機能と、使用とが、相互依存的な関係にあることを示している。一方で、名前は——それが道具である限りにおいて——使用されることによつてしかその機能を発揮し得ない。それゆえ、名前の自然本性的機能——すなわち、「実在の区分と教示」——を発揮するのは、実際には、語の使い手自身であることになる。つまり、語の使い手は、名前を用いて何かを名指すという行為を通じて、実在の区分と教示を体現しているのである。だが、他方で、語の使い手が、名指しの本性についての精確な理解を欠いているにもかかわらず名指すというその行為を正しく行っているのは、名前が、「名指す」ことを、その自然本性としている機能を本来的にもっているからである。

わたしはここで、「正しく」という言葉を用いたが、384c10-391b6の一節においては、実は、「正しさ」ということは表立って論じられていない。「正しい」という概念は、行為の自然本性をめぐる議論の中で二度——「正しい思いなし」[τὴν ὀρθὴν (δόξαν) 387b3] と「正しく語る」[ὀρθῶς λέξει 387b12] という言い方で——言及されるに過ぎない。それはなぜなのだろうか。

われわれが肉を切ることができるのは、肉を切るという行為とそれに用いられる道具（肉

る。「名前の形相」を、名指しという行為の自然本性的あり方に定位して理解する学者は、(わたしの知る限りでは) 中畑以外にはいない。したがって、389a5-8の一節については、中畑の翻訳を参照させていただいた。

切り包丁)、そして切られる肉の種類や特性について正しい思いなしをもっているからであり、肉を切るという行為を首尾よくすることができる限りにおいて、われわれは、その行為を正しく行っていることになる。だが、われわれの行為の中に見出されるその「正しさ」は、行為主体であるわれわれには一見不透明なものに見える。だがそれは、われわれが「正しさ」というものを——クラテュロスが「正しさ」を語源分析的正しさに見出すように——決められた規範ないし基準と見做し、自分の行為が体現するその「正しさ」に目を向けないからではないのか。

「名指す」という行為の「正しさ」がわれわれに透明なものとなるのは、われわれがわれわれ自身の名指し行為を省察することで、自分の使用する語が外的世界のあり方を基準として適用されているかどうか——言い換えれば、自分の使用する語が、対象の「感覚(知覚)」や対象についての「表象」ではなく、語の外部にある実在に届いているのかどうか——を判別したとき、であろう。われわれ自身が、自らの名指し行為の中にある「正しさ」を自明なものにしない限り、名指される対象としてのアイデアは単なる虚構に過ぎない。

第三章 「名前の正しさ」についてのソクラテスの「解釈」

1 はじめに

391b7 から、クラテュロスが再度登場する 427e5 までの一連の長い語源分析は、『クラテュロス』全体において、クラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものについてのソクラテスの解釈に位置づけられる。このことは、次の二つのことを意味する。一つは、この長大な語源分析の中で論じられることは、クラテュロス自身が「名前の正しさ」ということと言おうとしていることではないということである。このことは、語源分析が終えられた直後のヘルモゲネスの発言がはっきりと示している¹⁴⁸。

HE. 「さて、ソクラテスよ、最初にわたしが言ったように、クラテュロスは幾たびも本当に多くの厄介事をわたしに負わせます——一方では、「名前の正しさ」というものがあると断言しながら、他方で、それがどんなものであるのか、明確なことを何も言わないのです、その結果、わたしは、彼が「名前の正しさ」について言うときはきまっぴつでもそれほどまでに不明確に言うのが自らの意志でなのか、意志に反してなのか、知ることができないのです。

そこでいまやクラテュロスよ、ソクラテスの前でわたしに言っておくれ、諸々の名前についてのソクラテスの解釈は君を満足させるのか、それとも君は何か他の仕方でもっと立派なことを言うことができるのかどうかを。そして、もし君がそうできるならば、言っておくれ、実に君がソクラテスから学ぶか、それとも君がわれわれ両方を教えるために。」(427d4-e4)

「最初にわたしが言ったように」は、383b7-384a4 での発言を前方参照する(29頁参照)。「名前の正しさ」のようなものが存在すると断言しながら、クラテュロスはそれについて明確なことを何も言わないため、ヘルモゲネスはその「解釈」をソクラテスに願い出たが、ソクラテスの語源分析のパフォーマンスは、クラテュロスの言う「名前の正しさ」の内実を明らかにはしなかったということである。実際、クラテュロスは次のように応答する。

¹⁴⁸ Ademollo (2011: 315-316) が分析するように、427d4-e4 の一節は、ほぼ均等の長さで前半と後半に二分される。前半部 (d4-8) は、ソクラテスに向けて述べられており、この対話篇の冒頭部を喚起する (383b-384a; 384c)。Ademollo によれば、このことは、この対話篇の前半部が幕を閉じたことを強調する効果をもつとされるが、冒頭場面の前方参照は、むしろクラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものについて、事実上、まだ何も明らかにされていないことを示唆するものとして理解されるべきである。後半部 (d8-e4) は、クラテュロスに対する議論の勧誘ないし挑戦の宣言を含意する。

CR. 「何だって、ヘルモゲネスよ。何であれ物事を、それほどまでに素早く学んだり教えたりすることが容易であると、君には思われるのか——それも、それこそが物事のうちに最も重要 [μέγιστον] であると思われる限りのものに関しては、言うまでもない。」(427e5-7)

「物事のうちに最も重要なこと」こそ、クラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものに他ならない。ソクラテスの語源分析作業がその内実を明らかにしなかったということは、クラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものは、語源分析にのみ依拠しているのではないということである。

だが他方で、ソクラテスの語源分析作業がクラテュロスの言う「名前の正しさ」の何も明らかにしなかったわけではない。ソクラテスが語源分析の実演を通じて論じてきた次の点に、クラテュロスは全面的な同意を示すからだ (428e)。

C⁴ 「名前の正しさ」とは、事物がどのようなものであるかを示すこと [ἐνδείξεται οἷόν ἐστι τὸ πρᾶγμα] である。

以下で、C⁴が長大な語源分析を通じてどのように論じられてきたのかを順に追ってゆくことにしよう。

2 名前についてのホメロスの考え

(1) プロタゴラスからホメロスへ

第二章第一節で述べたように、ソクラテスはこの対話篇において、「名前の正しさ」に関する類のことを知らないとする姿勢に徹しており、本格的探求に着手する際も、「知っているひとびとと一緒にする」方法を選択する。「名前の正しさ」に関する類のことを知っているのは、プロディコスとプロタゴラスであるが、ソクラテスはすでに 384bc で、「名前についてのプロディコスの講義を聞かなかったため、「名前の正しさ」に関する類の事柄について、真実が一体どのようなものであるかを知らない」と断言している。よって、残るはプロタゴラス一人であるため、ソクラテスはヘルモゲネスに次のことを要求する。

SO. 「考察のうちでもっとも正しいのは、友よ、知っているひとびとと一緒にするというものだ、かのひとびとにお金を払い、感謝をため込みながらね。で、ソフィストたちがそのひとびとである。君の兄であるカリアスも、まさに彼らに多額のお金を支払ったから、知者であると思われている。だが、君は父からの遺産を所有していないのだから、兄にしつこく頼み、彼がプロタゴラスから学んだこうした類の事柄についての正しさを君に教えるよう、彼に懇願しなければならない。」(391b9-c5)

『ソクラテスの弁明』20aにあるように¹⁴⁹、カリアスはヒッポニコスの息子であるが、引用箇所から、彼はヘルモゲネスの義兄弟、つまりヒッポニコスの嫡出子であることが推測される。このことは、ヘルモゲネスの名前をめぐる問題と密接にかかわっている。ヘルモゲネスは、ヒッポニコスの遺産を貰い受けることができなかつたため、金銭的な問題を抱えることになり、そのことが、「ヘルモゲネス」という名前がヘルモゲネスの名前でない」ことの一つの理由であるからだ。

第一章第四節(2)で述べたように、プロタゴラスが扱っていた「正語法」[ὀρθοέπεια] (『パイドロス』267c) は、名前の正しさの自然本性的基準を、名前の文法的性が対象の本性を反映するという点に求めるものであったと考えられる。だが、『クラテュロス』においては、プロタゴラスが扱っていた類の名前の正しさについても、立ち入った考察はなされない。ヘルモゲネスがソクラテスの要求に応じないからだ。

HE. 「しかしながら、ソクラテスよ、わたしの懇願はおかしなことでしょう、もし一方で、わたしはプロタゴラスの『真理』を全面的に受け入れていないのに、他方では、そのような真理でもって言われた事柄を¹⁵⁰、それらが何かしら価値あるものであるかのように喜ぶのだとしたら。」 (391c6-9)

「プロタゴラスの『真理』を全面的に受け入れない」というヘルモゲネスの発言は、プロタゴラスの相対主義を受け入れないという 386a での発言を前方参照する。名前の正しさについてのプロタゴラスの見解と彼の相対主義の思想の両方が、『真理』という書物の中で展開されていたのかどうかに関して、諸家の解釈は異なる¹⁵¹。だが、391c8 の τῆ τοιαύτη ἀληθεία は、386c2 と同様に、プロタゴラスの『真理』という書物のタイトルのもじりとして読まれるべきであり、それゆえ、ヘルモゲネスが引用箇所、名前の正しさについての事柄もまた『真理』の中で語られているという趣意の発言をしていると解すべきでない。

いずれにせよ、問題は、名前の正しさについてのプロタゴラスの見解と、彼の相対主義の

¹⁴⁹ カリアスへの言及は、次の二つの効果をもつ。一つは、『ソクラテスの弁明』20a で記述されているように、「他のすべてのひとが投じた総額よりも多くの金銭をソフィストたちにつぎ込んできた人物」であるヒッポニコスの息子カリアスに言及することで、金儲けのために教えるソフィストたちの慣習を嘲笑する効果である (cf. Ademollo 2011: 146)。もう一つの効果は、カリアスがヒッポニコスの嫡出子であることを示唆することによって、「ヘルモゲネス」という名前は、君の名前ではない」というクラテュロスの発言が、ヘルモゲネスの金銭的問題と関係があることを伝えることである。

¹⁵⁰ 386c2 にもあるように、ここでの「真理」とは、プロタゴラスの書物のタイトルのもじりである。『テアイテトス』161c も参照されたい。

¹⁵¹ τὰ δὲ τῆ τοιαύτη ἀληθεία ῥηθέντα (c8) は、たとえば Reeve によって ‘the things contained in it’ と訳出されている。Ademollo は、ヘルモゲネスのこの言い方が「名前の正しさについての見解が『真理』の中に含まれている」ということをはっきり言うものではないとし、‘the things said with such a Truth’ と訳出している (2011: 149)。

思想は相互に独立した思想であるにもかかわらず¹⁵²、ヘルモゲネスが、後者を斥けたことを理由に前者をも斥けたことにある。おそらくこれは、プロディコスの場合と同様に、プロタゴラスの扱う類の名前の正しさが、クラテュロスの説く「名前の正しさ」とは本質的に異なるものであるため、目下の議論の対象から外すためのプラトンの仕掛けであると考えられる。

さて、名前の正しさに関する類の事柄についてプロタゴラスから学ぶという選択肢がなくなつたため、必然的に、「ホメロスやその他の詩人たちから学ぶ」という方法がとられる。Reeveの説明によると、当時、ホメロスらの詩人は伝統的な師であり、ソフィストたちは新しい師であったため、何かについての学知を得る際、一方から学ばない場合は、他方から学ぶことが必至であった¹⁵³。したがって、ソクラテスらの「名前の正しさ」の共同探求において、ホメロス、ヘシオドスその他の詩人が権威となる。

391b7 から 396d1 までの一連の議論において、名前についてのホメロスの考えが吟味される。注意すべきなのは、プロディコスやプロタゴラスが名前の正しさに関する類の事柄を扱っていたように、ホメロスもまた名前の正しさについて表立って論じていたというわけではないということだ。ホメロスらの詩人を権威として、ソクラテスは、名前についてのホメロスの考えの中に「正しさ」を見出してゆく。以下で、いわばホメロスの「正しさ」が本質的に何に存し、語源分析的正しさへとどのように展開してゆくのかを、順に見てゆくことにする。

(2) 「正しさの程度」 I —— 名前の使用者の間の知恵の優劣における相違 (神々と人間たちの間の知恵の優劣) ——

ソクラテスは、ホメロスが同じものに対して神々が呼ぶ名前と人間たちが呼ぶ名前とを区別している点に「正しさ」を見出す¹⁵⁴。

SO.「君は知らないのか、トロイアにある、ヘパイストスと一騎打ちをした川について、
「この川を神々はクサントスと呼び、人間たちはスカマンドロスと呼ぶ」と {ホメロス
スが} 言っているのを。」

¹⁵² Ademolloによれば、名前の正しさについてのプロタゴラスの見解が、彼の相対主義の思想に依拠していたという可能性はほとんどない (2011: 149)。

¹⁵³ Reeve 1998: xxiv.

¹⁵⁴ Kirk 1985: 94; 246によれば、『イリアス』と『オデュッセイア』には、同じ対象について神々が呼ぶ名前と人間たちが呼ぶ名前とが区別される例が5つ存在する (『オデュッセイア』における二つの例では、神々が呼ぶ名前に対応する名前 (人間たちが呼ぶ名前) は言及されていない)。『イリアス』における三つの例のうち二つ (川について、神々は「クサントス」と呼び、人間たちは「スカマンドロス」と呼ぶ (『イリアス』第20章74)、鳥について、神々は「カルキス」と呼び、人間たちは「キュミンディス」と呼ぶ (『イリアス』第14章29) が、『クラテュロス』の目下の箇所では引用されている。しかし、Kirkによれば、なぜ「クサントス」や「カルキス」などの名前が神的とされるのかを説明する原則は存在しないとされる。

HE. 「知っています。」

SO. 「それならば、どうだろう。君はこのこと、すなわち一体なぜかの川をスカマンドロスと呼ぶよりもクサントスと呼ぶ方が正しいのかを知ることが、何か荘厳なことであると思わないのか。あるいは、もし君が望むなら、{ホメロスが} 次のように言っている鳥について、すなわち、

神々はカルキスと呼び、人間たちはキュミンデイスと呼ぶ

と言っている鳥について、同じ鳥がキュミンデイスと呼ばれるよりもカルキスと呼ばれる方が、その分だけ一層より正しい [ὀρθότερον] という学知がつまらぬものだと君は思うのか。[...]」 (391e4-392a7)

Sedley は、目下の一節でソクラテスが、「正しさ」が「程度の差のある性質」(a comparative attribute)であるという、極めて重要な論点を提示していると述べる¹⁵⁵。実際、後続する一連の語源分析において、名前に対して ὀρθῶς (正しく)、δικαίως (正当に)、καλῶς (立派に)、εὖ (うまく)、反対に、κακῶς; αἰσχροῦς (悪く、下手に) などの副詞 (ないし、これらの形容詞) が用いられるが、それに劣らず比較級と最上級が多く用いられる (ὀρθῶς の比較級は 392a6; b9; c2-3; d8; 437a5、ἀγαθός の比較級は 429a5; a7; b4; b8、καλῶς の比較級は 429a7; a9; b1、κακῶς; αἰσχροῦς の比較級は 429a4-5; a10; b2; b8 で用いられており、さらに、ὀρθῶς の最上級 405c4; 417e4、καλῶς の最上級 404e5; 435c7、δικαίως の最上級 409c1、αἰσχροῦς の最上級 435d1 も用いられている)。

Ademollo は、「正しさ」が程度の差のある性質であるという Sedley の解釈に異論を呈し、「正しさの程度」という考えは、彼が「正しさの冗長概念」(the Redundancy Conception of correctness) と呼ぶものによって排除されると主張する¹⁵⁶。Ademollo によれば、ソクラテスは「名前の正しさ」と言いつつ、この概念に終始執着している。これに従うと、「X の名前である」は「X の正しい名前である」と同じことを意味し、このことは必然的に、語が何かの正しくない名前でありながら、それでもその対象の名前であることは不可能であるということを伴う。Ademollo のこの解釈は、一見すると、正しい。というのは、『クラテュロス』を通じてソクラテスは、名前は何かの正しくない名前であるかもしれないが、それでもその対象の名前であるとは一度も言っていないからである。この解釈の問題点は、「名前の正しさ」を「端的に名前であること」に単純化することによって、「正しさ」という側面を捨象することにある。もっとも、「正しさ」の無化は、規約主義解釈に徹する Ademollo にとっては、むしろ彼の立場を裏づける論拠となるのだが。

しかし、『クラテュロス』において、「正しい名前」と「端的な名前」との間の区別が一見

¹⁵⁵ Sedley 2003: 78.

¹⁵⁶ Ademollo 2011: 151.

判然としないように見えるのは、一方でクラテュロスにおいては、「正しい名前でなければ名前ですらない」という仕方で「名前の正しさ」が「端的に名前であること」に同化し、他方、ヘルモゲネスにおいては、逆に「名前であれば何であれ正しい」という仕方で後者が前者に同化するからだ。「正しい名前」と「端的な名前」の間のある種の同等性は、こうした理解においてのみ正当に論じられうる。

ではそうすると、「正しさ」に程度の差を設ける表現が用いられているという事実をいかに理解すべきか。目下検討中の議論 (391d1-393b4) は、「名前の正しさ」の共同探求の冒頭部分にあたる。ホメロスら詩人たちを権威として、ソクラテスはまず、名前に関するホメロスの陳述のうちで、ホメロスが、神々が呼ぶ名前と人間たちが呼ぶ名前とを区別している点に注目する。なぜなら、諸々の名前の間に優劣の区別を設けるという仕方で「正しさ」を説明することができるからである。しかし注意すべきなのは、目下の優劣の区別は、名前の使用者の間の知恵の優劣に起因し(神々の方が人間たちよりも知恵がある、男の方が女よりも知恵がある)、「正しさ」を名前の使用者の間の知恵の優劣に訴える説明を、ソクラテスは、ホメロスの説明として提示するという点である。それゆえ、ソクラテスはのちに、名前の間の優劣の区別(言い換えれば、名前の間の「正しさの程度」の差)の基準を別のもの——すなわち、語源分析的基準——に見出すことになる。

「諸々の名前の間には「正しさ」の点で程度の差が存在する」という考えは、したがって、「名前の正しさ」をめぐるソクラテスの探求の起点であり、かつ、こののちの語源分析はこの考えを主軸として進展してゆく。一連の語源分析を終えた後で、ソクラテスのパフォーマンスが、クラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものの内実を明らかにするものでないとされるのは、「正しさの程度」という考えが、クラテュロスの主張する「正しさ」の中に認められ得ないからである。実際、クラテュロスの見解の根幹にあるのは、「すべての名前が正しくつけられている」(429b10) という主張であり、クラテュロスの「名前の正しさ」の意味論的・存在論的問題の根源は、まさにこの主張に存することが徐々に判明する。現段階ではまだ、語源分析的基準が導入されていない点に留意すべきであるが、「正しさ」に程度の差を認めるか否かが、ソクラテスとクラテュロスを隔てる極めて重要な論点なのである。

(3) 「正しさの程度」——名前の使用者の間の知恵の優劣における相違(類としての男性と女性の間知恵の優劣)

ソクラテスは次に、ホメロスにおいて、同じものが二つの異なる名前と呼ばれている別の事例を取り上げる。

SO. 「[...] 他方で、スカマンドリオスとアステュアナクスは、わたしが思うに、それらの名前の正しさが一体何であると {ホメロスが} 言っているかを調べるには、{先の名前よりも} より人間に適しており、容易なものである——これらは、ヘクトルの息子の名前であると {ホメロスは} 言っているのだが。というのは、君はおそら

く、わたしが言っていることが書かれている詩句を知っているからだ。」

HE. 「もちろん、知っています。」 (392b3-8)

ヘクトルの息子の二つの名前が言及されているのは『イリアス』第 6 巻 401-3 行である。「彼女（アンドロマケ）は彼（ヘクトル）に会った、そして乳母が彼女に付き添っていた——まだ乳飲み子である児——星に似た、ヘクトルの息子——を胸に抱いて」の後に、以下の一行が続く¹⁵⁷。

その児を彼はスカマンドリオスと呼んだが、他の者たちはアステュアナクスと呼んだ。
というのは、ヘクトルただ一人がイリオスの市を守護したからである。

391e6 で言及されたように、スカマンドロスはトロイアを流れる河とその河神の名前である。Kirk によれば¹⁵⁸、ヘクトルは、土地への敬虔の念を表す行為として、この河——すなわち、この河神——にちなんで彼の息子を名づけたにちがいないとされる。他方、「アステュアナクス」は、父ヘクトルへの敬意を表すしるしとして（ヘクトル以外の）他のすべてのトロイアのひとびとによって使用された敬称であったようであると Kirk は推定する。その推定は、アンドロマケが亡きヘクトルに語りかける次の一行（『イリアス』第 22 巻 505-7）によって支持される。

アステュアナクス——彼をトロイアのひとびとはあだ名で呼んでいる [ἐπίκλησιν
καλέουσιν]、

というのは、あなたただ一人が¹⁵⁹、彼らの門と長大な市壁を守護したからである。

ἐπίκλησιν καλέουσιν は、第 18 章 487 と第 22 章 29 の両方で、二次的で非公式的な名前に関して用いられている¹⁶⁰。そうすると、少なくとも目下の箇所（第 22 章 506）では、アステュアナクスはあだ名であることが明らかであるが、この箇所はスカマンドリオスに一切言及しておらず、スカマンドリオスという名前がヘクトルの息子に適用されるのは、『イリアス』全体において、第 6 章 401-3 の箇所のみである。実際、ヘクトルの息子は、叙事詩環ととのちの伝統において常にアステュアナクスとされている。そこで、Kirk は、「スカマンドリオス」という名前の方が、むしろ非公式的な名前であったのではないかと想定する。そうであるなら、第 22 章 506 が意味するのは次のこと、すなわち「アステュアナクス」がヘクト

¹⁵⁷ Kirk (1990: 211) の訳を参照した。

¹⁵⁸ Kirk 1990: 212-213.

¹⁵⁹ 507 のアポストロフィーで、アンドロマケの演説 (477-514) の主題はヘクトルに戻る (Richardson 1993: 162; cf. 158)。

¹⁶⁰ 第 22 章 29 の関連箇所については、Richardson (1993: 109) もまた、ἐπίκλησις がときに「あだ名」を意味すると説明している。

ルの息子の正式名称であり、その名前は、トロイアの守護者の息子に適切にあてがわれたということになる。

Kirk のこの想定を念頭に置いて、ソクラテスがこれらの箇所をどのように引用し、どのような議論を展開するのかを見てゆこう。

SO. 「そうすると、この二つの名前のどちらがその子供により正しくつけられているとホメロスは考えていると君は思うか、「スカマンドリオス」か、それとも「アステュアナクス」か。」

HE. 「わたしは言うことができません。」

SO. 「では次のように考察したまえ。もし誰かが君に「どちらのひとびとが名前をより正しく呼ぶと君は思うか、より思慮のあるひとびとか、それともより無思慮なひとびとか。」と尋ねるとしたら。」

HE. 「明らかにわたしは「より思慮のあるひとびとが」と言うでしょう。」

SO. 「それでは、国家の中の女性と男性とでは、類全体を言って、どちらがより思慮があると君に思われるか。」

HE. 「男性の方が、です。」

SO. 「では、君は知っているか、ホメロスが、ヘクトルの子供がトロイアの男たち¹⁶¹によってアステュアナクスと呼ばれていると言っているということ。そしてスカマンドリオスは女たちによって {呼ばれていた} ことは明らかだね、なぜなら、男たちが彼をアステュアナクスと呼んでいたのだから。」

HE. 「そうらしいです。」

SO. 「さて、ホメロスもまた、トロイアの男たちを、彼らの女たちよりも知恵があると考えていたのだね。」

HE. 「わたしはそう思います。」

SO. 「したがって、{ホメロスは} 「アステュアナクス」の方が「スカマンドリオス」よりもその子供により正しくつけられていると思っていたことになるね。」

HE. 「そのように見えます。」 (392b9-d10)

ソクラテスは、ヘクトルの息子につけられた二つの名前——「スカマンドリオス」と「アス

¹⁶¹ ὑπὸ τῶν Τρώων (d1): 『イリアス』第6章401-3と第22章505-7によれば、ヘクトルの息子は、ヘクトルによってのみ「スカマンドリオス」と呼ばれ、ヘクトルを除く他のすべてのトロイア人には「アステュアナクス」という敬称で呼ばれていたとされるため、τῶν Τρώων は——正しく引用される場合には——女性も含めたトロイア人に言及する。しかし、目下の一節で、ソクラテスは、ヘクトルの息子がトロイアの男たちによって「アステュアナクス」と呼ばれ、女たちによって「スカマンドリオス」と呼ばれていたと解釈することで、類としての男女の間の知恵の優劣における相違に「正しさ」を見出そうとする。これは明らかに誤った引用であるが、文脈上、τῶν Τρώων は男性名詞で読まれなければならない (cf. Ademollo 2011: 153)。

テュアナクス」——のうち、どちらがより正しい名前であるとホメロスが考えているかを調べるにあたり、次の推論を用いる。

- 1) 名前の使用者が知恵のある者であればあるほど、その分だけより正しい名前を使用する。

先に触れたように (92-93 頁参照)、「正しさ」についてのホメロスの説明として、ソクラテスは、名前の使用者の間の知恵の優劣という論点を提示する。知恵の優劣における相違は、神々と人間たちの次に、「類全体としての」男と女に帰される。

- 2) 或る国家の男たちは、全体として、(その国家の) 女たちよりも知恵がある。

2 は、『国家』第 5 巻 455ce にも確認される原則である。この原則に基づいて、ソクラテスは、ホメロスが次のように言っていると説明する。

ヘクトルの息子はトロイアの男たちによって「アステュアナクス」と呼ばれていた、

- 2 (類としての男女間の知恵の優劣における相違) から、

女たちが彼を「スカマンドリオス」と呼んでいたことになる。

- 2 (男の方が女よりも、全体として、知恵がある) と 1 (名前の使用者が知恵のある者であればあるほど、その分だけ、使用される名前はより正しい名前である)、および、1・2 をホメロスが受け入れるという前提に基づき、

「アステュアナクス」の方がヘクトルの息子の、より正しい名前であるとホメロスは考えている。

が導き出される。

先に引用した『イリアス』の対応箇所と見比べれば、ソクラテスがかなり粗雑で誤った引用の仕方をしていることは明らかであろう。まず、『イリアス』第 6 巻 401-3 では、「スカマンドリオス」という名前を使っていたのはヘクトルで、他の者たちが「アステュアナクス」という名前を使っていた」と言われているが、ソクラテスはこの点には言及せずに¹⁶²、「へ

¹⁶² Kirk (1990: 213) によれば、プラトンは、ソクラテスの言及を第 22 章のバージョンに限定するとされる。

クトルの息子が、「スカマンドリオス」と「アステュアナクス」という二つの異なる名前と呼ばれていた」という点にだけ言及する。さらに、上記の原則に従い、男性が呼ぶ名前と女性が呼ぶ名前との間に知恵の優劣の点での区別を設けるために、原文の「トロイアのひとびと」[Τρῶες] を（原文では、「ヘクトル以外のすべてのトロイア人」を指し、その中には女性も含まれる）、男性のトロイア人だけを指す語として解釈している。

Sedley 以外のほとんどの学者が意見を一致させるように¹⁶³、ソクラテスのこの誤った引用は意図的であると、わたしも考える。簡潔に言えば、ソクラテスが意図的に誤った引用したのは、ホメロスの「正しさ」と、のちに導入されるクラテュロスの「正しさ」とを明確に区別するためであった。名前の使用者の間の知恵の優劣における相違という論点は、確かに、神々が呼ぶ名前と人間たちが呼ぶ名前とをホメロスが区別している点から導出されたが、ヘクトルの息子の名前について、ホメロスは、名前を使用する男女間の知恵の優劣という点には一切言及していない。むしろ、Kirk が想定するように（94 頁参照）、ヘクトルを除くすべてのトロイア人が、ヘクトルと守護者としての彼の役割を称える敬称として使用していた「アステュアナクス」(ἀστὺ-ἀναξ, ‘Town-lord’, 「市の支配者」) という名前の方が、市の守護者ヘクトルの息子の名前として正しい（つまり、正式な名前である）とホメロスは考えていたように思われる。無論、そのことは、ホメロスが「名前の正しさ」に関する類のことを扱っていたことを意味しないが、少なくとも語源分析的基準が、ヘクトルの息子の名前をめぐるホメロスの記述の中に見出されることは確かである¹⁶⁴。だが、それは、こののちの展開に齟齬をきたす。なぜなら、「正しさ」の語源分析的基準は、名前の使用者間の知恵の優劣に代わる新たな基準として導入されることになるからだ。要するに、一方で、「正しさ」を、名前の使用者の間の知恵の優劣に訴える説明をホメロスのとし、他方、語源分析的基準に求める説明をクラテュロスのとして、両説の区別を明確にするためには、ホメロスの原文の誤った引用は不可避であった。

(4) 名前の正しさについてのホメロスの考えの「痕跡」

以後、ホメロスの権威はやや後退し、「アステュアナクス」の方がヘクトルの息子の、より正しい名前であるのは何故か」という問いそのものが探求される。

SO. 「では考察しようではないか、一体なにゆえに {「アステュアナクス」の方がより正しい名前であるのかを}。それとも、彼（ホメロス）はわれわれにその「なにゆえか」をこのうえなく見事に示唆しているのか。というのは、彼はこう言っているか

¹⁶³ 「意図的である」と考える学者は、Heindorf, Horn 1904: 32; Méridier 1950: 16; Labarbe 1949: 334-7; Minio-Pauello 18 n.22; Ademollo 2011: 154. *Contra* Sedley 2003: 78.

¹⁶⁴ Ademollo によれば (2011: 155)、『イリアス』第 6 章 403 と第 22 章 507 で、ホメロスは実際に、語源的に「市の支配者」を意味する「アステュアナクス」という名前が、トロイアを守護するというヘクトルの役割との関連で彼の息子に与えられたと言っているが、ホメロスが「名前の正しさ」に関心をもっていないのは明らかであるとされる。

らだ、すなわち、

というのは、彼ただ一人が、彼らの市と長大な市壁を守護したからである。

まさにこれらのことゆえに、どうやら、この守護者の息子を、彼の父が守護していた「市の支配者」——「アステュアナクス」——と呼ぶことは正しいのである、ホメロスが言っているように。」

HE. 「わたしにはそのように見えます。」 (392d11-e5)

先の引用と同様に、この引用にも不正確な点がある。原文（『イリアス』第 22 巻 507）は、*ἔρυτο πόλιν*（「彼（ヘクトル）が市を守護した」）ではなく、*ἔρυσσεν πύλας*（「あなたが門を守護した」）となっている。おそらくソクラテスは、『イリアス』第 6 巻 403 の「ヘクトルただ一人がイリオスの市を守護した」を基に、*ἐρύομαι*（守護する）の主語を「あなた」ではなく「彼（ヘクトル）」とし¹⁶⁵、*πύλας* の代わりに *πόλιν* を読んだのではないかと推測される。だがいずれにせよ、検討中の問いに対しソクラテスが引用箇所でのどのような説明を与えたかは、現段階では明らかでない。なぜなら、「わたしにはそのように見えます」(392e5) というヘルモゲネスの返答に、ソクラテスは、

SO. 「一体なぜ {君はそう思うのか}。というのも、わたし自身がまだわかっていないからなのだ、ヘルモゲネスよ。で、君はわかっているのか。」 (392e6-7)

と問い、ヘルモゲネスは、「いいえ、ゼウスに誓って、わたしはわかりません。」(392e8) と応じるからだ。

ソクラテス自身がまだ理解していないこととは、何であるのか。それはおそらく、「ヘクトルが市を守護した」ということがいかにして、「彼の息子が「アステュアナクス」——「市の支配者」——と呼ばれて正しい」ことの論拠となりうるのか、という点であろう¹⁶⁶。というのは、父が市を守護したからといって、その息子が「市の支配者」と呼ばれる必然性はないと、われわれには思われるからだ。

ソクラテスは次のような説明を試みる。

SO. 「しかし、善きひとよ、ヘクトルにもホメロス自身がその名前をつけたのではなかったか。」

HE. 「いったいなぜ {そうおっしゃるのですか}。」

SO. 「なぜなら、この名前は、アステュアナクスに何らかに近いものであるようにわたし

¹⁶⁵ 註 159 を参照されたい。

¹⁶⁶ Cf. Ademollo 2011: 156.

には思われるからだ、そしてこれらの名前は、ギリシア語のようだ。というのは、「アナクス」[ἄναξ]（「支配者」）と「ヘクトル」[ἔκτωρ]（「所有者」）は、何かほとんど同じこと、すなわちその名前は両方とも王にふさわしいものであること、を表示しているからだ [ὁ γὰρ ἄναξ καὶ ὁ ἔκτωρ σχεδόν τι ταῦτόν σημαίνει, βασιλικά ἀμφοτέρα εἶναι τὰ ὀνόματα]。というのは、思うに、概してひとはその「支配者」であるようなものの「所有者」でもあるからだ。というのも、明らかにそのひとはそれを支配し、所有し、もっているからだ。それとも、わたしは無意味なことを言っていると君には思われるか、否むしろ、わたしは自分自身でも気づかずに間違っ¹⁶⁷て、名前の正しさについてのホメロスの考えの、いわば痕跡のようなものをつかんでいると思っているのだろうか。」

HE. 「いいえ、ゼウスに誓って、わたしにはそうは思われません。あなたはおそらく何かをつかんでいるのかもしれない。」 (393a1-b6)

ソクラテスはまず、「ヘクトル」と「アステュアナクス」の両方がホメロスによって作られた名前であることを示唆する。ソクラテスがそう考える理由は、「ヘクトル」が、「アステュアナクス」に近い、すなわち似ているという点にある。ソクラテスはその根拠を、双方が「何かほとんど同じことを表示する」[σχεδόν τι ταῦτόν σημαίνει] という点に見出す。「表示する」と訳した原語 σημαίνει の目的語にあたる σχεδόν τι ταῦτόν は、βασιλικά ἀμφοτέρα εἶναι τὰ ὀνόματα という infinitive clause によって補足説明される形となっている。この二つの名前が表示するものを特定するはずの infinitive clause が、この二つの名前への循環参照を含むことは、これまで多くの学者たちの混乱を招いてきた。Stallbaum は infinitive clause 全体を削除し、Hirschig もこれに従った。この読みは 20 世紀の編者たちには採用されなかったが、代わりに、幾人かの学者は無理に構文を変えて訳出しようとした¹⁶⁸。Ademollo は、『クラテュロス』の他の多くの箇所、σημαίνω という動詞が ‘that’-clause を伴って用いられている点に着目し (399c; 413e; cf. 395ab; 415cd; 419a; 437ab)、ソクラテスは「名前が表示するもの」を、名前の指示対象ではなく、むしろ「名前が、その語源分析を通して伝える、指示対象についての情報的内容」と見做していると分析する¹⁶⁹。確かに、Ademollo が言うように、名前が「表示する」と言われるものは、名前の指示対象ではない。だがそれは、いま問題となっている infinitive clause が、「ヘクトル」と「アステュアナクス」という兩名への循環参照を含むからというよりもむしろ、βασιλικά という形容詞が、この二つの名前のそれぞれの指示対象——すなわち、ヘクトルとアステュアナクス——に共通の属性——すなわち、“王にふさわしい”という属性——を表すからである。実際、少し後で「ヘクトル」と「アステュ

¹⁶⁷ λανθάνω καὶ ἐμαυτὸν οἰόμενος (b2): 『ソフィスト』 234b を参照する de Vries 1955: 293-4 の訳に従った。

¹⁶⁸ たとえば、Reeve は ‘since both are names for a king’ と訳出している (1998)。

¹⁶⁹ Ademollo 2011: 157-159.

アナクス」の事例が再度参照される際、この二つの名前が「表示する」ものは、*ταυτόν* 一語で示されており（「同じものを表示する」*[ταυτόν σημαίνει 394c1]*）、*ταυτόν* は、そこで、*βασιλικά* を直接受けると考えるのが自然である。同様に、「イアトロクレス」と「アケシムプロトス」は“医者にふさわしい”*[ιατρικά 394c6]* を「表示する」と言われる。このように、*σημαίνω* という動詞は、対象の属性を表す形容詞を単独にとる形でも用いられている。

そうすると、名前が表示するものは、本質的に、任意の形容詞によって示される、対象の任意の属性であることになる。それを定式化すると、次のようになる。

(1) 「X」が「Y」を表示する *[σημαίνει]* は、「X」が X の任意の属性を表示する」に等しい。

名前が「表示するもの」は、指示対象の任意の属性であることは確認されたが、名前はいかにして指示対象の任意の属性を表示するのだろうか。

ソクラテスは、「ヘクトル」と「アステュアナクス」がそれぞれ、*ἔκτωρ*（所有者）と *ἄναξ*（支配者）という構成要素を通じて、“王にふさわしい”という属性を表示すると言っているように見える。一見それぞれ異なる外延をもつ語ないし概念に見える「所有者」と「支配者」が、ともに“王にふさわしい”という同一の属性を特定することを、ソクラテスは、「概してひとは、何かの「支配者」であれば、その「所有者」でもある」という前提に基づいて説明する。

ソクラテスは「息子が「市の支配者」——「アステュアナクス」——と呼ばれて正しい」ことの論拠を、「彼の父ヘクトルが市を守護した」という事実に求めるのではなく、「ヘクトル」という父の名前と「アステュアナクス」という息子の名前がともに“王にふさわしい”という同一の属性を表示するという意味論的説明に求めた。しかしながら、ソクラテス自身が「名前の正しさについてのホメロスの考えの、いわば痕跡のようなものをつかんでいる」（393b3-4）と述べるように、この説明は、検討中の問いに対する十分な答えを提供するものではない。なぜなら、この意味論的説明においても依然として、息子が父と同じ属性をもつことが、息子の名前の「正しさ」の前提となっているからだ。この前提が説明されない限り、検討中の問いは解明されない。

(5) 親と子の間の自然本性的類似性

ソクラテスは、「アステュアナクス」が父の名前「ヘクトル」と同一の属性——“王にふさわしい”——を表示する点に、この名前の「正しさ」を求めた理由を、次のように説明する。

SO. 「ともかくも正当なのだ、わたしに思われるところでは、ライオンから生まれたものをライオンと呼び、馬から生まれたものを馬と呼ぶことは。わたしは、馬から馬以外の何か別のものが、いわば怪物のごとく、生まれる場合を言っているのでは決

してなく、概して{何か}自然本性的に属する種から生まれたような場合のことを言っているのだ。もし馬が、自然本性的に牛の子であるものを、自然本性に反して生んだとしたら¹⁷⁰、仔馬ではなく仔牛と呼ばれなければならない。また、思うに、人間から、人間の子でないものが生まれる場合も、その生まれたものは人間と呼ばれてはならない。また木々も、その他すべてのものも同様である。それとも、君は同意しないか。」(393b7-c7)

Ademollo は、この一節が、「人間は人間を生む」というスローガンによって表現されるアリストテレスの原則 (Burnyeat が ‘The synonymy principle’ と呼ぶもの¹⁷¹) を喚起すると述べる。Burnyeat の説明によれば¹⁷²、『形而上学』第 7 卷第 7・8・9 章全体を貫く主題は ‘The synonymy principle’——「或る何かが生ずるとき、「生み出すもの」と「生み出されるもの」は形相において同じである」という原則——であり、この原則は、最初に①「自然による生成」(第 7 卷第 7 章 1032a24-25) について述べられ、それから②「技術による生成」(1032a32-b14) について述べられる(「自己偶発的生成」の問題は 1032a30-32 で言及されるが、その解決は延期される)。第 7 卷第 7・8・9 章は、第 9 卷第 8 章 1049b27 で前方参照され、そこにおいてこの原則は、より洗練された形で次のように提示される。

SP* およそ生成するすべてのものは、(a) 或るものに、(b) 或るものから、(c) 或るものによって生成するのであり、この最後の或るもの ((c)) は、これによって生成するその或るもの ((a)) と形相において同じものである。

SP*に従えば、「人間は人間を生む」は次のように説明される。まず、現実態において存在しているこの特定の間人 ((a)) は、その質料 ((b)) ——すなわち、可能態において、時間的に先に存在しているもの(精子) ——から生成するが、さらにそれ ((b)) よりも時間的に先に存在しているもの ((c)) ——すなわち、(a) と数的には異なるが、形相において同じ(=同種の)、現実的に存在しているもの——があり、(c) によって(a) は生成する。

確かに、Ademollo が指摘するように、アリストテレスもまた、プラトンと同様に、親 ((c)) と子 ((a)) の関係を「後者は前者と同じ名前をもっている」という点から説明する (1033b29-1034a2; 1034a21-23; 1034b4)。しかし、説明形式は一見同じに見えても、その内実は双方にお

¹⁷⁰ Hirschig, Méridier, Ademollo に従い、Ast と Stallbaum による $\mu\acute{o}\sigma\chi\omicron\nu$ (c2) の削除を採用する。

¹⁷¹ アリストテレスは『形而上学』第 7 卷第 9 章 1034a2-b4 で $\acute{o}\mu\acute{o}\nu\omicron\nu\mu\omicron\varsigma$ (having the same name) を用いているが、第 12 卷第 3 章 1070a5 で、第 7 卷の第 7 章から第 9 章の内容が要約される際に、より一般的な $\sigma\upsilon\nu\acute{o}\nu\omicron\nu\mu\omicron\varsigma$ (of like name) の使用が取り戻される(修正される)という理由で、Burnyeat は ‘The synonymy principle’ という呼称を用いると説明している (2001: 33 n.59; cf. 35 n.65)。Ross (1924: 192) によれば、アリストテレスはときに $\acute{o}\mu\acute{o}\nu\omicron\nu\mu\omicron\nu$ と $\sigma\upsilon\nu\acute{o}\nu\omicron\nu\mu\omicron\nu$ の間の区別を無視するが、そのような区別は普通のギリシア語の用法には存在しなかったとされる。

¹⁷² Burnyeat 2001: 29-38.

いて著しく異なる。アリストテレスにおいて、SP*は、事物の生成や存在の説明として、プラトンのアイデアを指定することが無意味ないし無用であることを示す目的で提示されるが(1034a2-5)、『クラテュロス』の目下の一節で問題とされているのは、事物の生成や存在のあり方の如何ではない。もし目下の一節が事物の生成や存在のあり方の説明を与えるものであるとしたら、極めて不合理な説明を与えていることになるだろうが¹⁷³、そうした批判は的を得たものではない。

問題は、「同じ名前」ということが何を意味するかにある。この問題を考察するにあたり、「X から生まれたもの (Y) は、X と同じ名前と呼ばれなければならない」という原則（以下、この原則を P と略記する）が、393c8-d1 と 394a1-7 で、王や美しい者、その他すべてのものに適用されることを念頭に置いておく必要がある。つまり、P は、親と子の間の関係のみならず、おおよそすべてのものに適用可能な原則として導入されたのである。この点を踏まえて、まずは、P が、何を説明するものであるのかを見ることにしよう。目下検討中の問いは、次の問い——すなわち、なぜ「アステュアナクス」の方が「スカマンドリオス」よりもヘクトルの息子の、より正しい名前であるのかという問い——であるため、P は、この問いに何らかの仕方で応答していることになる。ソクラテスは、これまでの議論で、この問いに次のような説明を与えてきた。

「アステュアナクス」(子の名前)は「ヘクトル」(親の名前)と同一の属性——“王にふさわしい”——を表示する。

この説明は、「アステュアナクス」の正しさの説明として、まだ不十分である。なぜなら、子が親と同一の属性を有する必然性はないからだ。この説明が十全なものであるためには、子が親と同一の属性を有することが、自然の原則のようなものとして、予め前提されている必要がある。それを定式化すれば、次のようになる。

P* 子は親と、自然本性的に、同一の属性を有するか、同一の「種」[γένος 393c1] に属する。

P*に従い、先の説明は、次の原則によって裏づけられることができる。

ヘクトルの息子は父ヘクトルと、自然本性的に、同一の属性——“王にふさわしい”——

¹⁷³ Ademollo は、目下の一節の中に、‘Restricted Principle of Synonymical Generation’と呼ぶ原則——「もし X が K という種に属しており、X が Y を生むなら、物事の自然の成り行きで、Y もまた‘K’と呼ばれなければならない。しかしながら、もし Y が怪物であり、K ではなく別の異なる種、たとえば H に属しているとしたら、Y は‘K’ではなく‘H’と呼ばれなければならない」という原則——を見出し、この原則が、K が王である場合に拡張されるのを誤りと見做す(2011: 160-162)。

一をもつ、あるいは、同一の種——〔王〕——に属する。

「アステュアナクス」がヘクトルの息子の、より正しい名前であることの説明は、P*の導入でもって完了したかに見えるが、実際には、そうでない。まだ残されている問題は、「同じ名前」ということの意味と密接にかかわっている。以下で、その問題を見てゆくことにしよう。

(6) 名前の正しさと、名前を構成する文字と音節の間の関係構造

ソクラテスは、ヘルモゲネスの誤解を招かないように、次の点に注意を促す。

SO. 「よく言ってくれた。しかし、わたしが何らかの仕方で君を誤らせることのないように、わたしを見張ってくれたまえ。というのは、同じ言論に従うと、概して王から何かが生まれた場合、{そのものは} 王と呼ばれなければならないからだ。だがもし {二つの名前が} 相互に異なる音節の中で同一のものを表示する [τὸ αὐτὸ σημαίνει] としても、何の問題もない。また、何か文字がつけ加えられていたり、あるいは取り除かれたりしていても、これもまた何の問題もない——事物のあり方が、名前の中に明示されて支配的である限りは [ἕως ἄν ἐγκρατῆς ἢ ἡ οὐσία τοῦ πράγματος δηλουμένη ἐν τῷ ὀνόματι].」

HE. 「どのような意味でそうおっしゃるのですか。」

SO. 「何も複雑なことではない、ちょうど字母に関するようなことなのだ。君が知っているように、われわれは字母そのものではなくそれらの名前を言う、ε と υ と ο と ω の四つ以外は。また、君が知っているように、その他の母音字と子音字をわれわれは言う、それらのまわりに他の文字を置き、名前を作りながらね。しかし、われわれがその字母の力を——それが明示されるように——{名前の中に} 置く限りは、その字母をわれわれに明示するであろうかの名前でもって {その字母を} 呼ぶことは正しいのである [ἕως ἄν αὐτοῦ δηλουμένην τὴν δύναμιν ἐντιθῶμεν, ὀρθῶς ἔχει ἐκεῖνο τὸ ὄνομα καλεῖν ὃ αὐτὸ ἡμῖν δηλώσει]. たとえば、「ベータ」[Βῆτα] だ。君が見ているように、η と τ と α がつけ加えられているけれども、{そのことは} 法習制定者がその本性を明示することを欲していたところのかの字母の本性を、その名前全体で明示することを妨げない¹⁷⁴。{法習制定者は} これほど見事に知っていたのだ、名前を文字につけるすべを。」

¹⁷⁴ οὐ βούλετο ὁ νομοθέτης (e7-8) に関して、二通りの読みが可能である。一つは、εβούλετο の目的語に τὴν φύσιν δηλῶσαι を読むもので、Ficino と Ademollo が採用する読みである。もう一つは、οὐ の属格を先行詞 ἐκείνου τοῦ στοιχείου の attraction と解し、εβούλετο の目的語に δηλῶσαι だけを読むものである。Fowler など、多くの訳者がこの読みを採用する。文脈上、法習制定者が明示するのを欲するものは、「字母の本性」であると考え、前者の読みを採用した。

HE. 「あなたは真実を言っていると、わたしには思われます。」 (393d1-e10)

「同じ言論」(393c9) とは、「人間は人間を生む」をめぐる言論のことである。王への言及から、「アステュアナクス」という名前の正しさについて、まだ論じられねばならない点が残されていることがわかる。それは、「Y が X と「同じ名前」で呼ばれる（あるいは、「同じ名前」をもつ）」ということと、Y と X を構成する文字と音節の多様性との間の関係にかかわる。まず、393c8-d5 の一節が、原則 P と、それと対置される文字の多様性とその許容条件の三つの部分から構成されている点に着目しよう¹⁷⁵。

P 「X から生まれたもの (Y) は、X と同じ名前と呼ばれなければならない」

A 二つの名前が相互に異なる音節の中で同一のものを表示するとしても、何の問題もない。

B 何か文字がつけ加えられていたり、あるいは取り除かれていても、何の問題もない。

A・B が成立する条件：

C 事物のあり方が、名前の中に明示されて、支配的である。

「王から何かが生まれた場合、{そのものは} 王と呼ばれなければならない」(393c9-d1) が P の一例として挙げられている点に鑑みれば、P/ A・B/ C は、全体として、「アステュアナクス」の正しさを説明するものであると考えられる。したがって、X と Y に、それぞれヘクトルとアステュアナクスを代入して検討することにしよう。

まず P は、一見すると、ヘクトルの息子を「王」(‘King’) という名前と呼ぶ(つまり、「王」と名づける) というようなことを言っているように見えるが、実際は、そうでない¹⁷⁶。「同一」という点に着目すると、先行議論では(98-99 頁参照)、*βασιλικά* という形容詞で表される属性(“王にふさわしい”)が、「アステュアナクス」と「ヘクトル」という二つの名詞が表示する「同一のもの」とされていた。そうすると、ここで言及される王 [*βασιλεύς*] は、“王にふさわしい”という形容詞と互換的であり、「王」という名前ではないことになる。それは、むしろ王という「種」ないし「属性」を表す。それゆえ、「王から何かが生まれた場合、{そのものは} 王と呼ばれなければならない」という一文は、「王から生まれたもの(へ

¹⁷⁵ 393d1-5 は、全体として、*ἕως* に導かれる条件節と、二つの主節からなる。後者はそれぞれ *εἰ* に導かれる条件節を含む条件文となっている

¹⁷⁶ Pace Ademollo (2011: 162). Ademollo は、ソクラテスが、固有名と一般名の間での区別にかかわる過ちを犯しているとは指摘している。

クトルの息子)を“王にふさわしい”と形容する¹⁷⁷”という意味に理解されることができる。

二つの名前が表示する「同一の属性」に対置されるのが、それぞれの名前を構成する文字と音節の「多様性」である。この論点は、AとBによって説明される。

Aの要点は、名前は異なる文字および音節から構成されることができるということである(以下、この論点を「名前を構成する文字の多様性」と明記する)。この論点は、確かに、389d-390aを喚起する。第二章第五節で述べたように、Ademollo以外のほとんどの学者が、目下の一節と、「名前の形相」に関する389d-390aとを区別せずに読んだ。しかし、Ademolloが分析するように¹⁷⁸、両節は次の点で決定的に異なる(便宜上、「名前の形相」に関する一節389d-390aをE節、目下の一節をD節と略記する)。

1. E節では、異なる言語の名前が問題となっている。
D節では、同じ言語に属する名前が問題となっている。
2. E節では、(異なる言語間の)二つの名前が、それぞれ異なる文字と音節の中で、同じ一つの形相を具現化する可能性が論じられている。
D節では、(同じ言語に属する)二つの名前が、それぞれ異なる文字と音節の中で、同一の属性を表示する可能性が論じられている。

だが、最も重要な相違点は、次の点にあるとわたしは考える。それはすなわち、

3. E節では、名前と、その指示対象ないし外延との間の関係が論じられている。
D節では、名前と、それが表示する属性との間の関係が論じられている。

Bの要点は、名前は、任意の属性の表示に寄与する文字を欠いていたり、逆に、その表示に寄与しない文字がつけ加えられている可能性があるということである(以下、この論点を「名前を構成する文字の無関係性」と明記する)。この論点は、ほとんどのギリシア語の字母に当てはまる。なぜなら、たとえば‘Βῆτα’という字母の名前には、この名前が表示するもの——〈β〉——とは無関係の文字が三つ含まれているからだ。だが、この種の文字の無関係性は、ギリシア語の字母の名前だけではなく、多くのギリシア語の名前にも見られることが、のちの語源分析の中で示される。

名前を構成する文字の「多様性」と「無関係性」には、しかし、条件が設けられている。それを示すのが、ἐωςに導かれる条件節(C)である。名前は、「その中に事物のあり方が明示されていて、支配的である」という条件を満たす限りにおいて、それを構成する文字の多様性も無関係性も許容される。この条件は、慎重な理解を要すると思われるので、以下で詳

¹⁷⁷ 英語の call は‘describe ~ as’ (～を特徴づける、類型化する、形容する) という意味ももつ。

¹⁷⁸ Ademollo 2011: 164.

しく見てゆくことにする。

検討されねばならないのは、次の三点である。一点目は、「明示する」と訳出した原語 *δηλόω* が、語と対象との間のどのような関係に言及しているのかという問題である。この点は、「あり方」と訳出した原語 *οὐσία* が、対象のどの程度の属性を射程に収めているのかという、二点目の問題と密接にかかわるため、この二点は平行して論究することにする。三点目は、「支配的」と訳出した原語 *ἐγκρατής* が、この条件において、どのような役割を担っているのかという点である。

『クラテュロス』において、*σημαίνω*, *δηλόω*, *ἐνδείξομαι* の三つの動詞が、「語」と「それが表示するもの」との間の関係に言及する動詞として用いられている。しかし、それぞれの動詞が言及するその「関係」は、どれも一様であるわけではない。Ademollo によれば、*δηλόω* という動詞は、*σημαίνω* と同様、プラトンとアリストテレスによって使われる、語句とそれらが意味するものとの間の関係に言及する主要な動詞であるとされる¹⁷⁹。実際、*σημαίνω* という動詞は、語と、それが表示するものとの間の関係に言及し、その「表示されるもの」とは、概して形容詞で表される、対象の任意の属性であることを、われわれはこれまで見てきた。*ἐνδείξομαι* という動詞もまた、*σημαίνω* と同様に、語と、それが表示するものとの間の関係に言及すると考えてよい。この動詞は中動相で対格の目的語を伴う際、「(感情・性質・徴候など)を示す、表す」(*exhibit, display*)を意味する。『クラテュロス』では、394e11で「オレステース」[Ὀρέστης]もまた、彼の本性[φύσις]の“野獣のようで、野性的で、山岳的[ὄρεινόν]”性質をその名前で表しているので、おそらく正しいのだろう」という文脈で *ἐνδεικνύμενος* (中動相・現在形の分詞) が用いられている。また、一連の語源分析を終えたあとで、ソクラテスが「これまで述べてきたこと」として表明する次の主張(89頁参照)、

C⁴ 「名前の正しさ」とは、事物がどのようなものであるかを示すこと [*ἐνδείξεται οἷόν ἐστι τὸ πρᾶγμα*] である。

においても、この動詞の目的語は、事物の何らかの性質 [*οἷον*] である。

だがしかし、*δηλόω* は『クラテュロス』において、慎重な扱いを要する動詞である。Ademollo が分析するように、この動詞は、「内包」(*connotation*) と関係がある場合には、指示対象のもつ何らかの性質を表し(したがって、*σημαίνω* と互換的に用いられる)、他方、「外示」(*denotation*) と関係がある場合には、指示対象そのもの、つまり語の外延を指定する¹⁸⁰。この二つの用法の峻別は、極めて重要である。なぜなら、「内包」と「外示」を混同することは、語が表示する任意の属性を語の指示対象と混同することに他ならないからだ。「アステュアナクス」を例にとって考えてみよう。この名前が表示するものは“王にふさわしい”と

¹⁷⁹ Ademollo 2001: 165.

¹⁸⁰ Ademollo 2011: 165 n.49. Ademollo の解釈について賛同できない点については註 129 を参照されたい。

いう属性であるとされてきた。問題は、この“王（にふさわしい）”が、アステュアナクスの本性ないし本質に対応するものであるのかどうかにある。われわれはここで、“王（にふさわしい）”がどのような仕方で表示されたのかを振り返ってみる必要がある。「アステュアナクス」という名前は、語源的に「市」[ἄστυ]の「支配者」[ἄναξ]に分析可能である。そして、「ヘクトル」もまた、語源的に「所有者」を意味する。「支配者」と「所有者」は、そのどちらも「王」という種に属すると考えることができる。“王（にふさわしい）”という属性は、このようにして、「アステュアナクス」と「ヘクトル」のそれぞれの語源分析的意味が決定するものとして選び出された。それゆえ、「アステュアナクス」の指示対象——すなわち、アステュアナクス（ヘクトルの息子）——が、実際に、この“王（にふさわしい）”という属性をもっている必然性はない。もしもっていたとしたら、それは偶然に過ぎないことになるが、実際、アステュアナクスは、“王”という属性を顕すには至らなかった。なぜなら、トロイア戦争時にまだ乳飲み子だった彼は、トロイアの陥落とともに殺されてしまったからだ。そうすると、“王”という属性は、アステュアナクスの本性ないし本質でないどころか、実はアステュアナクスに当てはまらない属性であることになる。このことは、「X」が‘Y’を表示する仕方が「X」の語源分析にもうばら依拠することに因る。

このように、名前の語源から説明される、対象の任意の属性を表示する記述的内容が「記述的意味」(descriptive meaning or descriptive sense)と呼ばれるものである。そうすると、(1)は、次のように修正されることができる(100頁参照)。

- (1)* 「「X」が‘Y’を表示する [σημαίνει; δηλόω] は、「X」が、その記述的意味を介して‘Y’を表示する(=その記述的意味によって‘Y’を決定する)」ということの意味するため、それは、「X」がXの任意の属性(あるいは、Xにあてはまらない属性)を表示する」に等しい。

従来、「X」が表示するもの(σημαίνειの目的語)は、「X」の指示対象であるX——つまり、「X」の外延——であると誤って理解されたために、「記述的意味」は、「X」の「内包的意味」のようなものとして解されてきた。先の例に関して Sedley は、「記述的意味」が複数の語の間の「外延的同値」(extensional equivalence)を説明するとし、「支配者」と「所有者」は「内包的に」(intensionally)異なるが、それらの両方が〈王〉という同じ一つの外延を指定するのに成功すると分析している¹⁸¹。しかし、これまで見てきたように、「X」が表示するのは、概して形容詞で示されるような対象の何らかの属性であり(“王にふさわしい”、“医者にふさわしい”など)、「X」の外延では決してない。むしろそれが、「X」の「意味」ないし「概念」に相当すると言うことができよう。Ademollo は、「意味」という概念がまだ存在

¹⁸¹ Sedley 2003: 81-86. 二つの名前が表示するのは「内包的に」異なるが、同じ一つの「外延」を指定するという Sedley の解釈の誤りは、「名前の力」と「名前の形相」を同一視することに起因する。

しなかった古代において、語源分析が「意味」概念の出現と何らかの関係があると指摘している¹⁸²。この指摘が正しければ、われわれが現在「意味」と呼んでいるものは、次のような仕方
で現われたことになる。それはすなわち、同一のもの（子）につけられた二つの名前のうち
どちらがより正しいかという問いに対し、原則 P に従って、親の名前と同一の属性を
表示する名前の方がより正しいという仕方、いわば「二つの異なる名前が表示する同一の
もの」のようなものとして現われたということだ。しかし、これはいわゆる同義語の話では
ない。前述のように、二つの異なる名前が共通にどのようなものを表示するかは、それぞ
れの名前の語源分析から得られる記述的意味によって決定されるからだ。要するに、語の
「意味」は、語の「記述的意味」によって決定される仕方
で現われたのである。

以上の点を念頭に置いて、名前を構成する文字の多様性と無関係性に設けられた「条件」
を再度見てみることにしよう。名前を構成する文字の多様性や無関係性が許容されるた
めには、第一に、「事物のあり方が、名前の中に明示されて」[ἡ οὐσία τοῦ πράγματος δηλουμένη
ἐν τῷ ὀνόματι] いなければならない。ここで言われる「あり方」[οὐσία] とは、対象のど
の程度
の属性を射程に収めたものであるのだろうか。名前を構成する文字の多様性は、「アステ
ュアナクス」と「ヘクトル」という二つの名前を事例に導入された点であることは疑い
得ない。そうすると、目下の「あり方」とは、まさに“王にふさわしい”という属性——
ヘクトルの子には帰され得ない属性——を指すことになる。Sedley が言うように、
内包に対応する οὐσία は柔軟性のある概念であり¹⁸³、『クラテュロス』において、語の
対象の任意の属性を指す用語として用いられている。οὐσία が、プロタゴラスの「相
対性」とヘラクレイト斯的「流転性」と対極に置かれるものとして、「対象それ自身
の確固不動のあり方」という意味で用いられている箇所は、この対話篇において、
ごくわずかである (385e5; 386a4; 386e1; e3; 388c1; 423e1; e3; e8; 424b2)。したがって、
名前を構成する文字の多様性と無関係性が許容される条件とは、差し当たり、

C* 対象の任意の属性あるいは対象にあてはまらない属性が、名前の中に明示（表示）
されている。

という、極めて弱い条件であることになる。

次にわれわれは、対象の任意の属性ないし対象にあてはまらない属性が、いかなる
仕方
で名前の中、つまり名前を構成する文字と音節の中に明示されるのかという問題に向
かわねばならない。「アステュアナクス」の場合、“王にふさわしい”という属性は、
この名前を構

¹⁸² Ademollo 2011: 11-12.

¹⁸³ Sedley によれば、われわれのような日常の言語使用者による名前の使用においては、われ
われ
が相互に伝達し合うのは事物の取るに足らない様態であるが、教示の専門家——問答家
[διαλεκτικός] とも言われる——による使用においては、事物の「本質」(essence or reality) が
教示
され、伝達される (2003: 61)。

成する二つの音節——ἀστυ-ἀναξ——のうち的一方——ἀναξ（支配者）——の中に明示される。そうすると、C*は、さらに、

C** 名前を構成する文字および音節の中に、その名前が表示する属性を決定づける音声的要素が置かれている。

と、言い直されることができる。

一見すると、名前を構成する文字の多様性と無関係性が許容される「条件」は、C**ですべて説明され終えたように見える。実際、Ademollo は、「支配的」[ἐγκρατής] という表現が、この「条件」において、冗長であると述べる¹⁸⁴。Ademollo は、事物のあり方を明示する文字が「支配的であること」が、本質的に、その文字が名前の頭文字であることに存するという解釈を提示するが、この解釈はすぐに斥けられる。確かにほとんどのギリシア語の字母の名前は、その頭文字に、当の字母を表示する文字が置かれている（βῆτα, ἄλφα, γᾶμμα, δέλτα など）が、この説明があてはまらない他の多くの事例が存在するからだ。また、Ademollo は、βῆτα が β を意味し、βῆμα が a step を意味するという事実には、何も自然本性的なものは存在せず、この事実を説明するのは「規約」だけであると述べる。

念頭に置かれているのは、「σκληρότης の議論」と呼ばれる議論 (434b10-435d1) の結論であろう。この議論については第四章第三節で詳細に検討するため、ここでは、「支配的」という考えと関連があると思われる論点だけを示し、一考するにとどめる。ソクラテスは、「名前は、事物のあり方の、音声による模造品である」(423ce) という以前の観察を喚起し、「名前が事物の模造品であるためには、名前を構成する字母が、名前がその模造品であるところの当の事物との類似性をもっていなければならない」と言って、次のように続ける。

SO. 「それならば、いまやもう君も、さきほどヘルモゲネスが {わたしと} 共有していた論題を共有したまえ。言っておくれ、われわれがうまく言っているように君に思われるかを——ρ は (場所的) 運動と動きと硬さに似ていると。あるいは、われわれはうまく言っていないと {君に思われるか}。」

CR. 「うまく言っているようにわたしには思われます。」

SO. 「で、λ は、なめらかでやわらかいものと、たったいまわれわれが言っていたものどもに {似ている} のか。」

CR. 「はい。」

SO. 「さて、君は知っているか、同じものを指して、われわれは‘σκληρότης’ と言い、他方、エレクトリアのひとびとは‘σκληρότηρ’ と言うことを。」

CR. 「もちろんです。」

¹⁸⁴ Ademollo 2011: 166.

- SO. 「それでは、次のうちどちらだろうか、 ρ と σ の両方が同じものに似ており、{その名前は} 同じものを、かのひとびとに対しては語尾の ρ でもって、われわれに対しては語尾の σ でもって明示するのか、それとも、{その名前は} われわれのうちのどちらか一方にはそれを明示しないのか。」
- CR. 「{その名前は} 実際、両方のひとびとに対してそれを明示します。」
- SO. 「それは次のうちのどちらか、 ρ と σ がまさに似たものである限りにおいてか、それともそうでない限りにおいてか。」
- CR. 「{ ρ と σ が} 似たものである限りにおいて、です。」
- SO. 「では、{ ρ と σ は} あらゆる点で似ているのか。」
- CR. 「少なくとも、等しく¹⁸⁵ (場所的) 運動を明示している点では。」 (434b10-d6)

ギリシア語で〈硬さ〉を表す語は、アッティカ方言の $\sigma\kappa\lambda\eta\rho\acute{o}\tau\eta\varsigma$ と、エレクトリアのイオニア方言の $\sigma\kappa\lambda\eta\rho\acute{o}\tau\eta\rho$ の二つの語形がある。434c10-13 でのソクラテスの問いの意図は、従来、イオニア方言の語形の方が、語尾に ρ をもつことで〈硬さ〉を伝える文字を二つ (よって、アッティカ方言の語形よりも多く) 含んでいるために、アッティカ方言の語形よりも正しい名前であることを仄めかすことにある、と解釈されてきた¹⁸⁶。それに対して Sedley は、ソクラテスの問いの趣意は、イオニア方言の語形の語尾の ρ が〈硬さ〉を含意するという考えを無効にする (*disarm*) ことにあると反論した¹⁸⁷。

確かに、Sedley が分析するように、ソクラテスはこの問いの導入によって、イオニア方言の語形の語尾の ρ が、〈硬さ〉以外のものを表すように誘導した——語尾の ρ と σ の両方が同じものに似ているなら、イオニア方言の語形の語尾の ρ は、アッティカ方言の語形の語尾の σ と同様に〈動〉を表さなければならない (427a で、 σ は、強い氣息を伴って発せられる音であるため、突風——よって、〈動〉——を模倣すると言われていた。また、 ρ が〈動〉を表すことは、434c で、 ρ が運動および動きと硬さの両方に似ていることにクラテュロスが同意したことによって、確保されている)。ここで生じる問題は、無論、もし ρ と σ の両方が〈動〉を指すという点で似ているのなら、これは問題となっている事柄、すなわち〈硬さ〉の指示とは何の関係もないということである。しかしソクラテスはこの点に関してはこれ以上議論を進めず、問題のある別の側面、すなわち λ に焦点を当てる。

この短い議論が、「 $\sigma\kappa\lambda\eta\rho\acute{o}\tau\eta\varsigma$ の議論」全体においてどのような意味をもっているのか、一

¹⁸⁵ ἴσως (d6) に関して、Ademollo は、この副詞の位置が、ここでの意味が「等しく」であることを示唆していると述べる (2011: 393 n.19)。Sedley も同様に「等しく」と訳出している (2003: 143)。

¹⁸⁶ Schofield 1982: 74-75; Barney 2001: 124. $\sigma\kappa\lambda\eta\rho\acute{o}\tau\eta\varsigma$ という語形においては、 λ は ρ とちょうど同じ頻度で存在するという事実について、Schofield は、その二つの流音は互いに打消し合い、音素のまとまりに硬さもしくはその反対を指す特定の傾向を残さないと考える方が合理的であると述べる。

¹⁸⁷ Sedley 2003: 143.

見したところ、判然としない。しかし、ソクラテスがわざわざイオニア方言の σκληρότηρ という語形を議論に持ち込んだのには何らかの意図があったと考えられる。理解の鍵は、語の地域的多様性という点にある。Sedley は、「ヘスティア」[Ἑστία] (401c1-d7) という名前が、一方で、ギリシア語のアッティカ方言の語形 ἐστία においては「実在」[οὐσία] と関連づけられ、他方、ドリス方言の語形 ὠσία (ὠθεῖν、「押すこと」の派生名詞) においては「動」と「変化」に関連づけられる点に着目し、語の地域的多様性は、語が表すものの総体についてのわれわれの理解を豊かにすると述べる。このことは、見方を変えれば、同一のものが、地域的に異なる意味内容をもつ異なる語形で呼ばれることを許容する。「硬さ」という名前の場合も、同様に、イオニア方言の語形は、語尾に ρ を余分にもつことによって、〈硬さ〉と反対の性質である〈やわらかさ〉を模倣する文字 λ に、二対一の比率で数的に勝るがゆえに、結局のところの〈硬さ〉がこの語において支配的であると考えることは可能である。

「イオニア方言の語形の語尾の ρ が〈硬さ〉を含意するという考えを無効にする」ということで Sedley が言おうとしているのは、まさにこの考えを前もって排除する、ということなのである。

だが、語の地域的多様性という考えの最も重要な点は、名前がどのような文字から構成され、どのような意味内容をもつかは「規約」によって決定されるということである。C**に照らしてみると (107 頁参照)、イオニア方言の語形 σκληρότηρ を構成する文字および音節の中には、この語が表示するものを決定づける音声的要素が二つ置かれている。だが、もし語尾の ρ が σ と同一のもの——すなわち、〈動〉——を指すとすれば、この語の中には、〈硬さ〉を表示する ρ が二つ置かれていながら、そのうちの一方 (語尾の ρ) はその機能を発揮していないことになる。これは言い換えれば、語尾の ρ は、この語の中で、支配的でないということである。ここで重要なのは、語尾の ρ が〈硬さ〉を指すか、それとも〈動〉を指すかを決定するのは「規約」であるということだ。後で詳述するが、「σκληρότης の議論」の結論、すなわち、

名前は、「規約」と、文字と対象との間の「(音声的) 類似性」の助けを借りて、対象を指示するが、類似性よりも規約性の方に比重が置かれる。

という結論に鑑みれば、この短い議論の目的は、文字と対象との間の本性的関係は、規約に依拠する仕方ではしか確保され得ないことを示すことにあったと考えられる。

以上の考察から、「支配的」という考えについて次のことが明らかにされた。それはつまり、名前を構成する文字と音節の中に、その名前が表示するものを決定づける音声的要素が置かれているとしても、その音声的要素は必ずしもその表示に寄与するわけではないということだ。その音声的要素がそれ自身の機能を発揮するか否かは、規約の問題なのである。

そうすると、C**は、さらに次のように言い直されることができよう。

C*** 名前を構成する文字および音節の中に、その名前が表示する属性を決定づける音声的要素が置かれており、かつ、その音声的要素がその表示に寄与する。

これが、名前を構成する文字の多様性と無関係性が許容される「条件」である。ここで、何のためにこの「条件」が設けられたのかを振り返って見てみよう。この「条件」は、「アステュアナクス」という名前の正しさについて、まだ論じられずに残されている点を吟味するために導入された（102頁参照）。ソクラテスは、まず、原則 P から、

王から何かが生まれた場合、そのものは王と呼ばれなければならない。

を導出し、続いて以下の二つの論点、

- A 二つの名前が相互に異なる音節の中で同一のものを表示するとしても、何の問題もない。
- B 何か文字がつけ加えられていたり、あるいは取り除かれていても、何の問題もない。

を導入する。

ソクラテスが A・B を議論の俎上に載せたのは、二つの名前が表示する属性の「同一性」と、それらの名前を構成する文字の「多様性」とを明確に区別するためである。この「多様性」は、名前が条件 C*** を満たす限りにおいて、許容される。先に、「王から何かが生まれた場合、そのものは王と呼ばれなければならない」という一文は、「王から生まれたもの（ヘクトルの息子）を“王にふさわしい”と形容する」という意味に解釈されねばならないと言った理由が、いま明らかにされた。もしこの一文を、「ヘクトルの息子を「王」という名前と呼ばなければならない」という意味に解釈するなら、ソクラテスはここで、次の二つの区別、

二つの名前の指示対象——すなわち、外延——の同一性
それらの名前を構成する文字の多様性

を設けたことになる。実際、ほとんどの学者がこう解釈してきたが、この解釈の問題点は、「語の外延が、語の記述的意味によって決定される」という考え、言い換えれば、世界のあり方が、語の記述的意味を無条件に基準として決定されるという考えを、ソクラテス自身に帰すことにある。ソクラテスが実際に設けたのは、次の区別、

二つの名前が表示する属性——すなわち、「(内包的) 意味」——の同一性

それらの名前を構成する文字の多様性

である。これまで見てきたように、「(内包的) 意味の同一性」は、記述的意味にもつばら依拠するため、語と対象との間の自然本性的関係を確保するものではない。確かに、「(内包的) 意味」の存在は、『クラテュロス』において、明示的に語られているわけではなく、その存在身分も定かでない。しかし、σημαίνει という動詞によって、語と対象との間に第三の要素が設けられたことは疑い得ない。この仲介物の存在は、「名前の正しさ」の探求の過程で、「正しさ」の説明根拠として要請されたため、外的事物の本来的なあり方を主張するものでは決してないということに留意を促しておきたい。

(7) 「名前の力」

ソクラテスは続けて次のように言う。

SO.「それでは、王についてもまた同じ言論が{あてはまるのではないか}。というのも、王から王が将来のあるときに生まれるだろうからだ。そして善い{ひと}から善い{ひと}が、美しい{ひと}から美しい{ひと}が、その他すべてのものも同様であり、それぞれの種から同じ種{に属する}別のものが生まれるだろう、もし怪物が生まれるのでなければ。だから{それらは}同じ名前と呼ばれなければならない。だが、音節の点での多様性は許容される、それらは同じものでありながら、素人には、相互に異なるものであるように思われるほどに。ちょうど、医者薬が、同じものでありながら、色と匂いの点で多彩に色どられているため、われわれには相互に異なるものに見えるが、他方、医者にとっては——薬の力を考察しているため [τὴν δύναμιν τῶν φαρμάκων σκοπούμεν]——同じものに見え、つけ加えられているものによって驚かされないのと同じように。同様に、おそらく、名前について知っているひとまた、名前の力を考察するだろう [καὶ ὁ ἐπιστάμενος περὶ ὀνομάτων τὴν δύναμιν αὐτῶν σκοπεῖ]、そして、もし何か文字がつけ加えられていたり、置き換えられていたり、取り除かれていても、あるいは名前の力 [ἢ τοῦ ὀνόματος δύναμις] がまったく異なる文字の中に置かれている場合でさえ、驚かされないだろう。」(394a1-b7)

ソクラテスは、原則 P——「X から生まれたもの (Y) は、X と同じ名前と呼ばれなければならない」——を再度持ち出すが、ここにおいて、P が善いひとや美しいひと、その他すべてのものに適用されることに注目する必要がある (102 頁参照)¹⁸⁸。P が適用される範囲が

¹⁸⁸ Ademollo (2011: 168-169) によれば、ソクラテスはここで、PSG (173 頁参照) が善や美や他の任意のものに適用可能であることを主張するが、a2-3 での三つの事例は、そのどれ一つとして自然種にかかわるものではなく、自然の経過で K が他の K を生むという原則が適用されるも

拡張されたのに伴い、名前を構成する文字の多様性と無関係性についての説明にも、いくつかの修正ないし新しい論点を加えられた。以前の説明では、

- 二つの名前は、一方で、文字と音節の点では異なるが、他方、「同一のものを表示する」。

とされていた。今回の説明では、

- * 複数の名前は、一方で、文字と音節の点では異なるが、他方、「同じものである」。それゆえ、素人には、相互に異なるものに見える。

とされている。○*は、「薬」と類比的に説明されており、そのアナロジーにおいて、「力」[δύναμις] という概念が極めて重要な役割を担う。繰り返し述べるように、「名前の力」は「名前の形相」と全く異なる概念であり、そのことは、それぞれが相互に異なるもの——「薬」と「椽」——と類比される点からも明らかである。色と匂いという描写に現れているように、ここで「薬」と言われているのは、主に植物や食べ物のことである。色や匂いなどの外面的な要素の点では異なるが¹⁸⁹、「力」の点では同じであるという考えは、テオフラストス『植物誌』第9巻第19章第4節の次の記述に見られる¹⁹⁰。

「根や実や液汁の本性は多くのさまざまな力[δυνάμεις] をもっており、中には同じ力を持ち、同じ結果をもたらすものもあれば[ῥῶσαι ταὐτὸ δύνανται καὶ τῶν αὐτῶν αἰτίαι]、正反対の結果をもたらすものもある。それゆえ、ひとは、ひよっとしたらほかの事例にもあてはまるかもしれない疑問を抱くだろう、それはすなわち、同じ結果をもたらすのはただ

のでもなく、したがって、それらはすべて誤りであるとされる。原則 P を、アリストテレスの原則 (Burnyeat が ‘The synonymy principle’ と呼ぶもの) と関連づけて理解することは、原則 P で何が問題とされているのかを見誤ることにつながる。原則 P で問題とされているのは、一貫して、「意味論的同値」である (厳密には、「親子関係にある二つの名前の間の自然本性的な意味論的同値」から「複数の名前の間の意味論的同値」への展開が見られる)。

¹⁸⁹ テオフラストス『植物誌』第9巻第13章第1節によれば、根には味にも匂いにも相違があり、一方で、味には刺激的なものもあれば苦いものもあり、甘いものもあり、他方、匂いには、快いものもあれば、きついものもあるとされる。また、色の相違は、根や実や葉などの部分について、多くの箇所でも述べられている。

¹⁹⁰ テオフラストスは『植物誌』第1巻第1章第1節の冒頭で、「植物相互の違いやその本性については、植物それぞれの部分、性質、発芽、生長・衰退の過程にわたって把握する必要がある」と述べている。大槻・月川の解説によれば、「性質」と訳出された[πάθη] は受動的な意味、すなわち環境によってかわる習性のようなものを意味し、他方、δυνάμεις (能力、性能、性質を意味する) も「性質」であるが、後者は能動的な意味に用いられることが多いとされる (1988: 19 n.3)。ヒポクラテスは、食べ物と食事療法が患者にもたらす作用について延べている (Περὶ διαίτης 2.39)。

一つの力 [δύναμιν] によるのか、それとも異なる力からも同じ結果が生じることが可能であるのかどうかという疑問である。」

Ademollo は、この箇所を、一般的見解と対比される過激な見解として引用している¹⁹¹。「一般的見解」とは、Ademollo によれば、

二つの調整薬品 A と B が、一つの同じ物質 X（たとえば、或る植物の液汁）を基本構成要素とし、異なる添加物（色や匂いの相違の原因となるもの）を含むが、同じ効果をもたらす場合、A と B は、実際には、一つの同じ薬として数えられる。

これに対して、テオフラストスに帰される「過激な見解」とは、Ademollo によれば、

二つの調整薬品 A と B が、異なる添加物ないし異なる基本構成要素 X と Y を含むが、同じ効果をもたらす場合、A と B は、一つの同じ薬として数えられる。

テオフラストスに、この「過激な見解」を帰することができるのかどうかは疑問である。確かに、テオフラストスは、引用箇所、外面的には相互に異なる複数の植物が「同じ力をもつ」、すなわち「同じ効果をもたらす」と言っているが、それらの植物が「同じ一つの薬」として数えられるとは言っていない。むしろ、テオフラストスは第 9 巻第 12 章第 3・4・5 節で、色や匂いや形と、効能の点で相互に異なる複数の植物が「メコン」という同一の名称で呼ばれているという事例を報告している¹⁹²。引用箇所、テオフラストスは、「複数の植物 A・B・C...が、色や匂いなどの点で相互に異なる物質 X・Y・Z...（苦い味のする根や白い葉や太い実など）を基本構成要素とし、同じ効果をもたらす場合、A・B・C...を「一つの類」に分類できるのかどうか」という疑問を呈し、さしあたり、この問題を提出しておくにとどめると明記している。それゆえ、「過激な見解」全体をテオフラストスに帰することはできない。

「同じ一つの薬」という考えは、テオフラストスの中に確認できないが、少なくとも「同じ力」をめぐるテオフラストスの思索にはソクラテスと共通するものがある。Ademollo は、ソクラテスの考えを理解するにあたり、「一般的見解」と「過激な見解」の両方の可能性を提示するにとどめるが、その判断を曖昧にしておくことはできない。なぜなら、双方は、本

¹⁹¹ Ademollo 2011: 170 n.61.

¹⁹² 「メコン」と呼ばれるさまざまな植物の中で、次の三つの種が紹介されている。「ケラティティス」と呼ばれる種：[①諸部分の特性] 葉は黒いプロモスのようであり、根は太くて浅く張っており、実は曲がっていて、小さな角のようである。[②効能] 胃を浄化する。「ロイアス」と呼ばれる種：①花は赤く、頭花は指の爪ほどの大きさである。②下半身を浄化する。「ヘラクレア」と呼ばれる種：①葉は亜麻布を漂白するサボンソウのようである。根は細く、浅く張り、実は白い。②根は下半身を浄化する。これら三つの種は外面的な特性においても、効能においても、それぞれ異なっているが、同一の名称で呼ばれている。

質的な点で大きく異なるからだ。

「一般的見解」と「過激な見解」の間の本質的な相違は、次の点にある。それはすなわち、「複数の植物 A・B・C...が、色や匂いなどの点で相互に異なる物質 X・Y・Z...（苦い味のする根や白い葉や太い実など）を基本構成要素とし、同じ効果をもたらす場合、その原因を、

- a) A・B・C...のそれぞれが、一つの同じ物質——X であれ Y であれ Z であれ——を基本構成要素とすること

に見出すか、それとも、

- b) A・B・C...はそれぞれ異なる物質 X・Y・Z...を基本構成要素とするが、X・Y・Z...が一つの同じはたらきをすること

に見出すか、にある。ソクラテスの立場は、テオフラストスと同様に、b である。問題とされているのは、「同一の力」と言われるものの存在身分である。Ademollo が a の可能性を残すのは、名前の場合、「記述的意味」（薬の場合、X・Y・Z...に相当する）に同一性を見出すからであると考えられるが、これまでの議論では、「同一」とされるのは、親子関係にある二つの名前（「アステュアナクス」と「ヘクトル」）のそれぞれの記述的意味（「市の支配者」と「所有者」）によって決定される一つの同じ属性（“王”）であった。そうすると、名前と薬のアナロジーにおいて導入された「力」という概念は、一方で、薬の場合、

複数の植物 A・B・C...が、色や匂いなどの点で相互に異なる物質 X・Y・Z...（苦い味のする根や白い葉や太い実など）を基本構成要素とし、同じ効果（たとえば、胃の浄化）をもたらす場合、X・Y・Z...に共有される同一のはたらき（胃の浄化作用）が「力」と呼ばれる。

類比的に、名前の場合、

複数の名前 A・B・C...が、文字や音節の点で相互に異なる「記述的意味」X・Y・Z...から構成され、同じものを表示する場合、X・Y・Z...に共有される同一のはたらき（意味作用）が「力」と呼ばれる。

と定義されることができる。

(8) 複数の名前間の意味論的同値

次に、名前と薬のアナロジーおよび「力」という概念の導入が、『クラテュロス』全体に

においてどのような意義をもっているのかを見ることにしよう。「力」について以上に見てきたことは、ソクラテスによって再度「アステュアナクス」と「ヘクトル」を例にして説明される。

SO. 「それはちょうどたったいまわれわれが言っていたこと、すなわち「アステュアナクス」と「ヘクトル」に関するようなことだ。それらは、τ以外は、同じ文字を一つもっていない、しかしそれでも同じものを表示する。そして、「アルケポリス」は何の文字を共通にもっているのか。だがそれでも、同じものを明示している。そして、他にも、“王”以外の何も表示しない多くの名前が存在する。そして、他のものはまた“将軍”を{表示する}、たとえば「アギス」と「ポレマルコス」と「エウポレモス」だ。そして別のものは“医者にふさわしい”を{表示する}、「イアトロクレス」と「アケシムブロトス」だ。そしておそらくわれわれは、音節と文字の点では不協和であるが、力の点では協和している¹⁹³別の多くの名前を見つけることができるだろう。そのように見えるかどうか。」

HE. 「もちろん {そう見えます}。」 (394b7-d1)

ソクラテスは、三つのグループの名前を取り上げる。

- ① “Ἐκτωρ” ‘Ἀστυάναξ’ ‘Ἀρχέπολις’
- ② ‘Ἄγις’ ‘Πολέμαρχος’ ‘Εὐπόλεμος’
- ③ ‘Ἰατροκλῆς’ ‘Ἀκεσίμβροτος’

「名前の力」についての考察に基づき、①～③に属する名前はそれぞれ、文字と音節の点では相互に異なるが、「力」の点では「同じもの」を表示するとされる。

- ① “Ἐκτωρ” ‘Ἀστυάναξ’ ‘Ἀρχέπολις’: “王” を表示する
- ② ‘Ἄγις’ ‘Πολέμαρχος’ ‘Εὐπόλεμος’: “将軍” を表示する

¹⁹³ τῆ δὲ δυνάμει ταῦτὸν φθεγγόμενα (c8-9): φθεγγόμενα がここでなぜ使われているのか、疑問である。実際、この表現はこれまでさまざまに訳出されてきた (Dalimier ‘qui rendent des bruits vocaux de valuer identique’; Méridier ‘qui ... disent, pour ce qui est de la valuer, la même chose’; ‘which ... express the same meaning’ Fowler; ‘which have the same force or power when spoken’ Reeve)。Dalimier だけが唯一「同じ音を発する」という字義通りの訳を与えているが、Ademollo が指摘するように、目下の箇所ではソクラテスは、「音声の点での相違」と「力の点での同一」を対比しているのだから、「力の点で、同じ音を発する」とするのは文意に沿わないように思われる。差し当たり、Ademollo の採用する Ficino の解釈と訳が、最も妥当であると思われる。Ficino は、ταῦτὸν φθεγγόμενα が音楽のメタファーを含意しており、それは直前の διαφωνοῦντα (c8) によって導入されると解釈する。この解釈に従い、Ademollo は c7-9 を次のように訳出している: ‘discordant in thier syllables and letters, but consonant with regard to their power.’

③ ‘Ἱατροκλῆς’ ‘Ἀκεσίμβροτος’: “医者にふさわしい” を表示する

これまで見てきたように、名前が表示するものは、名前の記述的意味によって決定される。ソクラテスはここでこれらの名前の語源分析を行っていないが、①～③に属する名前はそれぞれ、概ね次のように分析することができよう。

- ① “Ἐκτωρ” 「所有者」、‘Ἀστυάναξ’ 「市」[ἄστυ] の「支配者」[ἄναξ]、‘Ἀρχέπολις’ 「国家」[πολις] の「統治者」[ἄρχων]
- ② ‘Ἄγις’ 「指導者」、‘Πολέμαρχος’ 「戦争」[πόλεμος] の「長」[ἄρχων]、‘Εὐπόλεμος’ 「戦争」[πόλεμος] 「上手」[εὖ]
- ③ ‘Ἱατροκλῆς’ 「医者ないし外科医」[ιατρός] として「有名な」[κλέος]、‘Ἀκεσίμβροτος’ 「死すべき人間」[βρότος] の「治療」[ἄκεσις]

これまで、①～③を事例とする「名前の力」についてのソクラテスの説明に関して、二つの異なる解釈が提示されてきた。一つは、Heitsch と Sedley によって提示されたもので¹⁹⁴、Ademollo が「フレーゲ的」解釈（‘Fregean’ interpretation¹⁹⁵）と呼ぶものである。彼らの解釈の要旨は、2点ある。一つは、①～③で挙げられているのは「個人名」であるが、実際には、それらは個人ではなくタイプを選び出すために選択されている（要するに、①～③の名前は「固有名」ではなく、実際には「一般名」として解釈されるよう意図されている）という点である。もう一つは、①～③のそれぞれのグループに属する名前は、異なる文字と、異なる（語源分析的）意味をもつが、同一の指示対象をもつという点である。たとえば、Sedley は、「アギス」[Ἄγις] と「エウポレモス」[Εὐπόλεμος] に関して、双方は「指導者」と「戦争上手」という異なる内包的意味をもちながら、同一の外延——〈将軍〉——を指示するのに成功すると述べる。つまり、これらの例は、単なる同義語——つまり、内包的に（intensionally）同値である——の例ではなく、むしろこれらの名前は、対象同定の過程で部分的に異なる情報を与えることによって、指示対象指定を果たすとされる。Sedley は、『クラテュロス』における複数の語の間での意味論的同値を、複数の語の間での同義性（synonymy）と区別したうえで、「外延的同値」（extensional equivalence）と呼ぶ。

この解釈に異論を唱えたのが Ademollo である¹⁹⁶。Ademollo は、引用箇所ではソクラテスが例として挙げる固有名が異なるひとびとの名前である点に着目し、「二つの名前が

¹⁹⁴ Heitsch 1985: 58-61; Sedley 2003: 84-85.

¹⁹⁵ 語源分析とフレーゲの思想との関連は、通常、固有名を確定記述に置き換えて扱う点に見出されるが、Ademollo は、むしろ「二つの固有名は、同一の指示対象をもつが、異なる意味内容をもつ」という考えを、「意味」と「意義」の区別に基づくフレーゲの思想（たとえば「明けの明星」／「宵の明星」）の先駆的見解と見做す(2001: 12 n.10).

¹⁹⁶ Ademollo 2011: 172-178.

「同じもの」を表示する」ということは、本質的に、「二つの名前が、同じ（語源分析的）意味——あるいは、同じ（語源分析的）内包的意味をもつ」ということに存するのであって、「同じ指示対象をもつ」ということに存するのではないと述べる。つまり Ademollo は、Sedley らの解釈に抗して、名前が「表示するもの」（σημαίνει の目的語）を、名前の指示対象ではなく、その（語源分析的）意味ないし内包的意味と見做し、Sedley らが語源分析的意味における相違（ソクラテスが言及さえしていない点）に重点を置くのに対し、その「同一性」を主張する。

この応酬で争われているのは、「同じもの」が語の指示対象であるのか、それとも語の語源分析的意味（つまり、記述的意味）であるのかという点であるが、実際には、そのどちらでもない。二つの名前が表示する「同じもの」は、そのそれぞれの名前の記述的意味によって決定される、対象の任意の属性（たとえば、“王にふさわしい”や“医者にふさわしい”）である。従来、原典で βασιλικά (393a7) という形容詞の形で初出した σημαίνει の目的語の存在論的身分が、あやふやなままにされてきたように思われる。まず、「アステュアナクス」と「ヘクトル」という二つの名前の指示対象は、それぞれアステュアナクス（ヘクトルの息子）とヘクトルであるため、この二つの名前が表示する同一のものは、この二つの名前の指示対象ではあり得ない。そうかと言って、それは、Ademollo が述べるように、この二つの名前の記述的意味でもない。二つの名前の語源分析的（記述的）意味における「相違」という点は、確かにソクラテスによって言及されてはいないが、それが「同一」であるとも言われていない。「同一」とされるのは、一貫して、二つの名前が共通に「表示するもの」である。そして、「アステュアナクス」と「ヘクトル」の事例では、“王にふさわしい”という属性がそれに相当する。σημαίνει は、『クラテュロス』において、形容詞、名詞、および ‘that’-clause を目的語にとる形で用いられているため、「同一」とされるものが何であるのか、一見すると、判然としない。しかしそれは、二つの名前のそれぞれの記述的意味によって決定されるもの、言い換えれば、それぞれの記述的意味が帰着する一つのものである。

語の指示対象ではなく、複数の語のそれぞれの記述的意味によって決定される「同一のもの」の存在は、この対話篇の終わり近くで、次のような仕方で問題化される。

SO. 「さて、さらに次のことを考察しようではないか——これら多くの、同一のものの方へと向かっている名前が、われわれを欺くことがないように。[...]」(439b10-c1)

「これら多くの名前が向かっている「同一のもの」[ταυτόν 439c1]とは、徳に関する名前のほとんどが帰着する一つのものであり、それは、一言でいえば、“万物流転”である。「思慮」[φρόνησις]、「理解」[σύνεσις]、「正義」[δικαιοσύνη] その他の徳に関する名前の記述的意味は、全体として、外的世界のあり方を“動”として表示することが判明する。

この最後の議論展開を踏まえると、名前と葉のアナロジーおよび「力」という概念の導入

が、この対話篇全体において極めて重要な役割を有することがわかる。原則 P——「X から生まれたもの (Y) は、X と同じ名前と呼ばなければならない」——は、元来、子の名前（「アステュアナクス」）の正しさを自然本性という観点から説明するために導入された。しかし、目下の一節で (394b7-d1)、ソクラテスが例として選んだ名前は「父子関係にある名前」ではない¹⁹⁷。①のグループでは、「アルケポリス」という名前が加えられることで、「父子関係にある二つの名前の間の自然本性的正しさ」はもはや問題ではなくなり、代わって「複数の名前の間の意味論的正しさ」が問題になっている。つまり、ソクラテスはここで、父子関係にある二つの名前に適用された「正しさ」の説明を、「複数の名前の間の意味論的正しさ」の説明へと拡張・展開したのである。だが、この動きは、次のような仕方で段階的に準備されてきたものであった。まず、

1. 原則 P が、「親子関係にある二つの名前」だけではなく、およそすべての名前に適用可能であることが示された：この展開によって、複数の名前が同一のものを表示する可能性が開かれた。
2. 名前と薬のアナロジーの導入によって、次の二つの論点が生じた。
 - 1) 複数の名前 A・B・C...が、文字や音節の点でそれぞれ異なる記述的意味 X・Y・Z...を介して同一のものを表示する場合、A・B・C...は、「同一の力」——すなわち、一つの同じ意味作用——をもっている。
 - 2) 「名前の力」——名前の意味作用¹⁹⁸——についての知識は、名前の記述的意味についての知識（語源分析的知識）を伴うため、語源分析の専門家の存在が要請される。

この動きは、明示的に示されているわけではないにせよ、ホメロスの「名前の正しさ」からクラテロスの「語源分析的な正しさ」への展開と、さらに「名前の正しさ」の問題から流転説の問題への内的展開に向けた布石になるものと思われる。

3 派生的名前の語源分析

(1) はじめに

394e から 421c までの一連の長い語源分析は、「派生的名前の正しさ」にかかわる。「派生

¹⁹⁷ Pace Ademollo 2011: 172.

¹⁹⁸ 「名前の力」を「名前の形相」と区別したうえで「意味」ないし「概念」と見做すのは Ademollo だけであり、その解釈には同意する。しかし、「力」[δύναμις] という概念が、植物の場合、「能動的なはたらき、効能、効果」を意味するものとして用いられている点に着目すると（註 190 参照）、「名前の力」は、単なる「意味」ではなく、同一のものを意味するはたらき——意味作用——として理解されるべきであると考えられる。

「要素的名前」は、421c-427e で扱われる「要素的名前」の対概念である。「要素的名前」とは、「それ以上、他の要素に分解され得ない名前」であり、「派生的名前」は「要素的名前」から構成される。その構成上の相違ゆえに、「派生的名前」と「要素的名前」は相互に異なる「正しさ」を有する。

これまでのところ、「派生的名前の正しさ」は、次の三段階の説明によって示されてきた。

第一段階：同じものにつけられた二つの名前のうち、どちらがより正しい名前であるかを決定するのは、名前の使用者の間の知恵の優劣である（ホメロスの説明）。

第二段階：同じもの（子）につけられた二つの名前のうち、一方がもう一方よりも正しい名前であることは、原則 P*——子と親は、自然本性的上、同一の種に属する、あるいは同一の属性を有する——に従い、その一方の（子の）名前と親の名前とが、それぞれの記述的意味を介して、同一の属性を表示するという点に存する。

第三段階：複数の名前の中の正しさは、それらが、それぞれの記述的意味を介して、同一のものを意味論的に表示するという点に存する。

「正しさ」をめぐるこの三段階の議論によって、後続する「派生的名前」の一連の語源分析が依拠する、語源分析のパターンが確立された。そのパターンに従えば、

名前は、単一の語（“Ἐκτωρ”, ‘Ἅγις’）から派生するのであれ、複合語（‘Ἄστυ-ἀναξ’, ‘Ἀρχέ-πολις’など）を構成する複数の語から派生するのであれ、対象についての偽装された記述である¹⁹⁹。

ソクラテスの次なる探求は、したがって、「それぞれの名前が、偶然につけられているのではなく、何らかの正しさをもっていることを、名前それ自身がわれわれに証言してくれるかどうかを見る」（397a7-9）ことである。このようにして、こののち、途方もない数のギリシア語の名前が語源分析されることになる。

本稿は、その膨大な量の語源分析のすべてを扱うことはできない。『クラテュロス』の語源分析全体についてのわたしの理解は、第一章第三節で述べた通りであり、流転説と関連のあるいくつかの論点は、第六章で詳細に検討される。したがって、以下の論述は、394e から 421c までの一連の語源分析の構造について説明と、関連のある論点についての検討にあてることにはしたい。

¹⁹⁹ Ademollo 2011: 181. ‘According to this pattern- the standard one in Greek etymology before and after Plato- names are more or less disguised *descriptions* of their referents, deriving either from one single word or from more words conflated together in what is actually a compound name.’

(2) 語源分析の体系的構造

ソクラテスは、諸々の名前の語源分析を「どこから始めるか」(397a5-6)を問題にし、次のように述べる。

SO. 「[...] そうすると、英雄たちと人間たちのものだと言われている名前は、もしかしたら、われわれを欺くかもしれない。というのは、一方で、それらの名前の多くは、ちょうどわれわれが最初に言っていたように、先祖たちの姓名に従ってつけられており、それはいくつかの名前にはふさわしいやり方ではなく、他方、その多くは、まるで祈りをささげているかのようにつけられており、たとえば「エウテュキデス」「ソシアス」「テオピロス」など、その他多くの名前がそうであるからだ。だから、一方で、こうした類の名前はほっておかなければならないと、わたしには思われる。他方、われわれは、正しくつけられている名前を、常にあり、自然本性的に決まっているものどもの範囲内で [περὶ τὰ ἀεὶ ὄντα καὶ πεφυκότα] 発見する見込みがもっともある。というのは、ここにおいてもっとも、諸々の名前の制定が行われるからだ。だが、もしかしたら、それらの名前のいくつかは、人間の力よりももっと神的な力によってつけられたのかもしれない。」(397a9-c2)

前節で見たように、個人名の制定は、原則 P*——子と親は、自然本性的上、同一の種に属する、あるいは同一の属性を有する——に従って、行われる。だがしかし、子が親と同一の属性（たとえば、“王にふさわしい”）を受け継ぐことは、必然ではない。したがって、子につけられた名前が、その子にとって「正しい名前」である場合、それは単なる「偶然」(394e9; 395e5) に過ぎないことになる。逆に多くの場合、「アステュアナクス」の事例のように、子につけられた名前は、実際には、その子にとって「正しい名前」ではない。つまり、子につけられた名前の多くは、本当のところ、「そうなってほしいという希望ないし祈り²⁰⁰」の表現なのである (b4)。

そこでソクラテスは、「常にあり、自然本性的に決まっているものども」[τὰ ἀεὶ ὄντα καὶ πεφυκότα] につけられている名前を考察の対象に据える。Ademollo によると、この表現は、神学的神々に加えて、後続する「自然的」神々のグループ、すなわち自然科学の対象を導入するのみならず、ソクラテスによって語源分析される他のすべての名前への言及を含む可能性がある²⁰¹。それはつまり、倫理学、心理学、論理学、存在論の対象であり、一言でいえば、哲学的思考がそれにかかわるところのすべての実体を含む²⁰²。以下に、397c から 421c までの語源分析のセクション全体の構図を記す。

²⁰⁰ Sedley 2003: 86. 'Indeed, many names are given to children as expressions of nothing more than the hope that they will turn out so.'

²⁰¹ Ademollo 2011: 188-189.

²⁰² Dalimier 1998 219-220 n.120; Reeve 1998: xxviii-ix; Sedley 2003: 88; Ademollo 2011: 188.

397c4-399c9: 「神々」[θεοί] についての予備的考察および「ダイモンたち」[δαίμονες]、
「英雄たち」[ἥρωες]、「人間たち」[ἄνθρωποι] について

399d1-400c10: 人間を構成する二つの要素、すなわち「魂」[ψυχή] と「肉体」[σῶμα] に
ついて

400d1-408d5: ホメロスの神々の名前について

「ヘスティア」[Ἑστία]⇒「知恵の大群の到来」⇒「レア」[Ρέα]、「クロノ
ス」[Κρόνος]、「オケアノス」[Ὠκεανός]、「テテュス」[Τηθύς]、「ポセイド
ン」[Ποσειδῶν]、「プルートン」[Πλούτων]、「ハデス」[Ήιδης]、「デメテル」
[Δημήτηρ]、「ヘラ」[Ἥρα]、「ペルセポネ」[Φερσεφόνη]、「アポロン」[Ἀπόλλων]、
「ムーサたち」[Μοῦσα]、「レット」[Λητώ]、「アルテミス」[Ἄρτεμις]、「ディ
オニュソス」[Διώνυσος]、「アプロディテ」[Ἀφροδίτη]、「アテナ」/「パラ
ス」[Ἀθήνη/Παλλάς]、「ヘパイストス」[Ἥφαιστος]、「アレス」[Ἄρης]、「ヘ
ルメス」[Ἑρμῆς]、「パン」[Πάν]

408d6-410e1: 自然科学の対象について

408d6-409c9: 「自然的」神々について

「太陽」[ἥλιος]、「月」[σελήνη]、「月」[μείς]、「星々」[ἄστρα]、(電光 [ἀστραπή])

409c10-410c4: 要素について

「火」[πῦρ]、「水」[ὔδωρ]、「空気」[ἀήρ]、「アイテール」[αιθήρ]、「大地」
[γῆ]

410c5-e1: 時間的規則性について

「季節」[ώρα]、「年」[ἐνιαυτός; ἔτος]

410e2-5⇒「知恵の高点へと疾走」⇒

410e6-420e5: 徳に関する名前

411b3-d2⇒「めまい」⇒

411d3-416d11: 徳と価値

「思慮」[φρόνησις]、「識別」[γνώμη]、「知」[νόησις]、「節制」[σωφροσύνη]、
「知識」[ἐπιστήμη]、「理解」[σύνεσις]、「知恵」[σοφία]、「善い」[ἀγαθόν]、
「正義」[δικαιοσύνη]、「勇気」[ἀνδρεία]、(「男性的」[ἄρρεν]、「男」[άνήρ]、
「女」[γυνή]、「女性」[θηλυ]、乳房[θηλή]、「繁栄」[θάλλειν])、「技術」
[τέχνη]、「工夫」[μηχανή]、「悪徳」[κακία]、「徳」[ἀρετή]、「醜い」[αισχρόν]、
「美しい」[καλόν]

416e1-419b4: 有用と有害

「有用な」[συμφέρον]、「有益な」[κερδαλέον]、「有益」[κέρδος]、「利益になる」[λυσitteλής]、「役に立つ」[ώφέλιμον]、「有害な」[βλαβερόν]、「破壊的な」[ζημιώδες]、「(日)」[ήμέρα]、「くびき」[ζυγόν]、「なすべき」[δέον]

419b5-420b5: 感情

「快」[ήδονή]、「苦」[λύπη]、「悲しみ」[άνία]、「痛み」[άλγηδών]、「苦しみ」[όδύνη]、「悩み」[άχθηδών]、「喜び」[χαρά]、「楽しみ」[τέρψις]、「楽しい」[τερπνόν]、「愉快」[εὐφροσύνη]、「欲求」[ἐπιθυμία]、「気概」[θυμός]、「欲望」[ἕμερος]、「希求」[πόθος]、「エロース」[ἔρως]

420b6-c9: 判断

「思いなし」[δόξα]、「思い」[οἴησις]、「熟考」[βουλή]、「欲すること」[βούλεσθαι]「熟考すること」[βουλεύεσθαι]、「熟考しないこと」[ἀβουλία]

420d1-e5: 意志

「自発的な」[ἐκούσιον]、「必然的(強制的)な」[ἀναγκαῖον]

421a1-c2: 最も重大で最も美しいもの

「名前」[ὄνομα]、「真理」[ἀλήθεια]、「虚偽」[ψευδος]、「ある」[ὄν]、「あり方」[οὐσία]

以上のグループ化には若干の説明が必要とされるため、以下で、それぞれのグループについて概説しておきたい。

まず、397c4-400c10 で扱われる名前に関して、399d1-3 でヘルモゲネスが「これらのもの(「神々」「ダイモンたち」「英雄たち」「人間たち)」の次に [τούτους ἐξήξ]「やってくるものとして「魂」と「肉体」に言及し、それらを「人間に属するもの」と呼ぶ点に鑑みれば、「魂」と「肉体」は前のグループに付属すると考えられる²⁰³。

400d1-408d5 で扱われる神々の名前について留意すべきなのは、このセクションの目的は、神々について何かを知ろうとする(あるいは、神々の真の名前が何であるかを知ろうとする)ことにあるのではない、ということだ。目的は、むしろ人間たちと、神々の名前の中に反映された、神々についての彼らの思いなしを考察することにある(400c)。

対照的に、408d6-410e1 で扱われる「神々」、すなわち太陽と月と星々、要素、および季節と年は、「ソクラテスが詳しく論ずるのを妨げないもの」(408d6-e1)として導入される²⁰⁴。この記述によって、ホメロスの神々とこれらの神々との区別が喚起されることは明らかであるが、その区別とは、本質的に、何に存するのか――。

²⁰³ Cf. Ademollo 2011:183.

²⁰⁴ Sedley は、太陽と月などの天体の名前グループと、要素の名前グループとを区別しているが(2003: 89-90)、Ademollo は、408d-410e で扱われるすべての名前が 408de で最初にリストアップされている点を踏まえ、408d-410e を一括して「自然科学の対象」のセクションと見做す(2011: 184 n.5)。

それは、ドクソグラフィーと自然科学的考察の間の区別である、と言えるかもしれない。ホメロスの神々の名前については、命名者の思いなしを明るみに出すという点に、探求の目的がいわば制限された。しかし、太陽や月などの名前については、そうした制限は加えられていない。実際、Sedley の緻密な分析が示しているように²⁰⁵、このセクションで扱われる名前の語源分析の少なくともいくらかは、真にプラトンの見解を含んでいると考えられる。たとえば、太陽は、『国家』第 6 巻 509b2-4 で、宇宙における変化の第一原因として選出されるが、当該箇所では三つ組みの語源分析でもって権威づけされる。

- (1) 昇ることによって、人々を「集める」[ἀλίσσειν]もの
- (2) 地球のまわりを「常に回転しながら行きつつある」[ἀεὶ εἰλεῖν ἰόν]もの
- (3) その運動によって、大地から生まれるものを「多様化する」[αἰολεῖν]もの

勿論、宇宙の天体についての考察もまた、それらの名前の語源分析を用いてなされる以上、それが古代の命名者たちの見解についての解釈学的考察であるのか、それとも自然科学的考察であるのかを判別するのは難しい。しかし、上で引用した 408d6-e1 の記述は、前のセクションと目下のセクションとの間の方法論的な相違を示唆していることは確かであろう。

徳に関する名前のセクション内での分類は、Ademollo の分類に従ったものであるが、Gaiser と Sedley は、「技術」と「工夫」を下位グループに類別している²⁰⁶。「技術」の語源分析の直前 (414b3) での「コースの外へ」[ἐκτὸς δρόμου] という記述は、先行する一連の語源分析（「勇気」から「繁栄する」まで）の「脱線」を意味する。他方、「われわれにはまだ、重要だと思われるものの多くが残されている」(b4-5) という記述は、重要なものの名前の語源分析へと「コースを引き返す」ことを示唆している。そして、「重要なもの」と言われるものの一つが、技術である。したがって、「技術」および「工夫」は、「思慮」にはじまる価値的概念の名前の語源分析のセクションの中に含まれなければならない。

また、416e-419b で扱われる名前に関しても、Sedley は、「悪徳」(415a) から「破壊的な」(419b) に至るまでの一連の語源分析を「評価についての一般名」(generic terms of evaluation) という一つの下位グループに類別している²⁰⁷。しかし、Ademollo が指摘するように、「美しい」という名前の語源分析の後で、ソクラテスは、ヘルモゲネスに、「こうした類の名前のうちで、まだわれわれに残されているものは何か」(416e1) と問い、ヘルモゲネスは「善と美にかかわるもの」として「有用な」「有益な」などの名前を挙げる (416e2-417a2)。このことは、前のセクションと目下のセクションとの連関を示唆していると考えられる。

419b-420e で扱われる名前が、徳との関連性をもっているのかどうか、一見したところ、定かでない。まず、419b-420b で扱われる名前は、徳や価値に関する名前ではなく、感情に

²⁰⁵ Sedley 2003: 105-108.

²⁰⁶ Gaiser 1974: 56; Sedley 2003: 113.

²⁰⁷ Sedley 2003: 113.

関する名前である。また、420b-c で扱われる「思いなし」「熟考」「欲すること」などの名前も、徳や価値に関するものではなく、判断、熟考、意志に関する名前である。しかし、意志という概念が徳と或る仕方に関連することが、420d-e のセクションの冒頭で判明する。そこでソクラテスは、「必然（強制）」と「自発的」について議論する理由を、それらの名前が「これらの名前（「思いなし」「熟考」「欲すること」など）の次に」[τούτοις ἐξῆς] (420d4) くるものであるという点に見出す。そして、「自発的」という名前は、「意志に従って [κατὰ τὴν βούλησιν] 生じる」ということ、反対に、「必然的（ないし強制的）」という名前は、「意志に反する」[παρὰ τὴν βούλησιν] ということとして定義され、この「意志に反する」ということが、今度は「失敗と無知にかかわること」[τὸ περὶ τὴν ἁμαρτίαν...καὶ ἁμαθίαν] だとされる (420de)。Ademollo によれば、最後に言及されたこの三つの名前（「必然的（強制的）」「失敗」「無知」）が、徳という概念を喚起するとされる²⁰⁸。そうであれば、411b 以降で扱われてきた名前のすべてが、多かれ少なかれ、「徳に関する」ものであることになる。

「最も重大で、最も美しいもの」[τὰ μέγιστα καὶ τὰ κάλλιστα] (421a1) として最後に扱われる四つの名前、すなわち「真理」「虚偽」「ある」「名前」は、論理学と存在論にかかわる。Sedley は、論理学と形而上学が、倫理的徳と連動して扱われる知的徳である知恵の対象とその内容を表現するという理由で、倫理学の下位に置かれる学問であると述べる²⁰⁹。他方、Ademollo は、内容と提示の両方の点において、このグループが、「徳に関する」グループに従属するというよりもむしろ並置されるものであると述べる。内容に関しては、一方で、「名前」「真理」「虚偽」「ある」を、倫理学、心理学、あるいは何であれ、徳に関するセクションの主題に組み入れるのは奇妙であり、他方、提示に関しては、このグループは、「常にあり、自然本性的に決まっているものども」(397b) や、「「徳に関する」名前」(411a) などの、或る種の概要とともに導入されるからである。よって Ademollo は、このグループが、一つの独立したグループを形成すると結論づける²¹⁰。

グループ化に関しては、Ademollo の解釈が説得的だと思われる。しかし、問題とされるべきは、むしろ「真理」「虚偽」「ある」が扱われるこのグループの中になにゆえ「名前」が含まれているのか、そしてこのグループが一連の語源分析の最後に扱われることに何らかの必然性があるのかどうか、である。理解の鍵を握るのは、ヘルモゲネスとソクラテスの間で交わされた、「名前」[ὄνομα] についての次のやりとりである。

HE. 「[...] それでは、わたしは質問します、最も重大で最も美しいものども、すなわち「真理」と「虚偽」と「ある」と、そして目下のわれわれの議論がそれについてなされているところのまさにそれ、すなわち「名前」について、それがなにゆえにこ

²⁰⁸ Ademollo 2011: 187.

²⁰⁹ Sedley 2003: 157. Cf. Goldschmidt 1940: 132-133.

²¹⁰ この最後のグループを、先行するグループから独立したものと見做すのは、Ademollo 以外では、Gaiser 1974: 57 と Reeve 1998: xxviii である。

の名前をもっているのかを。」

SO. 「では、君は追求すること [μαίεσθαι] を何と呼ぶか。」

HE. 「わたしとしては、ともかくも {それを} 探求すること [ζητεῖν] と {呼びます}。」

SO. 「そうすると、それ(「名前」)は、次のことを言っている文 [λόγος] から構成された名前のようなことになるね、それはすなわち、この「ある」[ὄν] というものは、「名前」[ὄνομα] が、それを探求するところのものである、ということだ。だがそれを君は、われわれが「名指されるべきもの」[ὀνομαστόν] と言う場合にもっとよく識別することができるだろう。というのは、ここにおいてはっきりと、{「名前」は} 次のことを言っているからだ、それはすなわち、この「ある」というものが、{名前が} その追求 [μάσμα] であるところのものであるということだ。」(421a1-b1)

「名前」は、「「ある」を、探し追い求めるものである」と語源分析される。Sedleyはこの語源分析について、ὄνομα が「実在を区分して教える」(388b13-c1) という機能を果たすためには、絶え間なく動き続ける獲物を追い続けなければならないことが示唆されていると(比喩的に)解釈している²¹¹。第六章で述べるように、「狩猟の比喩」は、流転論者たちの言語観およびかれらの言語使用を痛烈に批判するためのメタファーとして機能していると考えられるが、「名前」についてのこの語源分析は、必ずしも流転説を含意するわけではない。なぜなら、引用箇所の中に、流転説への明示的な言及は確認されないからだ。着目されるべきは、むしろ、この語源分析と直前のヘルモゲネスの質問との関連である。というのは、「では、君は追求すること [μαίεσθαι] を何と呼ぶか。」という、一見唐突に思われるソクラテスの問いは、ヘルモゲネスの直前の問い、すなわちヘルモゲネスらの探求課題である名前が、なにゆえ 'ὄνομα' という名前をもっているのかという問いを直接受けるものであると思われるからだ。名前の探求は、名前が「ある」を追求するものである限りにおいて、必然的に、「あるもの」、すなわち実在の探求を伴う。このことは、流転をめぐる最後の議論において、名前から名指される対象へと議論の基点が移行する点に鑑みれば、まさにソクラテスらによって実践されていると言うことができよう。この意味において、「名前」が、存在論にかかわる最後のグループに含まれていること、そしてこのグループが一連の語源分析のセクションの最後に置かれていることは、偶然ではなく、必然であると、結論づけることができる。

いずれにせよ、この最後のグループは、「派生的名前」の語源分析を締めくくる。ソクラテスが、「ない(もの)」[οὐκ ὄν] から「行かない(もの)」[οὐκ ἰόν] を導出した後、ヘルモゲネスは、まさにこの ἰόν という語が、「流れる(もの)」[ρέον]、「縛る(もの)」[δοῦν] と同様に、どんな正しさをもっているのかを尋ねる。このようにして、議論は、派生的名前の正しさから、要素的名前の正しさへと移行してゆく。

²¹¹ Sedley 2003: 121.

4 名前を構成する字母と対象との間の音声的類似性

それ以上他の名前に分解され得ない名前（以下、「要素的名前」と呼称する）は、記述的意味をもち得ないため、別の「正しさ」が要請される。

「要素的名前の正しさ」の考察の出発点は、「名前は事物の、音声 [φωνή] による模造品である」という考えである (423b9-10)。だが、もしこれが事実であれば、「羊やにわとりや、その他の動物を模倣しているひとびとは彼らが模倣するまさにそれらを名指している」ということになってしまう (c4-6)。音楽術との区別を設ける必要性からソクラテスは、次のように述べる。

SO. 「事物には、そのそれぞれのものに、音と形があり、色も多くのものにある。」 (423d4-5)

Ademollo によれば、目下の「事物」は特定の物質ではなくむしろ種であり、「走っている馬」 (423a) や「羊」 (423c) などを前方参照する²¹²。そうすると、そうした諸々の種に属する音・形・色を模倣する術が音楽術・絵画術であることになる（たとえば、にわとりという種の鳴き声を音によって模倣するのが音楽術）。ソクラテスは続けて次のように言う。

SO. 「では、このことに関してはどうだろうか。それぞれのものに「あり方」 [οὐσία] もまたあると君に思われぬか——ちょうど色も、たったいまわれわれが言っていたものども（音・形）もそれぞれのものにあるように。第一に、色と音そのものに、それらのどちらにも、また「ある」 [εἶναι] と指示対象指定する [πρόσρησις] にふさわしい限りの他のすべてのものに、何らかのあり方があるのではないか。」 (423e1-5)

ものの「あり方」 [οὐσία] は、まず諸々の種（トークンではなくタイプ）に帰され、次に（種に属する）色や音そのものにも帰され、最後に「ある」と名指されるすべてのものに帰される。πρόσρησις は、従来、「名称²¹³」か「述定語²¹⁴」のどちらかに訳出されてきたが、わたしはこの語を「指示対象を指定すること」と訳出したい。それは次の理由に因る。『クラテュロス』は、名前と事物、語と対象との間の関係を論じた対話篇であり、「流転をめぐる議論」では、「あるもの」 [τὰ ὄντα] のそれぞれひとつひとつの同一性（数的・質的同一性）が、正しい指示と知識を成立させる条件として仮定される。つまり、οὐσία は、少なくとも『クラテュロス』においては、まさに語が指示する当の対象——その対象の同一性と言われうるも

²¹² Ademollo 2011: 275.

²¹³ E.g., Ademollo; Méridier.

²¹⁴ E.g., Minio-Paluello; Sedley; Dalimier.

の——なのである。それゆえ、目下の「ある」は、述定と解されるべきでない。ここでは、言表 [λόγος] と外的世界との間の対応関係ではなく、それなしではいかなる思考も成立し得ないような、語の外部にある対象への最初の接触が論じられているからだ。実際、προσερέω という動詞 (πρόσρησις はこの動詞の派生名詞) は、『クラテュロス』403a7 で、「指示する」(refer to²¹⁵) の意味で用いられており (「〈見えないもの〉が、「ハデス」という名前で指示される」)、他の対話篇においても²¹⁶、「... is F」という述定言明の形式で用いられている箇所はない。

このようにして、要素的名前は、それぞれのものが有する同一性を音声によって模倣するものであるとされる。そこでまず、実在が類ごとに分割され、それに対応する形で、ギリシア語の 14 個の字母 [ρ, ι, φ, ψ, σ, ζ, δ, τ, λ, γ, ν, α, η, ο] が取り出され、そのそれぞれは、14 の類 (動・静、硬さ・柔らかさなど) と、舌の動きや氣息によって生み出される音声面での類似性をもつことが示される (この点は、「σκληρότης の議論」において本格的に吟味される)。

²¹⁵ Cf. Ademollo 2011: 193.

²¹⁶ 『パイドン』60a ‘speak to; address’; 『国家』463a ‘call by name’.

第四章 「名前の正しさ」の意味論的問題

1 「割り当ての議論」

(1) 「ヘルモゲネス」のヘルモゲネスへの割り当て

さて、一連の語源分析を通じてソクラテスが見出した「名前の正しさ」——すなわち、「名前の正しさ」とは、事物がどのようなかを示すこと [ἐνδείξεται οἷόν ἐστι τὸ πρᾶγμα] である」(C⁴) ——に、クラテュロスは同意する。しかし、「正しさ」についてのこの定義に対するソクラテスの理解とクラテュロスの理解には大きな隔たりがあることが、次のようにして判明する。

ソクラテスは、法習制定者の間の名前制作の技術の優劣における相違に基づき、名前の中にはうまく作られたものと下手に作られたものがある、とクラテュロスに言う。すでに見たように、ソクラテスが見出した「正しさ」は、「名前が、その記述的意味を介して対象の任意の属性を表示する」という点にある。名前が何を表示するかは、その名前の語源分析に完全に依拠するため、名前が対象の本性ないし本質を表示することは必然ではなく偶然であり、たいていの場合、名前が表示するのは、当の対象に付随的な属性であったり、実際にはあてはまらない属性である。実際、「アステュアナクス」だけではなく、ソクラテスが語源分析を行ったほとんどすべての名前が、対象に付随的な属性や、実際には対象にあてはまらない属性を表示する。ソクラテスの言う「下手に作られた名前」とは、ソクラテス自身が扱ったほとんどの名前を指しているのである。

しかしクラテュロスは、ソクラテスの以上の説明を受け入れない。クラテュロスは、「すべての名前が正しくつけられている」(429b10) と反論するからだ。つまり、クラテュロスは、名前の中に出来の優劣における相違（つまり、正しさの程度）を決して認めず、「すべての名前が、対象の本性を表示する」と考えているのである。クラテュロスのこの主張は、意味論的にも存在論的にも極めて重大な哲学的問題を伴うことが徐々に明らかになってゆく。

ソクラテスはまず、語を対象に正しくなく割り当てる [διανέμω] ことの可否を問う（以下、429b12 から 432a4 で展開される名前の「割り当て」[διανομή] をめぐる一連の議論を総括して、「割り当ての議論」と呼ぶ²¹⁷）。この議論は三段階の内部構造を成す。最初の部分は「ヘルモゲネス」という名前の割り当てに関わる。

ここで、この対話篇の背景にあった事情をもう一度思い出そう。ヘルモゲネスが、クラテュロスの神託めいた言葉の解釈をソクラテスに懇願したのは、「少なくとも「ヘルモゲネス」

²¹⁷ 「割り当てる」[διανέμω] 及び「割り当て」[διανομή] という語が用いられるのは絵と名前のアナロジーが導入される 430b 以降であるが、名前の割り当てをめぐる議論は「ヘルモゲネス」という名前についての先行議論に端を発すると考える (cf. Barney 2001: 111-115)。

は君の名前ではない——たとえすべての人間がそう呼ぶとしても、だ。」(29頁参照)という、その発言の意味を解釈してもらうためであった。ヘルモゲネスの名前をめぐる問題は、一連の語源分析の中で二度、ヘルモゲネスとヘルメス神との関係性という観点から扱われる。ヘルモゲネスは、「ヘルモゲネス」という名前の語源から説明される記述的意味——「ヘルメスの息子」——を充足する本性をもたない。その理由は二つある。一つは、ヘルモゲネスには「金銭的な成功が欠如している」(383b6-7; 384c3-6)からであり(89-90頁参照)、もう一つは、ヘルモゲネスには「演説家としての能力が欠如している」(407e-408b)から、である。第一章第五節(3)で説明したように、クラテュロスは、「すべての人間がヘルモゲネスを「ヘルモゲネス」という名前で呼ぶ」という点は譲歩している。彼が決して譲らないのは、「ヘルモゲネス」がヘルモゲネスの名前ではないという点だ。「ヘルモゲネス」という名前と呼ばれているのに、その名前は本人の名前ではない、という事態をどう理解すべきなのか。クラテュロスによれば、まず、

- ・「ヘルモゲネス」はヘルモゲネスの正しくない名前なのではなくヘルモゲネスの名前で
すらない——「ヘルモゲネス」は、むしろ「ヘルメスの息子」という記述的意味を充足
する本性をもつ誰か別の人物の名前である(429b1-c5)。

ことになる。この主張を要約すれば、次のようになるだろう。

- C⁵ すべての名前が、その記述的意味を充足する本性をもつ対象(本性的指示対象)を指示する。

この見解は現代の言語哲学者には奇異に映るだろう。クリプキの分析に従えば、ヘルモゲネスは「ヘルモゲネス」の意味論的指示対象(semantic referent)、すなわち、「ヘルモゲネス」という語の理念的相関者にあたる²¹⁸。ここで注目すべきなのは、クリプキのこの分析の萌芽がソクラテスの見解に見出されるということだ——ソクラテスに言わせれば、ヘルモゲネスは「ヘルモゲネス」の規約的指示対象ということになるだろうが。というのは、以下の論述が明らかにするように、ソクラテスは、「ヘルモゲネス」の発語によって話し手と聞き手の間に相互理解が生じる際、発話者は「ヘルモゲネス」をヘルモゲネスの名前として、すなわち、規約的に、用いていると考えるからだ²¹⁹。

しかしクラテュロスはそうは考えない。「ヘルモゲネス」という名前と呼ばれているのに、その名前は本人の名前ではないという事態は、クラテュロスにおいて、次のように説明され

²¹⁸ Kripke 1980: 25-26 n.3. クリプキによれば、意味論的指示対象は名指された事物であり、話者の指示対象は、話し手が誤った信念をもっている場合に指示する、意味論的指示対象以外の何かである。

²¹⁹ Ademollo 201: 324.

る。誰かがヘルモゲネスを「ヘルモゲネス」と呼ぶとき、この名前は——話し手の意図に関係なく——「ヘルメスの息子」という記述的意味を充足する本性をもつ誰か別の人物を指示している。それゆえ、その話し手は、「ヘルモゲネス」という発語によって、実はそのだれか見知らぬ人物を正しく名指しているのである。

語は、その記述的意味を充足する本性をもつ対象にしか適用され得ない——それゆえ、虚偽を発することは本来的に不可能である——。これが、クラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものの内実である。

(2) 「ヘルモゲネス」のクラテュロスへの割り当て

C⁵がいかにして「偽を語ることの不可能性」を伴うのかは、第一章第五節(3)で説明した。ここでは、C⁵に孕まれるより本質的な問題、すなわち「虚偽を発することの不可能性」という問題に対し、ソクラテスがどう立ち向かうのか、そしてその論駁の試みは成功したのか否かを入念に見てゆくことにする。

ソクラテスによる「虚偽の発語の不可能性」の論駁の試みは、二段階の議論でなされる。最初の議論は「ヘルモゲネス」の誤った割り当てに関わる。ソクラテスはクラテュロスに次の問いを立てる。

SO. 「[...]たとえば、仮に誰かが外国の地で君に出会い、君の手を掴んで、「ようこそ、アテナイからのお客人、スミクリオンの息子、ヘルモゲネスよ」と言うとしたら、このひとがこれらのことを語る、これらのことを主張する、これらのことを言う、あるいはこのように話しかけるのは君に対してではなく、こちらのヘルモゲネスに対してなのだろうか。それとも、誰に対してでもないのだろうか。」

CR. 「わたしには、ソクラテスよ、そのひとは無益にこれらが発語するのだろうと思われれます。」

「アテナイからのお客人」「スミクリオンの息子」「ヘルモゲネス」という三つの名前（厳密には、最初の二つは「記述」）から構成されるクラテュロスへの挨拶において²²⁰、「ヘルモゲネス」だけが誤って割り当てられている²²¹。或るひとがクラテュロスに挨拶をする際、彼の名前を間違えるという一見すると単純なこの例をめぐる、クラテュロスが「名前の正しさ」

²²⁰ 最初に、その真偽が問われている統語論上のアイテムが、この例では「文」ではない、という点に注意を向ける必要がある。クラテュロスに向けて言われた挨拶「ようこそ、アテナイからのお客人、スミクリオンの息子、ヘルモゲネスよ。」は、Ademollo が説明するように、統語論的に何かより要素的なもの、すなわち、「名前」の羅列である (2011: 336-337)。

²²¹ クラテュロスに対するこれら三つの名前の割り当てのうち、最初の二つは正しい。クラテュロスは実際アテナイからの客人であるし、「スミクリオン」とはクラテュロスの父の実際の名前であると推察できるからだ (384a で、ヘルモゲネスはヒッポニコスの息子であると言われている) (cf. Ademollo 2011: 336; Sedley 2003: 133-134)。

と呼ぶものの内実が明らかにされる。クラテュロスによれば、クラテュロスに挨拶しようとして名前を間違えたこのひとは、

- ・「アテナイからのお客人」「スミクリオンの息子」「ヘルモゲネス」をすべて無益に発した。

ことになる。「言葉を無益に発する」ということでクラテュロスが何を言わんとしているのかは、クラテュロス自身によって次のように説明される。

CR. 「そのようなひとは音を立てているのだと、わたしとしては言うつもりです——ちょうど誰かが鍋をたたいて動かすのと同じように、そのひとは、自分自身を無益に動かしながらね。」(430a5-7)

クラテュロスにとって、語は、その記述的意味を充足する本性をもつ対象にしか適用され得ないため、今回のような「誤った名指し」のケースでは、誤って発せられた語は、いわば「騒音」に過ぎず、もはや名前ではないのである。このようにして、クラテュロスは、虚偽を発する可能性を全面的に排除するのである。

さて、クラテュロスのこうした「虚偽不可能論」に対して、ソクラテスはどうか応じたのか。それを知るためには、われわれは次の問いを立てる必要がある——この誤った割り当てにおいて、本性的指示対象でも規約的指示対象でもないクラテュロスが実際に指示されるのは何故か。クリプキの分析に従えば、この例でのクラテュロスは話者の指示対象 (speaker's referent) として説明される²²²。話者は「ヘルモゲネス」をヘルモゲネスの名前として使っているとしても、或る意味で彼はクラテュロスを指示しているからだ。だがさらに掘り下げて考えたい。いかにして話者は、この名前の外延ではなく、彼が話しかけようとする対象、すなわちクラテュロス特定することに成功するのか。幾人かの研究者は、指示対象は名前によって(それが誤って割り当てられた名前であっても)確定されると主張するが、これに対して Ademollo は、話題となっている対象 (the subject matter) を特定する機能をもつ「前触れ」(preamble) の重要性を強調する²²³。事実、この例は、クラテュロスが話者の指示対象として特定されるように描かれている。クラテュロスの手を掴むという身振りと、「アテナイからのお客人」、「スミクリオンの息子」というクラテュロスについての精確な記述が、クラテュロス特定する前触れの役割を担う。つまり、この例ではクラテュロスは、「ヘルモゲネス」という誤って割り当てられた名前によってではなく、この割り当てに先行する「前触れ」によって特定されるのである。

²²² 前掲の原註 218 を参照。

²²³ Ademollo 2011: 342-345.

ここにおいて、ソクラテスは、何かを特定する行為とそれに名前を割り当てる行為の間に区別を設けることによって²²⁴、クラテュロスの「虚偽不可能論」を論駁しようとしていることが確認できる。ソクラテスが目下の箇所実践したように、話題となっている対象の特定は、必ずしも名前の使用を伴うものではない。近現代の「指示」をめぐる分析を踏まえるなら、発話時点、発話場所、発話者、および指示詞「これ」に伴われるべき指差し、手振り、身振り等の直示行為を含む特定の発話状況が、話題となっている対象を特定する役割を担うとも言えよう。このことは、何かを誤って名指す余地を残すため、虚偽不可能論を論駁する論拠となるかもしれない。しかしながら、以上のような論をクラテュロスは受け入れない。なぜなら、クラテュロスにとって、部分の誤りは全体の誤りを意味するため(54-55頁参照)、「アテナイからのお客人、スミクリオンの息子、ヘルモゲネス」という名前の羅列表現の中で、クラテュロスについての精確な記述(「アテナイからのお客人」と「スミクリオンの息子」)を、誤って割り当てられた名前「ヘルモゲネス」と同様、「無益な騒音」(430a5-7)と見做すからだ²²⁵。

(3) 「男性」ないし「女性」の特定男性への割り当て

かくしてソクラテスによる虚偽不可能論の論駁の試みは、最終段階に入る。論点を簡略に示すなら、ソクラテスはクラテュロスに対して、名前の「偽りの」[ψευδής] 割り当ての可能性を論証することにより、虚偽の不可能性を論駁しようとする。

具体的には、ソクラテスは要素的な名前の「正しさ」を探求する過程(422d-424a)で措定した「名前は事物の模造品である」というテシスを喚起し、名前と絵の間に、何かの模造品という点でアナロジーを見てとる。名前の割り当ては、絵と類比的に、次のように論じられる。

[第一段階] 或るひと A が、特定の男 B のもとへ行く。

[第二段階] A は B に、「これはあなたの絵です／名前です」と言う。

[第三段階] A は B に、絵の場合は「男性の似像」もしくは「女性の似像」を見せる／名前の場合は「男」もしくは「女」と発語する²²⁶。

特定の男 B は「男」の外延に属し、「女」の外延に属さない——よって、前者は真の割り当てであり、後者は偽りの割り当てである。

A が B のもとへ行き、「これはあなたの名前です」と言う行為——前の議論での直示や記

²²⁴ 幾人かの研究者は、『ソピステス』261d-263dで提示される、文を構成する二つの要素——主語と述語——の間の基本的区別はここでの区別に端を発すると解説するが、Ademolloは、『クラテュロス』での区別は単独の名前の割り当てに関わるものであって文の内的構造に関わるものではなく、したがって、統語論的区別ではないと述べる(2011: 345)。

²²⁵ 429e9 ταῦτα は、「アテナイからのお客人」、「スミクリオンの息子」、「ヘルモゲネス」のすべてを指す。

²²⁶ ソクラテスは名前の誤った割り当てを、先の例では「ヘルモゲネス」という固有名の次元で、今の例では「男」「女」という一般名の次元で論じている。

述と同様、主題を確定する機能をもつ行為——は、確かに、話者と聞き手の間の相互理解に不可欠な主題を確定し、結果として、虚偽が発せられる余地を残した。だが、この説明もまた、虚偽の発語それ自体がいかにして可能であるかを直接説明していない。発語行為が行われる外的文脈に訴えずに虚偽の発語それ自体の可能性が示されない限り、虚偽の発語を本来的に不可能とするクラテュロスの説（C⁵）は論駁され得ない。

2 「二人のクラテュロスの議論」

ソクラテスのこれからの議論は、C⁵の誤りの元凶を探り当てようとするものである。クラテュロスにとって、要素の名前を構成する文字と対象の間の完璧な類似性こそ、それを要素として合成された派生的名前のすべてが、対象の本性を表示することの説明原理をなす。こうしたクラテュロスの主張は、次のように要約されよう。

C⁶ 名前は事物にあらゆる点で似ており、事物を完璧に模倣する。したがって、名前は事物の、いわば写し (duplicate) である。

ソクラテスは、クラテュロスが「名前の正しさ」を「数そのものおよびいくらかの数の要素から構成されていることが必然であるもの（以下「数的なもの」と記す）」(432a8-10) の正しさと混同する過ちを犯していることを看取し、C⁶から別の主張を引き出す。数そのもの（たとえば10）や、数的なもの（たとえばマイルや軍隊²²⁷）が、構成要素の何かを取り除かれたりつけ加えられたりしたら、ただちに別の数や別の単位になるのと同様、名前もまた、クラテュロスに従えば、

C⁷ それを構成する文字の何かを取り除かれたりつけ加えられたりしたら、ただちに別の名前になる。

この推論の誤りを論駁すべく、ソクラテスは仮想上の場面を設定してこう語る。

SO. 「[...] 他方、質的なものと似像全般の正しさとはこれ（数および数的なものの正しさ）ではなく、反対に、もし似像であるべきならば、似せている対象が有するすべての性質を{似像に割り当てることは決してしてはならないのだ。わたしが一理あることを言っているかどうか考察したまえ。次のようなものは、たとえばクラテュロスとクラテュロスの似像は、二つのものであるのだろうか、仮に神々のうちの誰

²²⁷ 『テアイテトス』204dで、「数から構成されている限りのもの」というほとんど同じ表現は、数と、マイルや軍隊などの数的なものの両方を含む (cf. Ademollo 2011: 359-360)。

かが、画家たちがするのと同じように君の色と形を模倣するだけではなく、まさに君のものであるようなすべての内的性質を作り、同じやわらかさと熱を割り当て、まさに君のもとにあるような動きと魂と思慮をそれらの中に入れ、一言で言えば、君がもっているまさにすべてのものに関して、そうしたような別のものを君の近くに置くとしたら。このときこのようなものは、クラテュロスとクラテュロスの似像であるのだろうか、それとも、二人のクラテュロスなのだろうか。」

CR. 「二人のクラテュロスだと、このわたしには思われます、ソクラテスよ。」 (432b1-c6)

ソクラテスの議論の眼目は、「似像」を「写し」——実物に酷似しており、質的に同一な写し²²⁸——から区別する点にある。似像も写しも、実物とは別のものであるという点は共有しているのだが、似像は二通りの仕方で写しとは異なる。第一に、似像は、たとえば二次元であったり、木製であったり、無生命であったりといった類の欠陥をもつ。これらは、制作者の技量や能力に依存せず、似像であるならば必ずもっている欠陥である（それゆえ、わたしはこれらを「本質的欠陥」と呼ぶことにする）。第二に、似像は、実物が実際に有するのとは異なった諸特徴を与えられる場合がある——たとえば、鼻が、実際にはまっすぐであるのに鷲鼻に描かれたり、目が、実際には二重であるのに一重に描かれたり等。これらは、制作者の技量や能力にもっぱら依存し、似像が必然的にもつのではない欠陥である（それゆえ、わたしはこれらを「非本質的欠陥」と呼ぶことにする）。

この仮想話は、クラテュロスの説く「名前の正しさ」の誤りの元凶が何であるのかを明らかにするよう組み立てられている。一見したところ、クラテュロスが見解 C⁶と C⁷で、似像と写しの間の二つの相違のどちらを見過ごしているかは判然としない。似像が本質的欠陥をもつのは必然的であるという点には、クラテュロスは全面的同意を示している (432c-433b)。それゆえ、クラテュロスが拒否するのは、似像が本質的欠陥をもつという点ではなく、非本質的欠陥をもつという点であることになる。

3 「σκληρότης」の議論

(1) 規約と習慣

C⁵の本格的な論駁は、‘σκληρότης’「硬さ」という名前の吟味を中心に据える。この名前をとり上げたソクラテスの意図は明らかだ。‘σκληρότης’は、中に置かれたλが硬さとは正反対

²²⁸ Ademollo 2011: 364-367.

の柔らかさを模倣するため²²⁹、下手に制作された名前に数えられるからだ²³⁰。「割り当ての議論」においてソクラテスは、主題を確定する行為とそれに名前を割り当てる行為との間に区別を設け、話し手と聞き手の間の相互理解の成立に前者は必要不可欠であるが、前者は必ずしも後者を伴うわけではないことを論証した。だが、これまでの議論は、指示が名前以外の要素（直示など）に依拠しなければ成立しないという点に重点を置いていたため、C⁵を論駁するに至っていない。そこでソクラテスは、σκληρότης が名前以外の要素抜きで、いかにして当の対象——〈硬さ〉——を指示しうるかを問題にする。この問題化によってソクラテスは、指示を確保する要因として、クラテュロスから「習慣」[ἔθος] という要素を引き出すことに成功する (434e4)。ソクラテスは習慣という用語で、発語行為と思考の習慣的連鎖を意味する。「こゝ発語する」という発語行為と「あれのことを考える」という思考活動の間には、或る種の無自覚的な連鎖が介在しており、この連鎖は、或る言語共同体の言語規則を採用して以来、その規則の範囲内で言語を使用するよう自分自身を習慣づけてきたことに由来する。この音の連なりを発すれば習慣的に、われわれはあの対象を「思考する」(διανοεῖσθαι) というわけだ (434e6-7)。だが、その思考対象とは何であるのだろうか。

この問題をめぐり、大方の学者は διανοεῖσθαι の目的語を（思考の内的対象としての）「意味」と解釈するのに対し、Ademollo は「思考の外にある対象 the extramental object」と解する²³¹。わたしは、Ademollo のこの分析が極めて重要な意味をもつと考えるため、以下でこの問題について詳しく検討することにする。

まず、前記の「発語行為と思考の習慣的連鎖」は、「自分自身と結んだ規約」のうえに成立していることに留意する必要がある。「自分自身と結んだ規約」という考えは、ヘルモゲネスの言う「規約」と同じものではない。ヘルモゲネスにとって「規約」とは、或る音声の連なりが名前であるための条件であった（66 頁参照）。こうした意味での規約は、音声と

²²⁹ Ademollo が言うように、派生的名前の記述的意味がいかにして記述される対象に似てい
る、あるいは、それを模倣することが可能なのか、という問いは議論に値する (2011: 445-
447)。しかし本稿ではこの点には深く立ち入らず、派生的名前は要素的名前から合成されてい
る以上、対象との類似性を有するという一般的な解釈に従う (cf. Sedley 2003: 126-131)。

²³⁰ 14 個の字母 [ρ, ι, φ, ψ, σ, ζ, δ, τ, λ, γ, ν, α, η, ο] は、14 の類と、舌の動きや氣息によって生み
出される音声的類似性をもつ。426e4 で、ρ を発音する際に、舌が最も少なくともとどまり、最も多
く震動するため（つまり、巻き舌音が ρ）、ρ は動きや運動を模倣すると言われる。しかし、研
究者たちが指摘するように、426ce のテキストは、ρ が動きに加えて硬さも模倣するという趣意
の主張を含んでいないため、ρ についての前方参照はやや問題である。Sedley によれば、426ce
での諸例のうちの幾つか（κρούειν 《押し砕く》、θραύειν 《砕く》）は、動きと硬さの関連性を
支持する (2003: 139)。巻き舌音は舌を一か所に固定して発せられる音であるという点を考慮に
入れれば、ρ には「動きのある音」に加えて「硬さのある音」も含まれるとわたしは考える。

²³¹ Ademollo によれば、「私はそのことを考える」[διανοοῦμαι ἐκεῖνο 434e7] という節における
ἐκεῖνο は、σκληρόν という語の、あるいはより一般には「X」の指示対象を表し、ここでは話し
手の考えるという行為の外にある対象として示される。この解釈は、a5-7 では、διανοοῦμαι の
目的語は λ が似ていないもの、つまり硬さと同定され、これは σκληρόν の指示対象である思考
の外部の特色をなすものであるという事実によって正当化される (2011: 398)。

名前の違いを説明するものではあるが、指示のメカニズムを説明するものではない。「自分自身と結んだ規約」という考えは、指示の成立に、語の使い手の知識や同定能力が或る仕方に関与していることを示すものであると考えられる。論拠は、434e1-435a7にある。

ソクラテスは「習慣」を次のように定義する。

A わたしがこの音声を発する（こう発語する）ときは決まっていつも、わたしはあれについて考えており、そしてあなたは、わたしがあれについて考えているということがわかる、ということである。

A「話し手Aがこの音声を発するときには決まっていつも、Aはあれについて考えている」を可能にするのは、「Aが自分自身と結んだ規約」(435a7-8)である。たとえばAは、同じ言語共同体に属する他人の発語行為を観察するなどして、おそらくは暗黙の裡に、「カタサ」という記号ないし音声と〈硬さ〉を結びつける作業を行い、以後、「硬さ」という語で〈硬さ〉を指示する行為を繰り返し行ってきたことにより、「硬さ」と発語するときには決まっていつも——すなわち、習慣的に——〈硬さ〉について考えている。

では、Aが「X」と発語するときには決まっていつも考えているところのXとは、何であるか。それは、「X」という語の外部にある対象——実在——である。なぜなら、Ademolloが分析するように²³²、「その明示という出来事は、(1) わたしがそれについて考えながら発語するところのものとは (2) 似ていないものから{生じる}」(435a5-6) という一節において、

(2) = 音声ないし文字は、(1) と似ていない

と言われており、目下、名前を構成する文字と名指される対象との類似性が問題となっていることから、

(1) = 語の外部にある対象

であることがわかる²³³。

そうであれば、当該議論の要点は、話し手Aと（Aと同じ言語共同体に属する）聞き手Bとの間の対人コミュニケーション（相互理解）ではない（あるいは、少なくともそれだけではない）ことになる。否むしろ、「X」という名前が、X——「X」の外延——を指示するのを確保するのは、「X」の属する言語Lを母国語とするひとびとが「Xについてもつ

²³² Ademollo 2011: 397-398.

²³³ この問題をめぐり、大方の学者は *διανοεῖσθαι* の目的語を（思考の内的対象としての）「意味」と解釈する (e.g., Schofield 1982)。

ている知識」である」ということだ。ここで言う「知識」とは、飯田による知識の二通りの解釈の区別に従うなら²³⁴、

Xについての知識がAにおいてどのように実現されているか、つまり、知識の主体Aのある状態

を指し、

ここでは、「どう知られているか」が問題である

と思われる。なぜなら、当該箇所で言われていることは、Aは「X」という語を発する際にXを指示し、Xについて考えているという事実であり、それを可能にするのは、

(i) Aが、「X」という記号ないし音声とXを結びつける作業を行ったこと

(i) によって、

(i)* Aは、のちに遭遇するであろう「X」といういかなる記号ないし音声もXを指示するものとして認識することができるということ

であり、(i)と(i)*は、「X」の属する言語Lを母国語とするすべての成員に共有されていることから、

(ii) Aが「X」の発語によってXを指示し、Xについて考えていることは、Aが属している言語共同体によって保証される

からだ。つまり、当該議論では、AがXを知っていることは生の事実——それゆえ、ここでは「何が知られているのか」が問題なのではない——であり、AがXをどのように知っているのが「規約」と「習慣」という考えを用いて説明されているのである。

「XについてAがもっている知識」についてのこうした理解は、当該議論の直前の一節によって確証される。

名前は、規約を結んだことによって対象を前もって知っているひとびとに対して、{その対象を}明示する(433e4-5)。

²³⁴ 飯田 2002: 69.

Ademollo によれば、「対象を知っている」とはここでは、「X」がどんな対象を指示するかを知っている」ということを意味する²³⁵。そうすると、以上の考察から次のことが明らかにされたことになる。

(ア) 言語 \mathcal{L} を母国語とするひとびとは、 \mathcal{L} に属する「X」という語と X を結びつける作業を行ったことにより、「X」という語で X を指示するのに成功する。

(イ) X の指示を確保する要因は、 \mathcal{L} を母国語とする A が X を暗黙の裡に知っているということである。

ただし、X について A がもっているこうした類の知識は、「X とは何であるか」、あるいは「X」という語で何を指しているか」と問われたときに、A が問われているその当のものを言葉ではっきり表現できることを保証しない²³⁶。

以上の理解は、「道具の機能への依存性」という論点が伝えるわれわれについての二つの事実を喚起する（75 頁参照）。名指し行為の成功が、「名前の形相」という名前の本性的機能に依拠することは、語の使い手が、名指し行為——すなわち、実在の区分と教示——を、それがなされるにふさわしい仕方で行っているという事実は無自覚であることと、名指される対象についてもっている或る種の「知」がまだ不完全なものでしかないことを示唆していた。ここにおいて、「無自覚」と「知の不完全性」が、「自分自身と結んだ規約」と「習慣」に因るものであることが明らかにされたように思われる。というのは、語と対象の結びつけの作業は、語の使い手に、対象についてのある種の「知」——語の外部にある対象への接触を可能にするもの——を確保するが、指示の成功は、語の使い手が、語の使用を自分の本性の一部になるほどにまで繰り返し継続してきたことと、同じ言語共同体に属する他人の理解に依拠するため、語の使い手が、自分の語が何を指示しているかを問い直すことはなく、よって、語の使い手が対象についてもっている「知」は不完全なままであるからだ。指示を確保する要因を「規約」と「習慣」に求める目下の説明は、したがって、名指しの本性的正しさについての以前の説明と無関係ないし独立ではなく、むしろそれを補完するものであると考えられる。

(2) 類似性と「形跡」

とはいえ、ソクラテスにとって（以上のような意味での）「規約」だけが指示を確保する要因ではない。われわれはここで、「σκληρότης」の議論に孕まれる難問に立ち向かわねばならない。それは τι (435b5; b8) と προσχρηῆσθαι (435c6) の解釈に関わる。まずは該当するテキストを見ておこう。

²³⁵ Ademollo 2011: 387-388.

²³⁶ 以上の考察について、Harte (2007) から多くの示唆を得た。

- ① 規約と習慣の両方が、おそらく、われわれがそれについて考えながら話すもの明示にいくらか [τι] 寄与するのが必然であるだろう。(435b5-6)
- ② なぜならば、この上なくすぐれた人よ、もし君が数の方へと向かうつもりなら、どこから数のうちのそれぞれ一つ一つに似ている名前をもってくることができるだろうと思うのか、もし君が、君のその同意と規約が名前の正しさに関していくらか [τι] 権威をもっていることを許さないのならば。(435b6-c2)
- ③ しかし、本当のところは、ヘルモゲネスのことばの通り、類似性のこの力 [明示する力] は薄弱であり、名前の正しさのためには、この通俗的なもの、すなわち、規約も用い [προσχηθῆσθαι] ざるをえないのではないかという恐れがある。(435c2-7)

特定の数量詞 τι [some] の限定的効果は、従来、「名前の正しさ」をめぐるソクラテスの最終的立場をどう判定するかに応じて、様々な仕方で解釈されてきた²³⁷。しかし、繰り返し述べるように、修正された基本構図に照らすならば、「名前の正しさ」に対するソクラテス（そしてプラトン）の最終的立場は何であるかという疑問は、「言語本性主義」と「言語規約主義」の対立という問題枠が設けられたことにより、否応なしに選択を迫る問題として浮上してきたのであり、目下の問題は、語が使用される外的文脈に訴えることなしに、語それ自体が当の対象をいかにして指示しうるかを明らかにすることによって、C⁵の真偽性を判別することにある。

三つの引用箇所から、ソクラテスが指示を確保する要因を「類似性」と「規約」の両方に見出したことは疑い得ないように思われる。問題は、それをどう解するかにある。要素的な名前が正しい名前であるための語源分析的条件として導入された「類似性」が、実在を構成する類と、それと対応する仕方で取り出された字母との間の関係に言及することに、着目する必要がある。ここでもう一度、「σκληρότης の議論」の要点を確認したい。話し手 A が ‘σκληρόν’ という語を発した際、A はこの語の当の対象——〈硬さ〉——について考えており、A がそれについて考えていることを聞き手 B が理解するという仕方で、A の ‘σκληρόν’ という発語は、A 自身と B に対して、この語の外延である〈硬さ〉を明示する。さて、この明示に、〈硬さ〉と音声的類似性をもつ字母 ρ が何らかの仕方で関与するとしたら、それは ρ という音声が、その類似性によって、A と B に〈硬さ〉を喚起するという仕方で、である

²³⁷ 規約説解釈を支持する Schofield (および Fowler, Méridier) は、τι の限定的効果を無効にし、規約の「いくらかの寄与」「いくらかの権威」を「完全な支配」「全面的な権威」の控えめな表現であると見做し、ソクラテスは「σκληρότης の議論」を境にこれまで支持してきた本性説を捨て、徹底的な規約説の立場に翻ったという判定を下す (Schofield 1982: 79)。他方、対象を指すために規約にのみ依拠する名前と類似性にのみ依拠する名前とを区別する Ademollo は、τι という数量限定詞によって両者が数的に区分されると解釈する(2011: 412)。

う。理解の鍵は、「形跡」[τύπος] という概念にある。「形跡」は、「二人のクラテュロスの議論」において似像には本質的・非本質的欠陥があるということが示された直後に、次のような仕方と言及される。

SO. 「[...] これ {形跡} が内在している限りは、{名前が当の対象とそっくりであるために必要とされる} すべての文字をもっていなくても、とにかく事物は言われているのである——すべてを {もっているときには} うまく、少ししか {もっていないときには} 下手に。{...}」(433a4-6)

Ademollo は、類似性の最低限の基準は、名前が名指される対象の τύπος を含んでいることにあると述べる²³⁸。τύπος の基本的意味「印影、痕跡」(imprint) から、幾人かの学者は「本質」(intrinsic quality²³⁹) や「固有の特性」(caractère distinctif²⁴⁰) のような特殊な意味を設けた²⁴¹。その場合、ソクラテスは、「名前は、それを構成する文字が名指される対象の何か固有の特性に似ている限り、どれほど不完全に作られていようとも、対象を名指す」と言っていることになるが、もし名前が当の対象に音声上似ている文字をほんのわずかしかもっていなければ、指示対象の何か固有の特性に似ていることはありそうにない。そこで Ademollo は、McDowell, Guthrie, Sedley らに従い、τύπος が「概略的内容」(outline) ないし「一般性質」(general character) のようなものを意味している可能性が高いと推定する。そうすると、類似性という語源分析的条件は非常に弱いものであることになり、非常に一般的な類似性でも十分であることになる。

τύπος 概念の導入によって、類似性の基準が下げられたことは確かであろうが、問われるべきはむしろ、名前が、極めて弱い類似性によって、いかにして当の対象を名指しうるかにある。この点に関して、Barney が極めて興味深い解釈を提示している²⁴²。Barney は『テアイテトス』192a4; 194b5 を参照し、τύπος を「見知っている対象についての、精神に刻まれた記録であり、知覚を通じてその対象を再度同定・認知するのを可能にするもの」と見做す。この記録が「像」[εἶδωλον] と呼ばれることから、Barney は、『クラテュロス』で名前が「似像」と呼ばれる点との関連性を見出し、両対話篇において、τύπος は、「外界の或る対象に由来する似像であり、われわれに「(その対象が) どのような性質のものであるか」を教え、同定行為を（『テアイテトス』と『クラテュロス』では異なる種類の行為ではあるが）可能にする」ものであると、述べている。

「どれだけずさんな名前であっても、当の対象の τύπος 「概形」が保持されている限り、ひとはそれを当の対象の名前として——ひとが形や概形を認知するように——認知するこ

²³⁸ Ademollo 2011: 371-372.

²³⁹ Fowler 1926.

²⁴⁰ Méridier 1950.

²⁴¹ 'marque' Dalimier; 'pattern' Reeve.

²⁴² Barney 2001: 122-123.

とができる」と Barney が主張するほど直接的に、目下の τύπος が対象同定に寄与するよう意図されているようには思われない。むしろ τύπος は、「規約」の助けを借りて対象同定に寄与するのではないかと考えられる。語の使い手は、何か或る「X」という記号ないし音声と X を結びつける作業を行ったとき、X が「X」という視覚的記号ないし音声としてそのひとの精神に刻印され、のちに「X」という記号ないし音声に遭遇したとき、その視覚的記号ないし音声から X を喚起することで、それが X の名前であることを認知することができるのかもしれない。もしこう考えられるのなら、語と対象との間の音声的類似性は、規約に依拠する仕方、指示の成立に関与していることになる。こうした理解に基づいて、わたしは τύπος を「形跡」と訳出することにする。

(3) 数の名前

以上の考察結果は、「σκληρότης の議論」に孕まれる厄介な問題への応答を可能にする。この議論の過程でソクラテスが数の名前 (435b6-c2) に言及する意図およびこれが議論全体にもたらす意味は、これまで研究者たちにとって謎となってきた。先行研究は、数の名前に数そのものとの本性的類似を認める解釈と、いかなる類似も認めない解釈に二分されるが、いずれの場合も、文脈を無視してこの問題を考察してきた。これに対してわたしは、この問題を「二人のクラテュロスの議論」に遡って考察する。結論から言えば、数の名前は、数との本性的類似はもたないが規約的類似を有すると考える。この解釈の論拠を以下に示す。

まずは、この問題を理解するうえでの予備事項を二点確認しておこう。一点目は、古代ギリシアの数の概念に従えば、数は抽象単位の集合体であるということだ。Ademollo が説明するように、たとえば「数 10」といったようなものは存在しない²⁴³。二点目は、「数の名前」によってソクラテスが何を念頭に置いているのか判然としないということだ。ギリシア語の ἓν, δύο, τρία... が有力候補であるが、α, β, γ... や I, II, III... などの数的な記号も候補の一つに挙げられてきた²⁴⁴。わたしはこの論争に立ち入らない。というのは、この問題をめぐる先行研究の議論の多くが本題から逸れているように見えるからだ。以下の論述が示すように、われわれはこの論争に判定を下す必要はない。論じるべきは、数という抽象単位と数の名前の間の関係であるのだから。

それでは、本題に入ろう。ソクラテスが数の名前に言及する場面の冒頭に、この問題を解く手がかりが存在する。ソクラテスはクラテュロスに対して、「もし君が数の方へと向かうつもりなら」(435b7-c2) と切り出す。先行研究では滅多に問われなかったソクラテスのこの発言は、何を意味するのか。ここで、「二人のクラテュロスの議論」についての考察を通して、クラテュロスにとって名前は数のようなものであったことを思い出す必要がある (135-136 頁参照)。数の本性は、「構成要素の何か一つでも欠けたり余分につけ加えられたりした

²⁴³ われわれは欲する分だけいくらでも 10 個の単位の集合体を形成することができるからである (Ademollo 2011: 360)。

²⁴⁴ Cf. Reeve 1998: xxxix-xl.

ら、ただちに別の数になる」という点にある。数の名前はどうか。数の名前もまた、似像であるためには、これと同じ規定を受けるのでなければならない。事実、数の名前は——それが *ἓν, δύο, τρία...* であろうと、*α, β, γ...* や *I, II, III...* であろうと——数そのものと同じ規定を受ける。というのは、それらもまた、もし構成要素の何か一つでも欠けたりつけ加えられたりしたら、ただちに別の名前になるからだ (*ἓν, δύο, τρία...* は音節の数で *1, 2, 3...* を模倣し²⁴⁵、*α, β, γ...* は一定の順序で配置されているという点で *1, 2, 3...* と似ており²⁴⁶、また *I, II, III...* は記号の数で *1, 2, 3...* を模倣した例である)。ところが、こうした本性は似像の正しさに反することをわれわれはすでに確認した。数の名前は、数に似ていながら似像ではないということになる——数の名前は、まさに写しなのだ。となれば、名前を事物の写しとみなすクラテュロスにとって、数の名前こそが模範例ということになる。「もし君が数の方へと向かうつもりなら」(435b7-c2) というソクラテスの発言は、クラテュロスにとって数の名前が名前についての彼自身の説を擁護するための頼みの綱であることを示唆している。

では、こうした意義をもつ数の名前にあえて言及するソクラテスの意図とは何か。テキスト②(141頁参照)の要点は次のようにまとめられる。

君が規約に訴えさえすれば、君はそれぞれの数に似ている名前を与えることができる²⁴⁷。

われわれはこの箇所から、「規約が、名前と対象間の類似性に寄与する」というソクラテスの主張を読み取ることができる。この主張は、ソクラテスが c2-7 で再度類似性と規約を対比する事実と折り合わないと言って、看過されるべきではない²⁴⁸。むしろこの主張こそが、ソクラテスが数の名前に言及する意図および彼の謎めいた議論を解明する。該当箇所想定されている数の名前が *ἓν, δύο, τρία...* であるとしよう。たしかに、*n* 音節の名前と数 *n* の間には類似性が存在する。この類似性は規約的ではなく客観的であると言えよう²⁴⁹。しかし、(Schofield のように) 関連項が文字や他の任意のものではなく音節であると決めるのは恣意的であり、また、*n* 音節から構成される数多くの名前のうちでどれが数 *n* を指すのかを決めるのも恣意的である²⁵⁰。つまり、関連項は音節であると決め、数 *n* の名前は *n* 音節の *○○* であると決める規約こそが、数とその名前の間に類似性を確立するのである(数の名前は、数との本性的類似はもたないが規約的類似を有すると言ったのは、この意味である)。上述したように、クラテュロスにとって数の名前が最後の頼みの綱であることを、ソクラテスは一連の議論を通して看取する。この意味で、ソクラテスの取った戦術は奇策であると言えよう。

²⁴⁵ Schofield 1982: 79.

²⁴⁶ わたしはこれが「もし何かを置き換えたら、ただちに別の名前になる」(431e-432a) 事例の一つであると考え。

²⁴⁷ Ademollo 2011: 409.

²⁴⁸ Pace Ademollo 2011: 410.

²⁴⁹ Cf. Ademollo 2011: 409-410.

²⁵⁰ Cf. Ademollo 2011: 410.

彼は、数の名前が数そのものと純粋な本性的類似をもつという誤った考えを根底から覆し、結果として、クラテュロスの主張の誤り ($C^6 \cdot C^7$) を論駁したのである。

第五章 「名前の正しさ」の存在論的問題

1 意味論的問題から存在論的問題への転換

「σκληρότης の議論」において、規約と類似性が指示の成立に関与することが論証されたことによって、C⁵（「記述的意味＝指示対象説」）は一見論駁されたかに見える。実際はそうでないことが、「流転をめぐる議論」において示唆されるのであるが、いずれにせよ、クラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものの全貌は、まだ明らかにされていない。議論は新たな局面に入る。

「σκληρότης の議論」を終えた直後に、ソクラテスはクラテュロスに対して次のように問う。

SO. 「[...] 名前はどんな力をわれわれのためにもっているのか、そして名前は如何なるすぐれたことをなしとげてくれると言ってよいものか。」

CR. 「教えるのだと、このわたしには思われます [...]。」 (435d1-4)

「名前は教える」というクラテュロスの返答は、従来、名前の自然本性的正しさについてのソクラテスの説明の冒頭で触れられた名前の教示機能、すなわち「名前は、外的世界のあり方を区分して教える」という機能、の前方参照 (388b-c) と見做されてきた。長大な語源分析が終えられた直後で (428e1-6)、「名前は教示のために言われる」ということがソクラテスとクラテュロスの間で再度確認されるが、名前が何かを教えるということの意味はこれまではっきりと説明されていない。そこでクラテュロスが、それが本当のところ何を意味するかをようやく語り始めた、という理解である²⁵¹。しかし、従来、この理解は、当該箇所 (435d) をこれまでとは完全に独立した新たな議論の出発点だとする理解に基づくか²⁵²、あるいは、『クラテュロス』において二つのタイプの言説——一般大衆による日常の規約的言語を用いた言説とプラトンの問答家による自然本性的に正しい問答法的言語を用いた言説——を区別し²⁵³、前者へのプラトンの関心は限定されたものでしかないと当該箇所を境に後者へと話題が転換したという理解に基づくものであった²⁵⁴。

しかし、クラテュロスが「物事のうちに最も重要なこと」の全容を明らかにしはじめるの

²⁵¹ Barney 2001: 144; Ademollo 2011: 427.

²⁵² Ademollo 2011: 444. 'But the present discussion of Cratylus' claim that names have the power to 'teach' has been introduced at 435d as a fresh start and has hitherto been wholly independent of the previous discussion.'

²⁵³ Ackrill 1997: 35-46.

²⁵⁴ Van den Berg 2008: 17-18.

は 429b 以降であり (89 頁参照)、それが一つには、次のこと——すなわち、語は、その記述の意味を充足する本性をもつ対象にしか適用され得ないため、虚偽を發することは本来的に不可能である、ということ——に存するのを、われわれはすでに確認した。だが他方で、「教示」ということでクラテュロスが何を意味しているかは、これまでまったく論じられていない。したがって、目下の一節は、クラテュロスの説く「名前の正しさ」に孕まれる意味論的問題から存在論的問題への転換点と位置づけられる。

2 「記述的意味＝知識説」

前記のソクラテスの問いを受け、クラテュロスは、「名前は教える」ということの意味を、次のように規定する。

C⁸ 名前についての知識をもつ者は、実在についての知識をも有する。(435d5-6)

「知識をもつ」[ἐπίσταμαι] という動詞およびその派生語は、語源分析の箇所を除けば、このクラテュロスの主張で初出する。この返答によってクラテュロスは、「教示」ということを「実在についての知識を与える」という意味で理解していることがわかる。だがそれは如何にしてなされるのか。その点の明確化のために、ソクラテスは C⁸が次のことを意味するのを確認する。

C^{8*} 「X」という名前の語源分析が何であるかを知る者は、対象 X が如何なるものであるかをも知る。(435d7-e4)

C⁸から C^{8*}への展開において、名前をその対象の「似像」だとする考え (430a12) と、互いに似ているものは同じ技術 [τέχνη] の領域に入るという一般原則が働いている²⁵⁵。Barney が指摘するように、名前の語源分析を通して実在のあり方を知る技術知、すなわち (クラテュロスの言う) 教示術と、ソクラテス (そしてプラトン) の問答術との緊張関係は、『クラテュロス』を通してずっと極めて重要な余談となっている²⁵⁶。そしてこの緊張関係は、教示術が知識の獲得を謳ったとき、一気に高まる。だが問題はそれだけにとどまらない。C^{8*}は次の主張をも含意することが判明する。

C^{8**} 名前の語源分析を通して実在についての知識を獲得する方法 (すなわち、教示術)

²⁵⁵ Ademollo によれば、ソクラテスはここで次の三段論法をほのめかす。すなわち、「互いに似ているものは同じ技術の領域に入る；名前と対象は互いに似ている；したがって、名前と対象は同じ技術の領域に入る」(2011: 428-429)。

²⁵⁶ Barney 2001: 144-148.

が、実在についての知識を獲得するための唯一にして最善の方法である。(436a1-2)

そこでソクラテスは、知を獲得する方法として、「教示」の代わりに「学び」と「発見」という視点を導入する。「教示」から「学び」と「発見」への基点の移行は、従来、C^{8*}を論駁するためのソクラテスの戦術であると理解されてきた²⁵⁷。確かに、ソクラテスはこののちの議論で、「学び」と「発見」という観点から C^{8*}に孕まれる問題点を指摘する。しかしこれは C^{8**}を論駁するものであって（つまり、教示術が唯一にして最善の方法であるという点の論駁）、C^{8*}を論駁するものでは断じてない（つまり、教示術そのものの論駁ではない）。以下の論述で、ソクラテスが C^{8*}を如何にして吟味し、如何なる結論に至るのかを論究する。

3 名前の不調和をめぐる議論

ソクラテスによる C^{8*}の吟味は四段階からなる。第一段階は「名前の不調和」をめぐる議論である (437ac)。C^{8*}の抱える問題点を明らかにするために、ソクラテスはまず次のテシスを提出する。

S³ 最初の命名者は誤った思いなしに基づいて名前をつけたのかもしれない。(436b9-11)

これに対して、クラテュロスは次のように返答する。

C⁹ 最初の命名者は知識をもって [εἰδότες] 名前をつけたにちがいない。さもなければ（もし知識をもたずに名前をつけたのなら）、それらは名前ですらない。(436b12-c2)

この応酬において、ソクラテスとクラテュロスの見解の相違が次の点に存することが明らかとなった。すなわち、最初の命名者が名前を制定したとき、ソクラテスは、彼らが実在についての思いなししかもっていないかと思えるのに対して、クラテュロスは知識をもっていたと考える。ここで重要なのは、すぐ後で詳述するように、ソクラテスは最初の命名者が実在についてもっていた思いなしが、誤った思いなしのみならず正しい思いなしをも含みうるものと考えることだ。そうすると、二人の見解はそれぞれ、次の帰結を生むことになる。

S^{3*} 最初の命名者が誤った思いなしに基づいて名前をつけた場合、その名前の語源分析は、われわれに実在についての誤った情報を提供するが、他方、正しい思いなしに

²⁵⁷ Cf. Barney 2001: 145.

基づいて名前をつけた場合、その名前の語源分析は、われわれに実在についての正しい情報を提供する（つまり、その名前の語源分析から、われわれは当の対象についての正しい思いなしをもつことができる）が、決して知識を提供するのではない（つまり、われわれは知を獲得することはできない）。

C^{9*} 最初の命名者は知識をもってすべての名前をつけたのだから、名前の語源分析はすべて、われわれに実在についての知識を提供する。

クラテュロスが知識の獲得を主張する理由は、一つには、「X」の語源分析から得られる記述的意味が「X」の指示対象を決定するという主張（「記述的意味＝指示対象説」）への執着にある。「記述的意味＝指示対象説」によると、もしXが「X」の記述的意味を充足する本性をもたない場合、「X」はXの名前ですらないことになる（ヘルモゲネスは、「ヘルモゲネス」の語源から説明される記述的意味——「ヘルメスの息子」——を充足する本性をもたないため、「ヘルモゲネス」はヘルモゲネスの名前ですらない (429bc)、言われるように）。つまり、クラテュロスにとって、或る音の連なりが名前であるということは、必然的に、それが当の対象の本性を表示する記述的意味をもっていることを伴う。そしてクラテュロスは、その「対象の本性を表示する記述的意味」を「対象についての知識」と同一視する（「記述的意味＝知識説」）。しかし Ademollo が的確に指摘するように²⁵⁸、「X」がXの本性を表示する記述的意味をもっていることは、必ずしも、「X」の命名者がXについての知識を有していたことを意味しない。したがって、クラテュロスがC^{9*}の論拠として「記述的意味＝指示対象説」を提出したのは誤りであったことになる。

しかしそれでもクラテュロスは、C^{9*}の「最大の論拠」[μέγιστον τεκμήριον]を「名前の一貫性」という点に求める。つまり、クラテュロスは、名前が諸々の実在の一樣のあり方——すなわち、流転性——を提示するその一貫性こそが、命名者が知識をもっていたことの証拠であると考えているのだ。それに対してソクラテスは、前提が間違っている、その誤りが気づかれないほど小さなものである場合、妥当な推論によって、多くの誤りがあるが一貫した帰結を生む数学的証明の例を挙げて²⁵⁹、一貫性は命名者の知識の証拠にはならないと断言する (436d)。そして、実際のギリシア語の名前は一貫性を欠いていることが一連の語源分析を通して示される (437ac)。

「名前の不調和」をめぐる一連の議論は、その構成と趣意において、想定されるよりもずっと複雑である。注意を要するのは、この議論で扱われる一連の名前のうち、以前の語源分析 (412a) を再吟味されるのは「知識」[ἐπιστήμη] という名前だけであるということだ。このことが意味するのは、この一連の議論におけるソクラテスの意図は、以前の語源分析を撤

²⁵⁸ Ademollo 2011: 433.

²⁵⁹ τῶν διαγραμμαμάτων (d2) の意味および数学の例の全体的理解に関しては、Ademollo に従う (2011: 434-435)。

回することにあるのではないということ、言い換えれば、古代の命名者の思いなしのすべてが間違っていたことを論証することにあるのではない、ということだ²⁶⁰。否むしろ、この議論において、「知識」を含むいくつかの倫理的な名前（徳に関連する名前）に限り、それらの名前が語源的に「静」を表示するという点において、それらを命名した者は少なくとも実在についての正しい思いなしをもっていたことが示唆されていると考えられる。このことは当該箇所でもそ明示されないけれども、ソクラテスがここで極めて重要な伏線を敷いたことが、学びをめぐる一連の議論の最後に明らかになる。

4 実在を学ぶ二つの方法

以上のようにして、「名前の一貫性」は C^{9*}の論拠にはなり得ないことが示された。そこでクラテュロスは、さらに次の論点から C^{9*}を擁護しようとするが、ソクラテスに論駁される。

C^{9**} 語源的に「動」を表示する名前の多さが、C^{9*}の論拠となる。(437d1-2)

S⁴ 語源的に「動」を表示する名前と「静」を表示する名前のどちらが真実の [ἀληθῆ] 名前であるかは、数の多さでは測り得ない。(437d3-6)

ソクラテスは次に、クラテュロスの二つの主張、「知識は、名前の語源分析を通してしか獲得され得ない」(C^{8**})と「最初の命名者は知識をもっていた」(C⁹)が、両立し得ないことを指摘する²⁶¹(438a3-b4)。つまり、知識というものが名前の語源分析を通してしか獲得され得ないものであるとしたら、最初の命名者は——そこから知識を得るべく名前をもたなかったからには——知識をもっていたはずはない、ということである。それに対してクラテュロスは、「人間よりも大きな力」、すなわちダイモンや神、に訴えることで、C⁹を擁護しようとする(438b8-c3)。そこでソクラテスは「名前の不調和」をめぐる議論を前方参照し、ダイモンや神に自己矛盾を帰すことの不合理性に訴えるが(c4-5)、この論点が最終的に、クラテュロスを窮地に追い込むことになる。クラテュロスは、再度「記述的意味＝指示対象」を持ち出して、語源的に“動”を表示する名前と“静”を表示する名前のどちらか一方は名前ではないと主張するが(c6)、そのことは、どちらの名前が存在論的に真の理論を提示するかを判定する方法を要請することになるからだ。その方法は、「名前なしで、実在の真実 [τὴν ἀλήθειαν τῶν ὄντων] を顕示する」方法であるとされ(d7-8)、そのようにして、教示

²⁶⁰ Sedley は、ソクラテスが暴いた語源分析上の矛盾は、解釈学的 (exegetical) なものではなく哲学的 (philosophical) なものであると述べる (2003: 159-61)。

²⁶¹ 437d-438a には、テキスト上の問題が存在する。主要写本には二つの異なるテキストが存在するが、OCT が ‘Versio B’ として編纂したテキストは『クラテュロス』の初版に属し、われわれの手元にあるテキストはプラトン自身がいくつかの修正を加えたものであることはすでに一般的見解となっている (Cf. Sedley 2003: 6-9)。

術を實在について学ぶ唯一にして最善の方法と見做すクラテュロスの主張 C^{8**}は、一見したところ、論駁されたかのように見える (438d-e)。

では、「名前なしに實在について学ぶ方法」とは如何なる方法であるのか。注意を要するのは、「名前なしに [ἄνευ ὀνομάτων]」と言う際、ソクラテスは名前の使用を否定している訳では決してないということだ²⁶²。目下の論点は、名前の語源分析的調査に訴えない仕方であるか、詳細には語られない——「實在の相互を通じて」あるいは「實在それ自体を通じて」ということ以外には。前者は、「イデア相互の同族性」(e7) という考えに依拠することから、たとえば Ademollo は、当該箇所『メノン』における想起説 (81c9-d5) を読み込もうとする²⁶³。確かに、436a3 以降、「探求する」[ζητέω]、「学ぶ」[μανθάνω]、「発見する」[εὐρίσκω]という三つのキータームが用いられるという点を考慮に入れるなら、プラトンは「實在の相互を通じた学び」と記述する際、「想起」[ἀνάμνησις] を——その用語こそ用いなければ——念頭に置いていたと考えられるかもしれない (実際、『メノン』81d2-3 で、「想起を人間たちは「学び」と呼んでいる」と言われる)。しかし、ソクラテスもまた「想起」を意図していたと考えるのは間違いである。なぜなら、ソクラテスは、實在について学ぶということが如何にしてなされるべきか知らないと言断するからだ (439b4-6)。

『クラテュロス』において、ソクラテスの無知ないし確信の無さの表明は二つの問いに対してなされる。一つは、「實在について如何にして学ぶべきか (言い換えれば、知は如何にして獲得されるべきか)」という問いであり、もう一つは、「美や善や、あるもののそれぞれ一つ一つがあるのか、それとも流転しているのかどうか」(440c1-3; d3-4) という問いである。前者についての無知は後者についての無知を伴うため、ソクラテスの主張する「實在の確固不動性」は、最終的に「夢」(439c7-9)——として語られ、仮設的な身分にとどまることになる。

5 学びをめぐる議論の結論

学びをめぐる一連の議論は、以上のようにして、C^{8**}の論駁で終わったかに見えた。ところが、結論を急ぐなどと言わんばかりにソクラテスは、「名前の中で、うまくつけられている名前は当の対象に似ており、その似像である」というこれまでに何度も同意された論点を再度確認したうえで (439a1-4)、次のような結論を下す。

²⁶² ソクラテスの目下の主張が「言語の使用」を否定するものではないとする Sedley (2003: 162) と Ademollo (2011: 445) に対し、Silverman (2001) は、ソクラテスがここで、非言語的な理解方式を提案していると主張する。

²⁶³ Ademollo 2011: 446. 「實在の相互を通じた学び」については立ち入った考察がなされないため、先行研究においてもほとんど論じられていない。

S⁵ 名前を通じて可能な限り実在について学ぶことができるが、実在それ自体を通じて学ぶ方がすぐれており、明瞭である。(439a-b)

Barney は、S⁵から、名前のいくつかは真に賢い命名者によってあてがわれ、その結果、正しい思いなしを表すという可能性を引き出すが、その可能性は全く現実的でないことが含意されていると述べる²⁶⁴。「言語が似像であるとする考えは、当の対象の知識を優先することにその直接の目的があり、結局のところ、われわれは似像そのものからそれがよい似像であるかどうかを判定することはできない」からだ²⁶⁵。しかし、S⁵の眼目は、名前を通じて存在について学ぶことの或る程度の可能性を残すという点にある。そうであれば、「名前を通じた学び」に対するソクラテスの最終的な立場は、知を獲得する手段としての名前の語源分析の使用を絶対的に拒否するものではなく、適切な使用に限りそれを容認するものであると考えられる。だが本質的には、名前の語源分析に対するソクラテスのこうした態度は、「自分が自分に欺かれること」に対する徹底した警戒心ないし非難と分かち難く結びついている。

S⁵を表明した直後でソクラテスは、さらなる——そしてこの対話篇で最後の——探求に着手する。

SO. 「さて、さらに次のことを考察しようではないか——これら多くの、同一のものの方へと向かっている名前が、われわれを欺くことがないように。すなわち、A それらの名前をつけたひとびとは本当に、万物は常に行きつつあり流れつつある [ἰόντων πάντων ἀεὶ καὶ ῥεόντων] と確かに思索したうえでつけたのだが——というのは、彼らもまた²⁶⁶そのように思索したようにこのわたしには現われているので——B もしかしたらそのこと {つまり、「万物は常に流転している」ということ} は事実ではないのかもしれない、むしろ彼ら自身がいわば或る種の渦 [τινα δίνην²⁶⁷] の中に落ちてしまっ、目がくらみ [κυκῶνται]、われわれをも引きずり込んでその渦の中に投げ入れようとしているのかどうか。」(439b10-c6)

Ademollo が指摘するように、この一節は、『クラテュロス』全体の解釈と構造にかかわるという点で極めて重要である。まず、μὲν (439c2)...δὲ (c4) は、反対の内容だが両立可能な二

²⁶⁴ Barney 2001: 144-148.

²⁶⁵ Cf. Ademollo 2011: 447.

²⁶⁶ 439c3 には三通りの読みがある: αὐτοὶ W; καὶ αὐτοὶ βTQ; καὶ αὐτῶ Heindorf. Ademollo によれば、καὶ αὐτοὶ 「彼らもまた」は、「ヘラクレイトスなど、のちの流転論者たちのように」を意味する。文脈上この意味が適切であると考え、Ademollo の読みに従った。

²⁶⁷ Ademollo によれば、「彼らもまた」(439c4) は、回転と渦巻きを宇宙の或る発展段階に据えるソクラテス以前の諸説に言及しており、そのことは、「渦巻き」というまさにその比喩的表現によって伝えられるとされる (2011: 450 n.2)。

つの文 (A と B) を導く²⁶⁸。

- A ‘流転’を表示する名前をつけた命名者たちは、「万物は常に流転している」と確かに思索した²⁶⁹。
- B 流転を被っているのは実在ではなく、むしろ彼ら自身——彼らの認識の状態——であるのかもしれない。

A と B は、411bc を喚起する。第六章第一節(3)で詳しく検討するが、宇宙に関する名前の語源分析のセクションと、徳に関する名前の語源分析のセクションのちょうど分岐点に位置する 411bc で (123 頁参照)、「万物は常にあらゆる点で流転している」という極端な流転説は、古代の命名者たちの「ドクサ」であり、その原因は、彼らの「めまい」による投影的誤謬にあると言われていた。それゆえ、A と B は、徳に関する名前の一連の語源分析が、命名者たちの極端な流転説への傾倒を証言していること、そして極端な流転説は、命名者たちの認識的混乱が引き起こした「めまい」に起因するため真ではあり得ないことの直接の示唆を含んでいることになる。にもかかわらず、後続の「流転をめぐる議論」では、極端な流転説の真偽の判決は留保され、ソクラテスの主張する「確固不動性」は、極端な「流転性」を凌駕し得ずに、この対話篇は終わる。であれば、流転をめぐるソクラテスの最後の考察は一体何のためになされるのだろうか——。

「これら多くの、同一のものの方へと向かっている名前に欺かれないようにするため」というのが、その答えである。極端な流転説についての考察は、したがって、「名前の正しさ」をめぐる議論の一部——否むしろ、「名前の正しさ」についての最終議論——であることになる。ここまで、徳に関する名前の一連の語源分析を通して明らかにされたのは、それらの名前の記述的意味が全体として‘流転’を表示するということである (第三章第二節参照)。ソクラテスはこの対話篇の最後に、語と対象との間の仲介物として現われた‘流転’が意味論的ではなく存在論的に真であるかを見定めるべく、名指される対象それ自体に視点を向けかえる。この「視点の向けかえ」によってしか、「自分が自分に欺かれる」という最大の危険は回避され得ない。「流転をめぐる議論」は、まさにその実践と見做されることができらる²⁷⁰。

²⁶⁸ Sedley によれば、A は、語源分析が解釈学的に (exegetically) 正しいことを述べ、B は、語源分析が、少なくとも流転に関しては、哲学的に (philosophically) 間違っていることを述べる (2003: 165)。

²⁶⁹ 最初の命名者たちが流転説を抱いていたというソクラテスの発言に嘘偽りはないと考える点で、Sedley と Ademollo は一致している。

²⁷⁰ Ademollo は、流転説についての考察を導入するこの一節が「実在は名前なしで学ばねばならない」という結論 (438b-439b) に後続することに着目し、ソクラテスは「名前を介さない」実在本性の探求の見本を示すことによって、いわば 438b-439b の結論を実践していると説明する (2011: 450; cf. Barney 2001: 143)。

第六章 流転説

1 プラトンと流転説をめぐる問題

「流転をめぐる議論」の検討に入る前に、プラトンと流転説をめぐる問題について一考しておきたい。

(1) 問題の所在

「流転説」(‘the theory of flux’; ‘the flux doctrine’) と呼ばれる存在論がある。それはかつて、ヘラクレイトスに帰される特定の教説——たとえば『クラテュロス』402a8-9で、「万物は流れつつあり、何ものもとどまってははいない」[πάντα χωρεῖ καὶ οὐδὲν μένει] という趣意の説がヘラクレイトスに帰される——と理解され、とかく「イデアの離在」をめぐる論争の火中に置かれた。その背景に、イデア論成立についてのアリストテレスの説明——プラトンがイデアを知識の対象として離在させたのは、感覚知覚の対象は絶え間ない生成・変化、すなわちヘラクレイトスの流転を被っているため、知識の対象にはなり得ないと考えたからだとする説明(『形而上学』第1巻第6章 987a32-b7. Cf. 第13巻第4章 1078b9-1079a4; 第9章 1086a31-b11) ——の影響を見てとることは難しくない。その影響をもろに受けたのが『テアイテトス』の「流転説批判」(179d-183c)である。この箇所をめぐる論争に立ち入る余裕はないため、その大枠だけ示すにとどめる。この箇所は従来、次の二つの競合する解釈の間の選択を迫られてきた。それはすなわち、a) アリストテレスの説明を額面通りに受け取って、プラトンは感覚知覚の世界についてのみ流転説を受容したと解するか、b) イデア論というテキストに明記されていない前提を読み込まず、プラトンは流転説を全面的に(つまり、感覚知覚の世界についても)斥けたと解するか、である²⁷¹。いずれの立場をとるにせよ、流転説は当該箇所において、イデアと感覚知覚の世界の区別という問題枠の中で論じられてきた²⁷²。

しかし、流転変動を繰り返す感覚知覚の世界と一切の変化を免れた可知界という、いわゆる二世界論的なイデア論を拒否する傾向が広まるにつれ、流転説は新たなイデア論理解の中に取り込まれることになった。同じものについて反対的性質(大・小、美・醜など)が成

²⁷¹ Sedley (2004: 99-100) は、a と b の二者択一を迫られる必要はないとし、第三の解釈を提案する。その解釈は、本質的に、著者プラトンの視点と対話者ソクラテスの視点とを区別することにある——前者は、イデアの仮定のおかげで感覚界を流転の状態に放置しておくことができると考えるのに対し、後者は、イデアが存在するとは夢にも思っていないため、流転説を捨てる必要性しか感じていない。Sedley は、『テアイテトス』だけではなく『クラテュロス』についてもこのスタンスをとっている。

²⁷² Cf. 藤澤 2014: 225.

立するという事態（一般に、「反対の性質の共存²⁷³」（‘the compresence of opposites’）と呼ばれる）がイデア論導入へのプラトンの主要な動機として指摘されるようになると、この事態を説明する「観点における変化」をプラトンの流転と解する向きが強くなった²⁷⁴。結果として、中期対話篇での「場所的・時間的流転説」——より厳密に言えば、「万物は、「場所的運動」[φορά]と「（時間の経過に応じた）性質的变化」[ἀλλοίωσις]を繰り返す」という説（たとえば『テアイテトス』181b8-182c8、『クラテュロス』439d8-440b4）——の存在は、アリストテレスの説明とともに軽視された²⁷⁵。もっとも、「観点における変化」（‘aspect-change (a-change)’）という視点を最初に導入した Irwin は、ヘラクレイトスの「対立物の一致」（‘the unity of opposites’: 違った二つのものが実は同じであるという主張²⁷⁶）を「反対の性質の共存」に重ね合わせることで²⁷⁷、アリストテレスの説明の再解釈を提示したのだけれども²⁷⁸。

(2) ソクラテス以前のギリシア思想全体におけるテーマとしての流転説

以上のような流転説解釈の変遷は、本質的に、いわゆる「ヘラクレイトス的」流転説を「プラトンの」なものに解釈し直すものである。実際、テキスト上の論拠がないこともない。

Sedley が分析するように²⁷⁹、『テアイテトス』(152d-e) だけではなく『ソフィスト』(249c-d) においても、プラトンは、ソクラテス以前の思想を構成する主要な二つの部分を「あらゆるものが静止している」と考えるパルメニデスの極論と、「あらゆるものが動いている」と考える、より蔓延した正反対の思想として提示し、プロタゴラス、ヘラクレイトス、エンペドクレス、ホメロスらを一括して後者に組み入れる²⁸⁰。

²⁷³ たとえば、Allen 1961.

²⁷⁴ Irwin によれば、プラトンは二つのタイプの変化——「時間の経過に応じた性質的变化と場所移動」（‘self-change (s-change)’）と「観点における変化」（‘aspect-change (a-change)’）——をはっきりと区別できなかった (1977: 5)。

²⁷⁵ Cf. 中畑 1993: n. 9.

²⁷⁶ Robinson (1991: 485) は、ヘラクレイトスの「対立物の一致」について、洗練された読者は「万物の統一性」というヘラクレイトスのより基本的な主張を正しく理解するだろうと述べる（つまり、「対立物の一致」は、矛盾律違反と見做されるべきでない）。

²⁷⁷ Irwin に同調して Sedley は、同じものにおける反対の性質の共存をヘラクレイトスが繰り返し強調したのは確かだと述べる (2003: 111)。

²⁷⁸ Irwin 1977. Irwin は、イデア論成立についてのアリストテレスの説明は正しいが、それについての解釈が間違っていると主張する。

²⁷⁹ Sedley 2003: 112.

²⁸⁰ Lodge によれば、ヘレニズム期の常識あるギリシア人と詩人たちにとって、われわれの住むこの世界が可変的であることは、目に見るほど明らかであったとされる。それゆえ、大多数のギリシア人と同様に、プラトンにとっても、物質的世界の可変性は、客観的な証拠に基づくものであり、よって、ヘラクレイトス主義に対する批判は、そうした実在についての仮説それ自体を斥けるよう意図されているのではなく、特定の人物——その一人が、（プラトンが教わった）クラテュロスであったのかもしれない——によるその不完全な定式だけを斥けるよう意図されている (1956: 17; 138-139)。

ソクラテス以前の思想

パルメニデスの存在論

「あらゆるものは静止している」
パルメニデスのテーゼ：「ないは、ある」
ことは不可能である

↓

帰結：虚偽の可能性を否定

流転的存在論

「あらゆるものは変化している」
プロタゴラス、ヘラクレイトス、
エンペドクレス、ホメロスなど
現われを実在と同一視

↓

虚偽不可能論

この図式は、『クラテュロス』においてはさらに拡大される。『クラテュロス』で最初にヘラクレイトスが言及される一節を見てみよう。「ヘスティア」[Ἑστία] の語源分析を終えたのち、ソクラテスは「レア」と「クロノス」の考察に取りかかろうとするが、「クロノスの名前を、われわれはすでに詳しく述べた」と言う (401e2-3)。ソクラテスは 396b を前方参照しており、そこで「クロノス」[Κρόνος] は「[知性] [νοῦς] の純粹さと混じり気のなさ」を意味していると言われていた。ソクラテスは「無意味なことを言っているのかもしれない」と言って、次のように続ける。

SO. 「善きひとよ、何か知恵の大群 [τι σμῆνος σοφίας] が頭に浮かんできた。」

HE. 「一体それはどのような。」

SO. 「言うとは全く滑稽に聞こえるのだが、しかし何らかの説得性をもっていると思う。」

HE. 「その説得性とはどんなものですか。」

SO. 「あのヘラクレイトスが、古代の賢いことをいくらか語っているのをわたしははっきり見てとっているように、わたしには思われるのだ——それはまさにクロノスとレアに関する事柄であって²⁸¹、ホメロスもまた語っていたことなのだ²⁸²。」

HE. 「あなたはどのような意味で言っているのですか。」

²⁸¹ ἀτεχνῶς τὰ ἐπὶ Κρόνου καὶ Ῥέας (a5) には訳出上の問題がある。通常、ἐπὶ は時代を表す属格 (in the time of) と読まれ、「クロノスとレアの時代における知恵」と訳出されているが、目下論じられているのは、「クロノス」と「レア」の記述的意味の内容についてであるため、Dalimier と Ademollo に従い、「クロノスとレアに関する事柄」と訳出した (cf. Ademollo 2011: 203)。

²⁸² ホメロスは、『イリアス』第 14 章 201; 246 で、川の神々であるオケアノスとテテュスを、他の神々とあらゆる生き物の「親」と見做している。この陳述は、『クラテュロス』402b だけではなく『テアイテトス』152e; 180cd でも引用されている。Guthrie (1962: 450 n.2) は、この陳述を根拠にプラトンが真剣にホメロスをヘラクレイトス的流転説の生みの親と見做していると述べる。

SO. 「ヘラクレイトスは、たしか次のように言っているようだ——「万物は去りつつあり、何ものもとどまっていない」と、そして、あるもの [τὰ ὄντα] を川の流りに喩えながら、「あなたは二度同じ川に足を踏み入れることはできないであろう」と。」

ヘラクレイトスの流転説が「知恵の大群」(401e5) によって導入されたことに注目されたい。「知恵の大群」とは、エウテュプロンに由来する「知恵」のことであると推測される(34-35頁参照)。エウテュプロンの「知恵」に由来する「神がかり的なひらめき」というモチーフは、さらに二度繰り返されるのだが、そのそれぞれと、流転説が、異なる仕方で絡み合っている。第一章第三節で述べたように、エウテュプロンの「知恵」に由来する「神がかり的なひらめき」というモチーフは、ソクラテスを、クラテュロスという人物および彼の実際の語源分析のパフォーマンスに近づける機能をもつ。この「近似化」は、ソクラテスをして、神がかり的な語源分析技能を發揮させ(クラテュロスは、神託めいた言葉を発する人物とされていたことを思い出してもらいたい)、ついに410e2-5で、知恵の高点へと疾走させる(「いまやもう、わたしは知恵の高点へと疾走しているように思われる」[Πόρρω ἤδη, οἶμαι, φαίνομαι σοφίας ἐλαύνειν])。エウテュプロンの「知恵」の二度目の到来とともに、極端な流転説が導入される。ソクラテスは、「思慮」や「理解」や「正義」その他の徳に関する名前が、極端な流転変動の思想を反映することを看守するからだ。三度目の到来(428c7)で、ソクラテスは「自己欺瞞」の危険性を自覚し、自分で自分を語源分析から遠ざける。「自己欺瞞」からの脱出は、最終的に、極端な流転説の真偽性の吟味という形でなされることになる。

この「近似化」と「距離化」は、流転説に対するプラトンのアンビバレントな態度を示しているかもしれない。一方で、エウテュプロンの「知恵」に由来するソクラテスの神がかり的な語源分析技能は、いわゆるヘラクレイトスの流転説の影響力の大きさとその歴史の長さを明るみに出すという効果をもつ。目下の一節は、従来、この中で引用されている「川の流りの比喩」²⁸³に関する断片の真正性との関連で、着目されてきた。川の流りの比喩に関する三つの断片(《B12》、《B49a》、《B91》)のうち、流転という側面が強調される《B49a》と《B91》は、プラトン(『クラテュロス』402a8-10)とアリストテレス(『形而上学』第4巻

²⁸³ 「川の流りの比喩」に関する断片に関して、Sedley (2003: 103-108; cf. 16-21 n. 37) は次のように論じている。アリストテレスの証言(『形而上学』第1巻第6章987a29-34)によれば、プラトンは、彼に哲学を教えた最初の師クラテュロスから、ヘラクレイトスの哲学を極端な流転主義として解釈することを学んだ。他方、『クラテュロス』におけるクラテュロスの人物描写は、アリストテレスの証言に見られるそれと次の二つの点で正反対である。一つは、クラテュロス自身の哲学的発展において重要な役割を果たすことになった「川の流りの比喩」とその解釈を、クラテュロスは当該箇所ではソクラテスから聞いているという点、もう一つは、この対話篇ではクラテュロスはヘラクレイトス一派に与しておらず、ソクラテスとの対話が終わる頃になって自分自身がヘラクレイトス主義に傾倒しかけていることを表明するという点である。Sedley は、『形而上学』でのアリストテレスの証言を——クラテュロスがプラトンの最初の師という点に関してのみ留保するが——基本的には支持したうえで、クラテュロスの言語本性説が流転説への傾倒に先立っていたと述べる(第一章第四節(1)を参照)。

第5章 1010a12-15) の引用に依拠していると推測され、その真正性が疑われてきた。この論争に立ち入る余裕はないが、少なくとも目下の一節を、ヘラクレイトスの思想についての証言として——とりわけ、流転説がヘラクレイトスの中心的思想であったのかどうかという問題との関連において——積極的に扱うことはできないように思われる²⁸⁴。ソクラテスの言う「いくらかの古代の賢いこと」(402a4-5) は、万物流転の思想に他ならないが、プラトンはそれをヘラクレイトスだけに帰していない。プラトンの意図は、むしろ、流転説の起源がホメロスと、さらにはレアとクロノス(およびオケアノスとテテュス)の神々の命名者にまで遡ることを示すことにある(これらの神々は、語源的に「川の流れ」を意味する(402b1-d3))。『テアイテトス』179e2-4で、エペソス一帯に屯する「ヘラクレイトスの徒たち」の言論が、「ヘラクレイト斯的」「ホメロ斯的」、そして「もっと古い時代の」言論と言われる。両節の関連性はこれまで注目されてこなかったが、『テアイテトス』で言及される「もっと古い時代の言論」を、『クラテュロス』での「古代の命名者たちの万物流転の思想」と理解することは妥当であろう。

そうすると、流転説はプラトンにおいて、最初期からのギリシア思想全体を巻き込むほどの歴史の長さや影響力をもった思想であったことがわかる²⁸⁵。

最初期からのギリシア思想全体

流転説

- a) 流転説の起源は、最初の命名者たちに遡る
(つまり、流転説の起源は名前の起源に等しい)
- b) 流転説は非常に多くの名前の語源分析の中に見出される

↓したがって

ソクラテス以前の思想

パルメニデスの存在論

「あらゆるものは静止している」

流転的存在論

「あらゆるものは変化している」

²⁸⁴ 流転説がヘラクレイトスの中心的思想であるのかどうかという問題に関して、Kirk (1954)とGuthrie (1962)の間には大きな対立が見られる。流転説をヘラクレイトスの中心的思想と見做す誤った解釈はプラトンに由来すると主張するKirkに対し、Guthrieは、流転説がヘラクレイトスにとって真であっただけでなく、それがヘラクレイトスの中心的思想であったという点で、プラトンは正しいと述べる。他方で、Cherniss (1964)は、プラトンとアリストテレスの証言に基づき、ヘラクレイトスの流転説と「真なる言表は何についてもなされ得ない」という主張との関連を指摘している。

²⁸⁵ Ademollo 2011: 208-209.

プロタゴラス、ヘラクレイトス、
エンペドクレス、ホメロス
+ 古代の命名者たち

さらにもう一つ、流転説が広く知者たちに共有される普遍的な思想であったことを窺わせるモチーフが存在する。それは、一般に「内密の教説」という呼称で知られるモチーフである。『テアイテス』152c-153d でソクラテスは、彼がプロタゴラスの教説に組み込むヘラクレイトス的要素を「内密の教説」として提示する。この言説は、感覚界に関する流転変動の説であり、感覚界の流転は、感覚の不可謬性の条件であるため、「知識は感覚である」というテアイテスの定義を裏づける目的で導入されたと考えられる²⁸⁶。

「内密の教説」は、『クラテュロス』にも存在する。「正義」[δικαιοσύνη] という名前の語源分析から、正義が「宇宙全体に浸透し、宇宙の流転を支配する力」であると言われたのち、ソクラテスは正義についての一連の改良された議論を提出する (413a-d)。ソクラテスが言うには、彼は流転説を唱えるひとびとが、彼らの「内密の」教説を暴露するまで、彼らにしつこく問いただしたことによって、彼らからこの議論を学んだ。それによれば、匿名の思想家たちが宇宙の力としての正義を「原因」と見做し、それをあれやこれやの実体と同一視したとされる。

具体的には、正義は a) 太陽、b) 火、c) 熱、d) 知性と同一視され、流転説を唱える者たちは、これらの競合する見解をめぐり互いに意見を異にしていたとされる。しかし、a~d の見解の出所を特定するのは容易でない。d の見解だけはアナクサゴラスのものであると明記されているが (413c5)、ほかの三つの見解（とりわけ、a と c）が誰の主張であるのか明らかでない。というのは、「正義」の記述的意味——「一切のもの間を通り抜ける [δια-ϊόν]」(412e1)——によって決定される諸属性、すなわち、

- ① “支配的” (e1)
- ② “生成の原因” (d4-5)
- ③ “最も素早く、最も細やか” (d5-6)

が、太陽²⁸⁷にも熱²⁸⁸にも当てはまらないからだ。火に関しては、「貫通」と①“支配的”と

²⁸⁶ Cf. Sedley 2004: 38-48.

²⁸⁷ Ademollo は、「正義」の語源的意味（「～の間を通り抜ける」‘going through’）ではなく、語彙的意味（「正しい」‘just’）に着目すると、a の見解が、太陽を正義の見張り役と見做す伝統的な考え（ヘシオドス『仕事と日々』267-9）と合致すると述べるが、それは当の問題の根本的解決にはならない。なぜなら、正義が、その記述的意味——「一切のものを貫通するもの」——から何故太陽と同定されるのかが、いま問題とされているからである。

²⁸⁸ Sedley は、ソクラテス自身の師アルケラオスが仄めかされている可能性を指摘する (2003:

の関連を、次のような仕方でヘラクレイトスの断片のなかに見ることができるかもしれない。まず、正義を太陽と同一視する人物は、正義を火と同一視する人物によって、

「太陽が沈むと人間たちの間には正義は存在しないと思っているのか」(413b7-c1)

と言って、嘲笑されるという一幕が報告されている。上記の問いは、ヘラクレイトスの次の断片²⁸⁹、

《B16》 決して没することのないものに対して、どのように身を隠すことができようか。

を喚起する。Ademollo が言うように、《B16》でヘラクレイトスが意味しているのは、われわれは正義の見張り役として太陽よりも信頼できるもの（なぜなら、太陽は没してしまうのだから）を必要とするということであろう。そして、その候補が火であることは、ヒッポリュトス『全異端派論駁』第9巻第10章に含まれる次の二つの断片、

《B64》 万物を電光が舵取る。

《B66》 すなわち、火が到来して万物を裁き、追求する（有罪を宣告する）であろう。

から読みとることができる。《B66》に内在するエクピュローシス（世界焼尽）説問題は脇に置いておくとしても、この二つの断片において、ヘラクレイトスが、火の優位性、支配性を、万物の間を貫いてすべてを明るみのうちに照らし出すという点に見出していると言うことはできそうである²⁹⁰。だが、②“生成の原因”と③“最も素早く、最も細やか”は、火についてのヘラクレイトスの断片のなかを確認されない。したがって、bの見解もやはり、a・cと同様に、誰か特定の思想家に帰することはできないことになる。

118)。確かに、アルケラオスは、宇宙の生成における熱の役割を主張するが、彼の思想において、熱が動の始原であるためには反対物である冷からの分離を必要とするため（ヒッポリュトス『全異端派論駁』第1巻第9章第1節(2) ‘εἶναι <δ> ἀρχὴν τῆς κινήσεως <τὸ> ἀποκρίνεσθαι ἀπ’ ἀλλήλων τὸ θερμὸν καὶ τὸ ψυχρόν, [...] ’)、統括的能力も兼ね備えた原因である「正義」と同一視されることはできないように思われる (cf. Kirk & Raven 1957: 396-399)。

²⁸⁹ 断片訳は、内山 1996-1998 を参照した。

²⁹⁰ Guthrie (1962: 456) や Kahn (1979: 274-275) もまた、b を主張した匿名の思想家がヘラクレイトスであるにちがいないとしている。《B66》には、ヘラクレイトスがエクピュローシス（世界焼尽）説に傾倒していたのかどうかという問題が内在するが、この説がヘラクレイトスに帰され得ないと主張する Guthrie (cf. 456 n.1) は、《B66》では単に火の優位性と、すべてのものはやがて火になるにちがいない——なぜなら、火は、他の状態にある物質の不純をあらわにするものであるから（‘at some time everything must become fire, which shows up the impurities of other states of matter’）——という真実が強調されているに過ぎないと述べる。この「他のすべてのものの不純をあらわにする」という点に、「正義」の記述的意味——「一切のものの間を通り抜ける」——との関連が見られるかもしれない。

だがしかし、これははじめから想定されていたことに過ぎない。なぜなら、「内密の教説」をめぐるこの一連の議論は、「正義」についての語源的解釈に完全に依拠しているからである。この議論の目的は、万物の原因がまさに“動”であるという思想が、最初の命名者たちに起源をもち、さらに、知者と称される多くのものたちの思想のなかに浸透していたことを伝えることにあるのであって、だれか特定の思想家の特定の説を攻撃することにあるのではない。

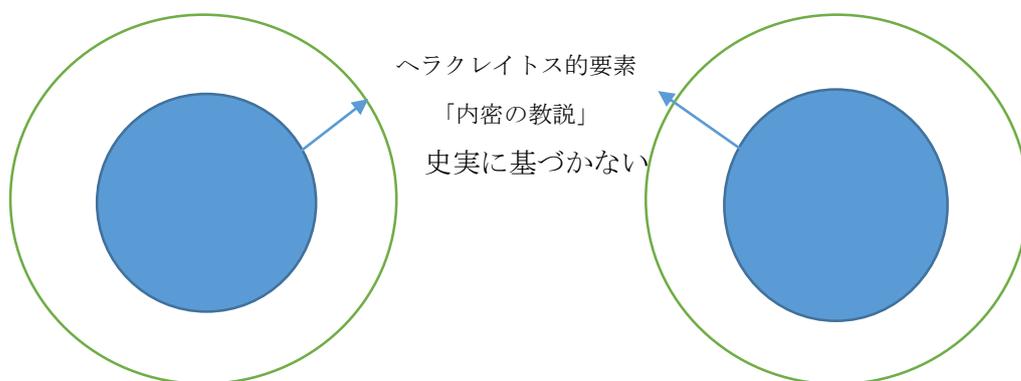
以上の考察から、「内密の教説」は、『テアイテトス』と『クラテュロス』の両対話篇において、史実に基づくものではなく、むしろプラトンが意図的に流転説を唱えるひとつの思想を独自の仕方と解釈したものである、と考えられる。その意味で、「内密の教説」の役割を、「ヘラクレイトスの基盤は実際の哲学史からの逸脱を示す」というプラトンの意思表示を伝えることにあるとする Sedley の解釈は妥当である²⁹¹。

『テアイテトス』

プロタゴラスの教説

『クラテュロス』

ソクラテス以前の思想
+ 古代の命名者たち



以上の点は、確かに、流転説をヘラクレイトスという名の特定の人物の特定の教説として理解すべきでないことを伝えている。その意味では、流転説をソクラテス以前に支配的であった「思想的傾向」と見做す Sedley の解釈は妥当である²⁹²。

しかし、流転説をこのように広く知者たちに共有されていた思想と見做すことは、或る代

²⁹¹ Sedley 2003: 116.

²⁹² Cf. Sedley 2003: 112. ‘Not only in the *Theaetetus*, but also in the *Sophist* (especially 249c-d), he represents the two main strands of thought bequeathed by the preceding tradition as the Parmenidean extreme of seeing everything as static and the more widespread opposed tendency to see everything as changing’.

償を伴う。Sedley は、一つの思想的傾向の中に二つの異なる潮流——a) プロタゴラス的相対主義と b) ヘラクレイトスの流転説——を見出してはいるが、それは二種類の相対性の区別——a) 価値的概念が判断する主体に相対化されること（たとえば、或る特定の対象の美しさが観察者の視点ないし審美眼に左右されること）と、b) 価値的概念が外的対象間で相対化されること（たとえば、或る特定の対象が一つの比較対象との関係において美しいが、別の比較対象との関係において醜いという事態において、美と醜が外的対象間で相対化されること）——を設けるといふ仕方でなされるため、結局のところ、流転性は相対性に縮減されてしまう。このことは、流転が、その本来の意味を有していたところの「場所的運動」と「(時間の経過に応じた) 性質的变化」を捨象することにほかならない。新たな流転説解釈は、こうした代償の上に成り立っているのである。

新たなとは言っても、それは英米圏（とりわけ、Sedley の解釈）の話であって、流転説が単にヘラクレイトスただ一人に帰されるべきでないことの警告を藤澤はすでに発していた²⁹³。だが、藤澤の解釈が本当の意味で先んじるのは、次の点においてである。それはすなわち、『テアイテトス』第一部で論じられる流転説に、次の二つの区別——「広く知者たちに共有される普遍的な思想」(152e; 160d) と「ヘラクレイトスの徒たちの特殊で極端な流転変動の主張」(179d)——を設けるといふ点である。ヘラクレイトスの説とヘラクレイトスの徒たち（とりわけ、クラテュロス）の「極端な」説の区別は何も真新しいわけではない。しかし、英米圏の学者による区別は、『形而上学』第4巻第5章 1010a1-15（そこでアリストテレスは、プラトンには言及せずに、感覚知覚の世界における絶え間ない生成・変化を主張するクラテュロスとヘラクレイトス派の人々を攻撃する）を典拠とするもので、その意図は、「プラトンの」流転説（「観点における変化」を核とする説）をクラテュロスおよびヘラクレイトスの徒たちの「極端な」流転説（「場所的運動」と「(時間の経過に応じた) 性質的变化」を核とする説）から切り離すことにある²⁹⁴。藤澤の解釈は、流転説がプラトンの思想において本質的に多層的であるという極めて重要な事実を伝えている。

(3) 流転説の多層構造

流転説がプラトンにおいて本質的に「多層的」であるということは、これまで表立って主張されてこなかったが、この視点は、流転説とプラトン哲学の関係を理解するうえで重要であると思われる。というのは、第一章第四節(1) で述べたように、広く知者たちに共有されていた普遍的な思想としての「流転説」と、ヘラクレイトスの徒たちに帰される「極端な流転説」、そしてクラテュロスただ一人が最終的に行き着いた「極端な流転説²」の間には、はっきりとした区別を設けざるを得ないと思われるからだ。このことは、いまだ論議的となっている次の問題、すなわちプラトンが、いわゆる「ヘラクレイトスの」流転説をどう受け止めたのか——感覚界に関する限りそれを受容したのか、それとも全面的に斥けたのか

²⁹³ 藤澤 2014: 126-127.

²⁹⁴ Irwin 1977: 12. Cf. Sedley 2004.

——という問題ともかかわっている。

この問題に対してわたしは、「プラトンの態度はアンビバレントである」と応答したい。これまでの考察から、プラトンは、一方で、次のような認識を実際にもっていたとすることができる。それはすなわち、流転説が、ヘラクレイトスのみならずプロタゴラスやホメロスに至るまで、一般に知者と称される多くのひとびとの思考を支配するほどの影響力をもつ思想であり、また、それが最初の命名者たちに遡るほどの歴史の長さをもつ思想でもあったという認識である。そうした広く共有された流転説を、プラトンは、各対話篇の主題ないし文脈との関連において、さまざまな視角から——ときに積極的に——論じている。

だが、極端な流転説に対するプラトンの態度はまったく異なる。『テアイテトス』だけでなく『クラテュロス』においてもまた、プラトンが、ヘラクレイト斯的「流転説」と「極端な流転説」とを明確に区別しており、両説が混同されてはならないことを告げていると想定される箇所が存在する。神々と宇宙に関する名前の語源分析の途中で、ソクラテスは、「思慮」[φρόνησις]、「理解」[σύνεσις]、「正義」[δικαιοσύνη] その他の徳に関する名前の正しさを考察するようヘルモゲネスに懇願されたとき、何かを思いついたかのように次のように述べる。

SO. 「さて、犬に誓って、たったいま思いついたことをわたしは下手に予言していたのではなかったと²⁹⁵、わたしには思われる。すなわち、諸々の名前をつけたはるか昔の人間たちは、今日の知者の多くと何にもまして次の共通点をもっていた、それはすなわち、あるもの [τὰ ὄντα] がいかにあるか [ὅπη ἔχει] を探求しながら絶えずぐるぐる回転しているせいで [ὑπὸ τοῦ πικνὰ περιστρέφεσθαι] めまいを起こし [εἰλιγγιώσιν]、そののち [κάπειτα]、事物の方がぐるぐる回っていてあらゆる点で動いているように彼らに現われる [αὐτοῖς φαίνεται περιφέρεσθαι τὰ πράγματα καὶ πάντως φέρεσθαι]、ということだ。そこで彼らは、その思いなし [ταύτης τῆς δόξης] の原因が彼らの側の内的状態 [τὸ ἔνδον...πάθος] にあるとは考えず、そうではなくて、事物それ自体が本性的にそうあるよう決まっておき、それらの何もとどまってもいなければ確固不動 [βέβαιον] でもなく、流れ、動いていて、ありとあらゆる場所的運動 [ποράς] と生成に常に [ἀεὶ] 満ちていると申し立てるのだ。で、わたしがこう言うのは、たったいま {言及された} 名前すべてに対して、このことを思いついたからなのだ。」

HE. 「それは一体どのような意味ですか、ソクラテスよ。」

SO. 「おそらく君は、さきほど言われた名前について、それらの名前が事物に——それ

²⁹⁵ Ademolloによれば、411b4でのμαντεύεσθαιは infinitus imperfecti であり、401e-402c (156頁参照)が前方参照されている (cf. ἐνενόησα は 401e の ἐνενόηκα に対応する)。Ademolloは、μαντεύεσθαιの直後のὄをこの動詞の目的語とみなす (新OCTはμαντεύεσθαιの後にコンマをうつが、HirschigとMériderはコンマなしにμαντεύεσθαιὄを印刷している)。

らが動き、流れ、生成しているという仮定に完全に基づいて——つけられていると
いうことに気がつかなかったのだろう。」

HE. 「全く気がつきませんでした。」

SO. 「さて、まず初めに、われわれが最初に言及したものは、事物についてのそうした
仮定に完全に基づいて、そのようなものにつけられている。」 (411b3-d2)

目下の一節は、徳に関する名前の語源分析のセクション（以下、「価値的語源分析」と略記する）の冒頭部であり、それに先行する神々と宇宙に関する名前の語源分析のセクション (401c-411a)（以下、「宇宙論的語源分析」と略記する）との分岐点となっている。Sedley は、古代の命名者たちの「めまい²⁹⁶」についての描写がまさにこの分岐点に存在するという事実から、プラトンが流転説を感覚界に関する限り受容したが、価値的対象（および、その他の抽象的対象）に関しては拒否した（つまり、流転説は感覚界についてのみ真であり、価値的対象については偽である）と推定する²⁹⁷。Sedley のこの解釈は、「魂のめまい」についての『パイドン』の一節 (79c2-9) に依拠する。それによれば、魂は感覚によって絶え間なく流転変動する事物に注意を向けるよう強いられるため、混乱し、「めまいを起こす」[εἰλιγγιᾶ 79c7-8]とされる²⁹⁸。Sedley は、感覚界の可変性それ自体が魂のめまいの原因であるとし、古代の命名者たちもまた、感覚される事物に注意を向けることによってめまいを起こし、価値的対象もまた流転しているという誤った見解をもつに至ったと述べる。それに対して Ademollo は、引用箇所ソクラテスが、古代の命名者たちのめまいを彼らが感覚される事物にのみ注意を向けることに帰していないとして、『クラテュロス』で言及される「めまい」と『パイドン』でのそれとが内容上一致しないと述べる。また、価値的対象の名前が導入される目下の一節で、流転が任意の対象 [τὰ ὄντα b7; τὰ πράγματα b8, c2] に帰されるという事実から、流転説は価値的対象についてしか論じられていない（つまり、宇宙論的語源分析のセクションでは、流転説は論じられていない）——よって、それは全面的に間違っており、プラトンは流転説を全面的に斥けた、と主張する²⁹⁹。

この応酬は、いわゆるヘラクレイトスの流転説と極端な流転説との間の区別を設けることによって、解消可能である。引用箇所 (411bc) に先行する宇宙論的語源分析では、流転説は、ヘラクレイトスのみならずプロタゴラス (386e) やホメロス (402a) にまで帰されたが、

²⁹⁶ 目下の「めまい」について：‘intellectually dizzy’ (Sedley 2003: 109) ; ‘in reality the whirl was in their heads’ (Ademollo 2011: 450)

²⁹⁷ Sedley 2003: 108-109. Cf. Barney によれば、「語源分析は、事物は流転しているというその全体的メッセージを通して真実を一括して指摘するのだが——実際、プラトンがわれわれの身の回りにある事物は流転していると信じているように——、不変の非感覚的対象、すなわちアイデアの存在を考慮し損なっている限りにおいて、流転説は誤りである」(2001: 73)。

²⁹⁸ アイデア論成立についてのアリストテレスの説明の典拠として『パイドン』78c-79a を挙げているのは Ross (1953) と Gulley (1962)。

²⁹⁹ Ademollo 2011: 206-208.

ここで論じられているのは、ヘラクレイトスの「流転説」ではなく、「極端な流転説」である。このことは、時間を通じた同一性を数的にも質的にも奪うような表現（「あらゆる点で」(411b8) や「常に」(411c5) など）が用いられていることから明らかであり、実際に「流転をめぐる議論」では、「万物は常にあらゆる点で変化している」という極端な流転説のテシスの真偽が問われることになる。つまり、『クラテュロス』においてプラトンは、一方で、広く知者たちに共有されていた流転変動の思想を、自然科学的知見という点で部分的に受容しながら積極的に論じ（125 頁参照）、他方、極端な流転説を、古代の命名者たちの「めまい」による投影的誤謬に帰すことで、無条件に斥る。

では、何故プラトンは「極端な流転説」を斥けねばならなかったのか——。その答えは、『クラテュロス』の「流転をめぐる議論」の中にある。

2 「流転をめぐる議論」

(1) ソクラテスの二つのテシス

ソクラテスは、徳に関する名前の語源分析が示すとおりに外的世界が本来的に流転変動の状態にあるのかどうかを確かめるべく、最後の考察に着手する。ソクラテスはまず、「これまでに何度も夢にみているもの」[ὁ ἔγωγε πολλάκις ὄνειρώττω 439e4]という前置きをして、次の仮説を述べる。

[ソクラテスの第一テシス] (439c6-d1)

「何か美そのもの、善そのもののようなものがあり、あるもののそれぞれ一つ一つもそのようなものとしてある [τι εἶναι αὐτὸ καλὸν καὶ ἀγαθὸν καὶ ἐν ἑκάστων τῶν ὄντων οὕτω]。」

「流転をめぐる議論」にはいくつかの厄介な問題が内在するが、その中でもとりわけ論議を呼んできたのが、この一節の中の「何か美そのもののようなもの」[τι...αὐτὸ καλόν] についての解釈である。争点となっているのは、当該議論においてイデア論が展開されているのか否か——厳密に言えば、『パイドン』と『国家』に顕著なイデアの離在が論じられているわけではないにしろ、τι...αὐτὸ καλόν にイデアといった特別な身分を与えるべきか否か——である。諸家の見解は、二つに大別される。すなわち、この表現をイデアと見做す立場と、イデアとは見做さない立場である³⁰⁰。

わたしはこの表現が、次のような意味で、イデアであるよう意図されている、と理解する。前章の最後に述べたように、目下の一節は、ソクラテスが、徳に関する諸々の名前が全体として主張する「実在の流転的本性」から、名指される対象そのものへと視点を向けかえる場

³⁰⁰ イデアと見做す学者は、Calvert 1970; White 1976; Sedley 2003; Ademollo 2011。イデアと見做さない学者は、Luce 1965; Irwin 1977; Barney 2001。

面に相当する。その場面でソクラテスは、「これまでに何度も夢に見ているもの」と前置きをして、美や善、その他あるもののそれぞれ一つ一つの確固不動のあり方を語る。

「何度も」(c7) は、Luceによれば、『クラテュロス』の内部で、事物の本性はその現われとは異なることを立証する向きのある数多くの散在する陳述を前方参照することも可能である (e.g., 386e; 387d; 394a-b; 401c; 411c; 423e)³⁰¹。Luceのこの指摘は正しいと思われる。だがより厳密には、名指し行為の成功が依拠するものとして、名指される対象の「確固不動性」が要請されて以来、そうした名指される対象の確固不動のあり方は、指示をめぐるソクラテスの思索の基盤となってきた(「σκληρότης」の議論において、「硬さ」という語の指示対象は、この語の外延——〈硬さ〉——であったことを思い出されたい)。それゆえ、語と対象の関係をめぐるこれまでの多くの観察と思索の全体が、ソクラテスのこのテシスと後続するもう一つのテシスを裏づけていると考えることができる。これまでの議論との関係を踏まえ、「夢をみる」というメタファーを「不完全で不十分な真理把握」と解するべきでない³⁰²。

他方で、「美そのもの」が最後まで暫定的・仮説的身分にとどまること、そして知識の獲得についてのソクラテスの無知の表明は、名指し行為の成功が、語の使い手が対象についてもっている或る種の「知」——語の外部にある対象への接触を可能にするもの——に依拠しつつも、その「知」はまだ不完全なものでしかないという、この対話篇全体の問題と相即的である。

さて、本題に戻ろう。第一テシスに対するクラテュロスの同意を得たうえでソクラテスは、次の二つの論点を考察の対象から外す (439d3-4)。

- ① 或る特定の顔やそうした類のものの何かが美しいかどうか
- ② それらのもの(たとえば、この特定の顔の美しさ)が流れているように思われるかどうか

ソクラテスが①と②を考察の対象から外す理由は、これまで激しい論争の的となってきた。諸家たちの解釈には、主に次の三つの方向性が見られる。

- A) 「顔などの感覚対象は流転している」というテシスにソクラテス自身がコミットしているから³⁰³。

³⁰¹ Luce 1965: 27.

³⁰² 「夢を見る」というメタファーは、「何かについての仮説に基づく把握」を表すプラトンの理論的装置であるという点で、諸家たちの見解はほぼ一致している。

³⁰³ Grote 1888; Goldschmidt 1940; Ross 1953; Gulley 1962; Jowett 1966; Jackson 1975; Festugière; Ficino.

B) 感覚対象が流転しているか否かという問題に対する解答をソクラテスは（少なくとも現時点では）留保するから³⁰⁴。

C-1) 後続する議論で提示される流転説は「極端な」説——すなわち、「万物は常にあらゆる点で変化している」という説——であり、実際にソクラテスは『テアイテトス』で感覚対象に関してこの説を斥ける。

他方で、

C-2) 「感覚対象は常に何らかの点で変化している」というのは、感覚界についての疑い得ない事実であり、感覚対象から時間を通じた自己同一性を奪うには十分である。

C-1 と C-2 から、

プラトンは、感覚対象に関して流転説を、C-2 の意味で受け入れるが、C-1 の意味では受け入れない（つまり、プラトンは、「極端な」流転説は感覚界に関しても偽であると信じている）。感覚対象の流転は複雑であるため、ソクラテスは感覚対象を目下の考察から外した³⁰⁵。

この論争は、『テアイテトス』 (179d-183c) で論じられるようないわゆる「ヘラクレイトスの」流転説をプラトンが結局どう受け止めたのかという問題をめぐる論争の延長線上にある。しかし、前節で述べたように、『クラテュロス』で論じられているのは、価値的对象に関する「極端な」流転説だけである。それゆえ、ソクラテスが感覚される対象（この特定の顔の美しさ）の流転を目下の考察の対象から外すのは至極当然である。

ソクラテスは次に、二つ目の仮説を提示する。

[ソクラテスの第二テシス] (439d3-6)

「美そのものは、常に、それがそのようであるところのそうしたもの [τοιοῦτον...οἷόν ἐστιν] である。」

第一テシスと第二テシスの相違は、目下のところ、「数的同一性」と「質的同一性」の相違と考えてよい³⁰⁶（両者の関係については、後続する議論の中で明らかになる）。以下で論述するように、第一・第二テシスは、「万物は常にあらゆる点で流転している」という「極端な」流転説のテシス（以下、H テシスと略記する）から導出される帰結の一つと対極に置かれる。後続する四つの議論は、H テシスから何が帰結するかを見ることによって、第一・第二テシスの正否を確かめようという試みである。

³⁰⁴ Calvert 1970.

³⁰⁵ Ademllo 2011.

³⁰⁶ Cf. Barney 2001: 153.

(2) 第一議論——語の正しい適用の不可能性——

[第一議論] (439d8-12)

「それなら、A¹それに向かつて正しく言うことはできるのか——まず、それであると、それから、そのようなものであると——もしそれが常に逃げ去っているのなら。あるいは、A²{それが常に逃げ去っているのなら}われわれが言うそのときに透かさず [ἄμα...εὐθύς] それは別のものになり [ἄλλο...γίγνεσθαι]、逃げ去ってしまい、もはやそのような状態にない [μηκέτι οὕτως ἔχειν] のが必然ではないのか。」

A¹と A²の文法上の主語は、第二テシスの主語を直接引き受ける形で「美そのもの」と解するのが自然である³⁰⁷。第一議論は全体として、A¹の条件節「もし美そのものが常に逃げ去っているのなら」の帰結を述べる。

「美そのものは常に逃げ去っている」は、H テシスの一例と考えられるが³⁰⁸、「逃げ去っている」[ὑπεξέρχεται d8-9]³⁰⁹を、変化一般を表す比喩的表現と解することに慎重でなければならない。というのは、ここにおいても依然として議論の主題は、語と対象の関係であるからだ。ここで、‘ὄνομα’「名前」という名前の語源分析についての Sedley の解釈をもう一度参照したい (127 頁参照)。名前とは「「ある」を、探し追い求めるものである」とするソクラテスの語源分析について、Sedley は、ここにおいて想定されている名前と実在との関係を、いわば狩人と獲物との関係に喩える。そして、この語源分析によって、ὄνομα が「実在を区分して教える」(388b13-c1) という機能を果たすためには、絶え間なく動き続ける獲物を追い続けなければならないことが示唆されていると (比喩的に) 解釈している。

名前を狩猟の道具ないし狩人に喩える説明は、『クラテュロス』だけでなく『テアイテトス』と『エウテュデモス』にも存在する (『エウテュデモス』295d で、名前は「狩猟用の網」に喩えられ、『テアイテトス』166c1 では、「獲物を捕まえる狩人」に喩えられる)。『テアイテトス』において、狩猟の比喩が「名前の一致を目指し、それに到達したことで、相手の言論を凌駕したと思い満足する」反論術の専門家たちおよび彼らの言論形式を痛烈に批判するためのメタファーとして用いられていることに注目すべきである。「反論術」[ἀντιλογική] とは、「同じものが、似ていて似ていないとか、一であり多であるとか、とどまっていたか見えるようにする」論法であることが、エレアのゼノン (BC450) について言われているが (『パイドロス』261d)、『パイドン』(90b9-c6) では流転論者たちが念頭に置かれており、さらに言論に対する彼らの態度への批判は、「流転をめぐる議論」の最後で「ヘラクレイトスの徒たちと他の多くのひとびと」に向けられる批判および訓戒と酷似してい

³⁰⁷ ソクラテスは、〈美そのもの〉というアイデアの一例をとりあげる (Ademollo 2011: 462)。

³⁰⁸ Ademollo 2011: 462.

³⁰⁹ Ademollo によれば、ὑπεξέρχεται は変化一般を表す比喩的表現である。ただし Ademollo は、この動詞のここでの使用が、語源分析の過程でソクラテスが流転説を場所移動の観点から定式化してきたことに一致するという点に留意する (2011: 462-463)。

る (8)で詳述する)。

もし極端な流転説が真であるなら、語の適用に要する時間と対象における変化に要する時間のずれのせいで、語の適用はすべて誤りであることになる (41-42 頁参照)。しかし流転論者にとって、そのことは、語の正しい使用の放棄を正当化するための理由づけとなりうる。名指しの自然本性的正しさおよび「名前の道具モデル」は、流転論者たちのこうした言語態度に対する、プラトンの強い抵抗を示しているのかもしれない。

この点に留意して、H テシスの一つ目の帰結を見てゆくことにしよう。「もし美そのものが常に逃げ去っているのなら³¹⁰、

- H¹ a) まず、それを正しく指示し、
b) それから、それを正しく記述する
ことは不可能である。

A² はこれの理由を与える。「われわれがそれに向かって言うそのときに透かさず、

- H^{1*} a) それは別のものになり、
b) もはやそのような状態にない
から。

a と b には、二つの解釈の選択肢がある。一つは Vlastos によって提示されたもので、ソクラテスは二種類の言明について語っているとする解釈であり³¹¹、もう一つは、Kahn によって提示されたもので、ソクラテスは二種類の言語行為を区別しているとする解釈である³¹²。

A) Vlastos 解釈 (二種類の言明の区別)

- a) 美についての同一性言明：「〈美そのもの〉は美である」
b) 美についての述定言明：「〈美そのもの〉は美しい」
「まず...それから...」に関しては、同一性言明は述定言明に論理的に先行すると理解する。

³¹⁰ 「常に」[ἀεί] という表現はいくらか説明を要する。Barney が分析するように (2001: 155)、「流転をめぐる議論」は確かに (確固不動性の) 三層構造をなすが、「決して変化しない (常に確固不動の状態にある)」と「或る時に変化しない (そのときに確固不動の状態にある)」の区別はそれほどはっきりしない。その証拠に、A¹の条件節をそのまま引き継いで、その帰結の論拠を与える A²において、ἀεί の代わりに ἄμα...εὐθύς が用いられていることは、両表現が交換可能であることを示すと考えられる。要点は、「名指し、そして知ろうとするそのときにはいつでも逃げ去ってしまう」ということである。

³¹¹ Vlastos 1991: 70, n. 111. Vlastos の解釈は、Ademollo によって支持される (2011: 464-468)。

³¹² Kahn 1973: 170.

B) Kahn の解釈（二種類の言語行為の区別）

a) <美そのもの>を指示する行為

b) <美そのもの>を記述する行為

「まず...それから...」に関して、指示行為は記述行為に時間的に先行すると理解する（したがって、*πρῶτον...ἔπειτα* は、もともとの時間的な意味を保持することができる）。

この一節は、プラトンがアイデアの「自己述定」を認めたとする解釈の典拠とされてきた³¹³。アイデアの「自己述定」の当否をめぐる論争にここで立ち入る余裕はないが、少なくとも目下の一節は、その問題を論ずる適切な場ではない。というのは、そもそも a と b の統語論的単位を「言表（文）」と解すべきでないからだ。言表 [λόγος] は、『クラテュロス』でも数か所で言及されるが（e.g., 425a; 431b-c）、言表の真偽性の問題を扱うのは『ソフィスト』であり、『クラテュロス』の主要問題は名前と事物の関係である。それゆえ、ソクラテスがこの対話篇の最後で考察するのが言表と外的世界の対応関係であるのは、極めて不合理である。これまでの議論の流れに従えば、ソクラテスが目下の一節で考察しているのは、語で対象を指示する行為と（何らかの述語をつけて）記述する行為であると解するのが自然である。

以上の考察が正しければ、H テシスが真であるという仮説から、次の帰結が導出されたことになる。

H¹ 語を対象に正しく適用し、正しく記述することは不可能である。

(3) 第二議論——存在の不可能性——

[第二議論] (439e1-6)

「それなら、B¹いかなるときにも決して同一の状態を有していないものが、いかにして何か [τι] であり得ようか {何かではあり得ない}。B²なぜなら、もしそれが或るときに [ποτε] 同一の状態を有しているなら、少なくともその時間だけは [ἐν γ' ἐκείνῳ τῷ χρόνῳ] それは決して変化しないことが明らかだからだ。で、B³もしそれが常に同一の状態を有しており、同一のものであるなら、いかにしてそれが——なぜならそれは、自分自身の形相 [ιδέα] から決して逸脱していないのだから——変容したり、動いたりすることがあり得ようか {そんなことはあり得ない}。」

「決してあり得ません。」

H テシスの二つ目の帰結は、精確には、第一議論の必然的帰結である³¹⁴。「いかなるときに

³¹³ White 1976: 140-145; Sedley 2003: 168-169. 「自己述定」(self-predication) という表現は、Vlastos (1954: 324) によって導入された。

³¹⁴ Ademollo 2011: 474.

も決して同一の状態を有していない」(e1-2) という考えは、「もはやそのような状態にない」(d11) という表現を取り上げており、それによって B¹は、H テシスの別の帰結を第一議論の必然的帰結として提示する。まずは、第一議論の要点を確認しよう。「もし美そのものが常に逃げ去っているのなら、われわれがそれに向かって言おうとするそのときに透かさず、

- H^{1*} a) それは別のものになり (それゆえ、それを正しく指示することはできない)
b) もはやそのような状態にない (それゆえ、何らかの述語をつけてそれを正しく記述することはできない)。

B¹は、厳密には、b の必然的帰結を述べる。美そのものが、もし常に逃げ去っているのなら、それは常に以前の状態から逸脱していることになるため、「もはやそのような状態にない」は、「いかなるときにも決して同一の状態を有していない」に等しいことになり、そのようなものは、

H² 何か [π] であり得ない

ことになる。

「いかなるときにも決して同一の状態を有していない」と言われる当のもの [ἐκεῖνο] が「美そのもの」を前方参照するの否かについて、諸家たちの見解は分かれている。前方参照すると主張する Sedley に対して³¹⁵、Ademollo は、「関係詞節を不自然に仮定の意味で読むのでない限り、ソクラテスは実際に「美そのもの」は決して同一のあり方を保たないということを示唆することになってしまう」という理由で、ἐκεῖνο を単に一般的な関係詞節の先行詞 (that which= whatever) として読むことを提案する³¹⁶。

わたしには、ἐκεῖνο が何を指しているのかという問いがナンセンスに聞こえる。なぜなら、「いかなるときにも決して同一の状態を有していないものは、何かであり得ない」という帰結は、そうしたものの存在それ自体、すなわちそうしたものが何か一つのものとして存在すること自体を否定しているからである。だがしかし、H テシスの二つ目の帰結を「存在の不可能性」と解するか否かは、解釈のわかれるところであるため、以下でこの点を検討する。

まずは、H テシスの二つ目の帰結を「(美を含めた) 流転変動する一切のものは、何かであり得ない」という帰結として理解しよう。この帰結を、われわれはどう解すべきか。理解の鍵は、B³にある。B¹は、B³とは正反対のテシスとして、次のように言い換えることができる。

B^{1*} いかなるときにも決して同一の状態を有さず、同一でないものは、

³¹⁵ Sedley 2003: 170.

³¹⁶ Ademollo 2011: 474.

自分自身の形相 [ιδέα] から常に逸脱している。

「いかなるときにも決して同一の状態を有さない」は、「時間を通じた質的同一性の否定」であり、他方、「いかなるときにも決して同一でない」は、「時間を通じた数的同一性の否定」である。そうすると、一方で、「質的同一性の否定」はソクラテスの第二テシスと拮抗し、他方、「数的同一性の否定」は第一テシスと拮抗することになる（165-167 頁参照）。ソクラテスの第一・第二テシスは、プロタゴラス説を斥けた結果得られた帰結、すなわち「事物それ自身の確固不動の本性」を再度表明したものである点に鑑みれば、「自分自身の形相からの逸脱」とは、「自分自身の確固不動の本性からの逸脱」を意味すると考えられる。

だが極端な流転説は、本質的に、何かの確固不動の本性をもつことを片時も認めない。アリストテレスが報告するクラテュロスの言語行為（「指先だけを動かす」、「シューシューつと口音を鳴らす」、「手を振る」など）が、事物の流転的本性を模倣しようとする行為と見做されることができるよう（43-44 頁参照）、極端な流転説には、「一瞬一瞬の、それ自身の本性」のようなものは存在しない。むしろ、万物の本性それ自体が流転であるような世界が、極端な流転の世界である。そのような世界では、何ものも「何か（一つのもの）」[τι] として存在し得ず、したがって、もはや一切のものが存在し得ないのである³¹⁷。

(4) 第三議論——知識の成立の不可能性——

[第三議論] (439e7-440a5)

「しかし、C¹ {いかなるときにも決して同一の状態を有していないものは} だれにも知られ得ないであろう。C²-1 というのは、知ろうとする者が近づくそのときに [ἀμα]、それは別のもの、そして別の性質のものになるだろう [ἄλλο καὶ ἄλλοῖον γίγνεται] から——C²-2 その結果、その者は、それがどのようなものであるのか、あるいはどのような状態を有しつつあるのかをもはや知ることができないであろう。で、C³ おそらく、知識の何一つとして、それが知るところの対象を、いかなる状態にもないものとして知ることはない。」

「おっしゃるとおりです。」

C¹は、H テシスの三つ目の帰結を述べる。

H³ いかなるときにも決して同一の状態を有していないものは、だれにも知られ得ない。

³¹⁷ Ademollo によれば、εἶναι τι は存在を表すプラトンの表現でもあるため、B¹は「もし X が決していかなる点でも同じ状態にないとしたら、X は存在しないことになる」ということをも言っていると読まれることができる (2011: 476)。

C²-1 は、第一議論の A²と全く同じ仕方での理由を与える。「いかなるときにも決して同一の状態を有していないものは、知ろうとする者が近づくそのときに」、

- H³* a) それは別のものになり、
b) 別の性質のものになる
から。

Ademollo が言うように、第三議論は第一議論に非常に似た構造をもつ³¹⁸。しかし、当該議論には、第一議論にはない論点が含まれている。第一議論の主題は、語の正しい適用と記述であり、H テシスが語の正しい適用と記述の不可能性を伴う理由は、a と b によって与えられ、それ以上の論拠を必要としない。つまり、「H テシスが真であるなら、美に向かって言おうとするそのときに透かさず」、

- a) それは別のものになり（それゆえ、それを正しく指示することはできない）
b) もはや以前の状態にない（つまり、別の性質のものになる）（それゆえ、それを正しく記述することはできない）。
以上。

他方、第三議論の主題は知識であり、H テシスが知識の成立の不可能性を伴う理由は、a と b だけでは不十分であり、さらなる論拠を必要とする。つまり、「H テシスが真であり、美がいかなるときにも決して同一の状態を有していないのなら、知ろうとする者が近づくそのときに」、

- a) それは別のものになり、
b) 別の性質のものになる。

第二議論の B¹と同様に、美がいかなるときにも決して同一の状態を有していないのなら、それは常に別の性質のものに変化していることになる（つまり、b は、或る一定の時間、美が別の性質を有することを述べているのではない）。C²-2 は、その帰結を述べる。その者は、

- a*) それがどのようなものであるのか
あるいは、
b*) それがどのような状態を有しつつあるのか

³¹⁸ Ademollo 2011: 479.

をもはや知ることができない。

「それがどのようなものであるのか」 [ὅποιον...τί ἐστίν] と 「それがどのような状態を有しつつあるのか」 [πῶς ἔχον (ἐστίν)] について、Ademollo は、「X についてわれわれが知りたいと思うかもしれない二種類のものの区別」を読み込む。「Z は、X が Y であることを知っている」において、「Y」に代入される二種類のものの区別は、

- a) 「X は Y である」が同一性言明である場合と、
- b) 「X は Y である」が述定言明である場合

の区別であり、

ὅποιον...τί ἐστίν は a に相当し、
πῶς ἔχον は b に相当する

と考えねばならない。

わたしには、ὅποιον...τί ἐστίν と πῶς ἔχον (ἐστίν) の両方を、美の一つの性質を問うものと解すべきだと思われる。その理由を以下で述べる。C²-2 は、美についての知識の成立の不可能性の十分な論拠をまだ提示できていない。なぜなら、「美がどのような性質であるかを知ることができない」ことが何故美そのものについての知識の成立の不可能性を伴うのかが説明されねばならないからだ。C³は、その説明を与える。

知識の何一つとして、それが知るところの対象を、いかなる状態にもないものとして知ることはない。

C³は、次のように理解されることができよう。すなわち、「X を知る」ということは、「X を、何か特定の性質をもつものとして知る」ということである」ということだ。これまでのところ、流転している対象は、「いかなるときにも決して同一の状態を有していない」と言われてきたが、440a4 では「いかなる状態にもない」と言われる。つまり、X がそのようなあるところの「状態」とは、これまでは、「X の質的同一性」を意味したが、当該議論では、「単に X の一つの性質」を意味する³¹⁹。そうすると、「いかなる状態にもない」は、「何一つ特定の性質をもたない」に等しいことになる。したがって、美の性質を何一つとして知ることができないなら、美そのものを知ることができないという帰結が導出される。

³¹⁹ Cf. Ademollo 2011: 480-481.

(5) 第四議論——知識の存在の不可能性——

「第四議論」(440a6-b4)

「いや、D¹知識すらないと主張するのが理にかなっている、クラテュロスよ、もしすべてのものが変化を被り、何ものもとどまっていなければならぬ。D²というのは、もし一方で、これ自身、すなわち知識が、知識であることから変化を被らないなら、知識は常にとどまっております、かつ{常に}知識があるだろうから。D³他方、もし知識の形相それ自身も変化を被るのなら、それが知識とは別の形相へと変化するそのときに、知識はなくなるだろう。で、D⁴もし{知識の形相それ自身が}常に変化を被っているのなら、常に知識はないであろう。そして、D⁵この論から、知ろうとするもの{主体}も、知られるはずのもの{対象}もないことになるだろう。」

まずは、第三議論とのつながりを見ておきたい。H テシスから、

H³ 一切のもの（美はその一例）はだれにも知られ得ない。

という、対象についての知識の成立の不可能性が帰結した。しかし、H テシスは、知るといふ知のはたらきそれ自体にも適用されるため、

H⁴ 知識すらない（存在しない）

が帰結する。

第四議論では、「知識それ自体」[αὐτὸ τὸ εἶδος τῆς γνώσεως 440a8] という表現の存在が、長い間議論を呼んできた。諸解釈は次のように整理される。

A) われわれが所有している知識³²⁰

B) 知識それ自体の本性（知識のイデア）

いわゆる二世界説を読み込み、〈美〉それ自体と或る特定の顔の美しさが区別されたのと同様に、〈知識〉それ自体とわれわれの所有する知識が区別された³²¹。

C) 知識それ自体の概念

議論の根底にあるのは、「知識は如何にして獲得されうるのか」という問いである（『テアイテトス』181b-183b と対応する）³²²。

D) 「知る主体」と「知られる対象」の関係

³²⁰ Calvert 1970: 42-43; Baxter 1992: 178-179.

³²¹ Barney 2001: 156, n. 17.

³²² Sedley 2003: 171.

論者たちは、この表現をソクラテス（そしてプラトン）における知識論と流転説という問題枠の中でさまざまに解釈してきた。しかし、「流転をめぐる議論」は、H テシスから何が帰結するかを見ることによって、ソクラテスの二つのテシス（第一・第二テシス）の正否を検証しようとする試みであり、目下ソクラテスはこの一連の議論を、流転論者たちの立場から論じているため、各議論の中でソクラテス（そしてプラトン）自身の見解が提示されていると考えるべきでない。

「知識の形相それ自身」という考えは、第二議論での「自分自身の形相」[τῆς αὐτοῦ ιδέας 439e5] という考えに由来する。そこでは、一切のものが自分自身の形相——それ自身の自然本性——から常に逸脱しているということが、「何かであり得ない」——すなわち、「存在し得ない」——ことの根拠となっていた（171-172 頁参照）。〈美〉は、常に自分自身の自然本性から逸脱し、別のものへの生成変化を繰り返す——吟味中の仮説において、〈美〉が、正反対の性質である〈醜〉にさえ変化することは可能である。そうした事態において、もはや美という一つのもの——醜や他の諸性質から区別された、それ自身の自然本性をもつもの——は存在し得ない。同様に、知るといふ知のはたらきもまた——なぜなら、それは「あるもの」[τὰ ὄντα] の一つであるから³²³——、自分自身の自然本性から逸脱し、別のものへ——たとえば、感覚知覚へ——³²⁴変化したとき、知識は存在しなくなる (D³)。もし H テシスが真であれば、知識は常に自分自身の自然本性から逸脱していることになるため、知識は常に存在しないことになる (D⁴)。

さらに、知識はわれわれに備わる知のはたらきであるため、H⁴ から必然的に、

「知る主体は存在しない³²⁵」

ことになり、知る主体が存在しなければ必然的に、

「知られる対象も存在しない」

ことになる。

³²³ 386e6-8 で、あるものの一種であるなすこと [πράξις] も、それ自身の自然本性をもつと言われる。この点に関しては異論がないわけではないが、行為を、あるものの一種とみなすことで、行為そのものにそれ自身の自然本性を認める解釈の方が一般的である (e.g., 松永 1993; Ackrill 1997)。

³²⁴ Ademollo は、知識が変化するものの一例として、ココナッツをあげているが、目下の文脈では、感覚知覚をはじめとする任意の認知的行為への変化の可能性が想定されていると思われる (Pace Ademollo 2011: 482, n. 65)。

³²⁵ 「知ろうとする者」[τὸ γνωσόμενον 440b4] は、440a1 の「知ろうとする者」[τοῦ γνωσομένου] を前方参照すると考えれば、ここで未来時制が使われているのはむしろ自然であろう。

(6) ソクラテスの最後のテシス

H テシスから以上の四つの帰結を導出したのち、ソクラテスは次のように述べる。

(440b4-c1)

「だが、E¹-1 もし一方で知るもの（主体）が常にあり、他方、知られるもの（対象）が {常に} あり、E¹-2 美があり、善があり、あるもののそれぞれ一つ一つが {常に} あるのなら、E²われわれがいま言っているこれらのものは、流れにも運動にも似ていないとわたしに現われる³²⁶。」

この一節は、一つの条件文から成り、条件節は、さらに二つの重文から成る。

E¹-1 知る主体が常に存在し、知られる対象が存在する。

E¹-2 美が存在し、善が存在し、あるもののそれぞれ一つ一つが存在する。

E¹-1 と E¹-2 から、次の帰結が導出される。

E² われわれがいま言っているこれらのもの、すなわち知るものと知られるもの、美、善、その他あるもののそれぞれひとつひとつは、流転に似ていない。

この推論によってソクラテスが何を言おうとしているのか、一見明らかでない。たとえば Ademollo は、目下の一節に関して、二者択一の解釈を提示する³²⁷。

- i) ソクラテスは単に、もし H テシスの帰結のいくらかが成り立たないのなら、H テシスもまた成り立たないということを推論しているに過ぎない。
- ii) ソクラテスは慎重に、H テシスの帰結のいくらかはわれわれの仮定によって斥けられ、それゆえ成り立たないのだから、H テシスは偽であるという趣意の本格的な論駁を示唆している。

しかしわたしには、ソクラテスがここで H テシスの論駁を意図しているようには思われな
い。(実際、ソクラテスはこの直後で、流転説の真偽の判決を留保する。)むしろソクラテス

³²⁶ 440b7-c1 には訳上の相違がある。Ademollo は、*ἂν νῦν ἡμεῖς λέγομεν* を「われわれがいま語っているこれらのこと」と読み、それが条件節の内容——すなわち、「あるもののそれぞれ一つ一つが存在し、識別する主体と識別される対象が存在する」ということ——を前方参照すると分析する。そうすると、これらのことが「流れにも運動にも似ていない」という主張は、それが H テシスに対立するということの意味することになる (2011: 485)。上記の理由により、Ademollo の読みには従わない。

³²⁷ Ademollo 2011: 483.

は、あるもののそれぞれひとつひとつの「確固不動の本性」と「流転」とを、前者は後者に似ていないとすることによって、双方の峻別を意図しているように思われる。

あるもののそれぞれひとつひとつの確固不動の本性は、クラテュロスの「名前の正しさ」にまさに依拠するものでもあった。「語は、その記述的意味を充足する本性をもつ対象にしか適用され得ない」という主張（「記述的意味＝指示対象説」）と、「語の記述的意味を知ることが、対象についての知識を獲得する唯一にして最善の方法である」という主張（「記述的意味＝知識説」）はそれぞれ、名指される対象と、知られる対象の確固不動の本性を前提するからだ。だが、クラテュロスにとって、その本性は、名前の記述的意味を介して到達される類のものである。それゆえ、実際のギリシア語の名前の多くが万物流転の思想を反映することが判明したことによって、クラテュロスは、この対話篇の最後で、対象の自然本性的なあり方は“動”であるという考えに傾倒しかけている。

名指され、知られる対象の本性が流転ではあり得ないことは、「流転をめぐる議論」の中で、「記述的意味＝指示対象説」と「記述的意味＝知識説」がそれぞれ自己論駁に追いやられるという仕方で暗示されている。もし名指され、知られる対象の本性が——記述的意味が主張する通りに——「動」であり、それぞれのものは片時も同一性を保たないのなら、名前の記述的意味は、その機能——指示対象を決定するという機能と、対象についての知識を提供するという機能——を失うことになる。なぜなら、一つの名前が、その記述的意味を介して一つの特定の対象（本性的指示対象）をもつことは不可能になるからだ。つまり、クラテュロスの「名前の正しさ」と極端な流転説は、本質的に、両立不可能であり、もしクラテュロスが極端な流転説を擁護するなら、彼は「名前の正しさ」を捨てざるを得ないのである。

クラテュロスの「名前の正しさ」の軸をなす二つの説——「記述的意味＝指示対象説」と「記述的意味＝知識説」——は、先行議論において明示的には論駁されていない。一方で、「記述的意味＝指示対象説」は、「割り当ての議論」から「σκληρότηςの議論」までの一連の議論において、その論駁が試みられるが、「σκληρότηςの議論」の結論は、指示を確保する要因を「類似性」と「規約性」に見出すことによって、「記述的意味」の問題を知らぬ間に議論の枠に追いやった。他方、「記述的意味＝知識説」もまた、「学びをめぐる議論」においてその論駁が試みられたが、その結論は、名前の語源分析から実在について学ぶことの可能性をある程度残すものであった。

「流転をめぐる議論」は、H テシスが真であると仮定した場合、「記述的意味＝指示対象説」と「記述的意味＝知識説」はもはや保持され得ないことを示すことによって、クラテュロスの「名前の正しさ」の最終的な論駁を目的としていると考えられる。しかしこの論駁は、名前の記述的意味が流転説を主張するという条件でのみ成立するため、両説それ自体の論駁を意味するものではない。

(7) 「流転をめぐる議論」の結論

(440c1-c3)

「F¹だから、はたしてどちらなのか、すなわちこれらのことが事実であるのか、それともかのこと、すなわちヘラクレイトスの徒たちと他の多くのひとびと [οἱ περὶ Ἡράκλειτόν τε...καὶ ἄλλοι πολλοί] が言っていることが事実であるのかを考察するのは容易ではないのではないかと、わたしは懸念する。」

F¹は、「流転をめぐる議論」の結論を述べている。「これらのこと」が E¹-1 と E¹-2 を前方参照することは明らかであるが、「かのこと」が具体的に何を前方参照するのかは判然としない。なぜなら、「かのこと」は「ヘラクレイトスの徒たちと他の多くのひとびとが言っていること」であるとされるため、それを、ソクラテスが H テシスから導出した四つの帰結 (H¹ ~ H⁴) と同一視してよいかどうかは議論を要するからだ。

先に述べたように、第一議論の帰結——語の正しい適用の不可能性——は、語を正しく使用しないことを正当化する理由として、「ヘラクレイトスの徒たち」だけでなく、他の多くのひとびと（反論術を扱っていた者たちが、一種の流転論者と見做されていたと考えることは妥当であろう）にも共有されていた言語観であったと考える余地はある。他方、第二議論の帰結——存在の不可能性——は、何もかも何か一つのものとして存在し得ず、万物はその本性それ自体が流転であるというような、より一層極端な思想として、クラテュロスの最終的な世界観を暗示しているようにも思われる。知識についての第三・第四議論の帰結は、『テアイテトス』の「流転説批判」(179d-183c) において、感覚そのものにまで流転が帰され、「知識は感覚である」というテアイテトスの定義それ自体がもはや成立し得なくなるのと同様に、クラテュロスの「記述的意味＝知識説」の論駁それ自体を意図して導出されたものであるとも考えられる。第六章第一節(3) で述べたように、流転説はプラトンにおいて本質的に多層的であったと考えられるため、目下の「かのこと」は、暫定的に、極端な流転説のテシス、すなわち「万物は常にあらゆる点で流転している」というテシスを指すとしておく。

そうすると、「流転をめぐる議論」の結論は、「E¹-1・E¹-2 と H テシスのどちらが真であるかを考察するのは容易ではない」ということであることになる。ソクラテスはなぜ両テシスのどちらが真であるかの判定を留保したのだろうか。というのは、極端な流転説が無条件に偽であることは、命名者たちの「めまい」への言及によって示唆されているからだ。われわれはその理由を、『テアイテトス』で解決されるべき問題として先送りすることはできない³²⁸。なぜなら、目下の一節でソクラテスが判定を留保するのは、感覚される対象の流転ではなく一切のもの（その中には、知識という知のはたらきも含まれる）の流転に関してであり、中でもとりわけ、美そのものの流転に関して、であるから。善や美などの価値的対象の

³²⁸ 通常、流転説の真偽をめぐる問題は『テアイテトス』での本格的な考察に委ねられると考えられている (e.g., Ademollo 2011: 461)。

流転は、『テアイテトス』においては二箇所で触れられているだけである (157d7-8; 186a)³²⁹。極端な流転説の虚偽性は明白であるにもかかわらず敢えてプラトンがそれを未解決のままにした理由は、この対話篇の中で——その主題と全体の文脈との関連において——明らかにされねばならない。

まずわれわれが踏まえておかねばならないのは、ソクラテスの目下の対話相手は極端な流転論者一般ではなくクラテュロスであるということだ³³⁰。『クラテュロス』というこの対話篇において、クラテュロスは、「名前の正しさ」に精通する人物として描かれている。プロディコスやプロタゴラスらのソフィストたちもまた、ひとびとから多額の謝礼金を受け取って「名前の正しさ」を教えていたとされるが、クラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものは、意味論的にも存在論的にも重大な哲学的問題を孕むものであった。名前の記述的意味へのクラテュロスの盲目的信頼は、一方で、「語は、その記述的意味を充足する本性をもつ対象にしか適用され得ない」という仕方ですら「虚偽不可能論（虚偽の発語の不可能性）」を生み、他方、「記述的意味を、実在についての知識を獲得する唯一にして最善の手段」とする考えから、彼自身を、この対話篇の最後で、極端な流転説へと追いやろうとしている。

「流転をめぐる議論」において導出された、あたかもクラテュロスの行く末を暗示するような帰結と、その真偽の考察を「容易でない」とする結論は、「名前の正しさ」を根拠に極端な流転説を信じることがいかに安易な思考であるかを皮肉的に暗示していると、考えられるかもしれない³³¹。実際、ソクラテスは直後で (F³)、この極端な流転説の真偽についての考察の続行をクラテュロスに促し、容易に受け入れてはならないという警告を発している。

だが、より本質的には、極端な流転説は、プラトンにとっての一つの真実を明るみに出すための手段であって、それ自体が論駁の対象ではない。その真実とは、名指され、知られる対象は同一のものであり、それは決して変化を受け入れないもの——すなわち、アイデア——でしかあり得ない、ということである。これは、極端な流転説——それが虚偽である限りにおいて——の裏面に隠されている真実である。このことを論証することは、もはや『クラテュロス』の議論の域を超えているが、そのことは、『クラテュロス』がプラトンのアイデア論の発展段階にあるというような理由で片づけられるべきでない。知識の対象が語の指示対

³²⁹ 「それではもう一度言うが、善も美も、さきほどわれわれが詳述したすべてのものは「何かである」[τι εἶναι] ことはなく、常に生成するのだということは、君を満足させるのかどうか、言ってくれ。」 (157d7-8)

³³⁰ 流転説がアイデアを一切許容しないとき、ソクラテスがアイデアに関してこの説の帰結を探求するという事実は如何にして説明されるかという問題がある。Ademollo は、この点ではソクラテスの目下の議論は無意味であると述べる。しかし Ademollo は、この批判は次のようにして論駁されることができると言う——ソクラテスの目下の相手は流転説論者ではなくクラテュロスであり、クラテュロスはこの対話篇の中ではまだ献身的なヘラクレイトス主義者ではなく、ソクラテスと議論を交わすなかで流転説に傾倒しかけているため、ソクラテスはクラテュロスに対して目下の議論を提出する資格がある (2011: 453)。

³³¹ Cf. Sedley 2003: 171; Ademollo 2011: 486.

象であるということは、プラトンにおいて言語論的問題が、認識論的問題を射程に収めるものであるという極めて重要な事実を伝えている。実際、『国家』第7巻の「洞窟の比喩」における囚人たちの言語使用の状況および彼らの理解についての Harte の研究の焦点は³³²、「ひとの言語使用とその理解が、そのひとの認識の状態について何を明らかにするか」にあり、言語使用の問題が、プラトン哲学における認識論的問題に関与していることを示す（第一章第五節参照）。勿論、語の指示対象がイデアであるということは、『クラテュロス』においては仮定されているに過ぎない。だがそれは、のちの認識論的・存在論的探求の基盤となるような仕方で、仮定されているのである。

(8) ソクラテスの確信的主張

「F²だがまた、次のようにすることは知性をもつ人間のすることでは決してない、すなわち自分と自分の魂を配慮すること [αὐτὸν καὶ τὴν αὐτοῦ ψυχὴν θεραπεύειν] を名前任せにしたうえで、名前とそれらをつけた者たちを信頼しきって、ひとかどのことをもう知っているのだと自信をもって断言し、自分とあるものの両方を、いかなるものにも健全なものは決してなく、万物が陶器のごとく流れているという理由で非難すること、そして事物もまた、カタル（鼻水の症状）で病んでいる人間たちと全く同じような状態にあり、万物が流動とカタルに捕えられているのだと思うこと、である。F³こういうわけで、クラテュロスよ、もしかしたらこれが事実であるかもしれないし、もしかしたらそうではないかもしれない。だから勇気をもって上手く考察しなければならず、容易に受け入れてはならないのだ——というのは、あなたはまだ若くて盛り年の年齢にあるのだから——で、考察したうえで、もしあなたが発見したならばそれをわたしにも分け与えなければならぬ。」(440c3-d7)

F²は、ソクラテスの確信的主張であり、極端な流転説の真偽性についての確信のなさとは鮮明に対比されている。一般に、この確信的主張は、語源分析を根拠に流転説（あるいは、他の任意の説）を信じることの愚かさにかかわるものであるとされている。そして、Ademollo によれば、流転説の真偽問題は留保されはしたが、ソクラテスが流転説に言及する嘲笑的なやり方——流転していると言われる事物の状態を漏れ鍋ないしカタルのひとびとの状態に喩えるやり方——だけで、ソクラテスが流転説に共感していないことを示すのに十分であるとされる³³³。他方、「規約主義解釈」に反対する Barney は（22-23 頁参照）、F²と『パイドン』90c3-6 での「言論嫌い」のひとびとについての冷淡な描写との類似を指摘する³³⁴。そこで

³³² Harte 2007.

³³³ Ademollo 2011: 486.

³³⁴ Ademollo は、『パイドン』90be での言論嫌いのひとびとについての冷淡な描写を、『クラテュロス』411bc での命名者および知者たちの「めまい」と、彼らが生かす原因に気づくことがで

は、「いかなる事物も言論も、健全で確固不動のものなど何もなく、万物は、エウリポスの潮の流れのごとく、かなたこなたへと変転きわまりなく、片時もいかなるところにもとどまらない³³⁵」という「言論嫌い」のひとびとの見解が描写されるが、Barney は、この見解が、流転論者たちではなくむしろプロタゴラスに帰されるとする。そして、「流転をめぐる議論」が、或る種の循環構造をなして、「言語本性主義」の出発点である「語の対象と知識の対象の確固不動性」を根拠づけるよう意図されていると解釈する。

実際、F²は判然としない点が多い。一見唐突に見える「魂の配慮」への言及、流転が「自分」にまで帰される点などについて、誰も疑問を提起していない。したがって、以下で述べることはあくまでも推測の域を出ないと断ったうえで、F²についての一解釈を提示することにする。

確かなのは、F²が「欺き」というモチーフと密接にかかわっているということである。しかし、この「欺き」というモチーフをどう解釈するかによって、F²と、ひいては『クラテュロス』の結論の理解が異なってくる。「欺く」[ἐξαπατάω] という動詞は『クラテュロス』の中で計4回(397b2; 428d3; 436b3; 439c1)登場し、その最初と最後の箇所、「名前がわれわれを欺く」という表現で用いられる。そのために、たとえば Barney は、『クラテュロス』の結論を、プラトンの言語に対する徹底的な悲観主義の表明と解した³³⁶。プラトンの非難が言語一般にまで拡大されるのは、『クラテュロス』において確認される「合成の原則」(*the principle of compositionality*)³³⁷、すなわち「言表 [λόγος] は、構成要素である名前と性質上同じである」という原則に則り、「言表もまた、名前——本質的に欠陥をもつ——から構成される限り、必然的に欠陥をもつ」と理解されるからである(51-52頁参照)。また、この原則は『第七書簡』(342b6-7)においても確認されることから、『第七書簡』における言語論と『クラテュロス』における言語論の類似性がしばしば指摘されてきた³³⁸。Barney は、『クラテュロス』(432b1)と『第七書簡』(342e3)の両方で用いられる τὸ ποιόν τι という表現にも着目する³³⁹。この表現が概して「不完全で不確定の本性しかもちえない任意の可感的個物」を指すという理解のもとで、この表現から名前と言語に対する非難ないし責めの意味合いを読み取り、『第七書簡』が『クラテュロス』の悲観主義的結論——現実の名前が規約によって機能していることへの絶望と名前側の本質的欠陥に対する非難の表明——に非常に

きないことへの冷やかな描写と類比させる(2011: 206)。

³³⁵ 和訳は朴(2007: 262)を参照した。

³³⁶ Cf. Barney 2001; Van den Berg 2008.

³³⁷ Barney 2001: 166-167.

³³⁸ Barney 2001: 163-169; White 1998: 199-215.

³³⁹ 『クラテュロス』432a5-b4で、ソクラテスは存在を二つの部類に分ける。一つは、「その同一性が数に左右される、数そのものおよび数的なもの」であり、もう一つは「τὸ ποιόν τι と似像一般」である。名前は、実物とは異なり、本質的および非本質的欠陥をもつことから、後者の部類に属するとされる。他方、『第七書簡』342e3では、「あるもの」(ὄν)が把握されるための四つの手段、すなわち(1)その名前、(2)その言表、(3)それが具現化された像(εἰδῶλα)、(4)われわれの魂におけるその現われ(思いなし、知識、知性)は、その「あるもの」ではなく、τὸ ποιόν τι を明示すると言われる。

近い言語観を提示すると主張する。

Barney は、「名前の本質的欠陥」ということを説明するために、「指示の二重性」(duality of reference) という考えを導入する。これは、同一の語がアイデアと可感的個物の両方を指示する（言い換えれば、両義的に用いられる）という考えである。たとえば、「美しい」という語は、第一義的には〈美〉のアイデアを指示するが、われわれがその同一の語を、われわれを取り巻く可変的对象に適用するため、その語は、〈美〉を可變的で不完全なものとして誤った仕方です。

Barney のこの解釈は、一見すると、もっともらしい。たとえば、この特定の花を見てわたしが「美しい」と発語するとき、わたしはその「美しい」という語で、いまこの花に現れている可變的な美しさを指示していると思っている。しかし、それはわたしの思い込みであり、わたしはその「美しい」という語で、確かにこの語の指示対象——すなわち、〈美〉——を指示しているのだということを伝えているのが、この『クラテュロス』という対話篇ではないのか。

「美しい」という語で何か可變的な美しさを指示していると思っていることが、わたしの思い込みに過ぎないことに気づかせてくれる一節が、この対話篇には存在する。それは、この対話篇の冒頭近くでなされたヘルモゲネスとソクラテスの次のやりとりである。ヘルモゲネスは、「名前で名指しながら、われわれは何をしているのか」(388b7-8) とソクラテスに問われたとき、その答えに窮した。そこでソクラテスは、ヘルモゲネスに次のように言った。

「名指しながら、われわれは何かを相互に教え合っている、つまり事物を、そうある通りに区分しているのではないか。」(388b10-11)

この一節から学ぶことができるのは、わたしは「美しい」という語で、〈美〉を、他の複数の類から区別されたものとして選びとっているということである。わたしが「美しい」という語で、この花にいま現れている可變的な美しさを指示していると思込んでいるのは、その語で実際には当の対象、すなわち〈美〉そのものを指示していることに無自覚であるからだ。

語で当の対象を指示していることに無自覚であることの原因は、「規約」と「習慣」にある。わたしは日本語を母国語とする者として、同じ日本語を母国語とする他人の言語行為を観察しながら、「美しい」という記号ないし音声を〈美〉と結びつける作業を——おそらくは無意識的に——おこなった。そして、そう名指すことがもはやわたしの本性の一部になるほどにまでその名指し行為を繰り返しておこなってきたことにより、「美しい」という語で習慣的に〈美〉を指示し、それについて思考している。だが、名指しは、その成功が同じ言語共同体内の他者の理解にいくらか依拠する限りにおいて、非個人的な行為である。それゆえ、わたしは日常的な語の使用において、その語で何を指示しているのかを問うことはない。

それゆえ、むしろわたしには、日常的に「美しい」という語で名指す対象が、〈醜〉から

完全に切り離された、確固不動の实在——〈美〉——である、というソクラテスの見解の方が一層受け入れがたく思われるかもしれない。とりわけ〈正義〉その他の倫理的価値規範に関して、相対性も流転性も免れた確固不動の实在なるものが存在するとは、通常は考えない。むしろ、「Xはよい」とか「Xは正しい」という事態の成立は、特定の認識主体の認知的状態に依拠するため、自体的なよさとか自体的な正しさなんてものは存在せず、Xのあり方は特定の認識主体との関係において、相対的に決定されると考える（価値の相対主義）。しかし、これは他方で、価値観の違いを強調し、価値的概念間の交換可能性へと基点を移せば、よさとか正しさとかいうものはそもそも存在し得ない（なぜなら、善は悪にもなりうるのだから）という思想にもつながる。

こうした思想への傾倒は、価値的对象の極端な流転説に孕まれる潜在的危険性として、この対話篇の最後で訓告されているように思われる。この説に遭遇する経路は、クラテュロスにとっては名前の語源分析であったが、おそらくわれわれは、さまざまな経路からこうした思想に傾倒してゆく危険性がある。或る同一の事柄について、正しいか正しくないかの判断がひとや共同体や国の間で異なるという事態を目の当たりにして、混乱に陥った場合、われわれは「正しいか正しくないかの判別は不可能なのだから、そもそも正しいということ自体が存在しないのではないか」という考えを——意識的にであれ、無意識的にであれ——抱く。そうしてわれわれは、何かについて知ろうとして自分自身で思索することを回避し、その時々確かそうに思われるものに盲目的信頼を置き、それで何かを知った気になる——もはや自分も含めて一切のものが、健全さを欠き、確たるものは何もないと考えて。

ソクラテスはこの対話篇の最後で、この極端な流転説が、われわれ一人一人の名前使用や世界のあり方についての認識にかかわる問題であることを告げている。「名前の正しさ」を主題とするこの対話篇全体を通して学ばれるべき教訓とは何であろうか。わたしは、次のことだと考える——われわれが「知識」と呼んでいるものは、われわれが名前で名指しているものである、と。何かについて正しいか正しくないかの判断に窮するのは、「正しい」という語で意味するもの——〈正義〉についてもっている理解のうちで、言語化されうるもの——がいまだ充足されない不完全なものであり、多くの誤りを含むものであるからだ。しかしそれでもわれわれは、「正しい」という語の使い手としてたしかに当の対象——〈正義〉——を指示し、それについて語り、思考している。「正しさ」とは何であるか」という問いは、「正しい」という語で何を指示しているのか」という問いに等しい。知識の探求は、したがって、自分自身の語の使用を省察することから始まるのである。

[参考文献]

【プラトンのテキスト、訳、註釈】

- Ademollo, F., *The Cratylus of Plato. A Commentary*, Cambridge, 2011.
- Burnet, J., (ed.), *Platonis Opera* vol. 1, Oxford, 1905.
- Dalimier, C., *Platon Cratyle*, Paris, 1998.
- Duke, E. A., Hicken, W. F., Nicoll, W. S. M., Robinson, D. B. et Strachan, J. C. G. (edd.), *Platonis Opera I*, Oxford, 1995.
- Fowler, H. N., (trans.), *Plato* vol. 6, Loeb Classical Library, Cambridge Mass., 1926.
- Jowett, Benjamin, (trans.), *The Dialogues of Plato* 3rd (ed.), vol. 1, Oxford, 1892.
- Méridier, L., *Platon Cratyle*, Paris, 1950.
- Reeve, C. D. C., *Plato Cratylus*, Indianapolis/Cambridge, 1998.
- 水地宗明、プラトン『クラテュロス』、翻訳、註、解説、岩波プラトン全集第二巻、1974年。

【プラトン以外のテキスト、訳、註釈】

- Manuela García Valdés, *Dioscórides Plantas y Remedios Medicinales*, translates with notes, libros 1-3, Madrid, 1998.
- Page, T. E., Capps, E., Rouse, W. H. D., Post, L. A., Warmington, E. H., (trans.), *Hippocrates*, vol. 1-2, Loeb Classical Library, Harvard, 1923.

【研究文献】

- Ackrill, J. L., 'Language and Reality in Plato's *Cratylus*', *Essays on Plato and Aristotle*, Oxford, 1997.
- Adoménas, M., 'Discipline Theme in Plato's *Cratylus*', *Literatūra* 48, 2006, 22-33.
- Allan, D. J., 'The Problem of *Cratylus*', *American Journal of Philology* 75, 1954, 271-287.
- Allen, R. E., 'The Argument from Opposites in *Republic v*', *Review of Metaphysics* 15, 1961, 323-335.
- *Icastes: Marsilio Ficino's Interpretation of Plato's Sophist*, five studies and a critical edition with translation, Berkeley/ Los Angeles / Oxford, 1989.
- Anagnostopoulos, G., 'Plato's *Cratylus*: The Two Theories of the Correctness of Names', *Review of Metaphysics* 25, 1971/2, 691-736.
- 'The Significance of Plato's *Cratylus*', *Review of Metaphysics* 27, 1973/4, 318-345.
- Anceschi, B., *Die Götternamen in Plarons Kratylos*, Frankfurt, 2007.
- Anderson, G., *The Second Sophistic: A Cultural Phenomenon in the Roman Empire*, London/ New York, 1993.
- Annas, J., *An Introduction to Plato's Republic*, Oxford, 1981.
- 'Knowledge and language: the *Theaetetus* and *Cratylus*', in Schofield and Nussbaum, 1982,

95-114.

Armstrong, D. M., *Universals and Scientific Realism*, vol. 1: *Nominalism and Realism*, Cambridge, 1978.

Bagwell, G., Review of *The Cratylus of Plato: A Commentary*, *Ancient Philosophy* 32(1), 190-193, 2010.

—— ‘Does Plato argue fallaciously at the *Cratylus* 385b-c?’, *Apeiron* 44(1), 2011, 13-21.

Barnes, J., *The Presocratic Philosophers*, London, 1982.

—— ‘Meaning, Saying and Thinking’, In *Dialektiker und Stoiker*, edd. Döring, K., and Stuttgart, Th. Ebert, 1993, 47-61.

Barney, R., ‘Plato on Conventionalism’, *Phronesis* 42, 1997, 143-162.

—— ‘Socrates Agonistes: The Case of the *Cratylus* Etymologies’, *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 16, 1998, 63-98.

—— *Names and Nature in Plato’s Cratylus*, New York/London, 2001.

Baxter, T. M. S., *The Cratylus: Plato’s Critique of naming*, Leiden/New York/Köln, 1992.

Benfey, Theodor, ‘Über die Aufgabe des Platonischen Dialogs: *Kratylos*’, *Abhandlungen der Königlichen Gesellschaft der Wissenschaften zu Göttingen* 12, 1866, 189-330.

Bestor, T. W., ‘Plato’s Semantics and Plato’s *Cratylus*’, *Phronesis* 25, 1980, 306-330.

Bluck, R. S., ‘False statement in the *Sophist*’, *Journal of Hellenic Studies* 77, 1957, 181-186.

Bostock, D., ‘Plato on ‘is not’ (*Sophist*, 254-259)’, *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 2, 1984, 898-119.

—— *Plato’s Theaetetus*, Oxford, 1988.

—— ‘Plato on understanding language’, *Companions to Ancient Thought* 3, ed. Everson, S., Cambridge, 1994, 10-27.

Boyancé, P., ‘La “Doctrin d’Ethypron” dans le *Cratyle*’, *Revue des Etudes Grecques* 54, 1941, 141-175.

Brandwood, L., *The Chronology of Plato’s Dialogues*, Cambridge, 1990.

—— ‘Stylometry and Chronology’, in *The Cambridge Companion to Plato*, ed. Richard Kraut, Cambridge, 1992.

Brentlinger, J., ‘Particulars in Plato’s Middle Dialogues’, *Archiv Fur Geschichte der Philosophie* 64, 1972, 116-52.

Brown, L., ‘Understanding the *Theaetetus*’, *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 11, 1993, 199-224.

—— ‘Being in the *Sophist*: a Syntactical Enquiry’, In *Plato 1, Metaphysics and Epistemology*, ed. Fine, G., Oxford, 455-478.

—— ‘The verb ‘to be’ in Greek philosophy: some remarks’, *Companions to Ancient Thought* 3, ed. Everson, S., Cambridge, 1994, 212-236.

Brunt, P. A., ‘Plato’s Academy and Politics’, in his *Studies in Greek History and Thought*, Oxford,

- 1993.
- Burkert, Walter, 'La Genèse des choses et des mots: Le Papyrus de Derveni entre Anaxagore et Cratyle', *Etudes Philosophiques* 25, 1970, 443-455.
- Burnet, J., *Greek Philosophy, Thales to Plato*, London, 1914.
- Burnyeat, M., 'The Material and Sources of Plato's Dream', *Phronesis* 15, 1970, 101-122.
- 'Conflicting Appearances', *Proceedings of the British Academy* 65, 1979, 184-197.
- *Notes on Book Zeta of Aristotle's Metaphysics*, Oxford, 1979.
- 'Idealism and Greek Philosophy: What Descartes Saw and Berkeley Missed', *Philosophical Review* 91, 1982, 3-40.
- *The Theaetetus of Plato*, trans. Levett M. J., Indianapolis, 1990.
- *A Map of Metaphysics Zeta*, Pittsburgh, 2001.
- Calvert, B., 'Forms and Flux in Plato's *Cratylus*', *Phronesis* 15, 1970, 26-47.
- Campbell, L., *The Sophistes and Politicus of Plato*, with a revised text and English notes, Oxford, 1861.
- *The Theaetetus of Plato*, with a revised text and English notes, 2^{ed} ed., Oxford, 1883.
- Chappell, T., *Reading Plato's Theaetetus*, Sankt Augustin, 2004.
- Cherniss, H. F., 'The Philosophical Economy of the Theory of Ideas', *American Journal of philology* 57, 1936, 445-456.
- 'Aristotle, *Metaphysics* 987 A32-B7', *American Journal of Philology* 76, 1955, 184-186.
- *Aristotle Criticism of Presocratic Philosophy*, New York, 1964.
- Cooper, John M., *Plato's Theaetetus*, New York, 1990.
- Cope, E. M., *An Introduction to Aristotle's Rhetoric*, with analysis notes and appendices, Hildesheim/ New York, 1970.
- Cornford, F. M., *Plato's Theory of Knowledge*, London, 1935.
- Crivelli, P., 'Plato's Philosophy of Language', In *The Oxford Handbook of Plato*, ed. Fine, G., New York, 2008, 217-242.
- Crombie, I. M., *An Examination of Plato's Doctrines*, vol. 2, London, 1963.
- Davidson, D., 'Plato's philosopher, in *Modern Thinkers and Ancient Thinkers: The Stanley Victor Keeling Memorial Lectures at University College, London, 1981-1991*, ed. Sharples, R. W., London, 1993, 99-116.'
- Denyer, Nicholas, *Language, Thought and Falsehood in Ancient Greek Philosophy*, London, 1991.
- Derbolav, Josef, *Platons Sprachphilosophie im Kratylus und in den späteren Schriften*, Darmstadt, 1972.
- Diels, H., and Kranz, W., *Die Fragmente der Vorsokratiker*, I-III, 6, Aufl., 1951-1952. (Berlin: 1. Aufl., 1903).
- Dixsaut, M., *Platon et la Question de la Pensée: Études Platoniciennes I*, Paris, 2000.

- *Platon Source des Présocratiques: Exploration*, Paris, 2002.
- *Platon*, Paris, 2003.
- Donnellan, K., ‘Refedence and Definite Descriptions’, *Philosophical Review* 75, 1966, 281-304.
- Dummett, M., *The Logical Basis of Metaphysics*, London/ New York, 1991.
- Duvick, B., trans. And comm., *Proclus: On Plato Ctaylus*, London, 2007.
- Everson, S. ed. *Companions to Ancient Thought 3: Language*, Cambridge, 1994.
- Fine, G., ‘Plato on Naming’, *Philosophical Quarterly* 27, 1977, 289-301.
- ‘Knowledge and Logos in the *Theaetetus*’, *Philosophical Review* 88, 1979, 366-197.
- Fowler, H. N., *Plato: Cratylus, Parmenides, Greater Hippias, Lesser Hippias*, Cambridge, Mass., 1926.
- Frede, D., ‘The Impossibility of Perfection: Socrates’ Criticism of Simonides’ Poem in the *Protagoras*’, *Review of Metaphysics* 39, 1986, 726-753.
- Frede, M., ‘Plato’s Arguments and the Dialogue Form’, In *Methods of Interpreting Plato and His Dialogues*, Klagge, J. C., and Smith, N. D. (edd.), Oxford, 1992, 201-219.
- ‘Plato’s *Sopshist* on False Statements’, in *The Cambridge Companion to Plato*, ed. Richard Kraut, Cambridge, 1992.
- Gaiser, K., ‘Name und Sache in Platons ‘Kratylos’’, *Abhandlungen der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, Philosophizch-historische Klasse*, Heidelberg, 1974.
- Gaudin, C., *Platon et l’alphabet*, Paris, 1990.
- Geach, P. T., *Reference and Generality*, Ithaca, NY, 1962.
- Gill, C., and McCabe, M. M., edd. *Form and Argument in Late Plato*, Oxford, 1996.
- Gold, J. B., ‘The Ambiguity of “Name” in Plato’s “Cratylus”’, *Philosophical Studies* 34, 1978, 223-251.
- Goldschmidt, V., *Essai sur le Cratyle*, Paris, 1940.
- *Le paradigme dans la dialectique platonicienne*, Paris, 1947.
- Gomperz, T., *Greek Thinkers. A History of Ancient Philosophy III, Plato*, translated by Berry, G. G., 1905, London.
- Goodwin, W. W., *Syntax of the Moods and Tenses of the Greek Verb*, London, 1889.
- Gosling, J. C. B., *Plato*, London, 1973.
- Grote, G., *Plato and the Other Companions of Socrates*, London, 1865.
- Gulley, N., *Plato’s Theory of Knowledge*, London, 1962.
- Guthrie, W. K. C., *A History of Greek Philosophy* vol. 1-6, Cambridge, 1962-1981.
- Hackforth, R., ‘False statement in Plato’s *Sophist*’, *Classical Quarterly* 39, 1945, 56-58.
- Harte, V., ‘Language in the Cave’, *Maieusis: Essays in Ancient Philosophy in Honour of Myles Burnyeat*, Dominic Scott (ed.), Oxford, 2007, 195–215.
- Heitsch, E., ‘Platons Sprachphilosophi im “Kratylos”’, *Hermes* 113, 1985, 44-62.

- Hicken, W. F., 'Knowledge and Forms in Plato's *Theaetetus*', *Journal of Hellenic Studies* 77, 1957, 48-53; repr. in Allen ed. 1965, 185-198.
- Horn, F., *Platonstudien*, Vienna, 1904.
- Huffman, C. A., *Philolaus of Croton*, Cambridge, 1993.
- Irwin, T., 'Plato's Heracliteanism', *Philosophical Quarterly* 27, 1977, 1-13.
 ——— 'Aristotle's Concept of Signification', in *Language and Logos*, ed., Schofield, M. and Nussbaum, M., Cambridge, 1982.
- Jackson, B. D., (comm) and Pinborg, J., (ed. and trans.), *Augustine: De Dialectica*, Dordrecht, 1975.
- Jacquinod, B., 'Le *Cratyle* et l'origine des noms L'aspect dans les verbes de dénomination', In *Etudes sur l'aspect verbal chez Platon*, ed. Jacquinod, B. St.-Etienne, 2000, 317-338.
- Jones, F., *Nominum Ratio, Aspect of the Use of Personal Names in Greek and Latin*, Liverpool, 1996.
- Jowett, B., and Campbell, L., (ed. and comm.), *Plato's Republic* vol. 3, Oxford, 1894.
- Kahn, C. H., 'Language and Ontology in the *Cratylus*', Lee, E. N., Mourelatos, A. P. D., Rorty, R. M. (edd.), *Exegesis and Argument*, New York, 1973^a, 152-176.
 ——— The Verb 'Be' in Ancient Greek, Dordrecht, 1973^b.
 ——— 'Some Philosophical Uses of "To be" in Plato', *Phronesis* 26, 1981, 105-134.
 ——— 'Retrospect on the Verb "To Be" and the Concept of Being', In *The Logic of Being*, edd. Knuuttila, S. and Hintikka, J., Dordrecht/ Boston/ Lancaster/ Tokyo, 1986, 1-28.
- Kaplan, D., 'Quantifying In', Davidson, D., and Hintikka, J. (edd.), *Words and Objections. Essays on the work of Quine, W. V.*, Dordrecht, 1969, 206-242.
- Keller, S., 'An Interpretation of Plato's *Cratylus*', *Phronesis* 45, 2000, 284-305.
- Kerferd, G. B., *The Sophistic Movement*, Cambridge, 1981.
- Ketchum, R. J., 'Names, Forms and Conventionalism : *Cratylus*, 383-395', *Phronesis* 24, 1979, 133-147.
- Keyser, P., 'Stylometric Methodology and the Chronology of Plato's Works', *Bryn Mawr Classical Review* 3, 1992, 58-73.
- Kirk, G. S., 'The Problem of *Cratylus*', *American Journal of Philology* 72, 1951, 225-253.
 ——— *The Iliad: A Commentary*, vol. 2: books 5-8, Cambridge, 1990.
- Kirk, G. S., Raven J. E., and Schofield, M., *The Presocratic Philosophers*, second edition, Cambridge, 1983.
- Kirwan, C., *Aristotle's Metaphysics books Γ, Δ, E*, translated with notes, Oxford, 1971.
- Kraut, R., (ed.), *The Cambridge Companion to Plato*, Cambridge, 1992.
- Kretzmann, N., 'Plato on the Correctness of Names', *American Philosophical Quarterly* 8, 1971, 126-138.
- Kripke, S., 'Speaker's Reference and Semantic Reference', In *Contemporary Perspectives in the Philosophy of Language*, French, P. A., Uehling, T. E., and Wettstein, H. K., (edd.), Minneapolis,

- MN, 1979, 6-27.
- *Naming and Necessity*, 2nd edition, Oxford, 1980.
- *Wittgenstein on Rules and Private Language*, Harvard, 1982.
- Labarbe, J., *L'Homère de Plato*, Liège, 1949.
- Lee, E. N., Mourelatos, A. P. D., and Rorty, R. M., edd. *Exegesis and Argument: Studies in Greek Philosophy Presented to Gregory Vlastos*, Assen, 1973.
- Levin, S. B., *The Ancient Quarrel Between Philosophy and Poetry Revisited. Plato and the Greek Literary Tradition*, Oxford, 2001.
- Levinson, R. B., 'Language and the *Cratylus*: Four Questions', *Review of Metaphysics* 2, 1957, 28-41.
- Lewis, D. K., *Convention. A Philosophical Study*, Cambridge, MA, 1969.
- 'Languages and Language', In his *Philosophical Papers*, vol. 1, New York/ Oxford, 1983, 163-187.
- Loht, S., Review of *The Cratylus of Plato: A Commentary*, *Journal of the History of Philosophy* 50(3), 2012, 450-451.
- Long, A. A., 'Stoic Linguistics, Plato's *Cratylus*, and Augustine's *De dialectica*', In *Language and Learning: Philosophy of Language in the Hellenistic Age*, edd. Frede, D., and Inwood, B., Cambridge, 2005, 36-55.
- Long, A. A. & Sedley, D., *The Hellenistic Philosophers*, vol. 2, Cambridge, 1987.
- Lorenz, K. and Mittelstrass, J., 'On Rational Philosophy of Language: the Programme in Plato's *Cratylus* Reconsidered', *Mind* 76, 1967, 1-20.
- Lowe, E. J., *The Possibility of Metaphysics*, Oxford, 1998.
- Luce, J. V., 'The Date of the *Cratylus*', *American Journal of Philology* 85, 1964, 136-154.
- 'The Theory of Ideas in the *Cratylus*', *Phronesis* 10, 1965.
- 'Plato on the Truth and Falsity of Names', *Classical Quarterly* 19, 1969, 222-232.
- Lyons, J., *Structural Semantics*, Oxford, 1963.
- Mackenzie, M. M., 'Putting the *Cratylus* in its Place', *Classical Quarterly* 36, 1986, 124-150.
- Mansfeld, J., '*Cratylus* 402A-C: Plato or Hippias?', In *Acti del Symposium Heracliteum*, ed. Rossetti, L. vol. 1, Rome, 1983, 43-55.
- McCabe, M. M., *Plato's Individuals*, Princeton, 1994.
- McDowell, J., *Plato: Theaetetus*, translated with notes, Oxford, 1973.
- 'Falsehood and Not-Being in Plato's *Sophist*' in *Language and Logos*, ed. Schofield M. and Nussbaum, M., Cambridge, 1982.
- Modrak, D. K. W., 'Meaning and Cognition in Plato's *Cratylus* and *Theaetetus*', *Topoi* 31(2), 2012, 167-174.
- Moore, G. E., 'Moore's paradox', in *Moore, G. E.: Selected Writings*, ed. Baldwin, T., London, 1993, 207-212.

- Morrow, Glenn R., *Plato's Cretan City*, Princeton, 1960.
- *Plato's Epistles*, Indianapolis, 1962.
- Mourelatos, A. P. D., 'Heraclitus, Parmenides and the Naïve Metaphysics of Things', in *Exegesis and Argument*, ed. Lee, E. N., Mourelatos, A. P. D. and Rorty, R. M., New York, 1973.
- Mueller, I., 'Mathematical Method and Philosophical Truth', In Kraut, 1992, 170-199.
- Murphy, D. J., and Nicoll, W. S. M., 'Parisinus Graecus 1813 in Plato's *Cratylus*', *Mnemosyne* 46, 1993, 458-472.
- Murray, G., *Greek Studies*, Oxford, 1946.
- Nightingale, A. W., *Genres in Dialogue*, Cambridge, 1995.
- 'Subtext and Subterfuge in Plato's *Cratylus*', *Plato as Author*, ed. Michellini, A. N., Brill, 2003.
- Nussbaum, M., and Schofield, M., edd. *Language and Logos. Studies in Ancient Greek Philosophy Presented to G. E. L. Owen*, Cambridge, 1982.
- Ostwald, M., *Nomos and the Beginnings of the Athenian Democracy*, Oxford, 1969.
- Owen G. E. L., 'The Place of the *Timaeus* in Plato's Dialogues', *Classical Quarterly* 3, 1953, 79-95.
- 'Plato on Not-being', in *Logic, Science and Dialectic*, ed. Nussbaum, M., London, 1986.
- Palmer, M.D., *Names, Reference and Correctness in Plato's Cratylus*, New York/ Bern/ Frankfurt am Main/ Paris, 1989.
- Peacocke, C., 'Depiction', *Philosophical Review* 96, 1987, 383-410.
- Pfeiffer, R., *History of Classical Scholarship, from the Beginnings to the End of the Hellenistic Age*, 1968, Oxford.
- Pfeiffer, W. M., 'True and False Speech in Plato's *Cratylus* 385 b-c', *Canadian Journal of Philosophy* 2, 1972, 87-104.
- Polansky, R. M., *Philosophy and Knowledge: A Commentary on Plato's Theaetetus*, Bucknell University Press, 1992.
- Proclus, *In Platonis Cratylum commentaria*, ed. Pasquali, g., Leipzig, 1908.
- Putnam, H., *Realism and Reason: Philosophical Papers*, vol. 3, Cambridge, 1983.
- Quine, W. V. O., *Word and Object*, Cambridge, MA, 1960.
- Richardson, M., 'True and False Names in the "*Cratylus*"', *Phronesis* 21, 1976, 135-145.
- Richardson, N., *The Iliad: A Commentary*, vol. 6: books 21-24, Cambridge, 1993.
- Rijlaarsdam, J., *Platon über die Sprache, ein Kommentar zum Kratylos*, Utrecht, 1978.
- Robinson, D. B., 'Κρόνος, Κρόνους and Κρουνός in Plato's *Cratylus*', In *The Passionate Intellect*, ed. Ayres, L., New Brunswick/ NJ / London, 1995, 57-66.
- Robinson, R., 'The Theory of Names in Plato's *Cratylus*', *Revue Internationale de Philosophie*. Reprinted in Robinson 1969, 100-117 (page numbers cited from the latter).
- 'A criticism of Plato's *Cratylus*', *Philosophical Review* 65, Reprinted in Robinson 1969, 118-

138 (page numbers cited from the latter)

—— *Essays in Greek Philosophy*, Oxford, 1969.

Robinson, T. M., 'Heraclitus and Plato on the Language of the Real', *Monist* 74, 1991.

Rorty, A. O., ed. *Essays on Aristotle's Rhetoric*, Berkeley/ Los Angeles/ London, 1996.

Rose, L. E., 'On Hypothesis in the *Cratylus* as an Indication of the Place of the Dialogue in the Sequence of Dialogues', *Phronesis* 9, 1964, 114-116.

Rosenmeyer, Thomas, 'Name-Setting and Name-Using: Elements of Socratic Foundationalism in Plato's *Cratylus*', *Ancient Philosophy* 18, 1998, 41-60.

Ross, W. D., *Aristotle's Metaphysics*, a revised text with introduction and commentary, vol. 2, Oxford, 1924.

—— (ed. and comm.), *Aristotle's Prior and Posterior Analytics*, Oxford, 1949.

—— *Plato's Theory of Ideas*, 2nd edition, Oxford, 1953.

—— 'The Date of Plato's *Cratylus*', *Revue Internationale de Philosophie* 32, 1955, 187-196.

Russell, B., *The Problems of Philosophy*, 1912. (Oxford Paperback, 1959)

—— 'The Philosophy of Logical Atomism', In his *Logic and Knowledge*, ed. Marsh, R. C., London, 1956, 57-281.

Sainsbury, M., *Reference without Referents*, Oxford, 2005.

Sambursky, S., 'A Democritean [sic] Metaphor in Plato's *Cratylus*', *Phronesis* 4, 1959, 1-4.

Schofield, M., 'The Dénouement of the *Cratylus*', Nussbaum, M., and Schofield, M. (edd.), *Language and Logos. Studies in Ancient Greek Philosophy presented to Owen, G. E. L.*, Cambridge, 1982.

Sedley, D., 'Epicurus On Nature, Book xxviii', *Cronache Ercolanesi* 3, 1973, 5-84.

—— 'Three Platonist Interpretations of the *Theaetetus*', In Gill/ McCabe 1996, 79-103.

—— 'The Etymologies in Plato's *Cratylus*', *Journal of Hellenic Studies* 118, 1998, 140-154.

—— 'The Origins of Stoic God', In *Traditions of Theology. Studies in Hellenistic Theology, its Background and Aftermath*, edd. Frede, D., and Laks, A., Leiden, 2002, 41-83.

—— *Plato's Cratylus*, Cambridge, 2003.

—— 'Aristote et la signification', *Philosophi Antiquae* 4, 2004a, 5-25.

—— *The Midwife of Platonism*, Oxford, 2004b.

—— 'Equal Sticks and Stones', In *Maieusis: Essays in Ancient Philosophy in Honour of Myles Burnyeat*, ed. Scott, D., Oxford, 2007a, 68-86.

—— *Creationism and Its Critics in Antiquity*, Berkeley/ CA/ Los Angeles/ London, 2007b.

Shorey, P., 'On Plato's *Cratylus* 389d', *Classical Philology* 14, 1919, 85.

Silverman, A., 'Plato's *Cratylus*: The Naming of Nature and the Nature of Naming', *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 10, 1992, 25-72.

Smith, I., 'False Names, Demonstratives and the Refutation of Linguistic Naturalism in Plato's *Cratylus* 427d1-431c3', *Phronesis* 53, 2008, 125-151.

- Snell, B., 'Die Nachrichten über die Lehren des Thales and die Anfänge der griechischen Philosophie- und Literaturgeschichte', *Philologus* 96, 1944, 170-182.
- Stanford, W. B., 'Onomatopoeic *Mimesis* in Plato, *Republic* 396b-397c', *Journal of Hellenic Studies* 93, 1973, 185-191.
- Stewart, M. A., 'Plato, *Cratylus* 424c9 sqq', *AGP* 57, 1975, 167-171.
- Tanner, S., 'Comedy as self-forgetting', *Journal of Speculative Philosophy; A Quarterly: Journal of History, Criticism and Imagination* 27(2), 2013, 188-198.
- Tarrant, Harold, 'Middle Platonism and the *Seventh Epistle*', *Phronesis* 28, 1983, 75-103.
- Taylor, A. E., *Plato. The Man and His Works*, 7th edition, London, 1960.
 —— *Plato, The Sophist and The Statesman*, ed. Klibansky, R. and Anscombe, E., Folkestone/London, 1961.
- Thornton, M. T., 'Knowledge and Flux in Plato's *Cratylus* (438-440)', *Dialogue* 8, 1970, 581-591.
- Trivigno, F. V., 'Etymology and the power of names in Plato's *Cratylus*', *Ancient Philosophy* 32(1), 2012, 35-75.
- Valenti, V., 'Una variante d'autore: Plat. *Crat.* 437d10-438a2', *Studi Classici e Orientali* 46.3, 1998, 769-831.+
- Van den Berg, R. M., *Proclus' Commentary on the Cratylus in Context*, Leiden/ Boston, 2008.
- Vlastos, G., 'The Third Man argument in the *Parmenides*', *Philosophical Review* 63, 1954, 319-49.
Socrates: Ironist and Moral Philosopher, Cambridge, 1991.
- Vries, G. J. de, 'Notes on Some Passages of the *Cratylus*', *Mnemosyne* iv 8, 1955, 290-297.
- Warburg, Max, 'Zwei Fragen Zum '*Kratylos*', *Neue Philologische Untersuchungen* 5, 1929.
- Weingartner, R., 'Making Sense of the *Cratylus*', *Phronesis* 15, 1970, 5-25.
 —— *The Unity of the Platonic Dialogue*, Indianapolis, 1973.
- Wilamowitz, U., *Platon*, 2ed edn (vol. 2), Berlin, 1920.
- White, Nicholas P., *Plato on Knowledge and Reality*, Indianapolis/Cambridge, 1976.
- Williams, B., 'Cratylus' Theory of Names and its Refutation', In Nussbaum/Schofield, 1982, 83-93.
 —— *Plato: Theaetetus*, translated by Levett, M. J., revised by Myles Burnyeat, Indianapolis, 1992.
- Wittgenstein, L., *Philosophical Investigations*, Oxford, 1958.
- Wohlrab, M., *Platonis Theaetetus, recensuit prolegomenis et commentariis instruxit*, Teubner: Leipzig, 1891.
- 飯田隆、金田千秋、佐藤芳、関口浩喜、山下弘一郎訳、『実在論と理性 ヒラリー・パトナム』、勁草書房、2004年。
- 飯田隆、『言語哲学大全 III 意味と様相 (下)』、勁草書房、2005年。
 ——『ウィトゲンシュタイン 言語の限界』、講談社、2005年。
 ——『言語哲学大全 IV 真理と意味』、勁草書房、2007年。
 ——飯田隆編、『ウィトゲンシュタイン読本』、法政大学出版局、2011年。

- 内山勝利編、『ソクラテス以前哲学者断片集』I-V、岩波書店、1996-1998年。
- 大槻真一郎、月川和雄訳、『テオフラストス 植物誌』、八坂書房、1988年。
- 加藤信朗、『初期プラトン哲学』、東京、1988年。
- 『ギリシア哲学史』、東京、1996年。
- 木原志乃、『流転のロゴス——ヘラクレイトスとギリシア医学』、昭和堂、2010年。
- 田坂さつき、『『テアイテトス』研究——対象認知における「ことば」と「思いなし」の構造——』、知泉書館、2007年。
- 田中利光、『『クラテュロス』再論』、北星学園大学文学部北星論集 42(2)、2005年、1-12頁。
- 中澤務、「プラトンの『クラテュロス』における「名前の正しさ」、哲学(44)、1994年、166-175頁。
- 中畑正志、「語・意味・対象——『クラテュロス』におけるプラトンの言語哲学」、『哲学研究』第551号、1985年、73-116頁。
- 「像と類似性——小池澄夫の仕事をめぐる覚書」、『METHODOS 古代哲学研究』XLIV、2012年、66-82頁。
- 「相反する現われ——イデア論生成へのプラトンの一視点——」、『プラトンの探求』、九州大学出版会、1993年。
- 『魂の変容』、岩波書店、2011年。
- 「自己知の原型とその行方——二つの格言をめぐる」、『METHODOS 古代哲学研究』XLVII、2015年、1-18頁。
- 納富信留、『ソフィストと哲学者の間』、名古屋大学出版会、2002年。
- 「プラトン」、『哲学を使いこなす』、知泉書館、2004年、3-29頁。
- 「言葉で創造する哲学——古代ギリシアにおける精神の展開」、『精神史における言語の創造力と多様性』、慶應義塾大学言語文化研究所、2008年、7-42頁。
- 納富信留訳、『ソクラテスの弁明』、光文社古典新訳文庫、2012年。
- 「イデアの永遠と同一——プラトン『饗宴』の「言葉」——」、西日本哲学年報第22号、2014年。
- 野本和幸、『意味と世界——言語哲学論考』、法政大学出版局、1997年。
- 野本和幸、山田友幸編、『言語哲学を学ぶ人のために』、世界思想社、2002年。
- 朴一功、「『クラテュロス』におけるプラトンの言語哲学の視座」、内山勝利・中畑正志編『イリスのほitori』、世界思想社、2005年、204-241頁。
- 朴一功訳、『プラトン 饗宴／パイドン』、西洋古典叢書、2007年。
- 藤澤令夫、『プラトンの認識論とコスモロジー——人間の世界解釈史を省みて』、岩波書店、2014年。
- 松永雄二、『知と不知——プラトン哲学研究序説』、東京大学出版会、1993年。
- 渡辺邦夫訳、プラトン『テアイテトス——知識について——』、ちくま学芸文庫、2007年。
- 渡辺慧、『認識とパタン』、岩波書店、1978年。

